
remember

稜川春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

r e m e m b e r

【Nコード】

N 3 3 2 4 H

【作者名】

稜川春希

【あらすじ】

南の大国ウエランドルスの王子ルイセラードは、王城でじつとしてれない、勉強大嫌いな困った王子さま。旅が大好き。それでも剣の腕だけは一人前かそれ以上？国家の重宝リメンバーを巡る事件、姉の失踪、滅んだと思われていた皇族たち、いろんなことに彼自身は巻き込まれていく。

「一章：銀色の髪：1」（前書き）

『Silver lily』（オリジナル小説自サイト）にて連載していたrememberのリメイク版。といっても内容に変わりはなし。読みやすくなっていれば幸いです。

「一章：銀色の髪：1」

ルイセラードは旅をするのが好きだった。

南の大国、ウェランドルスの王太子という身分を持ちながらも、いつも一ヶ月に一度は、他国へ足を運んでしまう。元々いろんな国を回るのが好きであり、それに王城の中でじっとしてられない性格なのだ。いつもぼさばさで適当にまとめられた淡い茶髪に、金の瞳。右目に巻かれた包帯。その茶髪は故郷にとっては珍しいものなれど、その瞳はそんなことはない。——片目だということ以外は。

この世界は、瞳の色で民族が区別される。そして、民族ごとに国家を持つ。一民族一国家主義とでも言おうか、とにかく民族意識が激しい。目の色はもちろん、各民族によつては肌の色も、髪の色も、身体能力も違つたりする。

そして今彼がいるのは、紫色の瞳をした者たちが住まう国、マテイルグラスだった。

今となつては、皇族の支配もない共和制の国だ。国土のほとんどが森林で、林業が盛んである。麦の生産量はウェランドルスに続く第二位。標高の高い山々が立ち並び、ふもとである国境付近には村が、北の海側には、発展した都市が存在する。世界で一番長い川、サンドウリアス川が森林地帯の真ん中を流れており、それは、南にあるスルリエズ、続いてウェランドルスを流れ、やがて海に流れ着く。

その川の東側——グランディスナという、灰色の瞳をした人たちの小さな荒野の国との境目に、一つの村があった。森の中に切り開かれて作られたかのような、人口がざつと何百人というちっぽけな村だ。

ルイセラードは今、その宿のうちの一つに泊まっていた。

安いおんぼろ宿。名を『マスティーナの店』という。女主人のマスティーナが経営している、宿代はバカ安い飯が不味いという宿

だ。そこには他に、ジェーナという少女が住み込みで働いていた。満月のような輝きの金髪に、深い紫の瞳。明らかに、ルイセラードより年下に見えるが、実は年上、十八歳だという。

彼女は毎朝、ルイセラードを起こしに部屋にやって来る。いい加減起きろ、と思い切り彼の肩を叩いて、部屋を出て行くのだ。

そして、今日もジェーナに叩かれる。

ぱしつと肩に強い衝撃を食らってから数分後、ゆっくりとルイセラードは目を開けた。窓から差し込んだ光が、床に反射している。

……右の瞼が痒い。

包帯の上から、ルイセラードは右目を掻いた。

幼い頃からこの右目は病気だと両親は言っていた。光を当ててはいけない、もし当ててしまえば失明してしまう、と。

「ふあ」

欠伸がついつい出てしまう。あと一時間くらい寝ないと持たない。本当は昼までぐーすかと寝ていたいのだ。なのに起こされる。

こみ上げる欠伸を噛み殺しつつ、ルイセラードは擦り切れた旅服に着替えて、下の食堂に降りた。

「おはよ、ジェーナ」

「やつと起きたわね」

ジェーナはふんつと鼻を鳴らすと、テーブルを拭き始めた。

「そのぼさぼさの髪、括るんなら括る、切るなら切れば？」

「……。後で括るよ」

ルイセラードは自分の長い茶髪をいじる。

——結構伸びてきた。あ、枝毛発見。

「どうかしらねえ」

と、ジェーナは嫌味ったらしくにやりと笑んだ。

「自分で括れないって嘆いてたくせに」

「嘆いてない。それで、ご主人は？」

「買い物」

ジェーナはため息をついた。「料理は不味いの……買い物は好

きなんだから」

「じゃあ、今日も朝は外で食べてくる」

「良かったらあたしの分のパンもちょうだい」

「わかった」

ルイセラードは欠伸を噛み殺し、店を出て行った。

外は静かだ。昔は旅人で賑わっていたらしいが、ここ最近はず旅をしようと思う者がいないらしい。故に、ここは数年前からこんな感じだった。人がちらほらと店の前にいるだけで、旅人らしき人物は一人もない。

と、向こうの方の建物の影から出て来た人影に、思わずルイセラードは足を止めた。

青年だった。見るからに、きらきらと輝いているのは銀色の長い髪。そして、灰色の瞳をしていた。腰に剣を携えて、彼はゆっくりとやって来る。

歩く度にきらきらと光に反射する銀髪に、ルイセラードは目を奪われた。ぼおつと見とれていると、すつと銀髪の青年は隣を通り過ぎて行く。

——銀色……。

ルイセラードはその場に突っ立っていた。彼が過ぎ去った方に振り向くが、もうそこに青年の姿はない。

「今のは……」

と、その時だった。

「片目の兄ちゃん」

へ、とルイセラードは傍にあつた店に目を向けた。

「買ってかないか？ ほれ」

そこには、パンを売っている露店があつた。おじさんが細長いパンを差し出す。

「うまいぞー。今日のは自信作だ。マスティーナの所に泊まってるんだろ。あそこの飯は本当に不味い、なあ兄ちゃん」

ルイセラードは苦笑いして店に近づいた。そして、パンを受け取

る。

「あの、これ、もう一つくれませんか？」

パンの入った紙袋を抱えて店に帰ってくると、まだせっせとジェーナはテーブルを拭いていた。

「おかえり」

ジェーナは手を止めない。せっせせっせとテーブルを拭いていく。

「——ジェーナ、朝ご飯」

その言葉に、ジェーナは手を止めてルイセラードの方に向いた。そして満足げに、にんまりと笑う。

「ありがとう」

「……そういえば」

ルイセラードは近くのテーブルに紙袋に入ったパンを置いた。

「外で、旅人らしき綺麗な銀髪の男の人を見た」

「……銀髪？ そりやまた珍しい」

ジェーナは台布巾を握って首をかしげた。「金髪ならここにいるけど」

「それも灰色の目をしてた。カノウ族には初めて会ったよ」

「銀髪ってどんな感じだった？」

「どんな感じ、って……そうだな。細い銀の針金が光るような感じかな」

へー、とジェーナはテーブル拭きを再開した。

「でも、あんた以外の旅人がいたとはね」

「あんた以外、って……」

ルイセラードは苦笑いして、椅子に座った。

「確かに今となつては旅人は珍しいけど」

「旅って、楽しい？」

「楽しい」

にんまりとルイセラードは笑う。

ふーん、とジェーナはカウンター席の方に向かった。そしてテーブルを拭き始める。

「ジェーナ、それはそうと朝ご飯は？ 食べないの？」

「掃除が終わってからにする。あたしが目の前にある食べ物を見ず逃すと？」

「じゃあ、お先に」

ルイセラードは紙袋の中からパンを出して、かぶりついた。

「今日のはうまいぞって、露店のおじさんが」

「得体の知れない物買ってきたんじゃないでしょうね」

「普通にうまいよ」

うん、とルイセラードは食べながら頷く。「この飯よりはマシ」

「マスティーナさんに怒られるよ、そんなこと言つとさ」

ジェーナは呆れたように笑う。と、その時だった。

「何が『この飯よりはマシ』だい？」

ぎっ、とドアが開いた。

——うわ。

あーあ、とジェーナのため息が聞こえる。

——しまった。

恐る恐る、ルイセラードはドアの方を振り向いた。

「……おかえりなさい」

「安く泊めてやってんだ。あたしの料理にケチつけるんじゃないよ。客が」

「別にケチつけては……」

ルイセラードは苦笑いする。「……ないですけど」

「じゃあ、昼はここで食べるんだね？」

「え」

「そういうことだろう。三人分用意しなくては」

女主人、マスティーナはそう言って、カウンターの向こうにあるキッチンに向かった。

ボタンとキッチンの扉が閉まる。と、ルイセラードとジェーナは

顔を見合わせた。

「……どうするよ」

「あたしまで巻き添え？」

「別の宿探した方がいいかな」

と、ジエーナに睨まれた。

「逃げるな金ヅル」

「でも昨日、晩御飯食べて部屋でぶっ倒れたの知ってるくせに」

「胃を鍛えるいいチャンスじゃない」

「でも、このパンを買ったところの露店の主人も、ここの飯は不味
いって言ってた」

ルイセラードはため息をついて、テーブルに額をつけた。

「これで晩飯までここだったら僕、明日起きれないからね。起こし
に來ないでよ」

「一章：銀色の髪：1」（後書き）

読んでくださりありがとうございます。んー、まだまだ序盤ですね。全部で十六章もあるのにどうしよう（汗）既に完結済みなので、更新は早めかもしれません。

「一章：銀色の髪：2」

——翌日。

晩ご飯まで無理矢理に食べさせられたルイセラードは、もちろん寝込んでいた。

目が覚めていても、体を起こせない。このぐったり感といい、気持ち悪さといい、半端ない。

今日はさすがに、ジェーナは起こしに来なかった。有り難い。

とか思っていると、どたどたと誰かが階段を上がってきた。そして部屋のドアが勢いよく開く。

「起きてる？ ルイセラード」

ジェーナだ。ゆっくりと目を開けると、目の前に彼女の顔が飛び込んできた。

「……おはよう」

「おはよ。病人さまさまね。本当にだめなんだから……情けない」
「仰る通り」

それでね、とジェーナはシーツを思い切り剥ぎ取った。

「うおっ」

「あんた、昨日銀髪の男の人見たって言ってなかった？」

銀髪？ とルイセラードはシーツを取り返そうと、闇雲に手を伸ばす。

「ほーら」

ジェーナはルイセラードの顔を覗き込む。「見たって言ったでしよ？」

「……あ」

渾身の力を込めて、ルイセラードは体を起こした。

「そっいえば……見たっけ」

「それでね今、下にお客さんが来てて……『銀髪で、灰色の瞳をした青年を探してる』って言うのよ」

「——え？」

「それで、あんたが見たことを言ったら『是非話を聞きたい』って断ったんだけどね？ 断ったのよ？ あたし。でも、緊急を要することらしいのよ」

「緊急、ね」

ルイセラードはゆっくりと首を回す。そして背伸びした。

「……行く」

「無理しなくていいわよ。マステイーナさんの犠牲者には同情するわ」

と、その時だった。

誰かが階段を上がってくる。マステイーナが掃除でもしに来たのだろうか——ルイセラードは思わずジェーナからシーツを奪い返して、それを頭から被る。だが、

「勝手に上がってきて申し訳ない」

その声に、ジェーナは入り口の方に振り向いた。

「ああ。ごめんなさい、待たしちゃって」

ジェーナは無理矢理ルイセラードからシーツを奪い返す。

「ルイセラード、そのお客さん」

「え？」

首をかしげて客人を見る。と、ルイセラードは思わず目を見開いた。

——この銀髪は。

そこには少年が立っていた。長い軽く波打った癖のある銀髪。そして、灰色の瞳。絹のように白い肌。腰に携えているのは、古びた銀色の鞘に納められた細身の剣。

ぱちくりと目を見開いていると、少年は引きつった笑みを顔に浮かべた。

「貴方が目撃者？」

「まあ。そうですね……何か」

「その青年を探していて——よければ何処へ向かったか教えてほし

くて」

はあ、とルイセラードはとりあえず頷く。と、少年はその戸惑った様子に、失礼、と笑った。

「自己紹介がまだか。私はアステイナという。そちらは？」

——え。

ルイセラードはぱちぱちと瞬きした。

少年ではない。アステイナというのは女の名だ。ということはすなわち女の子、である。だが、アステイナという名は何処かで聞いたような気が。

「えっと……僕はルイセラード」

「それで、別に急ぐ用ではないのだが——ただ、何処に行ったかだけでも——」

「けど、僕は見かけただけで」

と、ルイセラードは首を横に振った。「そこまでは……」

「でも昨日、この村に来た？」

「そうだけど」

「まあ、そんなに急ぐこともなし……」

彼女は顎に指を当てて考え込んだ。と、その時だった。

「あれ？」

言ったのはジェーナだった。窓辺に立って、外を見ている。

「外が変なんだけど……雨来るかも。嵐でも来そうな感じ」

「嵐？」

ルイセラードは窓の外に目をやる。外はやけに暗い。それも風一つない静けさとも言おうか。鳥のさえずりも、木々のざわめきも聞こえない。と、

「——真っ暗」

そう言ってアステイナが割り込んできた。

「これは……」

と、その瞬間いきなり、ざあっと雨が降り出した。

「通り雨か」

アステイナは窓に手をついてこくりと頷く。と、窓がガタガタと激しく揺れた。容赦なく雨が窓に吹き付けてきた。

「これじゃあ、買い物にも行けないわ。……ルイセラード、ご愁傷様」

「え、それじゃあまた！」

「しょうがないでしょう？ 雨でじゅくじゅくになった道は、歩けるもんじゃないわ」

と、その時、ジェーナ！ と下の階からマステイナーの声がした。「あら、呼ばれてるわ。ちよつと行ってくる」

ジェーナは部屋を出て行った。

「……このような大雨は苦手だ」

ふいにアステイナが呟いた。

「そうみたいだね。荒野しかないからね、グランデイスナ。でも、雨の降らない地域って雨あめ降れ降れとか雨乞いするんじゃないの？」

「こんなにも降られることはまずない」

「……確かに。それで、探している人って誰？」

「私の兄だ」

アステイナは深々とため息をついた。「同じような銀色の髪をしていたらう」

「……うん」

ルイセラードは頷く。

「兄上は家出人だ」

アステイナは指で額を押さえた。

「内気で無口な兄上が、急に家出だ。荒野でもこんな雨が降るんじゃないかと思った。我が家の秘宝を盗んで、夜のうちに姿を消すなんて、誰も予想しまい」

——秘法？

ルイセラードは首をかしげた。

そんな物のある家なんて、相当の家柄と見受けるが。辺りを見渡

して、お金とか宝石とか聞いて飛びつくジェーナがいないか確かめる。

——いないよな。

ルイセラードは声を潜めてアステイナに尋ねた。

「秘宝つてのは……宝石とか、そこらの物？」

彼女はびくつと肩を震わせた。

「……あ、ああ」

「僕の家にもあるんだ、秘宝」

僕の家にもある秘宝というのは、国家の重宝のことだ。その名も『リメンバー』という。王族であること、そして所持者だということとは支配者の証。ただの円柱状の、瞳と同じ色の宝石なのだが、その中には秘めたる力が存在すると言われる。持ち主はそれを持つからこそ、国家を支配する力が手に入り、国を統治出切るのだ、という言い伝えもある。信じるも信じないも、持ち主の支配者次第だが、そして最近、その重宝を盗む輩が出没するという噂もある。

なんでも、かなり身軽な二人組みの怪盗なんだとか。国家に対する反逆者だと、各国の王族や皇族に罵られている。

「そなた、相当な家柄の出身か？」

アステイナに尋ねられ、ルイセラードは頷く。

「まあ、そんな感じ」

「姓はなんという？」

アステイナは木箱の上に座った。「同じ秘宝を持っていた家柄同士、合う話もあるやもしれん」

「でも、まあそこはお互い秘密つてことで」

王族だなんて知れたら大騒ぎである。

「だが、一体兄上は何処に行ってしまったんだか。急がないとはいえ、早く戻ってきてもらわないと身分という物があるに、身分が――」

「……身分？」

え、とアステイナはびくつく。

「べ、別に私はそんな身分じゃないぞ、それにいくらなんでもおめおめ国家の重宝を持ち出すような真似は」

——え。

ルイセラードは目を見開いた。

——国家の重宝っていうことは、まさか。

「君、もしかして……」

「な、べ、別に私は皇族だなんて一言も——」

「あ」

はつとアステイナはとっさに口を押さえた。そして頭を抱える。

「また喋った……！」

「もしかして、皇族？」

訊くと、口を押さえたままちらりと彼女はこちらを見た。

——ああ、そうなんだ。

その様子がおかしくて、思わずくつくつと笑い出してしまう。

「なるほど」

「な、なるほどってなにが——なにがおかしい」

「別に」

ルイセラードは笑って、近くにあった樽に座る。

「ま、別にいいんだけどさ。気にしないしするほどでもないし。でも、リメンバーなんて物盗み出したら大罪じゃない？ 仮に皇子としても、国家基盤っていうか……そういう物を持ち出すなんて。早く追っかけた方がいいと思うよ、雨なんて関係なく」

「雨にぬれたら風邪をひく。……それに父上は急がないでいいと言った。加えて、あの無口で内気でろくに外出もしない兄上だ。怪しい人物として人々の目に焼き付けられるだろう、おろおろしていたら」

「それでも……最近リメンバー狙いの怪盗とが出るって言っし」

と、アステイナは、無関係だな、と嘲笑した。

「グランディスナはそんなにリメンバーを大事にしてはいない」

「え？」

「国家を治めるのは、父上だ。要は父上の権力と名君たる力。リメンバーは国家の信用稼ぎにしか過ぎん」

「そりゃあそうだけど……」

ルイセラードは首をかしげた。

「私の考えはおかしいか？」

アステイナの言葉に、はっと我に返る。

「いや……画期的なんじゃないかな」

「そうだろう」

アステイナは得意気に笑った。

「父上はそういうお方なんだ」

——父上は、リメンバーはなくてはならない物だと言っただけ。

そういう考えをする皇族もいるもんだなあ。

と、一人ルイセラードは考え込んだ。

「一章：銀色の髪：2」（後書き）

まだまだ先は長いぞ……。一日一章をモットーに。ていつかえらく長いなあ一つが長いな……。。

「一章：銀色の髪：3」

——今日もまた、マステイナーの食事の犠牲者が出る。いや、出てしまった。

通り雨でさすがに洪水になるはずもなかった。だが、二階の部屋は雨漏りしていたりで相当な被害を受けている。ルイセラードの部屋も雨漏りの被害に遭っていた。そして外もある程度水浸しになっているが、もう晴れ渡っている。すぐに乾くだろう。

だが、この状態でマステイナーが買い物に行こうとするわけも無く。

「これで四人分の昼ご飯が作れるねえ」

昼食後、ルイセラードは相変わらず部屋に戻るなりぶつ倒れたが、アステイナは信じがたいことに、首をかしげながら全て平らげてしまった。おまけにぴんぴんしている。

「……何で食えるんだよ」

部屋でベッドに横になっているルイセラードは、ドアの所に立っているアステイナに嫌味つたらしく言った。

「それと、行かなくていいの？」

「だから言っただろう。追いかけてなくても別段、支障はない」

「……ああ」

うげ、とルイセラードはシーツに包まった。

「大丈夫か？」

アステイナは笑った。「私は大丈夫だけれども」

そして、確かに不思議な味はしたけど、と呟いて補足する。

「ジェーナでも不味いっていうものを全部平らげる人は初めて見たよ」

ルイセラードは手で口を押さえた。

「まだ口の中に変なのが残ってる……」

「そなたは食事につるさい方か？」

「……割と何でも食べるよ」

「の、割には弱いな」

くつくつとアステイナは笑い出した。

「私はここで、またご馳走になるが、そなたはどうする？」

「まだ食べる気？」

思わずルイセラードは跳ね起きた。そして、うげ、と口を押さえる。

「尊敬するよ……僕は無理、食欲ないし」

「そうか」

「そうだよ」

うつ、とルイセラードはうずくまる。「すごい気持ち悪い」

「水、貰って来ようか？」

「……マステイーナさんには頼まないで」

「了解だ」

ジェーナに頼むよ、とアステイナは笑って部屋を出て行った。

うげ、とルイセラードはまたうずくまる。

一体あの飯には何が入っているんだろう。スープはやけに油染みた味がするし、マステイーナお手製のパンは苦いのかしょっぱいのか分からない味がする。

王室育ちつてのも一つの原因かも知れない。だけど皇女であるアステイナは全部食べている。やはりジェーナの言う通り、胃袋が弱いのだろうか。それとも彼女が味音痴か。

と、しばらくうずくまっていると、彼女は戻ってきた。

「水、持ってきたぞ」

「……ありがとう」

渾身の力を込めて、ルイセラードは水の入ったコップを受け取るや否や、一気に水を飲み干した。

「生き返った……」

「なにを大げさな」

「……祖国の料理が食べたい」

「ウェランドルスの料理はどのような物がある？」

「……そんなにこと大差ないかな。パンに野菜のスープに……よく肉を焼く」

「それなのに口に合わないのか」

と、アステイナは笑い出した。

——なにがそんなにおかしいんだ。おかしいのはアステイナの胃袋と味覚だ。

「まあ、でも皆が不味いと言っても、食えないものじゃない」

アステイナは隣に座った。ぼわん、とベッドが揺れる。

「それは私だけかもしれんが」

「アステイナだけだよ」

「まあ、舌は異常だ、と兄上に言われたことがある」

「そういえば、追いかけていないの？」

ルイセラードは尋ねた。そう言っただけで見たアステイナの横顔は寂しい。

「このまま兄上が戻ってこなければ、私が後を継ぐだろう。元々そういうことだしな」

「元々……？」

「兄上は無能だ」

アステイナはそう言っただけで、ふう、と息を吐いた。

「内気で無口で馬の世話が好き。頭は良いし決断力もあるが、なにを考えているのか分からない。時に変な行動に出る時がある。例えば、宮殿の壁のくすみに向かって微笑んで突っ立ってたり、庭の木々の朝の挨拶をして回ってたり……午前中ずっと花相手にぶつぶつと会話してるし」

ルイセラードは軽く吹き出した。

——に、似てる。

「……吹き出されるとさすがに腹が立つな」

アステイナがそう呟いたので、慌ててルイセラードは、違っ、違っ、と手を振って否定した。

「あまりにも似てたから」

「似ている？ 誰と」

くすりとルイセラードは笑った。

「僕の姉上とだよ」

きよとん、とアステイナはルイセラードを見た。

「僕の姉上もね、そんな風なんだ。天然っぽいつていうのかな……
朗らかすぎつていうのかなんて言うか…… まあ、花相手に会話つてのは一緒」

「いたのか。兄上の他にも」

「まあ、珍しいけどね」

ルイセラードの姉はジュリーナという。

すなわち、ウェランドルスの第一王女だ。平和を好み、花と愛を大切にする、天使のような女性である。晴れた日の陽だまりが好きで、よくそこで居眠りをしている。こっくりこっくりとしている彼女を部屋まで運ぶのは、ルイセラードの仕事だ。

「でも、無能つて訳じゃないんじゃないかな、君のお兄さん」

「……は？」

「決断力があるつてのは素晴らしいよ。優柔不断な王よりましさ」

「それでも父上は兄を嫌っていた」

アステイナは腕を組んで、ふん、と鼻を鳴らす。

「どうして？」

「父上は、兄上は皇帝には向いていないと思っている。国を支配する力が生まれつき備わってない、とな——って何故こんな話をそなたにしないといけない？」

「……そうだね」

「それはそうとそなた、気になっていたが、なにゆえ私が皇女だと知っても態度を変えない」

——あ、そういえば。

庶民なら敬語の一つでも使うものを。まあ、自分の方が少しだけ身分が高いのだから、敬語を使わなくてもいいとは思うが。

「気に障ったのなら訂正するよ。でも、僕ってこういう性格で、目上の人に敬語を使えないっていうか」

「まあ、今更言っても遅いか」

言っているのも絶対に敬語は使わなかったと思う。

「でもアステイナ、やっぱ早いところお兄さん追っかけた方がいいんじゃない？」

「何故」

「だって、メンバーも一緒なんだろう？ それって世間に知れたらすんごい大変なんだと思うんだけども」

「正直言って私は兄上を探すつもりはなかった」

え、と突然の言葉にルイセラードは絶句する。

「お、お兄さん、だよな？」

「そう、兄上だ。ちゃんと血の繋がった実の兄。だけれども、正直言つと私は——」

次に出てきたアステイナの言葉に、ルイセラードはぱちくりと目を見開く。

——玉座が、欲しい……？

「だけれど、正当な王位継承者はお兄さんの方じゃあ……」

「そう、私は皇女だ。だが、あの兄上を見ているとグランディスナの行く末が危ぶまれるような気がしてならない。皇族としての誇り

——それがあのアルディク・フェルナンデイルには欠けているような気がする」

——誇り。

第二の異文化発見だ。

「あの……僕がこんなこと言つのもなんだけどさ」

ルイセラードはアステイナの灰色の瞳を見つめる。

「国王——いや、皇帝に必要な物っていうのは、皇族の誇りじゃないと思うよ？ 国を納めるだけの決断力と思考、それから、民を思いやる優しい心があればいいんじゃないかな？ 時には優しさが邪魔になる時もあるかと思うけど、そこは自らの信念を曲げぬ強い心

を用いれば済む」

「……」

アステイナは黙り込んだ。そしてしばらくしてから口を開く。

「何故そう思う」

「さあね。ウエランドルス国王の、国王であり続ける精神がこうなんだ」

「……ジェルド・クロスキーズは名君だと聞いている」

アステイナは呟いた。

「その昔、ちっぽけな王国だったウエランドルスを、皇族が支配していた頃のマティルグラス程に発展させた国王以来、三百年以来だと兄上が——」

と、はっと彼女は息を呑んだ。

「お兄さん、探してあげなよ、ちゃんと。——ジェルド・クロスキーズ国王陛下はその通り、名君たる王であらせられる。僕らシュフル族の誇り。だけど、どうも王子は怠け者らしくてね」

自分で言っというて、我ながら笑える。

ルイセラードは笑いを堪えた。自分で言っ自分で笑うなんて……確かに怠け者だし、自分のことは自分がよく知ってるけれども。

「だが、怠け者って言っても、剣の腕はウエランドルス一。国王陛下も敵わないとかなんとか」

「国王陛下には敵わないらしいよ。いくらなんでもそれは無理っぽいって」

——父上に勝てるなんて、いつの話なんだか。

仮にも師匠だし、弟子が師匠に勝てるはずなし。いつも勝負して向こうが勝つと、決まってこう言われる。私に勝つなど十年早いわと。

——ちなみに今までの対戦成績は、○勝六十二敗である。

「一章：銀色の髪：3」（後書き）

アステイナのキャラが成り立って来た……かな？今思えば笑い上戸、
味音痴……な彼女ですが。続きもよろしくです。

〔二章：輝く重宝：1〕

翌日の朝、ルイセラードは悪夢にうなされて目を覚ました。

悪夢。といっても、別に己が死ぬわけじゃないし誰かが死ぬ訳でもない。長く延々と続く追いかけてこが頭の中で展開されていたのだった。

鬼は祖国での『おてんばルイセラード監視役』の軍人二人組み。

ホゲール將軍とその部下、シヴィット大佐のことだ。その二人が剣を片手に、夢の中で追いかけてくる。いつもルイセラードが旅に出ると、目撃情報を探し出し、王城に連れ戻そうと必死になって探しに来るのだ。

そしてそれがまさか夢の中でも起きようとは。

「……いい加減にしろ！」

ルイセラードは飛び起きた。ちなみに今は寢言だ。

「……夢？」

と、その時、

「どうかしたのか」

え？ とドアの方を向くと、啞然としたアステイナの姿があつた。

「思い切り叫んでたぞ」

「お、思い切り……」

参ったな、とルイセラードは脱力した。

「悪夢でも見たのか？」

「……追いかけてたんだ。ずっと。もうしつこいくらいにずっと追いかけて、来るなって言っても来るから『いい加減にしろ！』って言った」

「それは災難だったな。それで、災難続きでなんだが」

と、アステイナはにんまりと笑った。

「マステイナさんがお前が起きるのを待ってるぞ。朝ご飯、今日のは自信作なんだと」

とつさにルイセラードはベッドに突っ伏してシーツを頭まで被った。

「……それともう一つ、ルイセラード、そなたに客人が来ている」「え?」

シーツから顔を出すと、アステイナはにつこりと嫌味なまでに微笑んだ。

「金の瞳をした軍人が二人。呼んできてくれと実は頼まれていて、王子殿下を。まさかな。私と身分がほとんど同じだなんてな?」

「人違いだろ、それは――」

と、その時だった。

誰かが階段を上がってきた。ぎしぎしという音が聞こえる。

――まさかそんなバカな。

そんなバカなことがあるはずない。だが、そのまさかだとしたら自分はどうする。

ルイセラードはとつさにベッドから降りて窓を開けた。が、その時、

「下にはシヴィット大佐が待ち構えています、殿下!」

恐る恐るゆっくりルイセラードは振り向く。そしてその人物を見るなり――。

「うわっ!」

「もう逃げませんよ。今回は『挟み撃ち作戦第五段、殿下が眠っておられるこの時間帯に襲ってしまおう作戦』です」

「またそんな長い作戦名を」

「で、す、が! さて、これからどうしますか? そこから飛び降りるなんて出来ませんよ? なにせシヴィット大佐がいるんですからね」

「……また僕の負け」

げんなりとルイセラードは肩を落とした。そして窓枠に肘を付けてもたれる。

この窓から上に登れるだろうか。だが、やってみるしかない。

「ホゲール將軍、降参」

「やけに素直ですね」

「だって、袋の中のねずみ」

「ごもつともです」

と、將軍はこちらにやって来た。そして、目の前に来たその刹那に、

——今だ。

「將軍、窮鼠猫を噛むって知ってる？」

ルイセラードは將軍の顎を蹴り飛ばした。そして窓枠に上り、屋根の上に登る。

「この……殿下！」

「ごめん、顎大丈夫？」

とりあえず、屋根伝いに行くしかないか。

ルイセラードは走り出した。今までの対戦成績、○勝十一敗。パ
ン屋の屋根を伝い、一旦街中に入る。そして何処か隠れそうな場所
を探す。路地裏でもいいが、それで捕まったのが過去六回。あと五
回は、あの『挟み撃ち作戦』で敗れている。

さて、どうする。

とりあえず屋根から下りて人ごみに紛れておく。

それにしても正夢になるとは。追いかけてここが現実化など、して
ほしくはなかった。

と、その時だった。

「こんな所で散歩かい？　そう、朝ご飯食べてないだろう、お前」
ぎくつ。

ルイセラードは恐る恐る声のした方を向いた。

——この声はまさか。

「腹が減ってるなら、思う存分食わしてやるぞ？」

視線の先には大きな袋を抱えて満面の笑みで立つ、マスティーナ
の姿があった。

——うげっ。

胃の中に気持ち悪いのが再発してきた。

「こんな所まであたしのご飯が食べたくてわざわざ来てくれたのかい」

——いや、それだけは違う！

と、喉の奥まで出かかったが、

「いいんだよ、遠慮はしなくて。そうだな、野菜のスープでも要るか？ そう、パンも残ってたんだっけねえ」

がしつ、と腕を捕まれてしまった。

——え。

「それじゃあ戻ろうか。いやあ、あんたにもいい所あるじゃないか」
マスティーナは上機嫌でぐいぐいとルイセラードを引っ張っていった。

「二章：輝く重宝：2」

「あれ、お帰りなさ……っ、くつくくっ」

あははは、とアステイナは声を上げて笑った。

「笑うつもりはなかったんだが、あまりにもおかしくて」

段々と本性が見え始めた気がする。けらけらとアステイナはお腹を抱えて笑い出した。

「こっちは好きで捕まった訳じゃないっ！」

叫んでも、アステイナは笑い続ける。

「アステイナっ！」

「ご、ごめん……か、仮にも他国のっ……」

アステイナの言葉はそこで途切れて、笑いに変わった。と、ホグール將軍とシヴィット大佐はやって来ると、マステーナからルイセラードを引き離れた。

「挟み撃ち作戦第五段、成功ですね」

見上げると將軍は笑っていた。「十二連勝ですね、これで」

「一対二は不利なんだよ！ 第一！」

「そう怒らずとも。記念すべき十二連敗ではないですか」

「誰も記念してない！」

「それに。今回はただ単にいつものお父上のご命令だけではありません」

——へ？

いつもの命令だけじゃない？ それはどういう。

「將軍、どういうこと、それ」

「心して聞いてください。決して気を失うなんてこと、なさらないでくださいね」

「気を失う？」

見上げると、將軍の目はまっすぐに自分を見ていた。

「將軍？」

「この話は、極秘に伝えろと言われています。——だからして」

將軍は辺りを見渡す。「少しの間、三人にしてもらいたい」

「——ちよつと待ちな」

言つたのはマステイーナだった。「うちの客への客人と見えるが、ここはあたしの宿だ。出て行くならそつちが出て行きな！」

「な、なにを——」

「その通りだよ」

ルイセラードは自分の腕を掴んでいた將軍の手を振り払つた。

「いきなりの客人が出て行けなど言う資格はないさ。いくら自分が將軍でも、その場その場での身分をわきまえる。人には立場というものがある。そういう態度を父上が最も嫌うのを知つて、マステイーナさんにそう言つたのならば咎めはしないけど、代わりに王城から出て行け」

「そ、それは……」

「分かつたのなら、上の部屋で話を聞こうじゃないか」

ルイセラードはそう言つて、將軍の腕を掴んだ。

「ほら」

そしてシヴィット大佐の腕も掴んで、二人を二階にある部屋へ引っ張つていった。

笑いを堪えるアステイーナと、啞然とするジェーナと、そしてむすつとしているマステイーナを一階に残して。

「まったく」

二人を部屋に放り込んで、ルイセラードはドアを閉めた。

「それで、話つてなに」

「……申し訳ありませんでした」

將軍は頭を下げた。

「そう思つただけでいいさ」

と、ルイセラードは笑いかけた。そして窓際に向かう。

「それで、父上からの話つてなに？」

窓は開いたままになっていた。枠にもたれて、その景色を眺める。
「勉強一年分溜めてるの根に持つてるの？」

「——違いますよ」

静かに言い放たれた声に、ルイセラードは振り向いた。

「違う？」

「そうです」

目が真剣だ。重苦しい雰囲気があるその場を包み込む。

「なにか、重大なこと……」

「殿下。心して聞いてください」

「——心して？」

ルイセラードはごくりと唾を飲み込む。と、將軍は口を開いた。

「実は、ジュリーナさまが三日ほど前から姿を消されたんです」

「ずどん、と心の中に衝撃が走った。

「——どういうことだ、それは。」

「……冗談」

「姿がないんです。誘拐ならば要求があるはずですが、それもなく
て」

「家出なんてこと……姉上がなさるはずが」

「書き置きもありませんでした」

「じゃあ……」

ルイセラードはその場にへたり込んだ。

「殿下、『失踪』というのが正しい表現かと」

「——失踪？」

「だけれど、何故あの朗らかの塊の姉上が失踪なんかしなければなら
ない。」

「それから、これは殿下に追い討ちをかける様なものなんですが。」

ジュリーナさまの行方が知れないと同時に、国王陛下の部屋からリ
メンバーも姿を消していたんです」

「——へ？」

「今、何て言った。」

と、その時だった。

「う、わ、わっ！」

ぎっ、とドアが開いたかと思うと、誰かが部屋に倒れ込んだ。

銀色の髪からして、誰かは一目瞭然である。

「痛っ……」

「アステイナ！」

ルイセラードは叫んだ。「どうして——」

「い、いや、気になって」

よいしょ、と彼女は体を起こして立ち上がる。「そうしたらリメンバーも消えたって言うから動揺してしまった」

「……盗み聞きしてたの？」

「もちろん」

アステイナは、ふん、と鼻を鳴らす。「ルイセラード・クロスキーズ殿下。私が誰かをお忘れか」

「アステイナ・フェルナンデイル嬢。忘れる訳ない」

と、その刹那、將軍と大佐は目を皿にした。そんな啞然とする二人にアステイナは微笑みかける。

「お初にお目にかかります。ご察しの通り、私はアステイナ・フェルナンデイルと申す者。すまないが話を立ち聞き——いや、盗み聞きさせてもらった」

アステイナは満足そうに笑う。將軍と大佐はとっさにその場に片膝をつき、アステイナに頭を下げた。それに、満足気に笑ったまま彼女は將軍と目線の高さを同じにする。

「まあ、ときにホグール將軍殿。それは『リメンバーも一緒に』ということなのだろうか？」

「それは信じ難きことかと」

將軍は更に頭を下げる。「ご無礼、お詫び申し上げます」

「まあ、それはどうでもいい。気にするでないぞ。——それで、ジュリーナさまがリメンバーを持って行った、とお考えか？」

「いえ、近頃出る怪盗の仕業とも考えられます。ですが、なんの騒

ぎも起こりませんでしたので、その線は薄いかと」

そうか、とアステイナは將軍の肩を叩いて立ち上がった。

「ルイセラード。似ていないか」

「え……え？」

一瞬状況が飲み込めずにいた。「どういうこと？」

「私の兄上と似ているは思わぬか。私の兄上とそなたの姉上は性格が似ているという共通点もあるが、まあそれは置いておこう。それよりも、王族とリメンバーの同時失踪というのが気になる」

——あ。

思わずルイセラードは身を乗り出した。

「そついえば君のお兄さん……」

「気になるな。似ている辺りが」

「ああ。どうやら、話を吟味してみる必要があるそうだ」

〔二章：輝く重宝：3〕

夕陽が差し込む部屋に二人。

ホグール將軍とシヴィット大佐を部屋から追い出し、ルイセラードとアステイナは二人で話を吟味していた。

やけに似ている状況。二人とも皇族、王族。そして、アステイナの兄が失踪した日と、ジュリーナが失踪した日が近い。それぞれの性格が妙に似ているのはさておき、国家の重宝であるリメンバーの同時失踪というのも気になる。確かにここ最近、リメンバー狙いの怪盗が出るというが、もしその怪盗の仕業ならば、何かしら騒ぎが起きるし、今頃は世界中の噂になっているだろう。

「……どう思う？ アステイナ」

ルイセラードはベッドの上に座り込んでいた。「皇女としてどう思う？」

「そうだな。仮にジュリーナさまがリメンバーを持ち逃げしたとなると、それはなんの為なんだろうか。私の兄上はさておき、仮にもそのウェランドルスという大国の内親王殿下だ。リメンバーを信仰する王族ならば、それを持ち出すことがどういふことを知っているはずだろう？」

「そうなんだよ」

ルイセラードはため息をついた。

——理由が分からない。まさにその通りだ。

ウェランドルスの国家にとって、リメンバーがなくなるといふことは、国王の信用と国家の力に関わってくる。

「まったくもって分からない」

あーあ、とルイセラードはベッドに寝転がった。

「姉上という人を良く知っていたはずなのに、結局僕はなにも知らない」

「そんなこと」

ふつとアステイナは微笑んだ。「きょうだいでも、知らないことはたくさんある。私も未だに兄上という人が全然分らないからな」

「不思議な人ほど、理解に苦しむこととかある？」

「まあな。花に向かって話しかけて、一体なんの利益があるんだと言いたい」

「でも」

ルイセラードは体を起こした。「父上が前に言われていた。『ジユリーナが朗らかなのは生まれつきなのと、お前たちの母上からの遺伝だ。だが、なにかとせつかちになる時に、王妃のあの朗らかさで立ち止まることがある。そこで我に帰って、冷静な判断を下せることが私にはしばしばある』ってね」

「……なるほど」

アステイナは頷く。「それが名君になった秘密か？」

「さあね。父上には元から国王としての才能があるみたいだし。まあ、本人の性格もあると思うけど」

「……」

アステイナは考え込んだ。

「なんだか……」

「へ？」

「グランディスナは全てに関して実力の世界だからな。国王になるも、先代から伝わる物がある。それを私も幼い頃に暗記させられた。皇帝とは、常に国の最高峰でなければならない。権力も最高峰でなければならない。それだけの意義ある皇族に、王位は継承されていく」

「……はあ。なるほど」

「兄上には覇気が足りないと言われている。周囲を納得させる覇気だ。皇帝の日常に、朗らかさも笑顔もない。祖国を栄えさせ、己の権力を不動の物にする為だけに皇帝とは在り続けるものだ、と父上は言った」

「……寂しくない？ それ」

ルイセラードは呟いた。

確かにそれも一理ある。国王と皇帝、この違いは大きい物だからだ。言葉の重みの違い、そして王国と帝国……その違いはあまりにも激しい。例えば、王国であれば国王が国を治める。だが、それなりに民の意見を取り入れたりもする。今のウエランドルスがそうだ。そして反対に、帝国は皇帝の治める国。激しい身分の差に、貧富の差。ウエランドルスの東に位置するロルディオリーズという帝国は、世界一の軍国主義国だ。

「寂しいもなにも、慣れたら平気だ」

アステイナは嘲笑った。

「それが私の実家だからな」

国によって国家もさまざま。それは生まれ育った文化の違いと同じなのだろうか。

アステイナとはそんなに深い溝を感じない。それは、お互いに身分を知らずに知り合った影響なのかもしれない。多少の思想の違いはあるものの、年は近いし、似た者同士のきょうだいがいる。

そして今、同じ状況の中にいる。

元々、ルイセラードは王族だとか皇族だとかその違いにこだわらない。

その理由はまあ、父から受け継いだ思想と言うのが一般的だろう。

〔二章：輝く重宝：4〕

その日の夜、一階の酒場はいつもより騒がしかった。

酒好きのホグール将軍とシヴィット大佐が飲み始めたのが事の始まりで、そしてそこに自称酒豪のマスティーナも入ってしまったのだ。取り残されたルイセラードとジェーナ、そしてアスティナの三人は、三人だけで意味のない水での乾杯を挙げていた。

「……マスティーナさんってお酒弱いのよ」

そうふいにジェーナが呟く。

「強そうに見えるけど」

ルイセラードは水を一口飲む。「僕は絶対に駄目だよ。飲めやしない」

「あんたは確かに弱そう」

ジェーナは頷く。そして隣でアスティナも頷く。

「飲んだら一発で寝る方だろう」

「悪かったな」

ルイセラードはコップに入った水を一気に飲み干した。「にしても、あんなにべろべろに酔って……僕は知らないぞ」

なにが？ とアスティナは向こうのテーブルを見た。そして、ああ、と頷く。

「そなたの護衛か？ あの者たちは」

「一応そうなるんじゃないかな。というより最近『ルイセラードを捕まえよう同盟』を父上と組んだらしいけど」

と、目の前の水差しにジェーナが手を伸ばした。

「どういう同盟よ、それ」

「え？」

「……へ？」

ルイセラードとアスティナは同時にジェーナを見た。

「いまいちよく読めてないんだけどさ？」

ジェーナは水をコップに注ぐ。「その、あの尋ねてきた軍人さんたちがあんたとどういう関係なのか、とか」

「ああ……」

それはどうなんだ、とルイセラードはアステイナに尋ねる。

「……さあ」

アステイナは肩をすくめた。「一応、祖国での知り合いでいいんじゃないか？」

「それでなに？」

ジェーナは身を乗り出す。「どうなの」

「まあ、それはそういう——」

ルイセラードはとぼけようと視線を逸らす。と、その時だった。店の戸が開く。

「いらっしやいませ——」

そう言ったマステイナは完全に酔いつぶれていた。

「客なら今日は泊まる部屋が空いてませんよお？」

入ってきたのは二人だった。全身に衣をまとい、顔を隠している。ぱつと見、不気味な感じさえした。と、背の低い方がルイセラードたちの方へやって来た。

「……やあつと見つけた」

——女だ。いや、声からして、まだ少女だろうか。

ふふつ、と彼女は笑う。と、背後に手を回した。刹那、殿下！と將軍と大佐が叫び、剣を抜いたかと思うと、一本の槍の切っ先がジェーナに迫った。とつさにルイセラードはテーブル踏み倒し、ジェーナを突き飛ばす。

一緒に床になだれ込み、はっと視線を移した刹那、もう一度切っ先が向かってきた。

——このままでは。

ルイセラードはとつさに迫ってきた槍の刃を素手で掴んだ。

「——っ！」

すさまじい痛みが手のひらを襲った。ゆっくりと生暖かい血が腕

を伝ってくる。

「……っ」

「ル、ルイセラード、血！」

「……僕のことは気にしなくていい」

ジェーナに微笑みかけ、刃を掴んだまま立ち上がる。

「どうしてこんなことをする」

空いている方の手で槍の柄を掴む。そして刃から手を放した。

空気が凍りつく。ぽた、ぽた、とルイセラードの右手から血が滴れ落ちる音が、その場に響いていた。

目の前にいる衣を被った少女らしき人は、少しも動かない。

「ホグール將軍」

ルイセラードは目の前の彼女を睨みつけながら言った。「マステイーナさんを頼む。それと剣を貸してくれ」

「私にも」

言ったのはアステイナだ。「でかいのは私が相手をしてみる」

「……だ、そうだ」

ルイセラードは將軍と大佐、そしてアステイナに目配せする。

——今だ。

「投げろ！」

槍を蹴飛ばし、そして投げられてきた剣を受け取る。

目の前の彼女は飛び上がり、飛ばされた槍を空中で掴むと突っ込んできた。迫ってきた切っ先を剣で受け止め、ルイセラードは槍をなぎ倒し刃を踏みつけ、床に着地した彼女の喉元に切っ先を向けた。

「……あらま。速いのね、結構」

「それはどうも」

一方、大佐から剣を受け取ったアステイナは、でかい方に突っ込んでいった。そして正面から斬りかかる。だが、そいつの出した剣に刃は受け止められた。

ルイセラードの身長くらいの長さがある。それに、びくともしない。

アステイナは飛び退いて再び斬りかかった。だが相手は、片腕でその剣を操り、アステイナごと一撃を跳ね飛ばす。そしてルイセラードの方に突っ込んで行った。

——それに目の前の彼女はくすりと笑う。

「——ルイセラード！」

アステイナの叫び声が出たかと思うと、目の前の彼女は飛び退くと、その瞬間、目の前にもう一つの切っ先が現れた。

「畜生っ！」

ルイセラードはとっさにそれを剣で受け止める。だが、ものすごい力で押されていく。

——なんて力。

駄目だ、弾き飛ばされる。

そう思った瞬間、背後からジェーナの悲鳴が聞こえた。それと同じ時にふっと力は緩む。

——と、その場に煙が充満してきた。

「な……」

辺りが見えない。気配を探るが、ガシャン、と何かが割れる音と同時に、それは遠ざかってしまった。

「……畜生」

げげげほっ、とルイセラードは咳き込む。そして辺りを見渡した。

「アステイナ、何処だ。大丈夫か？」

すつと辺りの空気は澄んでいく。

「……ここだ」

声のした方を向くと、床に倒れ込んだアステイナの姿があった。

「そなたの方こそ……手は」

彼女はゆっくりと立ち上がる。「私は大事ない」

良かった、とルイセラードは辺りを見渡した。

「みんな大丈夫か。……って、待て」

あれ、とルイセラードはよくよく辺りを見渡した。

「ジェーナは」

なに、とアステイナも見渡す。と、その時だった。

「い……いったーい」

はっと二人は声のした方を向く。と、梓ごと蹴り破られた窓があった。

「なによ、もう……」

「ジエーナ？」

ルイセラードはその窓に駆け寄り、外を覗いた。

「……あ、ルイセラード」

そこには地面に座り込んだジエーナがいた。きょとん、と彼女は見上げてくる。

「どうしてそんな所に……」

尋ねると、ジエーナは首をかしげた。

「なんか、『捕まれた！ 連れ去られる！』って思ったんだけど、ここに捨てられちゃったみたい」

「……そうか」

とりあえずルイセラードもアステイナも一息ついた。

「だけれど、今のはなんだったんだろうか」

言ったのはアステイナだ。「私には、どうもジエーナを狙って来たような気がしたんだが……気のせいかな？」

「え……え？ 気のせいじゃない？」

ジエーナはおどけて見せる。「ほーら、アステイナの勝手な思い違いとか？」

「怪しいぞ。かなり怪しい」

「……わかったわよ」

べ、とジエーナは舌を出す。

「そつだよ、あたしを狙ってきたんだよ。多分」

と、ジエーナは深いため息をついた。

「盗られちゃった……」

「盗られた？ なにを」

ルイセラードはそう言つて、アステイナと顔を見合わせた。

と、ジェーナはぽつりと呟く。

「……父さんと母さんの形見」

「形見？」

「……形見ってどのようなものだ？」

アステイナが今度は尋ねた。と、ジェーナは消えそうな声で言う。

「驚かないでね」

「驚く？ 何故」

「だって……」

ジェーナはじーっと地面を見つめた。

「……だもん」

「……え？」

なんなんだ？ とアステイナは再度尋ねる。と、ジェーナは呟いた。

「……リメンバー」

かちん、と一気にその場が硬直した。

その名前。その意味するものは、ただ一つ。

大人の親指くらいの大きさで、透明の円柱の中に、一回り小さな民族の瞳と同じ色をしている円柱状のものがある。一見価値のなさそうに見える、唯一無二の国宝。

「それって、もしかして紫の円柱状の……」

——んなまさか。

ルイセラードは苦笑いする。「まさかとは思うけど——」

と、ジェーナは静かに頷いた。

——な。

「な」

その場に一気に衝撃が走った。

「な——」

そして次の瞬間、ルイセラードとアステイナは同時に叫んだ。

「——なにーっ!」

〔二章：輝く重宝：4〕（後書き）

ジエーナさんの素性がばれましたね。二章感想。二章を楽しみにしてくれば幸いです……。

「三章：幻の皇族：1」

あれから一階は微妙な雰囲気包まれていた。

ホゲール將軍とシヴィット大佐は硬直しているし、ルイセラードはアステイナに怪我の手当てを受けつつ、その痛みに叫びっぱなしで、アステイナはというと手当てをしながらその痛いだの、なんだのにぶつぶつと小言を返し、そしてジェーナは窃盗に遭ったことで思い切りご機嫌な斜めだった。先程から席に座ってテーブルを指でこつこつと叩いている。そのオーラが異様に怖い。そしてマステイナはといえば、一人のん気に眠っていた。

「……っていうか」

ジェーナはテーブルを叩くのをやめた。「ルイセラード、さっきの奴等はなに」

「え？　——痛っ」

ルイセラードは思わず目を閉じた。「アステイナ、もっと優しく頼むよ」

「文句言つな。もう一回言うが」

槍の刃を素手掴みした手に包帯が巻かれていく。

「私に優しさなど期待しない方がいい」

「じゃあもつと丁寧に——」

「おおざっぱで悪かったな」

と、言いつつも、なかなか綺麗に巻いてくれている。

そして最後に、端を結んで終わり。

「終わったぞ」

「——ありがとう」

「だが、医者に行った方がいいかもしれないな。化膿でもしてきたら大変だ」

「そうだね——で、ジェーナ、さっきなんて？」

と、ジェーナの方を向く。彼女は『いかにも不機嫌です』という

雰囲気をかもし出しながらテーブルに頬杖をついていた。

「ルイセラード、さっきの奴等は誰！」

ジェーナは叫んだ。そして思い切りテーブルを叩く。

「今思えば本当に腹が立つ！ 人のこと外に連れ出したかと思えば窃盗！ それも『お前に用はない』ですって！ 人のもの取つてそりやないでしょう！ ね！」

「そりやあ……」

「誰か突き止めて二人とも蹴り飛ばしてやりたいわ」

「ジェーナ……」

「それでよ！」

ジェーナはがたと席を立った。「さっきはなんか衝撃で、なにを盗られたから喋っちゃったけど、今思ったらなんであたしは喋ったんだか！ あんたたちこれからどうするつもり？ あたしを何処かで高値で売ろうとか考えてないでしょうね」

「……へ？」

「まあせいぜい皇族は金貨百枚は行くでしょうね。なんたってあのウィールントウールの血を引いてるんですもんね。まあ、あたしはそれが本当かなんて知らないけど！」

思い切りジェーナはテーブルを叩き、一同は肩をすくめた。

「とりあえずジェーナ、座ったら……」

まあまあ、とルイセラードは彼女をなだめる。

「とりあえず落ち着こう。あいつらが誰かを話すから」
「……」

しばらくジェーナはルイセラードを睨みつけていた。と、そうね、と彼女はため息をついて椅子に腰を下ろす。

「ごめん、叫んで」

「いや……それで、さっきの奴等のことだけど」

ルイセラードは一息ついて、ジェーナの方に体ごと向いた。

「多分、リメンバーを狙ってきた辺り、近頃出没している怪盗だと思っ」

「……は？」

「国家の中では案外有名なんだ。なにせ国王、皇帝がリメンバーの所持者。国家の威信とか信用とか——ウェランドルスではそれに関わってくるからね。民衆の間ではそう有名な噂じゃないかもしれない……これは。でも、とにかくそういう怪盗がいるんだ。みんなは国家への反逆罪だとか神へのぼうとくだとか言ってる。彼らは俗に、悪魔と死神——フェイエルとシェイレルと呼ばれ、その並外れた跳躍力から、夕焼け色の瞳か水色の瞳をしているらしい」

と、きょとんとジェーナは首をかしげた。

「ちようやくりよく？」

「ああ。その二つの民族——カヌズス族とクラフル族には身体的にそういう特徴があつてね」

へえ……とジェーナはあつけらかと呟く。さっきまでの怒りは何処へ行ったんだか。

「それで、そいつらがあたしのあれを狙って来た、ってこと」

「そういうことになるね。でも、よくジェーナを見つけたなあって思うよ。滅亡したとされている皇族や王族っていうのは、なかなか見つけれないからね」

「ふーん」

と、なんとか空気が和やかになったところでアスティナが言った。「実在とわかったところで思いついたんだが、もしかしたらそなたの姉上は危険な状況にあるんじゃないか？ 私の兄上は置いというて」

「へ？」

「奴等はリメンバー在るところに在り。ということだろう」

しばらくその場が沈黙した。なにが？ とジェーナが首をかしげる。

——まあ、考えればそうなる。ってそれはもしかしてこういうことでは——。

「將軍に大佐！」

ルイセラードは呼ぶと同時に振り返った。二人は同時に、はい！

と答える。

「誰が姉上を探している！ 大方將軍の部下かとは思うが――」

「さようで。スルリエズとの国境には厳重な検問を張ってます」

と、將軍が言った。そして大佐が補足する。

「内親王殿下が国外へ出られる確率も、先程の輩がウェランドルスに入れる確立も低いですから。大丈夫ですよ」

いまいち納得できないけど。確率が低いってことは、入れる確立もあるってことでは。

「ウェランドルス国軍精鋭部隊を信用することにしても、もし入り込んだらどうなる？ 將軍、父上はどう思ってる？ 危険性について」

「非常に危険だと分かってます。それでなければ精鋭部隊を送り込みません」

「……けどさ」

フェイエルとシェイレルは盗みの専門家。勝手に入国なんて容易いだろう。そうなってしまうえば、ジュリーナが危ない。王城にリメンバーがないことに気づき、尚且つ王女が家出したと聞けば、かすかな可能性を辿ってジュリーナを見つけ出すに違いない。

と、その時だった。

「殿下、一つ」

將軍はそう言って懷から丸められた紙を出した。そして差し出す。

「ジュリーナさまのお部屋に、こんなものがあつたと……道中で国王陛下の伝書鳩が」

ルイセラードは受け取って、それを開いた。そして内容に目を通す。

親愛なるジュリーナ・クロスキーズ内親王殿下。お元気でしょうか。私はいつもと変わらない毎日を送っています。今日、私の国では珍しく雨が降っています。妹が『外に出れない』と父上に愚痴をこぼしていました。でも、私としては少し安心しています。だって、

変に動き回って怪我などしてほしくはありませんから。ジュリーナ殿下、それでは、スルリエズとの国境まで迎えに行きます。

スルリエズとは、赤い瞳の者が住まう国のことだ。ここのおちようど真南、そしてウエランドルスのおすぐ北にある共和国。

「……？」

ルイセラードは曲げた指を唇に当てて考え込んだ。

どうということなんだろう、これは。というよりも誰からの手紙なのだろう。

と、將軍に、殿下、と呼ばれ我に帰る。

「同時に陛下から伝言です。『帰り道、お前しか他国にいて不自然じゃないのだから、一応スルリエズに寄って来い』と。それと殿下、陛下によるとその他にも似通った筆跡の手紙が数通、ジュリーナさまのお部屋にあったらしいです」

「なんだって？」

その時、ちょっと見せてくれないか、とアステイナが手を差し出した。

「手紙を」

「ああ」

はい、とルイセラードはそれを彼女に手渡す。と、アステイナはざっとその手紙に目を通した。そして薄く笑って一言。

「これは駆け落ちの提案か？」

「か、駆け落ち？」

「悪い、冗談だ。だが、これはどう見ても待ち合わせの約束だろう——？」

アステイナはじーっと手紙を睨んだ。と、ぴく、と右の眉がつり上がる。

「この語尾の跳ね上がりの癖……」

そしてはっと目を見開き、アステイナはもう一度手紙に目を通して始めた。

「アステイナ？」

と、彼女は静かに手紙を畳んだ。

「ルイセラード、ウェランドルスとグランディスナには交流はないな」

「え……？」

「ないはずなんだ。私とそなたも初めて会っただろう。同盟はおろか、国交さえもない。そんな双方の国の何処に、交流があるというんだ。仮にも父上は永世中立国を保とうとしている。なのに、何故――」

と、アステイナは静かに訊いた。

「兄上の書いたであろう手紙が、ジュリーナ殿下の御許に存在するんだ？」

その場が沈黙した。

「アステイナ、それはどういう……」

「単語の語尾の跳ね上がりを見てみる」

アステイナは手紙をルイセラードに返す。「妙にぴんつと跳ねているだろう？」

ルイセラードは手紙を覗き込んだ。確かに単語の語尾がぴんつと跳ねている。なんとなく硬い感じのする文字。

「アステイナ、まさか……」

「リメンバーを持って失踪というのは、実は双方リメンバーを持ち、そして待ち合わせするということじゃなかるうか。理由は知らないが。――というよりもあの兄上！　なんでこんなに人様に迷惑を……！」

「姉上と、アステイナのお兄さんが知り合い？」

「だろうな。兄上、やけにウェランドルスに詳しいと思ったらしいこと――」

アステイナはまいったなとばかりに頭を抱えた。

「……全く……私は今、兄上を呪い殺しそうな勢いだぞ」
「そんな」

ルイセラードは苦笑いした。「呪い殺さなくても」

「だが、よりによってあのウェランドルスにこんな迷惑を……」
アステイナは深い深いため息をついた。

「別に僕らは迷惑だなんて思っていないから……」

「迷惑だろう。仮にもジュリーナさまを呼び出したのは私の兄上だぞ」

「それに着いて行っちゃう姉上も姉上だけだね」

「あの兄上は本当にやることなすこと、ろくなことがなさ過ぎる！」
と、叫んだ後に、アステイナは長い長いため息をついた。

「……グランディスナはどのような罰でも受けよう……ルイセラード・クロスキーズ殿下、この場で私を殴ってくれても」

「そんな。お兄さんについてはまた今度にしよう。別に怒ってる訳じゃないし、誰かと一緒だと分かっただけでも少し安心したから」

「……他国不孝者ですまない」

「そんなことない」

ルイセラードは首を横に振った。まあ、心配が少し減ったのは本当だから。

でも、アステイナの兄さんが待ち合わせの相手で良かったと思う。何処の馬の骨とも分らない奴よりは、身元が知れてるだけ安心だし。なにより、アステイナの話と自分の見かけた銀髪の青年を照らし合わせると、とても良い青年のような気がする。

花相手に会話する時点で、それは分かりきったことだけでも。

と、その時だった。

「あの一」

言ったのはジェーナだった。

「話が逸れたんですけど。っていうより、ルイセラード、お姉さん家出したの？」

「ああ……そうみたい」

「それで、アステイナが探してたのがお兄さんで、そのお兄さんも家出。そんでもってルイセラードの姉さんとアステイナの兄さんが

待ち合わせてるって？ それじゃあアステイナの言った通り、まともにも駆け落ちじゃない」

そう思わない？ とジェーナは首をかしげた。「まあ、仮にもシユフル族とカロウ族だからそれはないと思うけど？」

「……だといけどね」

ルイセラードは呟いた。

そんなことあったら、それでこそこちらがどうグランディスナに謝罪すれば良いか。

「……とりあえず、今日は休もう」

そう言って話を遮断し、席を立つ。

——疲れた。それに右手がかなり痛い。

駆け落ちか、そうじゃないかを考えるのは明日からだ。とりあえず、明日にはここを出ないといけない。本当は今すぐにでも行きたいが、今出て行っても辺りは真っ暗で、尚且つここは森に囲まれた森。南へ向かうには森を抜けなければならない。夜に森なんてのに入れば、迷ってしまうに決まっている。

——でも、本当に駆け落ちだなんてそんなことないといいけど。

ため息をついて、ルイセラードは一人その場を去って二階の部屋へと向かった。

「三章：幻の皇族：2」

休もう、と言ったのはいいけれど。

当の本人、傷の痛みでそう眠れたもんじゃない。大分治まってはきたが、血が滲み出てきている。痛いなんか言ったらジーナが気にするから、易々と弱音は吐けない。本当は痛いけれども。

——怪我には慣れているはずなんだからな。

ベッドの上に仰向けになって天井を見上げる。にしても、槍の素手掴みがこんなに後になって痛いなんて。そりゃあ掴んだ瞬間が一番痛かったけれど。

もう一回手当てし直してもらおうか。それか痛み止めとか持つていないだろうか。

——でも、もうみんな寝ているだろうし。

体を起こして、床に目をやる。

部屋の床に座り込んで、自分にベッドを譲って眠り込んでいる二人に、思わず微笑む。

故郷でも、いつも王太子殿下最優先で考えてくれる。たまには自己中心でも良いのに。

そっとベッドから降りて、なるべく右手に衝撃を与えないようにそろりと進み、部屋を出る。そして、向かいの部屋の前に立つ。

「……」

まさか起きてる訳あるまいし。それに、下手したら起こしてしまう。明日は忙しくなりそうなのに。

と、その時、がちやりと扉が開いた。

「誰かと思えばそなたか」

囁き声で、扉を開けた彼女はそう言う。

「ごめん、起こした？」

囁き声で返す。

「……変に気配がすれば起きるぞ。起こされた」

「ごめん、アステイナ」

「なにか用か？」

「ちよつとね。やけに手が痛んで眠れなくて」

「……とりあえず入れ。今日は少し冷える」

開けられたドアから、彼女に促されて中に入る。部屋は片付いていて、荷物はテーブルの上に置いてあった。そこに明かりのともったランプもある。ベッドの枕元には銀の柄と鞘の細身の剣と、懐中時計があった。

「まあ、座れ——と言っても、ベッドの上しかないけれども」

「そうだね」

と、遠慮なく座らしてもらう。——何故か自分の部屋のベッドよりもふかふかしているのは気のせいかな。

「普段自室に男は入れない性格なんだが」

テーブルの上の荷物を整理しながら、アステイナは言った。そして補足する。

「父上と兄上は別だが」

「部屋に入りたがる男の人、いるの？」

「さあな。召使いは絶対に扉の手前で追い返す。女しか、まず私は雇わない」

「なるほど。でも」

ちよつと思ひ立つて尋ねてみる。

「その年ならそろそろ縁談があるんじゃない？」

と、彼女は手を止めた。そしてじとーっと睨んでこちらに振り向く。

「この私に誰が求婚なんかするもんか。男勝りだぞ。半分は皇子だぞ」

「それでも、皇帝陛下はそろそろ亭主を……と考えてるんじゃない？」

「そちらこそ、その話はあるそうだが？」

「ない、ない」

ルイセラードはぶんぶん首を横に振った。「僕に限ってそんな」
「だが、仮にも跡継ぎだろう。クロスキーズ家の——ウェランドル
ス国王の」

「本当にそういう話はないよ」

「あつても不思議ではないと思うけれどな、私は」

アステイナは再び荷物を片付け始めた。

「それともなにか。恋人でもいるか？」

「な、なに？」

「冗談だ」

そう言つて彼女は笑つた。「気にするな」

気にはしないけれども。急にそんなこと言われると動揺する。

「……まともに恋人がいるなら、祖国を離れて旅をしたりしない
つて」

ぼそつとルイセラードは呟いた。なにか言つたか？ と、アステ
イナは振り向く。

「いや、なんでもない。——っ……」

会話で忘れていた痛みが、またずきずきと再発してきた。右手の
手のひらを見ると、さっきよりも血が滲み出てきている。

「やはり医者に行くべきだろう、それは。診てもらえ。その方がい
い」

「医者、ね。時間があればの話だけどっ……」

ずきずきと手のひらが痛む。「今日はどうやら……眠れそうにな
い」

「痛み止めがあればいいんだがな」

「本当に。……起こして悪かった」

ルイセラードはそう言つてベッドから降りた。「明日は忙しくな
りそうなのに」

「いや。——一ついいか？」

「え？」

「これからどうする？」

「へ？」

「私は明日にでも発つつもりだ。兄上の目撃情報を得たことだし、なにより目的地が掴めたんだ。それで、そなたはお父上の命令でスルリイエズへ寄らなければならんだろう。だからその……よければ一緒に行けたら、と思うんだが。私は旅に疎いし、外国に疎い。……グランデイスナから出たのは、今回が初めてだ」

「そうなの？」

結構慣れてるような風格はあつたけれど。

「まあ、僕は構わないよ。いつも一人だから、誰かが一緒っていうのも楽しいかもしれないし」

「世話になる」

「お世話になるのは僕の方かもしれないけど。——それじゃ。起こして悪かった」

「大丈夫か？ なんならもつときつく巻き直すが……」

「大丈夫。おやすみ」

じゃあ、と軽く手を振って、静かにルイセラードは部屋を出た。

「……本当に今夜は眠れそうにないな」

右手の痛みは気にすれば気にするほど、ずきずきを増していった。

【三章：幻の皇族：3】

——眠ったら、出血多量とかで死んでたりして。

というよりもそれ以前に、やっぱり痛みのせいで眠れなくて、徹夜してしまった。

「朝……」

で、ある。太陽がマティルグラスの東の森の彼方から昇ってくる。普段きつちり十時間しか眠らないと起きれない自分が、痛みで徹夜って。

ルイセラードは窓の外を見ながら苦笑いした。

でも、なかなか早朝というのも気持ちが良い。こんなに綺麗な朝日を、今まで何回見逃してきたのだろうか。幼い頃から、ともに早起きはしたことがない。いつも起床は九時半から十時頃のいつからだ。

と、その時、こんこん、と扉がノックされた。そして静かに開く。

「……大丈夫か？」

「あ」

部屋の中を覗いたのはアステイナだった。

「おはよう」

「……怪我の方は？」

「見ての通り、徹夜。でも早起きだね。まだ朝日が昇り始めたばかりなのに」

と、彼女は欠伸した。

「気になって眠れなかった」

「……え？」

「その怪我。血、ちゃんと止まったか？」

あ、とルイセラードは右手を開いて手のひらを見た。赤く滲んだ血は、昨夜とそんなに変わらない。

「……まあ、大丈夫なんじゃないかな……」

「そうか」

と、アステイナはもう一度欠伸する。

「ごめん、心配かけて」

「いや……」

と、その時だった。外から、がちゃり、とドアが開く音がした。

アステイナは廊下の方に顔を出す。

「ああ、ジェーナ」

「おはよう。なにしてるの？　っていうかあんたの部屋はその向かい」

「いや……少し気になって」

「仮にもそこは男三人放り込んだ部屋なんだけど。アステイナお嬢さん」

「別になにもないぞ」

アステイナは苦笑いした。そして、ああ、と思いついたように言う。

「そつだジェーナ、この村に医師はいるか？」

「村外れに一人いるけど……それが？　マステイナーさんのご飯で胃でも壊した？」

「最低痛み止めがもらえたらそれでいいんだが」

「——アステイナ、別に大丈夫だってば」

言つと、彼女はこちらを見た。

「大丈夫な訳なかるう。痛さのあまりに泣きついてきたのは何処のどいつだ」

「別に泣きついてないって。でも、昨日は本当にごめん。起こして悪かった」

「だが、痛いのならちゃんと手当てを受けた方がいいだろうが。私の応急処置で後でどうこうなつてもらわれても困る」

と、ちよつと待て、とジェーナの声がした。そしてアステイナの肩を掴んで、背伸びしてこちらを見るなり、

「……嘘。起きてる。まだ早朝なのに！」

「悪い？」

「意外……！　なんで？　どうして？　アステイナが起こしに来たとか？」

自分で気づかない辺りジエーナらしい。

気づいてくれない方がいいけれど。彼女にも要らぬ心配をかけてしまう。

「まあ、そんなところかな。今日発つことに決めたし」

「え……」

「僕は姉上を探しに、アステイナは兄上を探さなきゃならないし。

それに、二人が何処に向かっているかも分かったことだし——長居は無用って訳」

「……そっか」

ぱつとジエーナはアステイナの肩から手を放し、踵を床につけた。

「残念だな……　そっかそっか、なるほど今日か」

「ジエーナ？」

「あ、昨日寝る前にマステイーナさんを無理に起こして許可を取ったんだけどね？　ルイセラード、アステイナ、あたし今日からあんなたちにお世話になるから」

「は？」

と、ジエーナはぐつと拳を握り締めて言い切った。

「盗られっぱなしは悔しくてやってらんないじゃない！」

ああ。

ルイセラードとアステイナはちらりと顔を見合わせ、お互いに肩をすくめた。

「だからよろしく」

「歓迎するよ。料理担当で」

「ええ。——に、あたって、昨日訊きそびれたんだけど、あんたたちってどういう身分と関係な訳？」

「……どういう身分、って」

ルイセラードは声を潜めてアステイナに尋ねる。

「言っていいのかな」

「いいんじゃないか？　もう既に殿下と呼ばれている訳だし」
確かに。

昨日から將軍と大佐にはやたらに『殿下』と呼ばれていた。それに、父上のことも話に出ていたのだから、ジェーナ自身もう気づいているんじゃない？

「ジェーナの予想は？」

「放浪ダメ王子と男勝り皇女」

「……ご名答」

と、ジェーナは目の前のアステイナを押しつけた。

「やっぱり王子だった！　殿下と呼ばれてるからもしかしたらっ
て思ったけど！　けどそのなりはないんじゃない？　王子さまのく
せに甘ったれで、わがままで——」

すると、何処からか誰かが吹きだした。

「っていうか、どうしてそこで笑い出す——」。

「アステイナ……」

「わ、悪い。つい……いや、悪い」

くつくつと笑い声が始めた。「つ、続けて」

ほんとよね、とジェーナも笑い出した。

「お笑いよね、こんな王子。アステイナの方が風格があるわ」

「……」

「けど、とりあえず王子だとか皇女だとかは置いといて」

と、ジェーナは数歩進み出て、ルイセラードへと手を差し出す。

——その手は左手だった。

「とりあえず世話になるわね。ルイセラード・クロスキーズ」

「こちらこそ」

ルイセラードはその手を握り返した。

「よろしく。ジェーナ・ウィールントウールン嬢」

〔三章：幻の皇族：4〕

ウィールントウルン。それは、マティルグラス皇族だけが名乗ることを許される姓。誇り高き、紫の瞳の長。その昔、帝国主義の礎を築いた、世界一の帝国だったマティルグラスは今、緑豊かな、美しい森を持つ一つの国として北の大地に存在する。その国土の大きさは当時と変わらぬままだ。

マティルグラスは数々の戦争を起こした帝国でもあった。だが、今のロルディオリーズほど軍事国家だった訳ではない。最盛期に君臨した女帝、ジャエスカリーナ・ウィールントウルンはとても平和を好む女性だったと言われている。だが、彼女は形だけの女帝だったのだとか。実際は、亡き父に仕えていた家臣たちが思うがままに国を操り、戦争を引き起こしたのだと言われている。

そしてまた、ジャエスカリーナにはこんな逸話がある。

それは当時世界第二位の権力を誇っていた隣国、イルグリストの王子との恋仲の噂だ。イルグリストは緑色の瞳の者たちの住まう国で、世界の最西端に位置する。

そしてそのジャエスカリーナ女帝と王子の話は、今から百年ほど前に一冊の本にされた。その名も、『深緑の森を越えて』。

この世では絶対に叶うことのない異民族同士の恋愛を書いた、一つの小説だ。

この世を統治する国王や皇帝には好ましくない本らしいが、内容には感じさせられるものがいくつかある。思想や友情は時には国境を越え、それぞれの想いや愛情は、更に民族を超える……。

各民族や国の間にある、分厚い壁を越えるものがある。それは思想であつたり、友情であつたり、時に愛情であつたりする。限りはない。越えようと思えば、何でも国や民族を簡単に越えられるものなのである。

ちなみにこれは、ルイセラードの持論である。

「僕が起きてるのがそんなに珍しい？」

ルイセラードはカウンター席に座った。そして足元に荷物を下ろす。

「ジェーナも將軍も大佐もみんなして驚くんだから……」

「そりゃそうでしょう」

と言ったジェーナは、カウンターの向こう側に回った。

「ルイセラード、今日は喜んでくれていいわ。マステイナーさん二日酔いでぶっ倒れてるから、朝ご飯あたしが作るね」

「え」

「期待してよ？」

と、ジェーナは調理場へ入って行った。

「……ってことは？」

「そういうことだろう」

そう言ってアステイナが隣に座る。そして彼女は隣の席に荷物を置いた。もう、朝食を食べたらすぐに出発できる。とりあえず急いだ方がいいのだから。

「良かったな、ルイセラード。旅立つ当日にぶっ倒れないで済むぞ」
ふふん、とアステイナは笑う。「ジェーナの手料理は初めてだな」
「ってことは、おいしいものが食べれる！」

と、その時だった。

「殿下」

へ？ と振り向くと、そこに將軍と大佐の姿があった。

「あ、なに？」

「ここを出る前に渡すものがありました」

と、將軍は大佐から紫の布に包まれた何か長いものを受け取った。
「ってちよつと待ってよ。もう行くのか？　せめて朝食くらい――」

「我らは急ぎます故。なにがなんでも内親王殿下をお見つけいたしますからね、王太子殿下」

「……うん」

と、将軍に、では、と紫の布に包まれたものを差し出された。ずしつと重い。それに見た感じに持った感じ、これはもしかしたら――。

その包みを開くと、思った通り、そこから一本の剣が現れた。

「……ありがとう、持ってきてくれて」

布を除けて、その剣を持つ。と、隣で、ほう、とアステイナのため息が聞こえた。

「黄金の柄、そして漆黒の鞘に、眩いほどのこんじきの鰐と黄金の獅子……見事だな」

黄金の柄と、鰐。その鰐に彫刻されているのは、ウェランドルス王家の証である黄金の獅子だ。黄金は黄色い瞳を現し、獅子はその勢力を現す。代々からのクロススキーズ家の紋章でもある。

「これも父上の命令？」

その剣を静かにカウンターの上に置く。――その場には不似合いな、黄金の剣だ。

「殿下、いつも丸腰で出かけないで下さいと言ってるでしょう。もちろん国王陛下のご命令です」

「……やっぱり」

「大体、殿下には王太子という身分の威厳がなさ過ぎるんです。その剣くらい持つていてくだらないと、しまりがありません、しまりが――」

と、将軍が叫ぶと、隣で思い切りアステイナが吹き出した。

「私の父と同じようなことを、申されないで下さい……っ」

と、お腹を抱えてアステイナは笑い出した。

「い、威厳がないなど、私の兄上と同じではないか」

「アステイナ……」

「だ、だって私も兄上のことをそんな風に思ってるんだぞ、なんでこんなところが一致するんだろうな、な、ルイセラード」

「僕のこと王太子に向いてないって言う？」

「そ、そうは言っていない、だが、あまりに同じようなことでつい……」
くつくつとアステイナは笑う。と、將軍は氣まずそうにアステイナの顔を覗き込む。

「アステイナ殿下、なにか私は悪いことでも申しましたでしょうか」
「い、いや、むしろ面白いことを聞かせてもらった」
「……」

と、將軍は次にルイセラードに視線を移した。

「王太子殿下」

「アステイナのことなら気にしないでいいよ。アステイナのお兄さんも皇帝陛下に同じように言われてるらしいんだ。それで笑いのつぼにはまったんだよ、きっと」

と、未だ笑い続けているアステイナは隣でこくこくと頷いた。

「ほらね」

ルイセラードは將軍を見上げた。

「そうらしいですね」

と、その時、

「あれ、なにみんな集まってるの？」

調理場からジェーナが出てきた。手にはスープの入った木で出来た皿が二つ。

「將軍さんたちは要らないって言うから作ってないけど、要るんだったら遠慮なく言ってるね。お題はルイセラードに請求しちゃうから」と、將軍と大佐は顔を見合わせた。それにルイセラードはくすくすと笑う。

「ジェーナ、そんなこと言うもんじゃないよ。僕に払わせたら後で父上がなに言うか分かったもんじゃないからね」

「やあね、冗談よ」

と、ジェーナは皿をカウンターの上に置いた。

「あたしの自信作。大丈夫、ちゃんと味見はしたからさ。パンがなくて申し訳ないんだけど、旅立ち前にカビの生えたのなんて食べた

くないでしょ？ だからスープで我慢してね。――大丈夫、死にやあしないってば。味見はしたからおいしいって」

「……匂いでそれは分かるよ。おいしそうだもん」

「私はなんでも食べれるがな」

「なによアステイナ、それはあたしの料理が信用できないって訳？」

「悪い、そういう訳じゃない」

「じゃあどういう訳よ」

ジェーナは苦笑いした。

「マステイナさんのお手製ジュース追加しちゃうわよ？」

「それはありがたい」

アステイナは微笑んでスープの皿を受け取る。「よければもらえるか？」

――げ。

っていうかそれって一体どんなお手製ジュースなんだろうか。かなりの不味さが期待できるが、そんなものの期待したくない。

ジェーナに目をやると、彼女はアステイナを見たまま固まっていた。

「……あんだ、舌おかしいわよ、きつと」

「味音痴には自信がある」

「ジェーナ、お願いだから僕の目の前に持って来ないで」

皿を受け取ると、ほんのりと温かさの伝わってきた。

「やっぱりこういう朝ご飯の方がいいな、僕は」

皿に添えられていた木のスプーンを手に取り、ぱつと後ろを振り返る。

「せっかくだから庶民の生活を経験しとけば？」

「残念ながら時間がないので」

と、將軍は失礼しますと一礼して踵を返した。それに大佐も続く。

「ちゃんと姉上のこと捕まえるよな。これは命令だぞ」

と、二人は振り返った。

「言われなくても分かってます。殿下、なるべく早くお帰りになっ

てくださいね。王后陛下が退屈しておられますよ」

「分かった」

「それでは」

失礼します、と二人は宿を出て行った。

「無事に捕まえてくれればいいけど。……姉上、ああ見えて抜け目ないところあるんだよ。かくれんぼが得意技」

「……反対だな」

隣でアステイナはスプーンをスプーンですくった。そして口に運ぶ。

「兄上はかくれんぼがとてつもなく下手だ」

「そうなの？」

「だからこうやって私に居所を探られるんだ」

「でもそれは銀髪の青年っていうのがあまりにも特徴あつて——」

「銀髪で灰色の瞳をしていて、背丈は少し高め、年は十九、服装は至つて庶民的、その長い銀髪は後ろで一つにまとめている。腰に私の持つているのと同じような剣があれば完璧」

「僕の見たのは確かにそんな感じだったけど」

「ほら、見つけられているだろう？」

アステイナは黙々とスプーンを口に運ぶ。

「まったく、人騒がせな兄上だ。どれだけ妹に迷惑をかければ気が済む」

「でも話の限りじゃ、良いお兄さんだと思うんだけどな」

「私は兄上というお人がどういう人なのか未だに把握できていない。正直なところ、そなたも良く分からなくなってきた」

「威厳がないから？」

「それに皇女と王子だろ。思想の違いは越えれん」

「……アステイナは十分に皇子だよ」

そんなもの、越えようと思わなきゃ分からない。理解しようと思わないと、理解なんか出来るはずもないのだから。アステイナはまだそれを実行していないから、そんな風に二つに分けてしまっただろう。多分。

「けど皇女だからとか、王子だからとか——確かに皇族と王族の考え方は表向きは正反対だよ。でも、その思想らの根源は同じ所にあるんだ、アステイナ」

「……は？」

彼女はスープを口に運ぶ手を止めて、こちらを向いた。

「これはあくまで僕の持論だけど——皇帝だろうが国王だろうが、その使命は共に国を治めることだよ。その国を治める上で、成り立っていった思想たちだから、用は『国を治める』という所から始まっていることになる。こじつけっぽいけど、でもなんとなく根源は同じなんだろうな——ってそういう雰囲気があるんだ」

「そなたの考えには『隔て』というものがないんだな」

「みんなには『あまつたれるな』って言われる。『帝国なんかと、一緒にされてたまるか！』っていう考えが、ウエランドルスの人の中にあつたりするしね。王国の誇りとかみんな言うけど、そんな他国を非難する王国の誇りなんて、僕は誇りじゃないと思う。なにかを下に見て、自らの存在を確立する——そんな国王だけには、僕はなりたくない」

「ウエランドルスだな」

「いいや、僕の勝手な持論だよ。——さてと。いい加減ジェーナの手料金が冷めちゃうな、こんな長話してると」

こんな話をするつもりはなかったんだけど。

アステイナの考えは間違っている訳じゃない。皇帝陛下ほど権力に執着しているような雰囲気も感じない。でも、もしこのまま玉座を手に入れたなら、きっと彼女は現グランデイスナ皇帝と同じような政治を繰り返してしまうだろう。

スープをひとさじすくって、ルイセラードは考え込んだ。

アステイナは考え方は割としっかりしているようだけど、誰かの思想をそのまま喋っているような、そんな気がしないでもない。それが父君の思想ならば、彼女自身の考えは一体何処にあるんだろうか——。

「……はて」

考えながらもくとスープを口に運んでいく。

お兄さんのことをろくでなしだと言いつつも、自慢しているかのようなあの態度——お兄さんを捜しているのも、父上の命だ、とか言いつつも、本当はお兄さんのことが好きだから捜すに出ているんじゃないかなるうか。『お兄さんと妹』は何処となく不思議な位置にあるのだと、ずっと昔に父上が申されていたような気もするし——それに、本当に嫌いでもなくと思つて、尚且つ玉座を狙っているならば、このまま放っておいて、捜しになど出なかったのではないか。

——でも、多分このまま放っておいたら、彼女は。

玉座はそれなりに重い。肩に重荷となつて、自国の民の命がのしかかってくる。それを重々承知していて玉座を狙うならまだしも、なにも知らずに父君に動かされたりするのなら、きっとこの先彼女はどうなるのだろうか。

未来の女帝を隣にして、ルイセラードはよからぬことを考えてしまいそうになった。

でも、同じ王位継承者としてそれは思うから仕方がない。

——きっと彼女は、このまま行けば玉座に苦しむ。

と、その時だった。

「ちよつと二人とも！ 感想ない訳？ 感想は！」

へ？ とルイセラードは我に返る。と、ジェーナは叫んだ。

「白状者っ！」

「……すみません。おいしいよ」

「良くできました。あたし荷物取つて来るから、ルイセラードにアシティナ、その席にこれまでの御代をちゃんと言いついて」

「一泊いくらだっけ？」

「銀貨三枚よ。あ、あんた一週間居座つてたから、その分もちゃんと支払いなさいよ」

と、ジェーナは二階に上がっていった。

「……僕の所持金なくなつたな、これで」

その姿を見送って、ルイセラードはぼそつと呟いた。

そして所持金の入った袋を荷物の中から出すと、金貨を二枚と銀貨を一枚取り出した。

しばらく経つと、ジェーナは戻ってきた。

上がっていた時には来ていなかった上着を羽織っている。そして荷物をしょっている。と、戻ってくるや否や、彼女は素早くカウンターにある朝食の食器を回収し、調理場へ向かつて行き、そして一分もしない間に戻ってきた。

手を上着で拭きながら、彼女はこちら側に回ってくる。

「後片付け終了」

「いつもながら仕事が早いね。マステイナーさんに挨拶は？」

「もう起きてくるって。それと、スルリエズ名産の黒糖パンをお土産に頼まれたわ。こっちは遊びで行くっていう訳じゃないのに」

と、その時だった。

「遊びじゃない、だって？」

「げ」

ふと見ると、階段を降りてくるマステイナーの姿があつた。

「何が『げ』だよ、ジェーナ。後片付けと、それと御代は？」

「そのカウンターのテーブルの上」

ジェーナは指差す。そしてマステイナーに向き直る。

「それじゃ、いつてきます」

「黒糖パン忘れるでないぞ」

「分かってるわよ」

べー、とジェーナは舌を出すと、踵を返した。そして扉に向かう。

「行くわよ。ルイセラード、アステイナ」

「え、行くってちよつと……」

慌ててルイセラードとアステイナは席を立った。そして足元の荷物と剣を手に取ると、もう既に外に出してしまったジェーナを追いかける。自分もすぐに追おうとするが、ルイセラードは宿を出る手前

で、ふと思いつてマステイナーの方に振り返った。

「また寄ってもいいですか？」

「土産の一つでも下げてくるんだね。ウェランドルスの特産品でも頼むよ」

そう言つて彼女は笑い、ひらひらと手を振る。

「宿代を倍に上げて待つてる」

「……勘弁してほしいな、それは。それじゃあ」

と、その時、早くしろ、とアステイナに腕を掴まれて、ルイセラードは外に引つ張り出された。

「ちょ、な、なに？」

「ジェーナを見失うぞ」

「え、え？」

と、アステイナは叫んだ。

「待て、ジェーナ！ 歩いていくつもりか？」

と、不満そうに視線の先の金髪の少女は振り返った。なによ、とでも言いたげに。

「ルイセラード、その厩に私の相棒がいる。そなたは」

「完全に徒歩だよ」

「——じゃあ荷物持ちでもさせるか」

「で、アステイナ……その厩って何処？」

「あそこだ」

え？ とルイセラードはアステイナが指差した方を見る。と、そこには小さな馬小屋があった。——と、すさまじく何かが割れる音と共に、いきなりその小屋から一頭の馬が飛び出してきた。

「な——」

思わずルイセラードは目をぱちくりと見開いた。

——ちょ、ちょっと待て。もしかしてあの栗毛の馬って——。

「脱走？」

隣でアステイナが啞然とする。「少なくともあいつではないが」

「……ホグール將軍の置き土産だよ。僕の声聞いて飛び出したんだ

ろうね」

脱力して、ルイセラードはかりかりと頭をかいた。

「は？」

そして指笛を鳴らす。

——でも、忘れられてたなんて可哀想に。

その指笛に反応した脱走馬は、人の少ないこの通りを駆けてきた。そしてルイセラードの目の前で止まる。

「まったく、將軍もついに年かな。忘れっぽくなったりして」

「なー、とルイセラードはその横顔を撫でる。

「ルイセラード、連れか？」

「いや。僕は確かに徒歩で来たよ。多分將軍が僕に伝えるのを忘れたんだろうね。連れて来てくれたんだよ」

栗毛のたてがみを撫でると、馬は嬉しそうに鳴いた。

「まったく、よく飛び出してきたよ。悪いな、あのぼけぼけの將軍と大佐が忘れてて。故郷に帰ったら蹴っ飛ばしてやれ」

と、そこにジェーナが戻ってきた。

「それ、お友達？」

「まあね。というより、それよりか」

「まったく、とルイセラードはため息をついた。

「——行つとくけど、僕は無一文だからね」

視線の先——目の前の栗毛の馬の向こうから、怒った雰囲気の中年の男がゆつくりとこちらに近づいてきていた。

——どうやら旅先早々、厄介なことになってしまったらしい。

〔三章：幻の皇族：4〕（後書き）

さてさて旅の始まりです。これからいろんなことが起こります。まだまだ先は長いぜ……。

〔四章：方向音痴な薬剤師：1〕

「いや、本当に助かったよアステイナ。でも、なんでそんなにお金持ってるわけ？」

「父上からのせんべつだ」

一向はそれぞれの馬に乗って、マティルグラスの森に入っていた。南へ向かえばそこから森、そしてずっと森である。経験済みのルイセラードが思うに、確かこの森はウェランドルスまで続いていたような。

あのぶつ壊れた小屋の修理代は、アステイナが立て替えてくれた。それもそのはず、要求されたのは小屋の修理費しめて金貨三枚——ルイセラードは無一文だった為、彼女が代わりに払ってくれたのだ。にしても、アステイナの所持金といったら、まだ金貨がたんまりとあるのだからすごい。

「ただ、ここは友人同士の貸し借りということだな。そうしないと困るだろう、ルイセラード」

「確かに」

身分を考えたら、それだけで父にどつかれそうな気がしてならない。

グランディスナの皇女に、あろうことか借金。それがいくら將軍のせいだとしても、怒りの矛先は自分に向くだろう。

「無事に姉上と君のお兄さんを捕獲したら、一度ウェランドルスに寄ってみる？」

「いいのか？　こんな小国の皇女が行って」

「いいさ。僕が許可する」

——と、その時だった。

「んぎっ！」

——え？

ルイセラードとアステイナは馬を止めた。

「ちょ、ちょっとなに？ 今の」

と、アステイナの後ろに乗っていたジェーナが声を上げた。

「んぎつ！ って、なにかの悲鳴？ 少なくともあたしたちじゃないわよね」

「……だと思っよ」

ルイセラードは馬から降りた。まさか盗賊でも出たか。だが、あの間抜けとも言える悲鳴を、盗賊はあげやしないだろう。それに、さっきの声は女の子のような気が――。

「アステイナ、どっちから声した？」

「……さあ」

アステイナは首をかしげる。と、その時だった。
がさつ！

「なっ」

思わずルイセラードは一步下がって、腰に下げた剣の柄に手をかけた。だが、

「……え？」

「はい？」

目の前の草むらから出てきたのは――というより顔を出したのは、一人の少女だった。

草の引つ付いたクリーム色の髪、同じような色の肌、そしてその瞳は赤い色をしている。だが、まだここは確かマティルグラス。

――赤い瞳は、今向かおうとしているスルリエズの民の瞳だ。

ルイセラードは剣から手を放した。と、目の前の赤い瞳の少女は、ぱぱっと身なりを整え、深く深呼吸した。そして、

「あの、ここって何処ですか？」

「何処って……多分マティルグラスのずっと南の森の中――だけど
え」

と、彼女は次に叫んだ。

「こ、国境越えちゃった！」

「スルリエズからなら……そうなるんじゃないですか？」

「えーっ！」

「もしかして、迷子？」

と、彼女は顔を伏せた。

「……多分迷っちゃいました」

「……はて」

ルイセラードは振り返ってアスティナを見た。

「どうする、アスティナ」

「どうするもこうするも、どうしようもないだろう。なあ、ジェーナ」

彼女は振り返る。と、ジェーナは、そうね、と返した。

「この森で放っておいたら、野良狼の餌食になっちゃったり、拳句の果てには飢え死にしかねないしね。盗賊なんてものに会ったら、それでこそ大変」

「つていつか出るのか？ 盗賊なんてものが」

「いなきやおかしいでしょう」

「そういうものなのか？」

「そういうもんよ」

ジェーナはパシンとアスティナの肩を叩く。そしてルイセラードを見た。

「つてことで、このまま放っておけやしないでしょ。それに、送り届けるくらいならスルリエズに用があるんだし、一石二鳥じゃない」

と、ジェーナは馬から降りた。そして赤瞳の少女に手を差し出す。

「あんた、名前は？ あたしはジェーナ」

「あ……私はトーラです。トーラ・アナギリ」

「年、いくつ？」

「十六です」

「お、予想通り」

ジェーナは笑った。そしてぱんつと彼女の肩に手を置く。

「家まで、ついでだから送ってってあげるわ。あたし、こういうの

嫌いじゃないし」

そして彼女は目の前の少女の髪についた草を払った。

「ふわふわしてるわね、髪」

「え？」

「でも、その誰かさんには負けるかな。これ何色って言うの？
クリーム色っていうか何て言うか……」

「お母さんにはバターって言われます」

「……なるほどねえ」

と、ジェーナは頷く。「バターね。確かにちよつとそれっぽいかも」

「だから、パンにバターといちごジャム乗せるとからかわれるんですよ」

彼女はそう言って笑った。と、ジェーナも笑い出す。

「そりや言っちゃあなんだけど傑作だわ」

「ですよ。私も我ながらそう思います。結構バターといちごジャム気に入ってるんですよ、これでも」

「可愛いわね、それ」

「でしょ？」

あははは、と二人は笑う。すっかり意気投合している。

ルイセラードはアステイナを見上げた。

「……どう思う？」

「え、あ、何がだ？」

「ジェーナと彼女」

「さあ。でも、ジェーナの人付き合いの良さに私は敬服する」

「……同感」

と、は？ と彼女は首を傾げた。

「ルイセラード、それはいくらなんでも説得力なさすぎる言葉だぞ」

「僕のこと人付き合い良いと思ってる？」

「——そうじゃないのか？」

ルイセラードはジェーナと彼女に目を移した。

「まあ、そう思われては本望だけどね」

「なんだ。そうなんじゃないか」

「人付き合い良くなきゃあ、王子はやってけないだろう」

「……それは同感」

「そういうことだよ」

ジェーナとすっかり意気投合したトーラはアステイナと一緒に馬に乗り、ジェーナはというとルイセラードと一緒に馬に乗っていた。「年頃の女の子はね、いろいろ思うところがあるのよ。特に同い年の男の子とか気にする年齢なの」

と、ジェーナはまるで母親のようなことを言い、彼女にアステイナの後ろを勧めたのだった。その時、アステイナが女だということにトーラが気づいたのは言うまでもない。

辺りは段々と暗くなってきた。そろそろ寢床を探さなければならぬ。洞窟が何処かそういう場所があれば一番良いのだが、あいにく森のと真ん中にいるみたいで、辺りは木や草むらしかない。

「……何処で野宿する？」

ルイセラードは尋ねた。「僕は何処でもいいんだけど」

「王子が言う台詞か」

と、アステイナが言い返した。

——っていうか素直に暴露してるし。

「アステイナ、そんなにほいほい言わないで」

「……あ。すまない」

そういえば、かなりお喋りな——というか口が軽かったつけ。

と、トーラがこちらを見た。するとジェーナが慌ててごまかす。

「トーラ、それよりもあんたの家ってどこら辺なの？」

「えーっと……マティルグラスとスルリエズの国境辺りなんです」

「なんだ、通り道になるじゃない。それとさ、やっぱりスルリエズの黒糖パンっておいしいの？」

「おいしいですよ」

にへらと彼女は微笑んだ。

「あたしも大好きです」

「どっかいいお店紹介してよ。おみやげ頼まれててさ？」

「いいですよ。えつとですわね……」

そんな話がルイセラードの耳を掠めて行く。にしても、アステイナの口の軽さは侮れない。そのうち、自分から皇女だと暴露しそうだ。いや、既にそれはあったか……。

辺りはもう後数分で日が落ちてしまいそうだった。ただでさえ薄暗いこの森、暗くなれば辺りが見えなくなるに決まっている。

と、アステイナは、待て、と馬を止めた。ルイセラードもその場で止める。

「ここらで止まっておくか」

彼女は言ってこちらに振り返る。

「どうする。そなたが一番、旅には慣れているだろう」

「下手に動くよりかはここで休んで、明日国境を越えようか」

「——だな」

そしてトーラとジエーナを乗せたまま馬を引いて、適当な場所を探し始めた。だが、辺りはもう木しかないだろうというくらい木ばかりで、何処が適当なのかも分からない。

一体自分はどやってウェランドルスからマティルグラスまで来たんだろう——とルイセラードは首をかしげながら場所を探した。

普通に木陰でいいのだが、暗くなり始めると何処がどうなのかも分からない。

「これ以上行っても、確かに迷うだけだ。だが、こんな森の中でどうやって休む。一つ言わせてもらうと、ルイセラード、見張れよ」

「え」

と、そうよねえ、ジエーナはこくこくと頷いた。
「女の子三人だもん。あんたそれに剣使えるし。昨日だって——つてごめん！ あたしったら助けてもらったにも関わらず、お礼の一つも言わずに！」

「いって、それは」

「よくない！ 昨日の怪我——」

と、ジェーナは馬から飛び降りた。そしてがしっとルイセラードの右手を掴む。

「やっぱり！ こんなに血……」

「大丈夫だつて」

「大丈夫な訳ないでしょ！ もう、なんであたしに文句の一つも言わないのさ！」

「それは……」

「言えはいいのに！ もうあんたってバカ——」
と、その時だった。

「あの……怪我なら手当てしますけど？」

言ったのはトーラだった。「私、薬とかいっぱい持ってる……」

「どういうこと？」

ジェーナはトーラを振り仰いだ。と、彼女は照れくさそうに笑う。

「あの、私これでも薬剤師のはしくれなんです」

「薬剤師？」

「お母さんが薬屋さんで、その跡継ぎなんです」

ちよつと待つてくださいね？ とトーラは背負っていた荷物を馬の背の上に置き、その中を探り始めた。

「うーん、確かあったはずなんですよ、きず薬。すごい効き目なんです。アナギリ―薬局おすすめの一品で。調合は企業秘密なんですけどね？ えつと……あ、ありました」

と、小さな小瓶を出す。

「これですよ。ちよつと緑の透明の変な感じしてますけど。結構しますけど、よく効くんです」

え。

ルイセラードは思わず後退りした。

「しみるってどれくらい……？」

「えーつとですね、すぐ治まりますけど、結構擦り傷で叫んじゃい

ます。私も結構叫びますよ、この薬で。でも一日で直る特效薬ですっ！」

自信満々の笑みでトーラは言った。
多分、ルイセラードの心の中に渦巻いている不安など知る由もなく。

と、トーラは荷物を抱えて、馬から降りた。

「良かったら今すぐ手当してあげますよ？ あ、でも確か男の子って痛みに弱いってお母さんが言ってたんですよね……。少し大変かも」

「大変だぞ、その方の手当ては」

と、アステイナは笑う。

「……そんな」

「何処のどいつだ。消毒液を塗る度に叫び散らしていた奴は」

「その節はどうも」

「まったく、恐れ多くも意気地なしと罵りそうだぞ。仮に同じ王位継承者だとしても、現実的には私とはあまり身分は——」

と、アステイナはとっさに口を押さえた。そして頭をかきむしる。

「私っては何故こんなに喋りたがりなんだ！」

「長年の癖だね」

「悪い」

アステイナはぱんつと合掌してルイセラードに頭を下げた。

「まことに申し訳ない！」

「いいよ。別にばれたからってどうこうなる訳じゃないし」

「本当に申し訳ない！ この通りだ」

と、その時だった。

「あたしのことは言わないでよね。売られるかもしれないから」

言ったのはジェーナだった。はっと二人はそっちに視線を移す。

「アステイナお嬢さん。その口の軽さどうにかしなさい」

「……なるべく気をつける」

「よろしい」

ジェーナはにんまりと笑った。と、その時だった。

「あの……」

言ったのはトーラだった。そして、そろりと右手を上げる。

「どういうことですか？ 王位継承者って」

「さあ？」

と、ジェーナは笑った。

「気のせいじゃない？ アステイナの言葉って聞き間違いやすいのよ」

「そうですか？ 私にはちゃんと聞こえたんですけど」

おかしいなーと、トーラは考え込む。

「……確かに王位継承者って聞こえたんですけどね。まあいいです。それと、怪我ってどれです？」

「僕の右手」

と、ルイセラードは適当な木を見つけると、ハルヴィートの手綱をくくりつけた。

「さて、場所確保……っと」

火を起こす為の枝を拾う。辺りになにかないかと見渡したが、やっぱり周りには単なる森の木しかなさそうだ。

来る時は、りんごの木とか野いちごとかを発見できたのに。

「うーん……」

その場にある木を見上げる。

なにもない。道を逸れたのだろうか。元々道なんかないけれど。

「なにしてるのさ」

がしっ、とジェーナに服を引っ張られた。「なんかいた？ リスとか」

「食料ってなにがあったっけ？」

「アステイナの持つてるので足りると思ったんだけど。あんたも一応お金持ちでしょ？食料くらい常に持つてるんじゃないの？」

「あいにく僕はケチだよ」

「まさか本当に見かけどおりの貧乏人！」

「身分どうこうで金持ちだとか決めないでよ」

苦笑いしてジェーナに振り返る。「そりゃあ確かに実家は裕福だけれどさ」

「まあ、見かけからいけば庶民よね。あんたって」

「……納得していいのかなんて言うか分かんないんだけど」

「それでも、実家はああでしょう?」

「そうだけど、でも、本当に食料はないかも」

「え」

と、バカねあんたって、とジェーナはルイセラードの背を殴った。

「い、痛っ……」

「これくらいで我慢してあげるわ。ふん、いざとなればあんたが犠牲になりなさいよ」

「な、なんの犠牲……」

「食糧確保の為の犠牲」

ね、とジェーナは不適に笑う。がしつとルイセラードの服を掴み直して。

「どうなの? お金持ち」

「——そりゃあもちろんそうだよ? 相手が女の子であれ誰であれ、僕は自己中心的に生きようとは思わないしね」

「……」

何故かジェーナは黙り込んでしまった。

そしてそつと、その手を放す。

「あたし、あんたのこと見くびってたかも」

「……へ?」

「今まで、単なるふにゃふにゃした甘ったれた、がきんちよだと思ってたわ」

「ちよつとそれって……」

と、枝を拾い集めていたアステイナが吹き出した。

「もうアステイナ……」

「わ、悪い、だがつい……っ」

「……もう」

まあ、これはもうしょうがないことだ。

でも、少しばかり心の奥で何かがうごめいているのは気のせいかな。

——確かに中身が抜けてるとはよく言われるけど。

どう思う？

ルイセラードは目の前の木を見上げた。

ジュリーナがよくやるように、問いかけてみる。喋ることはできないけれど。

確かに、そういうところが王后陛下に似ていらつしやる、と影で何やらと故郷では言われていたり、こんな性格や行動のせいで無能だと影で言われたりもしているけど。

——これはちよつと、笑うに値することじゃないんじゃない？

ねえ、姉上のお友達。

「僕は無能じゃない。……と思う？」

木の幹に手を置いてみる。

「……なのかな。やつぱり」

深い深いため息をつくとき、ぽんつ、と肩を叩かれた。

「私の兄上と一緒ににはしない」

振り向くと、そこにアステイナがいた。

「お前を無能だなどと、私は思わない」

「……僕も思いたくないよ」

ルイセラードは首を横に振った。「思ってしまったえば、王太子でいていいのかわからなくなりそうで」

そうだな、とアステイナはふと笑んだ。

「私も自らを無能だとは思いたくはない。自信をなくす。そういう風に石に話しかけるということは、兄上もやっておられたが……なにを感じられるというのだろうか」

そう言つて、彼女も木の幹に触れた。

「……私は、分からない。頭が固いせいかもしれないが」

「僕にも分からないよ。姉上は不思議王女で有名だし」

「私の兄上は不可思議だと父上に言われている。よく分からないのは、妹の私も同じだ」

「……なるほど」

でも、とルイセラードは木を見上げた。

「落ち着かない？ 安らぎというか、母なる大地の偉大さというか

……そんなものが感じられるような気がする」

「私はまず木が珍しく感じるがな。グランディスナは荒野の真ん中故に、森はない。本で読んだり、兄上から聞いたりして想像はしていたが…… 実際、こんなに壮大なものだとは思わなかった」

「……そっか」

ルイセラードはそつと木の幹から手を放した。

「なんだか、グランディスナの荒野を見たくなくなってきたよ」

〔四章：方向音痴な薬剤師：2〕

辺りは静かだった。

見上げたはいいけれど、なにも見えない。月も、星も、何もこの場を照らしてはくれない。トーラの持っていたランプを借り、静かにルイセラードはその場から遠ざかった。

——しみるって言うてたけど、これほどに痛いとは思わなかったぞ。

右の拳を握り締め、木の根っこに腰を下ろした。

「いた……」

こんなにしみる——というか、手術されたと言っていていいだろう、これは。

傷口が深すぎる——と、いきなり何処からともなく救急箱を取り出すや否や、そこから彼女は何故か針と糸を出し、突然、

「縫う」

と、言い出したのだから。

麻酔薬を飲んではいたけれど、その効果が切れた今となっては、痛みだけが残った。

そして、結局眠れずに、こうやって痛みを堪える。

「……痛っ」

右の拳を握り締め、胸に抱えてうずくまる。

こんなんじゃないやあ、剣も当分持てやしない。剣を使うことしか脳がない奴なのに。

こんな時に誰かが襲ってきたらどうする。

きつ、と前方を、ルイセラードは見据えた。ランプの光で、ほんわかとオレンジ色が灯されたその先には、やはり木しかない。

「——！」

何かが頭にぶつかった。ふと振り返ると、そこに栗毛の馬がいた。「お前、なんで……」

笑って、その横顔を撫でてやる。

「心配してくれたのか？ …… やっぱり似たのかな。名前がああだから」

一応、この馬の名は、ハルヴィートという。名付け親はジュリーナである。

そして、その名の由来は一人の少女だ。

彼女の名を、ハルシャ・マディスリートという。少しもじらせてもらって、ジュリーナはハルヴィートという男性の名に仕立て上げたのだ。

そのハルシャという少女は、身分で言うならば、ウェランドルスの東隣にあるロルディオリースという帝国の第二皇女だ。ウェランドルスが光なら、ロルディオリースは闇——そんな位置にある、世界一の帝国主義国。軍事国家で、二十歳になると男性は招集され、一通りの戦闘知識を仕込まれる。学校では、男子も女子も槍を習うように、指定されている。

——全ては、宿敵であるウェランドルスとの戦争に備える為。ウェランドルスはさんざら戦争をする気はないのだけれど。十年前に、長年続いた戦争に一応の終止符を打ってからというもの、ウェランドルスはすっかり平穏な世界一の民主主義国になった。

元々シュフル族は戦争を好まない、穏やかな民族だ。だが、この二つの国が戦争を再び起こしやしないかと、周囲の国はひやひやしているらしい。

けれど、そんなことはないだろう。それはさせない。

——しない国王になると、とうの昔から心に決めていたことなのだから。

「……ハルヴィート、お前はと思う？ 僕は所詮無能だと思う？」と、頭を突付かれた。

「——似てるな。やっぱり。そうじゃないって言うんだろう？ ……でもお前どうやってここまで来た？」

確か手綱はつないでいたはずだ。なのに、どうしてあの場所から

離れた所にいる。

と、その時だった。

「ついて行きたそうにしていたから、私が放したんだ」

と、アステイナが木陰から現れた。

「怪我の痛みで眠れないんだろう。すなわち昨日と一緒にだ。だが、これで寝なかつたら徹夜続きになるぞ。……ところでその相棒の名はハルヴィートというのか。初めて聞いたな」

と、彼女はやって来ると、ハルヴィートの栗色のたてがみを撫でた。

「お前、いい奴だな。優しい目をしている。——厩から飛び出してきたときにはびっくりしたぞ？　なついているんだな、主人に」

「アステイナの相棒に名前は？」

「あるぞ。私にそいつを送った鍛冶屋の息子の名でな。——ゲオルドという」

「いい名前だね。アステイナは馬、好き？」

「まあな。友達になり易いし、何より荒野を駆け抜けるのに、馬は必要不可欠だ。グランディスナの荒野を見たことが？」

いんや、とルイセラードは首を横に振る。

「——グランディスナは荒野の国と言われ、その名の通り、荒野しかない。人々は井戸を掘り、水を確保する。雨はごくまれにしか降らず、森なんてものは見えるだけだ。それで、森を求めて戦争をしたことも、昔にはあったらしい。森というのは、壮大でそして人々に豊かな資源を与えるものだと思っていたが……なんとも不思議な感じがしてな。——寝付けなかった」

情けなそうにアステイナは笑った。

「このざわざわ感が慣れなくてな」

「そうかな。いい音だと思うけど」

ルイセラードは上を見上げた。

「姉上は、森の声だ、って言っていた。嵐の日は、雷が鳴るのも、それは雷の声なんだと。雨打つ音も、それも雨の声なんだよ——と」

「……不思議なお人だな」

「自然の声が聞こえないのは、自然と向き合おうとしていないから、なんだって。昔よく姉上は、父上に反抗していた。あれだけみんなが悲鳴を上げているのに、どうしてまだお父さまは戦争を続けるの——と。幼い王女のたわごとだと、周りはその意見を拒絶した。でも、父上はちゃんと聞き届けてくれた。戦争はあと一年続いたんだけどね」

「……ロルディオリーズ、か」

「そう。もうあんな長い戦争はごめんだよ。僕が六つの時に停戦条約が結ばれたけど、いつまた、戦争が起こるかわからない。あくまで停戦条約だから。終戦条約じゃなく。僕はもう、本当に嫌なんだけどね。姉上の願いの為でもある。そして自分の為でもある。そしてまた僕が今度は、無能な王子のざれごとだ、と罵られてる」

何故、とアステイナは言った。

「何故と訊かれると言いようがないんだけど。アステイナ、もしかしたらお兄さんから聞いてない？ 風の噂で」

「……いや」

アステイナは口元に手を当てて考え込んだ。

「私はなにも……。そなたについて聞いたことといえば、ふらふらしている旅好きの王子だということと、少し価値観が普通ではないということと、剣の腕は随一ということだけだが。——実際は、ならそこらの人と変わらない、普通な少年だったかな」

「剣は父上には勝てないって」

ルイセラードは苦笑いした。

「將軍と大佐には勝てるけど」

「確か、そんなことを他人事のように言っていたな。あの時はまだ、そなたの身分を知らなかった。ただ単に、兄上を目撃した少年かと思っていた」

「そうだよ。ただの少年」

「ただの少年ではなからう？ 仮にもウェランドルスの王太子だぞ

？」

アステイナは振り返る。

「ルイセラード・クロスキーズという名は、ただの少年が持つものではない」

「——アステイナ」

ルイセラードは彼女の方に振り返った。

「人は生まれた時から皆、平等なんだ。僕も単なる一個人に過ぎないし、父上だって、母上だって、姉上だって、その役割を与えられているだけで、ただの人なんだ。笑ったり泣いたり、傷つけたり傷つけられたり——みんなそれは一緒だろう？　僕だって、名を明かさなければ、単なる一個人だ。一人のシュフル族に過ぎないんだよ」
「自らの身分をその様に軽んじるのか？　王族や皇族といったのは、天から授けられた特別なものでだな、それを民と同様に扱うなど——」

「君は民を侮辱するのか？」

アステイナは言葉に詰まった。

「……ごめん、でも、ジェーナだって一人の農民だったんだ。トーラだって、薬剤師の見習いだ。アステイナの考えは皇族としては正しいかもしれない。でも、人として考えた時に、それはどうなる？　人と人との間に、壁はないんだ。身分という隔ては、目に見えていだけで、心と心に壁元々ない。……通じ合おうと思えば、通じ合うことができるんだから」

ルイセラードは目を伏せて、寂しく笑んだ。

「例えばそれが、身分が違っている者同士であっても、民族が違う者同士であっても——ね」

アステイナは言葉に詰まったまま、視線を逸らした。

「……その確証は何処にある、ルイセラード」

「簡単だよ」

ルイセラードはランプの光に照らされた、木の幹を見つめた。

「だって、今こうやって僕と君は一緒にいるじゃないか」

はつとアステイナは息を呑んだ。そしてくつくつと笑い出す。

「そう……だな。そうなんだな」

「そうだよ。僕はそう思う」

「……悪かった」

「謝るなら、旅の途中は、皇族の考えをなるべく出さないこと。特にジェーナが傷つく。——でも、僕はあんまり君の思想を束縛したくない。そう思うなら思うで、突っ走ればいいと、そう思う。人は自由だからね」

「分かった。そなたといると、いろいろと勉強になりそうだ」

「僕からものを学ぶなんて、剣術以外は止めといた方がいいよ」

「自信がないのか？ 私はそうは思わないが」

「……できるなら、自信を持ちたいんだけどね。でも、なにせこんな世界の仕組みだし」

ふつと彼は一息つく。

「異民族同士っていうのは、束縛されがちだしね。僕は神じゃないから、仕組みを変えることなんかできない。変えたくても、それは斬首に値する。本当はもっと、自由になりたいのに、この想いばかりは自由になれない。がんじがらめな世界で、僕はなにを信じたら良いと言っただ」

「……？」

アステイナは首をかしげた。

「どういうことだ？」

と、ハルヴィートがルイセラードの頭を鼻でつついた。

——喋るなどでも、言いたいのだろう。

さんざら暴露する気はない。それに、彼女は多分気づいてはいないだろう。

さっきの『僕は神じゃないから、仕組みを変えれない』という言葉の意味さえも。

——だけど、本当に何を信じたらいんだというんだろうか。

この世界に、隔てはたくさんある。ないと思いたくても、発生し

てしまう。

異民族という隔ては、この世から永久に消えることはないのだろう。そしてその隔てがある限り、たった一つの想いさえも、自由にならないのだろう。

こんなに自由な発想してるのに、だ。

「それでそなた、怪我は大丈夫なのか？」

「……え？」

「大丈夫そうだな」

アステイナはくすりと笑った。

「私は休む。おやすみ」

そして踵を返し、戻っていく。

「おやすみ」

言うと、彼女は振り向かず軽く手を上げて、返事した。

その姿が暗闇に消えていくと、ルイセラードは右手を抱えてうずくまった。

「なんだって今日まで徹夜なのさ」

その場に剣を抱えて座り込み、ハルヴィートを見上げる。思い出しちゃったよ、とルイセラードはその鼻に左手を伸ばした。

「……もう、三年も会ってないんだ。寂しがってると思う？」

空想の中で、あの漆黒の髪が翻される。そして、自分を見る同色の瞳。

——と、ハルヴィートに鼻でおでこを撫でられた。

「……ありがとう」

その横顔を撫でる。彼は自分を慰めてくれているのだろうか。

——きっとそうだと思うけど。

そうでなくても、そう思いたかった。

〔四章：方向音痴な薬剤師：3〕

——新記録更新。

また今日も、朝日が昇る——いや、昇ったであろう辺りの雰囲気
を拝んでしまった。

「眠いよ、まったく」

手の痛みは大分引いてきた。

そして眠いのにな、でも眠れない。

——しんどい。

寝不足のせいか、頭が痛い。死にそうに眠い。でも、眠れない。

「う……」

ふっと体を起こして、立ち上がる。

頭が割れそうに痛い。

「ちきしょう」

悪態について、気の幹にもたれる。

いっそのこと寝てしまえば楽になれるんだろうが、手の痛みのせいでそうはいかない。引いてきたと言っても、まだずきずきと痛いのだから。手術された後の痛みが上ならば、この痛みは中の上だ。

——なんだってこんなに、今日は体調が悪いんだ。

「アルシイリス？」

訊くと、ええ、とトーラはこちらに振り向いて微笑んだ。

目の前の葦毛の馬——ゲオルドは、アステイナと彼女を乗せてぱっぱこと歩く。その後ろを、ルイセラードとジェーナを乗せたハルヴィートが歩いている。

さっきからの話題は、トーラの研究しているものについて、だった。

薬ではない。この世ではないと言われている民族について、だ。
「なんだってそんな伝説の民族に？」

ルイセラードは尋ねた。と、彼女は照れくさそうに頬をかく。

「あたし、この世の伝説ってちよつと興味があつて」

「よそ見すると落ちるぞ」

言つたのはアステイナだった。そしていきなりゲオルドの脇腹を蹴る。

「ちよ、ちよつと——っ！」

がしつ、とトーラは彼女につかまる。

ぱっぱかと十数メートル走らすと、アステイナはゲオルドを止めて振り返つた。

「だから言つたろう。落ちると」

「死ぬかと思いましたよ……」

なにするんですか、とトーラは胸を押さえて息を整えた。

「びつくりした……」

「それで、何故そのような者を研究しようとする？　ただの伝説だろ？」

「その根拠が何処にあるんですか？　アステイナさん」

「根拠もなにも、そんな左右の瞳の色が違う者がいたら、この一族一国家という仕組みが壊れてしまつたろう。だから、古来より、異民族間の結婚や恋愛は禁止」

アステイナは、この世の常識だろう？　とゲオルドを歩かせた。

「もし片目ずつ、違う色をしていたら、どちらの国に住めば良い？　どちらの民族に属せば良いと言う？　分からないだろう？　だから、昔から王族や皇族は、異民族同士の付き合いと言うか——恋愛

関係を、禁じてきた」

「それは分かつてます」

でもですね、とトーラはがしつとアステイナの服を掴んだ。

「じゃあどうして、ツォグリスサーナー、異民族異性愛者、っていう言葉があるんですか？」

「な」

アステイナは言葉に詰まつた。

「ほーら、詰まった。おかしいですよ。そんな言葉があるのに、アルシイリスもないって言うんですか？ 有り得ませんよね？」

「ただの伝説だろう。そのツォグリスサーナーも」

アステイナは速度を速めた。「私はあいにく、現実主義者だ」

「面白くなーい」

「走らずぞ、また」

「……」

トーラは黙り込んだ。かと思うと、ぱつと振り向く。

「いると思いませんか？ ね？」

「……じゃないかな」

くすくすとルイセラードは笑い出した。

「この世の何処かには、いるんじゃない？」

「酷い、いないような言い方して」

「そんなつもりじゃなかったんだけど。僕はツォグリスサーナーの方は信じるよ。もう一方は見たことがないから信じれないな。でも、僕は非、現実主義者だから」

「見たことあるんですか？ ツォグリスサーナー」

さあね、と彼はハルヴィートの歩調を速める。

もう、大分進んだだろう。もう少しで国境という具合だろうか。

「アステイナ、走る？」

隣に追いついて尋ねる。と、彼女は、競争だ、と脇腹を蹴った。

ちよつとーっ！ とトーラは走り出す馬の上で必死にアステイナにしがみつく。

「……速いなあ、もう」

行くよジェーナ、とルイセラードは左手で手綱を握り締めると、ハルヴィートの脇腹を蹴った。

これでも一応軍馬だ。そこそこ速い。

「気持ちいいーっ」

後ろでジェーナが、もつと飛ばせーっ！ と叫ぶ。

「こいつ、こんなに速かったんだね！」

「僕に似ず俊敏なんだよ」

「分かる気がするわ、それ」

速く！ とジェーナは前方を指差した。

「落ちるなよ、ジェーナ」

「わかってるわよ」

でも、結構アステイナの相棒も速い。さすが、故郷から五日での村まで来ただけのことはある。だけど、ハルヴィートの足の速さは、それ以上だった。

「はは、はやーい」

ジェーナは笑う。と、お先にといわんばかりにハルヴィートはアステイナたちを抜かして行った。

「なにを」

笑って、アステイナはゲオルドの脇腹を蹴った。

気持ち良いくらいに、双方は深緑の森を南へと駆け抜けていく。

——と、しばらくした時だった。

「止まって！」

突然トーラが叫んだ。アステイナは、待て、とゲオルドを慌てて止めた。

「どうかしたか？」

その様子を見て、ルイセラードも馬を止めた。

「なにかあったのか？」

と、トーラは、あそこ！ と右斜め前方向を指差した。アステイナは目を細めてそちらに視線を移す。ルイセラードもジェーナも、トーラの指した方を見た。

そちらがわの森の奥に、微かに一軒の小さな家……みたいなものが見えた。

「あたしの家！」

トーラは叫んだ。

と、その時だった。がさつ、と草むらからなにかが——いや、誰

かが現れた。

現れたのは恰幅の良い女性だった。

——何処となく、強気そうな雰囲気、何処かのご主人さんに似ているような。

「トーラ！」

「お母さんっ！」

とっさにトーラは馬から降りると、そちらに駆けて行き、思い切り抱きついた。

「ただいまあつ！」

「ただいまじゃないよ！　どれだけ心配したか！」

「ごめんなさい！」

「まったく、あんたの方向音痴にはもう——」

と、そのおばさんはこちらに気づいた。

「あら」

と、ルイセラードはジェーナに服を掴まれた。

「もうこれで、用は済んだのね？」

「……みたいだね」

ルイセラードは言って、こちらを見るそのおばさんに会釈した。

「——アステイナ、急ぐ？」

「任せる」

「僕に任せるとろくなことないよ」

と、その時だった。

「どうして急ぐの？」

言ったのは、こちらに振り向いたトーラだった。

「良かったら寄って行きませんか？　あたしの家。お礼に黒糖パンこちそうしますよ？」

と、行くっ！　とジェーナが拳手して即答した。

「ジェーナ？」

「黒糖パンにつられた。っていうか折角だから今夜の宿にしない？」

「……僕はいいけど、アステイナはどうする？」

と、アステイナは呆れたようにため息をついた。

「そなたに任せると言っただろう」

「それじゃあ僕はジエーナにさせる」

と言うや否や、ジエーナはルイセラードの後ろから降りた。そして、さあ行こう、とでも言わんばかりに、ぐいぐいとハルヴィートの手綱を引っ張って行った。

〔四章：方向音痴な薬剤師：4〕

アナギリ家というのは、スルリエズの、マティルグラスとの国境の手前に建っているらしい。なんでも、そこら一帯は薬草の宝庫なのだとか。あの直伝のきず薬も、この薬草豊富な環境あつてのものらしかった。

道なき道を、草むらをかき分けて進んで行くと、彼女の家に着く。薫が伝う白い壁に、赤い屋根、そして赤い煙突のある小さな家。さつきから薬草特有の臭いがつんと鼻をついている。

「その連れは、適当に木につないでおきな」

トーラの母親はそう言つて笑う。「この草は何でも食べれるからね。水は後で持つていつてやることにしよう」

「どうもすいません」

いいつて、と彼女は隣を歩いていくトーラの頭を小突いた。

「こいつを送り届けてくれたんだ、それくらいしなきゃあね」

「お世話になります」

そして、着いたところでその家のすぐ近くの木に、アステイナも一緒に馬の手綱をつなぐと、続いて家の中に通された。上の部分が丸い扉を開けると、薬草のきつい臭いが鼻をつく。

「狭いけど我慢してくれるかい？」

「え、あ、はい」

ルイセラードは辺りを見渡した。右手には台所、左手には、赤いダイヤ柄のクロスのかかったテーブル。上に置いてあるバスケットの中には、りんごが入れてあつた。そして、奥には二階へ続くであろう階段がある。

「荷物は上に。屋根裏だけど……すまないね、こんな家で」

「そんなことないですよ」

と、その時だった。

ぱつ、と目の前になにかが降り立って来て、鋭く光る白刃の剣が

向かってきた。とつさにルイセラードは抜刀して向かってきたそれを受け止める。

「なにしにきた、この下衆野郎」

「……初対面でこれはいささかきついんじゃないか？」

「初対面ね。それで、お前一体なにしにきた」

「なにしに來たって単なるお客だよ。君こそ誰だい」

と、トーラが叫んだ。

「右手使わないで！」

「……あ」

悪い、とルイセラードは左手で柄を掴むと、持ち替えた。

「それで、質問を戻そう」

「なにしに來た、こんな所まで。例の旅好きは本当か？」

「くっ」

ぐつと奥歯を噛み締めて、相手を見据えた。

狐の皮衣を被り、その下から自分を見る、鋭い眼差し。その瞳の色は——緑だ。そしてうねる長い黒髪に、きらりと光る狼の耳飾り。小柄な体には似合わぬ、ぐいぐいと押してくる強い力。

——でも、何処かで見たことのあるような？

ルイセラードは眉をひそめた。

「……質問を変える。何故こんなことをする」

「だから、こんな所までなにしに來たんだ。ルイセラード・クロス
キーズ」

「僕をご存知で」

ルイセラードはぎりつと奥歯を噛み締めた。

「最も」

と、相手は更に力をかけてきた。「やっかいなのは国王の方だけ
どな。俺らをどうにかして追っ払おうと、兵隊を国境に張り込ませ
る始末」

「お前、名前は」

ルイセラードはぐいつと押し返した。だが、左手ではやはりきつ

い。

「そろそろ剣をしまわないか。初対面で打ち合う気は僕にはない」

「本気でかかってきたらどうだ。ウェランドルスの三本の指に入る剣客じゃないのか？」

「右は使うなと止められている」

力は弱まらない。——どころか、強さを増していく。

「——仕方ないな」

きつ、とルイセラードは彼を睨みつけた。

「なら、悪いけど」

そして、渾身の力を込めて彼の剣を弾き飛ばした。そして相手が見せた驚きという一瞬の隙に切っ先を喉元へと向ける。

——その時間、一秒もない。

「……さすが」

辺りが唖然とする中、彼は微動だにせず、ずっとルイセラードを見据えた。

「士官学校に入った方がいいんじゃないか？ 放浪王子」

「考えておく」

「だが、さすがの噂通りの剣客だった訳だ」

お手上げだよ、と彼は剣を鞘に戻し、両手を上げた。

「さすがさすが」

「まあ、僕にはこれしか取り得がないしね」

ルイセラードは切っ先を引っ込める。と、その刹那——。

「単純な脳細胞だな」

さっきとは違う切っ先が、今度はルイセラードの喉元に突きつけられていた。

「あら……両刀使い」

「ジルヘウスの血を侮るな。やっぱお前って相手は本気で行かないと死ぬな」

——と、ルイセラードは少し考え込んだ。

ジルヘウス。何処かでこの名は聞いたような気が。

「ああ」

——思い出した。

ここ最近、ウェランドルスに進入しては盗みを繰り返していく、イルグリストの盗賊団。ジルヘウス盗賊団と俗に呼ばれる、その盗賊の、若頭といえは確か昨年、ウェランドルスが指名手配することを、イルグリスト政府から許可を取ったばかりだったか。

「ジルヘウスの若頭か。誰かと思ったら」

「酷すぎるんじゃないか？ その言い方は。それとも盗賊には容赦ないとても？」

「いや、別に。——だが、何故こんな所にいる？ 仮にここはスルリエズとマティルグラスの国境付近のはずなんだけれども」

と、その時だった。

「起きてきちゃだめだって、何度言ったら分かるの！」

トーラが叫んだ。

「絶対安静だってどれだけ言ったら分かってくれるの！」

「動けれりゃあ動く」

彼はそう言っただけで剣をしまった。「俺はバカ丈夫だ」

「それでも、意識戻ったばかりじゃない！ 傷口開くわよ！」

「うっさい、動けるから動く」

彼は踏みつけられていた剣を引き抜くと、くるりと踵を返し、奥にある階段を上がって行ってしまった。

「それで。なんで賞金首がここにいる訳？ トーラ」

ルイセラードは剣をしまった。

「森の中で行き倒れてたんですよ。それだけです」

トーラはつんと唇を尖がらせた。

「酷い傷で、死にかけてたんです」

「……でも、おかしいな」

口元に手をあてて考え込む。「仲間がいる気配もなし。盗賊の若頭が一人でこんな所までやってくるなんて、何か事情があるかもしれない」

「事情？」

「そう、事情」

ルイセラードは目を細めて足元を見つめた。

「ジルヘウスって、有名な盗賊団なんだけどね。ウエランドルスに進入してくる度胸のある盗賊ってことで、王城でも一目置かれてる。そんな有名な盗賊団——それも若頭が、なんでこんな森の中に大怪我して行き倒れてたんだろ」

「——少年の頭に仲間が不満を抱いて追放した、とかはどうだ」
言ったのはアステイナだった。

だが、違うと思う、とルイセラードは首を横に振る。

「あの若頭の権力は相当なんだよ。あの少年に、何故かみんな従う。あいつの発言は絶対なんだ。それほどの信頼を受けている、って考えていいと思う。けど、ついこの間まで、ウエランドルスで盗みを繰り返してたっていうのに」

「おかしいな」

「まったくだ」

二人は彼の去っていた方向を見つめていた。

〔四章：方向音痴な薬剤師：4〕（後書き）

なんだかまだまだ辿りつかないですねー。結構文章を削ったり直したりしてます。読んで「あ、書いてた頃、若かったな……」と、しみじみ思います……。

「五章：鮮やかな緑の瞳：1」

——その日の晩。

「あー、いたいた」

ジェーナはよいしょと屋根裏の窓から屋根の上に登った。視線の先には、黒髪の『ちっさな』少年が立っている。

「トーラに言われて捕まえてくるように言われたんだけどさ」
「ちらり、と彼はジェーナの方を見ると、そっぽを向いた。」

「興味なし、って顔したわね？　今。トーラが心配してたわよ？
昨日からなにも食べてないって」

彼はなにも答えない。

喋る気はないのか。ならこっちでいっぱい喋って、うるさい、の一言くらい言わせてやろう。

「あと、ルイセラードとアステイナが不思議がってたわよ。あんたがここにいること。盗賊の若頭がいき倒れてる自体が不思議らしいけどさ。あたしには全然分かんないんだけど、あいつらには不思議みたいで。でも言われてみれば不審よねえ、いち盗賊ならまだしも、若頭だもんねえ」

……黙秘を続けるときたか。

「あんた、ずっと黙ってるつもり？」

ジェーナは彼の方に歩いて行く。そして隣に立った。

と、あることに気づく。

「視線が一緒だ。あんたとあたし」

そう、身長が同じくらい。

「あんたちっちゃいね、あたしと同じ視線だなんてさ」

ジェーナはそう言って笑う。そしてその場から去ろうとした彼の腕を掴んだ。

「行かせはしないわよ。夕食に連れてくって約束したんだから。ほら、行こう」

と、ジェーナはぐいつと腕を引っ張る。

年の割りに小柄な彼は、その圧倒的な強引さに引きずられていく。

「放せ！」

「やっと喋ったわね。でももう遅いわ」

「なっ……」

「このあたしから逃げるなんて百万年早いわよ」

ジェーナは声をあげて笑って、彼を窓の方へと引きずって行った。

「はい、トーラお待たせー」

につこり笑って、ジェーナは強制連行してきた彼をトーラに突き出す。

「ってことで夜ご飯にしよう」

「……」

だが、彼女は驚いた様子で突っ立ったままだ。

「どうかした？ トーラ」

と、彼女は我に返った。

「え、いえ、別に」

「ところでさ、この匂いってばもしかしてシチュー？」

「ええ、そうですけど」

と、ジェーナは、やった！ と彼の襟首を掴むと、トーラに投げつけた。慌てて彼女は受け止める。

「トーラ、こいつ頼むわ。なんか手伝うことある？」

ジェーナは言って腕まくりした。

「なんでも来い」

「じゃあお皿にシチューを……」

「お安い御用。トーラのお母さん、お手伝いしまーすっ！」

ジェーナはるんと台所に向かった。ああなった彼女はもう止められない。

「……悪いなあ、お客さまなのに」

トーラは言って、彼を抱きかかえた。

「は、放せっ」

「いや」

と、彼女はずりずりと引きずって行き、先に席に座っていたルイセラードに彼を突き出した。

「見張つといてももらえますか？ 逃げないように」

「手伝い代わりによるこんで」

ルイセラードはがしつと彼の腕を掴む。

「逃げるなよ、盗賊」

「……放せ」

「嫌だね。ジェーナに怒られるから」

「お願いしますね」

トーラは笑って、彼を放すと台所へ行った。

「どうする？」

にんまり笑ってルイセラードは彼を見上げる。

「言つとくけど、お前ごときにお縄につく気はない」

「お縄をちようだいする気はないよ」

「かと言いつつも力が強いんだが」

「だってこれ以上ウエランドルスが被害に遭うのは嫌だから」

と、その時だった。こん、こん、と、扉がノックされた。

「……珍しいなあ」

台所でトーラが呟く。

「お母さん、お客さまかな」

「一応出ておあげ。行き倒れだったら困るからね」

くすつとトーラは笑って、台所を出てドアの方へ向かう。そして、

「はい、どちらさま——」

と、ドアを開けた。が、刹那。

——この気配。

開かれたドアの隙間から覗いていたのは、薄ら笑い。そして流れ込んできた気配に、とっさにルイセラードとアステイナは叫んだ。

「下がれ、トーラ！」

「え……」

戸惑って動かないトーラの向こうにいる『来客』に、とつさに二人は席を立ち、剣を抜く。――だが。

「きゃあっ!」

立ちすくむトーラはあつという間に『来客』に抱きかかえられた。そして喉もとに突きつけられたのは、槍の白刃の切っ先。

「はあい、お久し振り」

『来客』は笑う。

「まさかまた会えるとは思ってなかったわ。お久し振り。何日振りかしら?」

「……フェイエル」

「会えて嬉しいわ。でも残念、今日はお相手してあげれないの。その黒髪のおちびさんに用があつて来たのよ」

と、彼女の後ろに、ぬつ、と影が現れた。刹那、先程まで腕を掴んでいた少年が剣を抜き、ジェーナはまな板の上にあつた包丁を構えた。

――あいつだ。

背負っているのは、自分ほどありそうな、あの大きな剣だろう。顔を隠した布の影から、灰色の髪が覗いている。そして、殺気を放つそのオーラ。

「死神……!」

――全身全霊で向かわないと、多分死ぬ。

それはアステイナも悟ったようで、彼女も剣を構えた。その額には冷や汗が浮かんでいる。

「アステイナ、大きいのは僕が相手をする。……もっとも、勝てるかどうかは分からないけど」

すつ――、とルイセラードは瞳を閉じた。

――勝てるかどうか分からない、って?

そしてゆっくりと目を開き、目の前を見据えると、ルイセラードは余裕の表情を浮かべて、切っ先で彼らを指した。

「争うなら外に出よう。それとジェーナ、蹴っ飛ばせるチャンスだぞ」

「そうね」

ジェーナは手にしていた包丁を、扉側の壁にひゅんつと投げ刺した。

「あたしも戦闘に参加しようかしら。マスティーナさん仕込みよ」

「そりゃ頼もしい」

と、その時だった。

「よしとけ。——そいつらは俺に用なんだろ。なあ、悪魔と死神」
緊迫した空気の中で、彼は両手に持った剣を弾き合わせる。キン、と金属音がその場に響いた。

「狙ってきたんだろ？ 本物の方を。丁度いい、俺もあんたらに用があつた」

「話が分かつてるじゃない」

「それくらい予想はつく」

そう言つて、彼は羽織っていた皮衣を脱ぎ捨てた。それから、首から提げていたなにかを掴み、鎖を引きちぎり、その鮮やかな緑の瞳で彼女を睨みつける。

そして、

「これだろが」

彼がそう言つて、彼女に見せつけたもの。

絡めた鎖にぶら下がっているのは、彼の瞳の色とはまた違う、少し深い緑の色をした円柱状の宝玉。

「欲しいんだろ？」

「そうそう」

彼女はくすりと笑い、トーラを解放した。

「まさかあれ、偽物だとはね。あんたたちきょうだいいたら嫌味なんだから」

そして彼女は嘲笑した。

「今日こそもらうわ。スティルグ・ラディストリー」

その言葉に、その場が沈黙した。

皆の視線は、彼の手に絡められた鎖にぶら下がる、緑の宝玉。それは紛れもなく、彼女たちが狙うものであり、ジェーナから彼らが奪った、唯一無二の重宝の色違い。

「……言つとくけど渡す気はない」

彼はぐつとそれを握り締めた。

「あらそう。でもごめんなさいね、こっちはあなたを殺してでも手に入れるわ」

彼女は槍を構えた。

「シチューの夕食中悪いんだけど。殺戮というのをを始めさせてもらつていいかしら」

「今度はお前が俺を殺るのか」

「いえ？ 最初はここの赤い瞳のお嬢ちゃんかしら」

「なっ……」

彼女が被った布の下で薄く笑ったのが分かる。

「彼女は関係ない！」

ルイセラードが叫んで剣を構え直すと同時に、アステイナも構え直す。

と、彼女はため息をついた。

「だってこうでもしないと、その若頭が素直に渡してくれるとは思えないのよ」

そう言つて、くすりと彼女は思い出し笑いを漏らした。

「あの夜は実に楽しいものだったわ」

「——黙れ！ まずはお前を殺して次に死神を殺つてやる！」

彼は二本の剣を構えて彼女に突っ込んだ。

「あら、事実でしょう？」

彼女はトーラを突き飛ばし、器用に槍一本で斬りつけてくる彼の剣を受け止めていく。

「仲間に見捨てられてご愁傷様。妹さんは死んだのかしら？」

「知ってるくせにほざくな！」

右足に体重をかけ、渾身の力を込めて剣を盾に彼女へと突っ込む。その勢いで、二人は一緒に外へ飛び出す。

そして地面に勢いよく飛ばされた彼女に立て直す暇を与えず、彼は再び斬りかかった。

——と、その刹那のことだった。一瞬の隙だった。

「挑発に乗るなんて、いけないお子さまね。まったく」

「……お前……っ」

「バカね。やっぱり」

彼女は槍を抜くと、どかつ、と彼に蹴りを食らわた。

「がっ……」

「ご愁傷様」

そして、自分の上に倒れた彼をうつとうしそくに払いのける。

「フェイエルの名をなめんじゃないわよ……ほんっと」

衣は血に塗れ、赤く染まっている。

「一応急所は外しといたわ。あたしたちの目的は——」

彼女はしゃがみ、彼の手から目的のものを取り上げた。

「これだしね」

そしてゆっくりと立ち上がって、ドアの方に振り向く。

「頂いていくわ」

「お前っ……！」

「そんな顔しないでちょうだい、ルイセラード・クロスキーズ。お嬢さまが悲しむわ」

彼女はくると背を向けた。と、トーラが外に飛び出し、彼の元へと駆け寄る。

「——幸運な盗賊ね」

彼に寄り添うトーラに、彼女はため息をついた。

「なんですか」

トーラは恨みがましく彼女を見上げる。「それ、返してください」

「嫌よ」

「返して」

「聞き分けのない人ね。こっちも命懸けた仕事なのよ」
彼女は槍を構える。が、その時、

「よせ」

低い声がした。言ったのは、灰髪の彼だった。

「それ以上血まみれになるな。お嬢さまが心配する」

「……そうね」

彼女は槍を引っ込めた。「帰りましょう」

「……ああ」

灰髪の彼は、剣を背負って彼女の方へと歩いて行く。

——だが、このまま帰さないのが礼儀だ。

「ちよつと待て」

ルイセラードは彼を睨みつけた。

「用件はそれだけか。死神」

「ああ」

灰髪の彼は足を止めて振り返る。

「お前に特別これといって用事はない」

「僕もだよ」

言って、ルイセラードは外に出た。

「——だが、ただでここから帰す訳にはいかない。分かるだろう？」

僕だつて一端の王族だ。王族や皇族の中で害虫扱いされている奴等を見過ごす？ ウェランドルス王太子、ルイセラード・クロスキーズの名が聞いて呆れる。ジェーナのリメンバーとその盗賊のリメンバー、耳を揃えて返してもらおうか」

「無理な話だ」

彼は背負っていた剣の柄に手をかけ、ざつと体をこちらに向けた。そしてゆっくりと、その長い剣を抜く。刹那、その場に殺気が立ち込めた。

「——先に行け」

「分かったわ、例の場所で」

槍の少女は森の方へと駆け出す。

「逃がすか！」

と、アステイナがその後を追おうとするが――。

「……だめよ、アステイナ！ この森を侮っちゃいけない！」

ジェーナの声に、ちつ、とアステイナは足を止めた。

「ではどうする！ みすみす取り逃がしていいとでも言うのか！」

「それは」

ジェーナは奥歯を噛み締めた。

彼女だって、とっ捕まえたいのだ。だけれども、夜の深緑の森に迷うことがどれだけ危険か、彼女は知っている。

――だが、なにも槍の少女一人という訳では、ない。

「心配要らない。アステイナ、ここにもう一人いる」

言って、ルイセラードは剣を強く握った。

「こいつをとっ捕まえて、吐かせればいい話だ」

そして彼に向かって駆け出し、瞬時に右手に持ち替えて彼目掛けて突き刺すが、

――早い！

見ると相手はかわし、左足を軸に体を向けると同時に剣を払おうと構えた。そして攻撃の寸前でルイセラードは地面を蹴って跳び上がり、尚且つかわした剣を踏み台に背後に飛び退いてくるりと一回転して地面に着地する。刹那、剣を構え直してもう一度相手に突っ込んだ。

「遅い！」

打ち込む攻撃全てが彼のその剣に防がれていく。

決して勝てない相手ではないはず。

――だけど、その体の持つ力の差がありすぎる。

体重をかけ、両手で剣を握り締めて剣を振り下ろす。だが、いくら攻撃を仕掛けても、相手はそれを防いでいく。

――これじゃまるで、父上との親子喧嘩じゃないか――。

攻撃を受けられる度に腕がしびれていく。それに、右手の傷が開きかけている。攻撃の重さが半端じゃない。腕の長さも、攻撃の重

さも、まるで違う。

こちらの剣かわし、相手は右足を引く。そして剣を軽く握り直した。

——くる。

でも、間に合わない！

「……っ！」

防ぎそこなった剣がガキンッと甲高い音を立てて弾き飛ばされる。

——しまっ……！

刹那、目を閉じる間もなく、ぐっと切っ先が喉元に向いた。

「お前みたいな怪力な奴、初めてだよ」

降参だ、とルイセラードは左手を上げた。

——右手はしびれて動かない。そして、包帯に血が滲んでいた。

「まあ所詮、僕なんてこんなものさ。思ったよりも弱くて驚いたか？」

「——いや。筋力的な力の差がなければ、勝敗は分からなかったろう。それに噂通り、何事にも動じない。人はそれを開き直りと言うが——」

言つて、彼は剣を引っこめる。

「——相手のことを見透かす目と、度胸が備わっていると言う御人もおられる」

「買い被りだな」

「あえて否定はしない」

くるりと彼はルイセラードに背を向けた。

そして頭から被っていたボロ布を深く被り直す。

「また会おう、ルイセラード・クロスキーズ」

「一つ聞かせてくれ。どうしてお前たちはこんなことを繰り返す。王族や皇族を相手にして、ろくなことがないのは目に見えているはずだ。それに、リメンバーを盗んだところで、密売するなど不可能に近いはず。なのはどうして——」

「生きる為だ。これ以上お前に話すことはない」

言つて、彼は夜の森の闇に姿を消した。

「……トーラ、しびれに効く薬つてある？」

右腕を押さえ、ルイセラードはトーラの方に振り返つた。
と、そこには彼女の母もいた。応急処置の真つ最中だ。

「その若頭の怪我は——」

「急所は外れてます。でも、血が止まらなくて……」

「大丈夫だよ。あたしに任せな」

応急処置を済ませ、トーラの母親は少年を背負つた。

「あんたたち、手伝いな！ 急がないとこいつ死んじまうからね！」

「し——」

「急ぎな！」

そして家の中へと彼女は急いだ。

「五章：鮮やかな緑の瞳：2」

手当ての終わった彼は今、一階の寝室で休んでいる。

—— ついているのはトーラか、それともジェーナか。

ルイセラードは一人、さつきから屋根裏で物思いにふけていた。しびれる腕は、大分ましになってきた。手のひらの傷は案の定開いてしまっていて、さつき手当てを終えたばかりだ。

と、その時だった。

「よいしょ」

声と同時に、ランプとトレイに乗せられたシチューが床に置かれた。そして次にトーラがひよこつと顔を出す。

「お腹空いてるんじゃないかと思って、持って来ました。アステイナさんが『珍しくいじけてる』って言うてましたよ」

「いじけてるんじゃないくて、考えごと、してただけなんだけどね」と、トーラはシチューを持ってこちらにやって来た。

「はい」

そう言つて、ルイセラードの目の前にそれを置く。そして彼女はにつこりと微笑んだ。

「何、考えてたんですか？」

「……いろいろと。それに、『事實は小説よりも奇なり』ってこのことだなと思つて」

彼女は首をかしげた。

—— 事實は、小説よりも奇妙、かつ不思議である。

この場に、王子が一人。皇女が一人。皇族の生き残りだが、農民の子が一人。そして、盗賊として生きてきた王族が、一人。

ラディストリーの姓は、イルグリスト王族のものだ。その昔、世界一の帝国だったマティルグラスと対等に渡りあい、繁栄を誇った王国、それがイルグリスト。今は王国ではなく、共和国である。イルグリストの王族もまた、マティルグラス同様に滅んだと言われて

いた——が、しかし。

彼はリメンバーを持っていた。そして、フェイエルはラディストリーの姓を口にした。

これ以上の証拠が、何処にある。

「……参ったよ」

ルイセラードはため息をついて、スプーンに手を伸ばした。

「それで、彼の方は？」

「ジェーナさんがついてます。今は寝てますよ」

「そっか。でも、行き倒れてた——て言っただね。それも傷だらけで」

「そうなんです。それも、幼い女の子と一緒に」

「女の子？」

「ええ。もう死後何日か経っていて……近くの墓地に、お母さんとお墓を作ったあげたんです。背中に傷を受けていて、多分即死だったんじゃないかと思います。かわいそう」

しゅん、とトーラはうつむいた。

「……かわいそうです。まだたくさん未来があったと思うのに……」

「——そうだね」

ぼん、とルイセラードはトーラの肩に手を置いた。

でも、幼い少女というのは一体。

仮に妹がいるなんて噂、そんなものは流れていなかったはずだ。

——さっきから、うわ言で何か言っているのは分かるのだけれど。なんて言っているか分からない。

ジェーナはため息をついた。

ここはトーラとトーラのお母さんの寝室だ。大して広くもない部屋に、ベッドが二つ。その内の一つ——ドア際の、トーラのお母さんのベッドに、彼は寝ていた。その隣のベッドに座って、ジェーナはさっきからずっと彼の様子を見ている。

別に苦しそうじゃない。熱があるわけでもない。

でも、時々顔をしかめたり、うわ言を言ったり。悪夢でも見てるのだろうか。

と、その時だった。

「あ、起きた」

ジェーナは呟いた。

ゆっくりと彼は目を開く。そして、ゆっくりとジェーナを見た。
「絶対安静だつてさ、あんた。もうちょっと遅かったら死んでたわよ」

「……俺、生きてんのか」

「当たり前じゃない、ステイルグ・ラディストリーさん」

ジェーナは呆れたように微笑んだ。

「ルイセラードから教えられたよ。ラディストリーっていうのは、イルグリストの王族のことを指すんだって」

「人違いだ」

「じゃあ、リメンバー持ってた訳は？」

「……そんな大それた身分の人が盗賊やってるはずないだろ」

「そんな大それた身分の人が農民やってたのにそれはないんじゃないかい？」

「は？」

「あたしね、ジェーナ・ウィールントゥールンっていうの」

彼はきょとんとジェーナを見た。

「お前こそ人違いじゃあ——」

「やあね。違うわよ」

「……本当かよ」

彼は寝返りを打ってそっぽを向いた。

「ねえ、夜ご飯食べる？ シチューがたくさんあるんだけど。温めて持ってきてあげる」

「要らない」

「そんなにぴんぴんしてるのに？」

と、ジェーナはベッドから降りた。

「持ってきてあげるわよ。遠慮なんかするんじゃないわ、怪我人」

——と、言っただけ良かったけど。

あれだけの重傷を負った怪我人に、食事はどうなんだろうか。そんなことを考えながら、ぼけーっとジェーナは鍋の前で立つていた。

鍋の中には、温め中のシチュー。

と、その時だった。

「……さんっ、ジェーナさん」

背後からの突然のトーラの声に、はっとジェーナは我に返り、鍋に目を移した。もうぐつぐつと温まっている。

「気をつけてくださいね。ぼけっとしてちゃあ、危ないですよ？ 考え事ですか？」

トーラはやって来ると、トレイに乗った皿を流しに置いた。

「残されちゃいました。にんじん一個だけ」

その皿の中にちょこんと残されたにんじんに、思わずジェーナは吹き出した。

「に、にんじんって……」

くるっとジェーナは振り返って、天井を見上げる。そして叫ぶ。

「にんじんくらい残すなーっ！」

「ジェ、ジェーナさ……」

と、どんがらがっしょん、と二階から物音が聞こえた。

「まったく」

ジェーナは、ふう、と呆れたようにため息をついた。

「あいつ、まさかこれごときが食べれないとは」

「でも、他国のものが口に合わないってよくある話ですし」

「いくじなしなだけよ」

「でも、残したのはにんじん一個だけですから——」

「甘いわよ、トーラ。あいついじめて損はないわよ？ からかうと面白いの。さてと」

と、ジェーナは上の棚から皿を取った。にんじんを少し多めにして、それにシチューを入れ、スプーンを添える。

と、トレイを差し出された。

「どうぞ」

「ありがとう。ところでトーラ、怪我人に食事制限とかある？」

「あ、えつと……でも、なんかものすごい回復力の持ち主みたいで、もしかしたら胃が受け付けなくてもかもしれませんけど……。だけど、ほんとにああいうのを驚異の回復力って言うんでしょうね。この前もそうなんです。全治一ヶ月を三週間ではぼ治しちゃいましたから」

「へえ。バカ丈夫なのね」

言って、ジェーナは皿を乗せ、トレイを受け取った。

と、トーラはその皿の中に苦笑いする。

「にんじん多めですね」

「栄養あるからね。あたしはにんじん大好きなのよ」

じゃあね、とジェーナは笑って、さっきの部屋に戻って行った。

部屋に戻ると、彼は熟睡していた。

「あれま」

ジェーナは、ふう、とため息をついた。

「どうして寝ちやうかな」

さて、せっかく温めたシチューをどうしようか。

「おい」

呼びかけても返事はない。

「もしもし、ステイルグさん？」

やっぱり返事はない。

「もう」

と、ため息をついたその時だった。

——え？

なにか、言った？

ジェーナは首をかしげた。
と、その時だった。

「……………」
ん？ とジェーナは熟睡する彼の顔を覗き込んだ。

「……………ライナ」

消えそうな、微かな寝言。

—— だけどちよつと待て？

「誰のこと」

ライナ。呼んだその名は一体誰のもの。

それからしばらくジェーナは、傍にあつた椅子に座つて、クツシヨンに隠れて少ししか見えない彼の寝顔を見つめていた。いい夢を見ているとも思えない。かといって、悪い夢を見ているとも思えない。そんな寝顔。

かち、かち、と時計の秒針の音が部屋に響く。見ると、時刻は八時半。
—— 随分と経つたなあ。

と、その時だった。

「……………あれ……………」

その声にはつと視線を戻すと、ゆつくりと彼が体を起こすところだった。

「ごめん、起こした？」

「いや……………。俺、いつから寝てた」

「さあ。あたしがシチューを持ってきてあげた頃から寝てたわよ。

—— っていうか、ライナって誰のこと？」

ジェーナはにんまり笑つて、彼に尋ねる。と、

—— ぴたっ。

頭をかいていた彼の手が瞬時に止まった。

「呟いてたよ。その名前」

「そ」

「そっけないの。誰かくらい教えてくれてもいいじゃない」

と、彼はベッドに横になり、そっぽを向いた。

「誰なのよ」

「……妹」

「妹……？」

「そう。死神に殺された妹」

ジェーナは息を呑んだ。

「お前に言っただろうなんだかな」

そう言っただけ、彼はため息をつく。そして寝転がったまま、またがしがしと頭をかき始めた。

「おにいちゃん、おにいちゃんっ！」

目を閉じれば、今でも鮮明にその声が甦る。

そして、少女は手に花の王冠を持って駆けて来るのだ。

「みて、ナゼラスが教えてくれた！」

目の前で止まって、手に持っていたそれを差し出す。

「可愛いでしょ？」

「ああ。——ちよい貸してみ」

と、それを手にとって、彼女の頭に乗つけてやる。

「でもナゼラスって、こんな可愛い趣味あったけ？」

言つと、後ろの方から、あっはっは、と笑い声が聞こえてきた。

「確かにな」

振り向けばそこには黒く長い髪をした、顎ひげを生やした貫禄の良い男。

「良かったなラリイナ、どこぞやの姫さまみたいだぞ」

「えへへへ」

頬を赤らめて少女は笑う。

「今度お父さんの作ってあげるね。ナゼラスに手伝ってもらわないで頑張るんだ！」

「……俺が九つの時に生まれたんだ」

ジェーナは黙って彼の話を聞いていた。

「全然似てねーんだよ、俺と。優しい顔立ちして、まん丸な目して、性格だって正反対だった。動物と花と星が好きな、普通の女の子だった。……六つ、だった」

生まれたばかりの彼女と両親に森の中に捨てられて以来、たった一人の家族だった。拾って育ててくれた盗賊の頭を父のように慕いはしたが、やはり肉親の温かさはそこにはなかった。

「イルグリストの王族は世の恥だって、両親が昔、言ってた」

「……恥？」

「その昔、マティルグラスの女帝と恋に落ちた王子がいたとかいうそのせいで、迫害の対象になってた。ひそひそと偽名を使って隠れて暮らして……。生活が苦しくて、森の中に捨てられた。盗賊になって、頭が病気で死んで、俺が後を継いで——それなりに幸せだなと思う時だってあった。けど」

ぐつと彼は拳を握り締めた。

「……仲間に、裏切られた」

「……裏切り……？」

「俺たちを、フェイエルとシェイレルに売りやがった。俺が仲間に引き止められてる間に、他の仲間が行かした。妹は、なんの疑いもなく“あれ”を持ったまま、行ったんだ。——俺がそっちにいると吹き込まれて」

ジェーナは小さく息を呑んだ。

「……売られたって気づいて、行ったら、血まみれで。その傍に一人、死神が立ってた。……そいつの左目しか、奪えなかった。——偽物だったんだ。妹の持ってたのは、俺が持たせてた偽物だった。本物は、危険だと思って俺が持ってた。……俺のせいだ」

そこから自分がどうしたのかは、あまり記憶にない。深手を負ったまま、彼女の亡骸を抱えて森を彷徨っていた気がする。

それからここに、来たんだっただか。

「……なあ。あれ、取られたのか」

えっ、とジェーナはうつむいていた顔を上げた。

「なに、が？」

「——取られたんだな」

「あ……」

ジェーナは目を伏せた。

「でも……これから、どうするの。取り返しに行くの？」

「……」

「あたしは、取り返しに行く。……あんたは？ 帰る場所、ないんだったら、さ……。行こうよ。取り戻そう」

「あれが俺のじゃなくなったら、俺にとっては有利だ」

「……とりあえず、食べよう」

と、ジェーナは彼の服を引っ張った。

「お腹、空いたでしょう。——ね？」

「五章：鮮やかな緑の瞳：3」

夕食の残り物というのが、翌朝に持ち越されることは、よくあることらしい。特に、シチューやスープは持ち越されやすい。

翌日の朝はその通り、シチューの残り物から始まった。

そして、その朝食を終えると早速、ルイセラードたちは荷造りにかった。

今日にはここを出て、首都へ入る予定だ。

荷をまとめて下に降りると、トーラのお母さんがパンと水と薬を分けてくれた。娘を送り届けてくれてありがとう——と、せめてもお礼らしい。

「……と。あれ、ジェーナは？」

ぐるり、とルイセラードは辺りを見渡した。荷物は、そこにある上着もあるのに。

「ジェーナなら奴のとこだぞ」

言ったのはアステイナだった。

「さよならでも言いに行つたんじゃないか？」

と、その時、奥の部屋の戸が開いた。出てきたのはジェーナだ。

「ごめん。待つてた？」

「もう少し遅かったら怒らせてたぞ」

なあ？ とアステイナはにんまりと笑ってルイセラードを見た。

「僕は別に……」

「私たちの用事は、結構急ぐだろう。——ほら」

と、アステイナはジェーナの荷物を手に取ると、持ち主に投げ渡した。

「行くぞ、ジェーナ」

「……うん」

と、いつもより元気のない返事に、アステイナは首をかしげた。

「どうかしたか？ 悪いものでも食べたか？」

「うっん。その——ルイセラード、どうするの？ えっと……指名手配のあいっ」

「あ」

「あ、あのね」

と、ジエーナは合掌して頭を下げた。

「お願いがあつてね、その、あいっ——」
と、その時だった。

「余計なことするな」

はっとジエーナは顔を上げて、奥の部屋の方に目をやった。

——ドアの所に、冷めた目で彼女を見る彼が立っていた。

「でも——」

「嫌だ」

「それじゃあ、これからどうするつもり？」

「どーしてお前に指図されなきゃいけないーんだよ。俺がどうしようが俺の勝手だ！」

と、待つて、とルイセラードが割り込んだ。

「ジエーナ、落ち着いて。……でも思い出させてくれてありがとう。危うく父上に殺されるところだった」

ぶっちゃけて言えば忘れてしまっていた。

昨日のことと、リメンバーのことで頭がいっぱいだったのだ。思い出して良かった。仮にも彼はウェランドルスに被害をもたらした盗賊——それも若頭——だ。そんな指名手配犯を、ただ忘れていた、という理由だけで易々と見逃してもすれば……後が怖い。

嫌な想像をしそうになり、ルイセラードはかぶりを振った。そしてそれを紛らわそうとトーラの母親に尋ねる。

「悪いんですけど、紙とペンとインクもらえますか？」

「そんなもの、なんに使うんだい」

「ちよつと作らなきゃいけないものがあるんで」

と、トーラのお母さんは奥の部屋に行った。

それを見送って、ルイセラードは一息つく。

「まあ……僕は別に構わないんだけど。ジェーナも構わないって言うてる。それに、旅は人がたくさんいた方が面白いんだってさ。相談も出来るし、全然寂しくないし」

「なに勝手に一緒に行こうとしてんだよ！」

「だって父上に殺されたくないし」

と、そこにトーラのお母さんが紙とペンを持って戻ってきた。

「こんなもの、なにに使うんだい？ なにか書くのかい」

そしてルイセラードにそれらを差し出す。

「どうもすみません」

それらを受け取って、ルイセラードは椅子に腰掛けた。そして、テーブルの上に少し色褪せた紙を広げ、インク壺の蓋を開ける。

「とりあえず書いとくよ。君の身元も保証できるし、僕の身元も保証できるから」

ペン先をインクにつけ、すらすらとルイセラードはペンを走らせた。

捕獲したジルヘウスの若頭はまず、ウェランドルス国王が保護することとする。

指名手配の権利はウェランドルス国王、ジェルド・クロスキーズに有り。

捕まえられた後の処分は、指名手配の権利有るウェランドルス国王並びに王太子、憲兵の最高官——そして、ウェランドルスでの事情聴取が終わり次第、他でもないイルグリスト政府に全てを任せることとする。

そして、文の最後にサインを記し、ルイセラードは上着のポケットから、赤い蠟燭とマツチと、紫の袋に入れられた何かを取り出した。

「これ、困った時の身分証明なんだけどね」

紫の袋の中身がテーブルの上に、ことん、と置かれる。

それは持ち手が獅子の形をした、木製の印。

赤い蠟燭に火を灯し、溶けて出来た蠟を、サインのすぐ下に垂らしていく。そして、先程の印をそこに押し当てた。そして、蠟燭の火を消して、印を放す。

——そこに浮かび上がったのは、獅子の紋章。

「よし。——強制連行完了」

「……は」

ぽかーんとしているジェーナはさておき、ルイセラードは作った書を折り畳んで、

「僕が持つてたらくしかねないから持つといて」

と、アステイナにそれを渡した。そしてその場を片付け、席を立つ。

「一石二鳥だね。ほんとにありがとジェーナ、思い出させてくれて」

「え？」

「ところで、トーラは？」

荷物を持ち、ルイセラードは一人気楽に辺りを見渡した。

「さっきから姿が見えないんだけど」

「トーラなら奥の部屋にいるわよ」

と、ジェーナは言った。

「話、全部聞いてるんじゃない？　ここからじゃ姿が見えないけど」ルイセラードは開いたドアの所に立つ彼の向こうに目をやった。

だが、確かにそこには誰もいない。ただ、空いた窓から風が吹き込んで、カーテンが揺れている。まだ冷たい風が、自分のいる場所まで流れ込んでくる。春が来るのは、まだ少し先のこともかもしれない。

まあ、いいか。

お別れは僕も苦手だし——と、ルイセラードは、トーラの母親に向き直った。

「お世話になりました」

「こっちこそ、娘のことほんとになんて感謝したらいいか」

そう言つて彼女は陽気に笑う。

「また機会があつたら寄つておくれ」

「ええ。それじゃあこちらで」

一礼して踵を返し、行こう、とそこにいたアステイナを促す。と、彼女はぺこりと一礼して、くるりと背を向けた。

「ちよ、ちよと待つてよ！」

二人の後を慌ててジェーナが追おうとする——と、その前に、
「急げ！」

ドア際に立つ彼の腕をぐいつと掴む。

「さあ大人しくしなさい」

「お、おわつ、ちよつ……痛いつて！ こつちは怪我人だつっの！
それに俺はまだ大人しく逮捕されるとか決めた訳じゃね——」
「ルイセラードはこの場で逮捕するつて決めたみたいだけど？」
「う」

「ご愁傷さま」

容赦なくジェーナはいつかの夜のようにぐいぐいと彼を引っ張つていく。その時と違うのは、ずるずると引きずられている彼が本気で抵抗しているのと、お腹を押さえていることくらいだろう。

「傷が開く！」

「つと、お世話になりましたつ、それとありがとうございました！」
ジェーナは足を止めて振り返り、トーラの母親に笑つて言つたと、

「トーラもありがと！ 歸りに寄るね！」

奥の部屋の向こうに叫ぶ。

そして、がしつ、と彼の腕を掴み直し、またぐだぐだ言つ彼をずるずると引きずって行く。——と、その時だった。

「あ、ありがとっ！」

奥の部屋から、トーラが顔を出した。

「無理しないでね！」

その言葉に、誰かさん以外は、分かつてる、と振り返つてひらひ

らと手を振った。

〔五章・鮮やかな緑の瞳：3〕（後書き）

五章まで上げてみて一言。あと何章……！？

「六章：漆黒と、闇と光：1」

首都というような広い街は、真ん中に広場があつて、そこから東西南北に道が敷かれている。そして、水資源豊富な国の首都は、必ずしも言つていいほど、噴水が存在する。賑やかな人々の声に、太陽の光が反射する白い石畳。

だが、この街は少し違った。

明らかに灰色に見える石畳。そして、暗雲立ち込めるような雰囲気。

その街の中を一台の馬車がごとごとと進んで行く。

「……これがオルンクールですよ」

隣の黒髪の女性は、にわかに微笑んでそう言った。

「ウェランドルスとの戦争で、すっかり荒廃してしまいましたかね」

もうかれこれ、馬車で旅して四日目になるだろうか。

彼女、メア Ril・マディスリートに連れ去られたのは、ついこの間のことだった。

何故ロルディオリス第一皇女の彼女が、ウェランドルスにいたのか。彼女は自分を連れ去りに来たと言った。そして、持ち出してきたリメンバーが欲しいと言った。

何故それを欲しがするのか。その理由は、尋ねど尋ねど教えてはくれない。

ただ、彼女は自分の意思で、自分を連れ去ったのではなさそうだった。

全ては、皇帝である父、グローキー・マディスリートの命令だと思われる。

ロルディオリス皇帝が、リメンバーを集めている——その理由はさっぱりと分からない。だが、国家の重宝なんかを集めて、一体全体どうしようというのだろうか。

「これが私の生まれ育った故郷ですよ」

隣でメアリルはそう言つて、外を眺める。

「昔はまだ、活気があったんですけどね」

そして、ふつと寂しく微笑む。

「ウェランドルスとの戦争が終わつてからというもの、すっかりこの街は大人しくなつてしまいました。おまけに不景気で、民は日に日に帝国主義への不満を高めているみたいです。それに、我ら軍事国家の人間は、なかなか平和に馴染めなくて……特に私のような根っからの軍人は。いつも、槍の白刃が血を吸いたがっていますし、銃口は敵に向く……拳銃など、神へのぼうとくだと言われているがね」

「確かに、剣術主義の世界に飛び道具は、確かに神へのぼうとくですけど……。それに、古来から勝負は剣や槍と決まっていますもの」

「近代思想を追い求める私としては、厄介なものです」

彼女はじつと外を眺める。「ところで、あなたの弟君はまた放浪の旅を？」

「……そうなんです。今度は北の方まで行つてゐるんじゃないでしょうか」

晴れているのに、曇りの日のように見える街を、馬車はごとごとと進んで行く。

窓に映る彼女の黒い瞳は、暗い色をしていた。

「あの……メアリルさま」

呼ぶと、彼女はこちらを見た。

「あの、王城に着いたら、ハルシャさまに会わせてもらつてもいいですか？」

「ハルシャは今いませんよ」

「え？」

首をかしげると、メアリルは寂しく微笑んだ。

「あなた方がここに来ることを知らないよう、おつかいに出しています。ちよつとスルリエズまで、奴等を探しに行つてくれ、と」

「奴等？」

ジュリーナは更に首をかしげた。と、メアリルはくつくつと笑い出す。

「な、なんですか？」

「いや、別に。そういえば、あなたには待ち合わせの相手がいましたよね。同じくリメンバーを持って家出した、どこぞの皇太子殿下が」

「ア、アルディクさまのことですか？」

「さようで。それともう一つ。異民族同士で駆け落ちなんかしちゃいけませんよ。弟が弟なら姉も姉ですね、本当に」

「私たちはそんな関係じゃあ……！」

ぽつ、とジュリーナの頬が赤くなる。それを見逃さなかったメアリルは、声をあげて笑った。そして、窓の外を指差す。

「ほら、もう見えてきましたよ。城が」

「メアリルさまの意地悪っ」

ははは、と彼女は笑う。

ふくれても、彼女は笑うだけで相手にしようとしなない。

「メアリルさまっ」

「いや、申し訳ない。ハルシャを見ていると、そういう考えしか浮かばなくなってきましたね。そういえば——当分はハルシャの奴は戻ってきませんよ。なんせ、帰ってこられてはたまりませんからね。支障が出る」

「メアリルさま？」

不敵に笑う彼女に、ジュリーナは若干の恐怖を感じた。

「どういうことですか……？」

「今回のことは、ハルシャに知られてはまずいんですよ。あの子はご存知の通り、あなたの弟君と関係を持っている。そのハルシャが、あなたがここに連れてこられたと知ったらどうします？ 私の目を盗んで、あなたの弟君にカラスを飛ばすでしょう。それだけはどうしても避けたいんです。お分かりですか？」

「……一体、私たちをどうしようっていうんですか」

「さあ。それは父上が決めることですから」

あっさりとした答えに、ジュリーナは顔を伏せた。

「ちゃんと……帰してくれますでしょうか」

「さあ。あなたの身はどうなることやら。ウェランドルス的第一王女ですからね。時と場合によっては、人質です」

「そんな」

と、もう着きますよ、とメアリルは視線を窓からジュリーナに移した。

「長旅ご苦労様です」

「……」

ジュリーナは黙り込んだ。

馬車は、少し高台にある王城へと進んでいく。今、この状況で逃げることは不可能だ。ロルディオリーズの街にシユフル族が現れたら、どんな騒ぎが起こるか分からない。それに、ロルディオリーズ王城——オルンクール城にアルディクがいるなら一度彼に会った方がいいだろう。それに、一人で逃げ切れる自信はない。

私がここにいること、あの子は知っているのだろうか——と、ジュリーナは反対側の窓の外を覗いた。

家出したという情報は、もしかしたら耳に入っているかもしれない。

——知らずに、旅してくれている方が嬉しいのだけれど。

「六章：漆黒と、闇と光：2」

ウェランドルスがこの世の光ならば、ロルディオリーズは闇だ。

清楚、かつ何気に豪華なウェランドルスの王城とは違い、ここの王城は至って質素で、暗い影を落としていた。石のレンガを積み上げられて作られたであろう壁に、日の入らないじめじめとした廊下。その壁には、蝋燭を置くための四角い穴がある。

床に敷かれた、赤い絨毯だけが、高貴な雰囲気をかもし出していた。

その廊下を進み、次に奥の階段を使って二階へ上がった。階段の手すりは木で出来ているが、その木はささくれ立っていて、とても触れたものじゃない。

「すっかり財政難でしてね」

先を歩くメアリルが言った。「ほとんど軍事資金に回して、生活費がないんですよ」

「……そうなんですか」

「足元にお気をつけを」

そうして二階へ着くと、次は左へ曲がった。そして、曲がってすぐのドアの前で、メアリルは立ち止まり、こんこん、とノックする。「私だ。入るぞ」

ガチャリ、とドアが彼女によって開けられる。

部屋の中を覗くと、左側にあるベッドの上に、銀色の髪をした青年が腰掛けていた。その長い銀髪は後ろで一つに束ねられ、眼鏡をかけ、彼は本を片手に読書に没頭している。こちらに全く気づいていないかのように。

「気づいてるか？」

メアリルが尋ねると、ふっと彼は視線を本から上げた。

「ああ、メアリル嬢——」

と、彼はぱちくりと目を見開く。そして、本を置いて立ち上がった。

た。

「ジュリーナ……！」

「やれやれ。何故こうも私の周りには非現実的な人が多いのだろうか」

と、メアリルはジュリーナを部屋の中に押し込む。や、否や、彼女は携帯していた拳銃を抜くと、銃口をジュリーナに向けた。

「さて、話は本題に。――渡してもらいましょうか。リメンバーを」

「メアリルさま……？」

「どういうことです、メアリル嬢。彼女はそんなもの――」

「持ってるんですよ。まあ、最初から私は、これが目的なんです。リメンバー欲しさに連れ去ってきた。それまでです。そしてアルデイク殿下、そなたも同様。渡さないと、ジュリーナ嬢の命はない」

ジュリーナが驚いたようにアルデイクを見る。と、彼は静かにジュリーナに歩み寄り、自分の背に庇うようにして銃口の前に立ちただかった。

「その前に銃を下ろしてもらおう、メアリル嬢」

「脅しているんですよ？ 意味がないじゃないですか。取り引きと行きませんか？」

「……分かりました」

彼は首の後ろに手を回し、鎖の留め金を外した。そして繋がれた『あれ』を取り出す。

「それ……！」

ジュリーナは思わず声を上げた。

アルデイクはなにも言わずにメアリルにそれを投げ渡す。そして、ぱしっ、とそれを受け取った彼女は満足気に笑い、やっと銃を降ろした。

「ジュリーナ嬢のは、明日催促することにしよう。今日はお二方ともごゆるりと休まれるがいい。特にジュリーナさまは長旅で疲れているであろうし。なお、脱走などしようものなら、国軍総出で捕まえにかかるので、そこをご了承くださいたい」

「まさに四面楚歌つてことですか」

「ロルディオリーズから無事に出れる可能性は、無に等しいと思われよ」

と、メアリルは廊下に出るとドアを閉め、鍵をかけた。

灰色のリメンバーを持ち、彼女は皇帝の私室へと足を運んだ。

「父上、私です」

『入れ』

その声に、メアリルはドアを開けた。

少し広めの部屋の奥にある椅子に、父——皇帝、グローキー・マデイスリートは腰掛けていた。肘掛に肘をつき頬杖をついて、目を閉じている。

「起こしてしまいましたか？」

「いや、うとうとしかけていたところだ。それで、持って来たのか？」

「グランデイスナのものだけです。ウェランドルスのは明日」

「……まあ、いい」

グローキーは目を開き、メアリルを見上げた。

「渡せ」

「でも、こんなもの——」

と、メアリルは灰色のリメンバーを投げる。

「どうするといのです」

「なに、じきに分かる」

ぱしっ、とそれを受け取ると、グローキーはそれを懐にしまった。

「メアリル、明日には奴等が戻ってくるだろう。マティルグラスとイルグリストのリメンバーが手中に納まれば、全てを教えてやる」

「世界征服でも企んでいるのなら、それは不可能に近いかと」

「ウェランドルスか」

「さようで。ハルシャが泣き喚きますよ。——お父さまのバカ！と」

「あれはハルシャが悪い。自分で蒔いた種だ。自分で片付けると言え」

「……ですが」

ハルシャをああしたのは私たちでは。

そう言いかけて、メア Ril は口をつぐんだ。

母を失い、父にも私にも構ってもらえず、友もないこんな世界で、妹は奴と出会ったのだから。――暗闇に差した光にすがりたいと思うのは、当然のことだ。

「それで、ハルシャは何処へやったのだ？」

グロッキーは彼女に尋ねた。

「まだ聞いていなかったが」

「ハルシャはおつかいに出してます。私の頼んでいた新しい銃が出来たそうなので、それを。『なら私が行ってきてあげますよ』と引き受けられてしまいました。ついでに、街の様子をいろいろと見てくると言っていましたので……帰りは遅いです」

「そうか」

満足気に笑うグロッキーに、メア Ril は心の中で安堵のため息を漏らした。

――『奴等』を逃がすためにスルリエズにやったとは、誰も思うまい。

仕事の終わった『奴等』は、口封じのために自分に殺されるだろう。ハルシャはそれを避けたいと自分に懇願した。友達だから、仲間だから――と。

なに、あの悪魔と死神のことだ、上手くやってくれるだろう。

――ウェランドルスに逃亡など、容易いことだ。

上手くいけば、ハルシャは『奴』に会えるかもしれない。

あんなに自慢げに、目をきらきらさせて『奴』のことを話す妹の幸せを、願わない姉などいない。この世はなんという嫌な回り方をしているのだと、何度思ったか知れない。

願わくば、民族の壁など、瞳の色の壁など、神がぶち壊してくれ

ればいいものを。

「六章：漆黒と、闇と光：3」

首都というのは、真ん中に広場があつて、そこから東西南北に大通りが敷かれている。

大きな図書館もあれば、安くておいしい昼食を出しているお店もある。

そして、ここ、スルリエズの首都、ラルバートに一番多く存在しているのは、なんといっても黒糖パンを扱うお店だろう。そこら中、パンの香ばしい匂いと、黒糖の甘い匂いでいっぱいだ。見れど見れど目につくのは、各々自慢の黒糖パンのお店ばかり。

「やつぱりおみやげってここがいいかな？」

目をきらきらさせながら、ジェーナが言う。

「いやあ、マステイナーさん喜ぶだろうなあ、こんな街に一回連れてつてあげたいよ。……トラが教えてくれたお店、何処かな？」

街の大きさに驚き、黒糖パンの多さに驚き、ジェーナはさっきからちょこまかとうろついている。先程から見失わないだろうかとひやひやされっぱなしだ。

「ジェーナ、迷子にならないでよ」

ハルヴィートの手綱を引きながら、ルイセラードは彼女を目で追った。

「それより、迷子になったら見つけてよねー」

笑ってかわされ、思わずルイセラードはずっこけそうになった。

結構人の多い通りを、中央の広場に向かって歩いていく。

「んで、一体なにをしようって？」

言ったのは、ハルヴィートの背に跨るスティルグだった。

「こんな人通りの多い街に来て、盗みでもするのか？」

「お前と一緒にするな」

ルイセラードは苦笑いした。

「アステイナのお兄さんを探すの。ついでに僕の姉上も」

「は？」

「二人とも家出しちゃってさ。見つけないことには帰れない」

「なるほど、駆け落ちか」

ルイセラードは思わず前につんのめった。

「駆け落ちじゃないよ」

「そりゃどーだか。あのおねーさん意外とやり手だったりして」

「姉上に限ってそれはない……と思う。とりあえず宿を探さないと」

そして、しばらく歩いて着いた広場の中央には、やはり噴水があった。

人は多い。買い物客や——旅行者もいるのだろうか。赤い瞳でない人もたくさんいる。黄色い瞳、そして紫や緑など、スルリエズの周りの国々の人々が目立つ。

スルリエズは、世界の中心に位置する。

そしてその首都もまた、世界の中心に位置する。

その昔から、この街は商いの行路として栄えていた。昔は、世界各国の商人たちがこの街を通り、他国を目指したのだが、今となつてはスルリエズは半ウエランドルの同盟国の一つ。近頃では、その方面の国々の商人しか見かけないようになってしまった。

その街中に、真っ直ぐな黒髪の、庶民の格好をした少女を見つけ、思わずルイセラードは足を止めた。

「どしたよ」

「いや……」

なんでもないと言おうとして、続いて漆黒の瞳、そして顔が確認できた瞬間、彼は、はっと息を呑んだ。

「……！」

——そんな。まさか、そんなはずはない。

「ハルシャ……！」

ロルディオリース第二皇女、ハルシャ・マデイスリートが、そこには、いた。

「六章：漆黒と、闇と光…3」(後書き)

やっとハルシヤ出てきた……長かった……事件が起こるのは次の章
？そっから本領発揮？

「七章：あの子の秘密：1」

十年前、ウエランドルスとロルディオリーズは停戦条約を結んだ。それは三十年以上続いた——二つの国が対立し、周りの諸国がそれに巻き込まれ、終局時には世界戦争までに発展した争いの、終わりを告げるものだった。

彼女に出会ったのは、その条約が結ばれた時だった。

ロルディオリーズ皇帝の連れてきた娘のうちの一人が、彼女だった。

大人しくて、おしとやかで、年の割りにしっかりしていて。

『お前とは大違いだ』

と、幾度となく父に笑われ、なじられた記憶がある。

そして、そんな、外見も中身も自分と違う幼い少女に、気がつけば心惹かれていて。

なにがどうなって今に至ったかは、正直良く分からない。

——母曰く、

『理由もないのが、恋というものなのよ？』

「ハルシャ！」

叫んだその時にはもう、その足は駆け出していた。

広場の人を掻き分けて駆けて行く。いくら自分を止める声が背後から聞こえたって、妨害する者が現れたって、罵る声が聞こえたって、腑抜けだとか非現実者だとか言われたって、絶対に辿り着いてやる。

その時、その少女が自分と同じようにこちらに駆けてくるのが見えた。

——やっぱり、間違いない。

少しも変わってない。そんなこと言えば多分彼女に怒られるだろうが、身長が低いだとかそういうのじゃない。相変わらず目の色は

深みのある落ち着いた黒色——。その黒髪だつて、大人っぽい雰囲気だつて、なに一つ変わつてない。

「ルザ！」

そして目の前に来るなり、彼女は飛び込んできた。それを抱き止めた勢いでくるりと一回転する。嘘じゃない——思い切り抱きしめて、確信した。

「本当にあなたなの？ 本当に？」

「うん」

「バカ！　なんで三年も……！　なんで三年も会いに来てくれなかったのよ！　ずっと待つてたんだから！　待つてたのに！　お姉さまの監視なんて簡単にくぐり抜けれるくせに！」

ひつくひつくと、しゃくりあげて彼女は泣き出した。

「分かった、分かったから」

ぽんぽん、とルイセラードは彼女の背を軽く叩く。とその時、こつん。

なにかが頭に当たり、振り返るとそこにハルヴィートがいた。

「……あれ、スティルグは？」

見ると、彼の背には誰も乗っていない。

「まさか逃げた？」

と、それは無い、と服を引っ張られた。アステイナだ。

「ジェーナがちゃんとしている。逃がしてたまるかと追いかけて行つた。——それで、そつちのお嬢さまは。まさか泣かせたのか？」

「……まあそんな感じ」

情けなく笑つて、ほら、とルイセラードは彼女の——ハルシヤの肩を叩いた。ごめんなさい、と彼女は離れ、ごしごしと目を擦る。

「街中なのにこんなことして……だめね、私。絶対誰かに見られちゃつたわ」

「大丈夫だよ、いざとなつたら逃げればいいんだから。何処に行きたい？」

訊くと、彼女は手を止めた。

「……もし行くならマティルグラスの北の端っこがいいわね、『旅行』に。そういえばどうしてこんな所にいるの？　また家出てきたの？　それとも単なるいつものぶらり旅？」

「いんや。最初はそうだったけど今は珍しく仕事だよ。——姉上とかくれんぼ中さ」

きよとんと目を見開き、彼女は首をかしげた。

「……かくれんぼ？」

「詳しくは後で話すよ。それで君はどうして？」

「あ……待ち合わせなの、知り合いの人と。もう来るって聞いてたんだけど……まだ来なくて。そうしたらふと見た所にあなたがいるんだもの、びっくりしたわ。それで、多分宿に戻ってもそこに来てくれると思うんだけど……」

と、ハルシャは、そうよ、とぱつと顔を上げた。

「何処かでゆつくりと話さない？　だつてせっかく会えたんだもの！　この状況でお姉さまがいらないなんてこと、これから先に絶対にに等しいし、絶対にきつとやつと神様が味方してくれたんだわ。ねえ、いつまでここにいる予定なの？　帰りはまっすぐウエランドルスに帰ってしまうの？」

「……それは」

真っ直ぐか、とルイセラードはアステイナの方に振り向いた。

「だと私は勝手に思っているが。——ところで紹介なしはないだろう？」

「ああ。ハルシャっていうんだ」

言つて、ルイセラードは二人を向かい合わせた。

「こっちはアステイナ。グランデイスナの内親王殿下だ」

「あら！」

彼女は声をあげてルイセラードを見上げた。

「本当に？」

「マティルグラスで偶然会つてね」

と、ハルシャはきちんとアステイナに向き直った。

「なら、ちゃんと挨拶しなければいけないわね。——お初にお目にかかります、アステイナ・フェルナンデイル殿下。いつもこの人がお世話になってます。いろいろ迷惑ばかりかけてるでしょう?」

「……はあ」

なにか違和感を感じながら、アステイナは呟いた。

なんとというか、今の台詞は友達の言う台詞じゃないような……。

それに、さっきからの会話を聞いていると、どうもただの友達同士じゃないようだ。

「とりあえず、何処かに場所を移しましょう。人目についちゃうわ。私の泊まっている宿が近くにあるからそこに行きましょう。どうせまだ今日の宿も決まっていなくてしょう? 野宿なんかだめよ、森の中なんてなに出るか分からないもの。万が一なんてことがあったら寝込んでしまうからね」

「頑張るさ」

それじゃあ行こうか、とルイセラードはハルヴィートの手綱を取った。

「今日の宿は、そこで決まりだな」

彼女——ハルシャの泊まっている宿は、すぐ近くにあった。

一階が酒場や食堂。そして、二階が宿になっている、よくある普通の庶民の宿の構造だ。マステイナの店もこういう感じだった。

だけど、ここは料理もちゃんとしてそうだった。食べてぶっ倒れるとか、不思議な味がするとか、彼女曰くそんなことはないらしい。

「でも、まさかあなたに旅仲間がいるなんて、思わなかったわ」

くすくすとハルシャは笑う。そしてテーブルの席を勧めた。

「お二人とも、お昼ご飯まだなら、ごちそうしますよ?」

と、アステイナはルイセラードを見上げた。

「そなたはどうする。私はよしておくぞ」

「どうして」

「……それは」

でも、とルイセラードは苦笑いする。

「国交を結ぶいいチャンスだと思うけど。ウェランドルスともロルディオリースとも仲良くしとけば、グランディスナの今後は安泰だと思うな」

「……は？」

アステイナはハルシャに視線を戻した。そして交互に二人を見やる。

「事情が……読めないんだが」

「そうかな。——君の身分はなに？」

「皇女だ」

「僕の身分は？」

「王太子殿下」

「じゃあ、彼女はなんだと思う？」

は、とぽかんとアステイナは彼を見た。

「なんだと思う？　って」

「黒い瞳をした、ただの普通の子が、僕のただの知り合いだと思う？」

意味有り気にルイセラードは微笑む。と、アステイナは、はっと息を呑んだ。

「っていうことはロルディオリースの皇——」

「はい黙って。その先は暗黙の了解。分かる？」

「……」

と、すいません、とハルシャは軽く頭を下げた。

「驚かせてしまってごめんなさい。でも」

そして人差し指を唇に当てて、アステイナに囁く。

「絶対に喋らないくださいね？　騒ぎになりますから」

「……それはもちろん」

「落ち着いたところで、じゃあ、なにかお昼ご飯頼みます？」

「いや、私は——」

失礼、とアステイナは席を立った。

「折角誘っていただいて申し訳ないですが、お断りさせてもらいます」

「なにか用事でも？」

「何処かに消えた連れを探してきたいので。そのついでに、ちょっと仕入れないといけない情報もありまして。——ルイセラード、そなたはここでゆっくりと昼食でもごちそうになっておけ。どうせ無一文だろう」

そう言つてちらりと見やれば、恨みがましく睨まれる。

「……酷い」

「夕刻までには戻る」

失礼しますとハルシャに一礼し、彼女は宿から出て行った。

「凜々しい方ね」

彼女の後姿を見送っていたハルシャはふいに呟いた。

「お姉さまみたい。どうしてこんな所にいらっしゃるの？」

「まあ、事情がちょっとね」

「どんな？」

「それが……まあ、なんだかややこしいことになって」

あれから無事に、姉上は保護されただろうか。

だが、かくれんぼが得意な彼女のことだ。そう易々と見つかるはずもないだろう。

「本当に……ややこしいんだよ。ほんと」

本当に、どうなっているんだか。

呆れたようについたため息に、ハルシャは首をかしげた。

ああ言つて出てきたものの。

はあ、とアステイナは重いため息をついた。ちゃんと見つかるのだろうか。長い銀髪で。灰色の瞳をしている青年は。

宿の隣にある厩の柵を開けながら、アステイナは再度重いため息をついた。

このままでは、国に帰れない。このまま帰るにしても、もし二人

が本当の本当に駆け落ちなんかしていたらもう——收拾がつかない。それでこそ、ルイセラードに頭が上まらない。ウェランドルスに頭が上まらない。

「ったく……」

ゲオルドの手綱を取り、その鬣を撫でる。

「行こうか……ゲオルド」

そこから、とぼとぼと通りを歩いて、とりあえずアステイナは広場に出てみた。そして、何処で尋ねようかと辺りを見渡してみる。だけど大体、何故兄はこの街に来たのだろうか？

それよか先に、ジェーナと盗賊の奴でも探しに行くか——と、思ったその時だった。

「号外ーっ、号外だよ！ 号外だよ！」

街に響き渡る声に、ふとアステイナは足を止めた。

「号外……？」

新聞売りの赤い瞳の青年に、人々が群がっていく。

何か、事件でもあったのだろうか。それとも、何処かで災害でも起きたのか。

と、新聞売りの青年がばら撒いた号外が、風に乗ってこちらまで飛んできて、足元にひらりと舞い降りた。

なんだろう、とアステイナはその新聞を拾う。

「……？」

「……は？」

その題名を見るなり、アステイナは言葉を失った。黒背景に白い文字で印刷されたそれは——。

そんなまさか。

——ロルディオリーズが……！

刹那、ぐしゃっと新聞を握り締め、アステイナはゲオルドに飛び乗った。

「戻るぞ！」

——こんなことが。

こんなことが、あつていいのだろうか。
彼女は元来た道を、全速力で戻り始めた。
——その新聞の裏面には気づかずに。

「七章：あの子の秘密：2」

世界中に、匿名で知らされた記事には、とある事柄が記してあった。

各国がそれに揺れたのはもちろん、あのロルディオリーズとてそれは例外ではなかった。普段はそんな号外の記事など、気に留めるような心の寛大さのない皇室なのだが、この日は国権最高峰にいる皇帝も、メアリルも、二人して眉間にしわを寄せていた。

——その記事の内容が、『気に留めざるを得ない内容』だったのだ。

そして、その日の皇帝の私室は、いつにもなく重く沈黙していた。
「……誰が喋った」

皇帝の腹心——サールス・リヴェンティ大佐の持つて来たその号外に、もう一度メアリルは目を通した。そしてくるりと裏面にひっくり返し、ぐしゃっと握り締める。

「大佐、お前ではなかるうな」

「喋るはありますがせん。こんな、忠誠を誓ったロルディオリーズを陥れるようなこと……誰がやりますか」

「言っておくが、私が言ったものではありませんからね、父上」

「そんなこと百も承知だ」

きつぱりとグローキーは断言した。「そんなことをする娘なら、先に殺している」

「私ですよ。口を滑らすよう父なら、殺して玉座を手に入れてます」

そして不敵に笑いあう双方に、リヴェンティ大佐は背筋に悪寒を覚えた。

と、でも、とメアリルはぐしゃぐしゃに号外を丸める。

「こんなこと、城下の誰が信じますでしょうね、父上」

「さあな」

「ですが」

と、大佐は二人の会話に割って入った。

「城下の反応は、『まんざらでもない』というような状況でしたが、陛下、殿下」

「それは……民は信じ込んでいるのか？」

メアリルは丸めた号外を更に堅く丸め始めた。「この——ふざけたことを」

「情報というのは、人々にすぐに浸透してしまうものです」

「ほざけ！」

メアリルの投げつけた堅く丸められた新聞の玉は、彼の額に当たった。だが、彼は痛そうな素振りも見せず、視線を逸らす。

——まったく。

軽く舌打ちし、メアリルは踵を返した。

「……頭を冷やしてくる。悪い、つい頭に血が昇った」

靴跡の響きをその場に残し、彼女は皇帝の部屋を出た。

あれから軽く昼食を済ませ、二人は二階のハルシャの部屋にいた。

「……十分経ったら起こして」

そう言っただけでルイセラードはベッドに寝転がった。

「夜、眠れなくなるわよ？」

笑って、彼女は部屋の窓を開けた。その向こうはバルコニーになっている。そこから爽やかな風が中に吹き込んできた。

「いい天気よ？ 散歩に行かない？」

「ごめん、最近全然眠れてなくて……」

久しぶりのふかふかしたベッドが、思い切り眠気を誘ってくる。

ここ最近、本当にろくに寝れていなかった。手の怪我や姉の失踪や、ジェーナとステイルグのリメンバーのことなど、出来事がありすぎた。今までの疲れが一気に押し寄せてくる。

「ちよつとだけだからね」

今にも寝そうなルイセラードを見て、ハルシャは苦笑いした。と、

その時だった。勢い良くドアが開く。

「あ……いきなり失礼、ハルシヤ嬢」

「あ、アステイナさん」

うつすらとルイセラードは目を開けた。そしてまた閉じる。

——ああ、帰ってきたんだ。

体を起こそうか。どうしようか。わがママを言えば、このまま眠りたい。

と、今回は寝ようと思ったその刹那、

「起きろ、ルイセラード！」

ぱたん、とドアの閉まった音がしたかと思うと、カツカツと足音が近づいてきた。

そしてぱしつと肩に衝撃が走る。

「痛っ……」

「寝ぼけるな！ 起きろ、兄上とジュリーナさまの居所が割れた」

「は……？」

ルイセラードは重いまぶたを無理矢理こじ開けた。と、目の前になにかをアステイナは突き出す。

「……？ なに……これ」

「外で配られていた号外だ。よく見てみる」

「——？」

ゆっくりと体を起こしてひと欠伸し、ルイセラードは眠気まなこでその記事を手にした。そしてずらつと一通り目を通していく。――が。

「これ……」

その内容に段々と寝ぼけていた頭が冴えていった。

今日未明、匿名で送られてきた情報により、ウェランドルス第一王女、ジュリーナ・クロスキーズ内親王殿下と、グランデイスナ第一王子、アルディク・フェルンナンデイル皇太子殿下が、ロルディオリーズ皇室に軟禁されていることが分かった。

その内、ジュリーナ殿下は数日前から行方が知れておらず、ロルディオリーズに人質の為攫われた可能性があり、ウェランドルス王室は警戒の色を見せている。グランデイスナ皇太子殿下に至っては、その経由は不明とされている――。

「そんな……」

「それ、なにが書いてあるの？」

「言ったのはハルシャだった。」

「なにか事件でも？」

「ハルシャ。メアリルと皇帝陛下ってなにか企んでる？」

「え……？」

「なにも企んでない？」

「……企む、って……なにを」

ハルシャは右手で左の肘を掴んだ。そしてふと視線を逸らす。

と、その時だった。

「正直に言ったらどうです？ フェイエルとシェイレルを雇って、リメンバーを集めさせていたって」

と、誰かの声がしたかと思うと、よいしょつ、とバルコニーに誰かが降りてきた。

「レイーナさん！」

「ぱあつとハルシャの表情が輝いた。」

「お久し振りです、お嬢さま」

そのレイーナと呼ばれた彼女は、そう言っただけでハルシャに笑いかけた。

夕焼け色の瞳をし、ミルクティー色の髪をポニーテールにしている。年頃は、自分たちとそんなに変わりはないだろうか。ぼろぼろの擦り切れた服に、分厚めの丈の長い上着を羽織っている。そして彼女は背に細長い荷を背負っていた。

「まあ、なにより無事に会えて良かったですよ。ほんと」

「私も！ クラルグさんは一緒じゃないんですか？」

「ああ。そこに隠れてますよ。でも、お嬢さま、なんで奴がここに
いるんですか——」

と、彼女はびしっとルイセラードを指した。

「このへっぽこ王子！」

あら、ハルシヤはルイセラードと彼女を見比べた。

「お知り合い？」

「知り合いと言うか……それなりに」

と、彼女は笑顔でルイセラードにひらひらと手を振った。

「ウィールントウールンのお姉ちゃん、ジルヘウスのバカ頭はお
元気かしら？ あれからちよつと気になってたのよ。やりすぎたか
なって」

っていうか、その口調と素振りと話の内容、もしかして——。

「お前、まさか——！」

とつさにルイセラードはベッドに立てかけてあつた剣を手にと
った。

「なにをしに来た！」

アステイナも気づいたらしく、一声叫んで剣の柄に手をかける。

「あれま、ご挨拶がそれ？ やけに物騒じゃないの」

「お前に言われる筋合いのない台詞だな、フェイエル」

「あら、気づかれた。でも言われればそうね。だけど、今日は打ち
合う気はないの。あんたがいる時点で不利だし。あたしの腕だつて
限度があるし。……まあ、クラルグなら——あんたも殺しちゃうか
もしれないけど」

彼女の声が低くなり、目つきが鋭く変わる。そして刹那、ぱつと
バルコニーに影が降り立った。

「……！」

剣を掴んだ手がその気配に体が震えた。殺気は全くないのに——。

「レイ。余計な殺人予告はするな」

そう言ったそいつの声は、低くその場に響いた。

そして、彼は静かに体勢を立て直し、腰までありそうな長い灰色

の髪をかきあげる。

冷めた、正気の見えない透き通った水色の瞳。死人のような土気色の肌。やせこけた頬。顔の左半分が、血の滲んだぼろぼろの包帯に覆われている。

その格好がまさしく、彼が“死神”なのだとその場に肯定させていた。

「それで……お嬢さまがいたら、そこに小童もいたのか」

彼は剣の柄に手をかけた。

「助太刀ならする」

「やあね、冗談よ。それに、今日はお嬢さまに会いに來ただけじゃない。……ていうか、その灰色の髪なんとかしないと、怪しまれるわよ。それ以上に気味が悪いわ」

と、彼女はバルコニーの柵に腰かけた。

「それでお嬢さま——これからどうするんです。ウエランドルスに逃亡ですか？」

「あ……お姉さまの計らいではそうなんですが、えっと……」
かりかりとハルシャは頬をかいた。

「なにせ……ルザがまた他国を放浪してるなんて、思ってたかったものですから。もう十六ですし、いい加減王城に居座ってくれているって思ってたんですけど——」

「話が早くなつたじゃないですか」

言ったのは灰髪の彼だった。

「ここで頼めばいいこと。ですが、彼らは悪人としての私たちに既に出会っている。彼らの目に映るのは、お嬢さまの友人でもなく、ただの許せない悪党にしか、私たちを見ることはできまい。そうだな、ルイセラード・クロスキーズ」

「なにが言いたい。要望なら、聞くくらいのことはしてやるけど」

「この通り」

呆れたように彼はため息をついた。「無駄だと思いますが」

「無駄だなんて、そんな——」

「残念ながら、彼の言うとおりだよ」

ルイセラードはそう言つて、一つため息をついた。

「なにを頼もうとしてるかは大かじやないけど、彼らにね、僕の友人が二人被害に遭っている。一人は両親の形見を取られ、そしてもう一人はそこにいるフェイエルに斬られた。——けど、一つ問わせてほしい。アステイナの兄上——すなわちグランデイスナ皇太子と、僕の姉上が、リメンバーを持って失踪したんだ。そしてこうやって、ロルディオリーズに軟禁されていると、記事になっている」

続けてルイセラードは彼と、その隣の彼女——レイーナに問うた。
「ウェランドルスとグランデイスナのリメンバーは、盗めと言われたのか」

「マティルグラスとイルグリストの、その次だと思つてたわ」

レイーナは軽いため息をついた。

「でも、どうやら用なしみたいね。だから、逃げなさいってメアリルは手紙で送つてきたのかしら」

「送つてきた……？」

「そう。ホルクスっていうカラス使つて、あたたちの所に手紙をね。スルリエズのラルバートにハルシャを待たしているから、そこからウェランドルスにでも亡命しなさい、ってさ。気持ち悪かつたわよなんか」

ああ寒い、と彼女は腕をさすった。

「それで、その時にあの紫と緑のリメンバーをカラスに渡したつてわけ」

「でも、なんでそんなこと」

「さあ。世界征服かしら。リメンバーって支配者である者の証でしょう？ それを他国の支配者が持つてみなさいよ。従つたように見えるじゃない」

「……言われてみれば」

ロルディオリーズの考えそうなことだ。

「それで、リメンバー盗みなんてこと」

もう一度ルイセラードは号外に目を通した。

後半の記事は全て、リメンバーとフェイエルとシェイレルのことについてだ。ロルディオリーズが二人を雇ってリメンバーを盗ませていたことが記されている。

このことがもし本当だとしたら、何故ジュリーナとアルディクがロルディオリーズにいるのか、その説明がつく。

そして気まぐれに、くるりとルイセラードは記事を裏向けてみた。すると、どうやらそこにも記事があるらしい。なんの記事だろうとざっと目を通していく――が。

「……なん……！」

さあつと顔から血の気が引いた。

――なんでこれが記事……！

と、どうかしたのか？ とアステイナが声をかける。と、次に、そういえばとレイーナはパンつと手を叩いた。

「それ、裏にとんでもない事実が」

「事実ね」

隣で彼が――クラルグが相槌を打つ。

「お嬢さま、言っておきますが我らが犯人ではありませんから。一体誰でしょうね」

え？ とハルシヤは首をかしげる。

「……なに？」

「知られてはいけない大きな秘密があるでしょう」

「え」

「誰が喋ったのか――載ってるんですよ。街中で配られていたのをレイが拾ってきたんですが、まさか我らのことだけでなく、お嬢さまとその誰かの関係まで」

ハルシヤは硬直した。

「それってまさか……」

「ええ。あなたと彼との恋仲が」

クラルグはそう言ってひょいっとルイセラードを指した。

かあつとハルシャの頬が紅潮する。

「そ、そつ、こんな所で涼しく暴露しないでくださいっ！ いじわる！ クラルグさんのいじわるっ！」

彼はそんなハルシャに、一人満足そうにくつくつと笑いだした。そんな状況でアステイナだけがぽかんとその場に立っていた。

「……あなたと彼との……なんだって？ ルイセラード——」

と、アステイナは呆然と彼を見やる。

「まさかツォグリスサーナーとか言わないだろうな」

「……それは」

明らかに気まずそうにそつぽを向いたルイセラードに、彼女の表情は一変した。

「自分の立場を分かつてるのか！」

「分かってるよ。ウエランドルス第一王子。王太子。王位継承者」

淡々とルイセラードは言葉を並べた。

「だがそなた、分かっているなら何故」

「こればかりはどうしようも——」

「ウエランドルスというのは世界の王国の中の頂点だぞ！ その国の王位継承者がそんなふしだら者であつていい訳がなかるう！ 気は確かか！ そなた、自分の責任と立場を分かっているのか！ 王子だぞ！ 王太子だぞ！ ウエランドルスという大国の王位継承者なのだぞ！ クロスキーズ家の跡取りなのだぞ！」

思いつく限りの文句をアステイナは叫び散らす。

「大バカ者！」

「わかつてるさ！」

負けじとルイセラードは言い返した。

「ウエランドルスの王子で王位継承者でクロスキーズ家の跡取り息子だつて！ それくらい、わかつていて当然だろ！」

「な……わ、わかつていて何故！」

多少気後れしながらも、アステイナは言い返した。その額にうつすらと冷や汗が浮かんでいる。

「ぶっちゃけると、全世界の現実主義者には悪いけど僕は悪いと思
つてない。だって好きなんだからしょうがないじゃない」

「ざけっ……ふざけるな！」

「別れるとか言わないでよ。別れたくないんだから」
無駄だ。

そうアステイナは踏んだ。げんなりと肩を落とし、もういい、と
かぶりを振る。

この強い眼差しに、明確な意思をしつかりと持ったその瞳に、対
抗する術がない。人はそれを開き直りとか言うんだろうけど。

「……数々の暴言、申し訳ない。自分の身分を自覚すべきなのは私
の方だ」

呟いて、アステイナはルイセラードに背を向けた。

「だが、見損なった」

これ以上逆らっても、特にはならない。

——彼には彼の、自分より上の身分と肩書きがあるのだから。
けれどそれだけ吐き捨てて、アステイナはその場から去って行っ
た。

「七章：あの子の秘密：3」

「やっぱり自然は好きだな、あたし」

言って、ジェーナは手にした焼き魚にかぶりついた。

「ん、結構いける」

「へえ」

たき火を挟んで向こう側に座っていたスティルグも、そう言っ
て焼き魚にありつく。

「まあ、悪くはないな」

「よね」

辺りはもう暗い。ぱちぱちと音を立てて、たき火の火は燃え上
がる。

すぐそこには、川が流れていて、魚はそこで取ったものだ。明
いうちは、その水色に光る水の中にたくさん魚が見えて、取っ
てみよう、取ってみようとジェーナはしきりにスティルグをせか
していた。

だが彼は、そんなことできるのかと半信半疑で、行って来い、
ただ一言、魚と水と格闘するジェーナを川原で、呆れ半分で見守
っていたのだけれど。

『お前、本当に取れんのかよ』

『任せなさい。って、取れるかどうかは分からない——けどっ』

そう言っ
て魚目がけて手を水に突っ込み、そしてその勢いで——。
ばしゃあつ。

頭からジェーナは川に突っ込んだ。

それで、見事にずぶ濡れになってしまっ
て、今は、服はたき火の傍に広げて乾かし中、代わりにスティルグのあの狐の皮衣を服代わ
りにまとっている。

これが結構、ふわふわしていて暖かい。

「野宿もいいかも。やっぱり」

そう言つて、ジェーナは魚にかぶりついた。

「でも、もうびしょ濡れはごめんだわ。服、乾いたかな」

ちよつと乾かし中の服を触ってみる。だが、まだ若干湿っていた。

「うーん……ごめんね、あつたかいの借りちゃつて」

「それ言つなら最初から川に入るな」

「だつてそんなの、取れるなら取れるつて言つてくれればいいのに」
実際、魚を取つたのはスティルグの方だった。

その場に落ちていた長めの枝を拾つて、先の方を剣で削つて、尖らす。そして、手馴れた手つきで、一気に魚をそれで仕留める。

一人前までは頑張つて自給自足。自分のメシは自分で手に入れる。

……というのが、ジルヘウスの盗賊の掟らしい。それ故に、昔はよく妹と二人分の食事を、川で調達していたのだとか。

「第一、久し振りだつたんだよ。そんなことやつてたの、数えるほどしかないしな」

「だけど、あたしが濡れる前に言つてよね。もう」

「お前がずぶ濡れになるなんて、誰が予想できたんだよ」

う、とジェーナは言葉に詰まる。

「ま、まあ……とりあえず、ありがとっだけ言つとく」

「魚、食わないなら貰うぞ」

「た……食べるわよ。あげないんだからね。絶対にあげない！」

ジェーナは魚にかじりついた。

それからしばらく、二人はなにも喋らなかつた。ジェーナは、魚の骨とひたすらの格闘。その向かいでスティルグは、ずっと、じつとたき火の火を見つめていた。

——こんな風にして食事を取るのも、もう何年振りになるだろうか。

残像が頭を過ぎつて、ぼんやりと目の前の彼女が、黒髪の幼子と重なる。

昔、ラリイナもこんな風に悪戦苦闘していた。手と口の周りをべとべとにしながら、それでも彼女はちゃんと食べて、たまにはお魚

以外がいい、なんて言っていたけれど。

そして、川でべとべとになった口の周りと手を洗って、帰りは肩車しながらみんなのいる所まで歩いて行って——途中で眠くなったのなら、背に負ぶってやっていた。

だが、もうそれも何年前のことだろうか。

まだ、その盗賊という部族にいる快樂を知らぬ、純粹な頃だったかもしれない。

「……どうかした？」

と、ジェーナの声で、ふとスティルグは我に帰った。

「なに」

「顔、にやけてたわよ」

「……嘘だ」

「嘘じゃないわよ。なんか考えごとでもしてた？」

「別に」

スティルグは川の水面に視線を移した。

「……ふうん」

ジェーナはその横顔に目をやった。なんとなく寂しさを帯びた、その表情。そして、炎の光で、その緑の瞳が鮮やかに映える。

「あのさ」

「なに」

ぶつきらばうに彼は返す。でも多分、怒ってはいない。鬱陶しいだけだ。

「違うのね」

「は？」

「あんたみたいな緑の目、見たことない。今までに緑の瞳は何度か見たけれど、なんだか光の加減で鮮やかさが変わるっていうか……不思議」

ぱくりともう一口、ジェーナは焼き魚にありついた。そしてまじまじとスティルグの瞳を見つめる。彼は相変わらず川の水面を見つめたままだ。

「……不思議ね」

さてと、とジェーナは食べかけの魚の刺さった枝を地面に突き刺した。そして広げていた服を引っ掛けて立ち上がる。

「着替えてくる。借りっぱなし悪いし。——あ、間違っても覗きとかしないでよ？」

「誰が」

「あんたよ」

それじゃね、とジェーナは木陰に走って行った。

辺りは静かだった。

気がつけば陽も落ち、一階からは騒がしい声が聞こえてくる。空を見上げれば、そこには満月と、漆黒の夜空にはきらめく星がちりばめられていた。

「……どうするの？」

言って、ハルシャはバルコニーの柵に腕をもたせかけた。

一階の方からは、なにやらがやがやと喧騒が聞こえてくる。

夕食時だ。それなりに客も多いのだろう。ああ言って部屋を出て行ったアステイナも、先程レイーナを引き連れて——というか、レイーナがちよろちよろとつきまとっているのだが——部屋に戻ってきたのをちらりと見た。またすぐいなくなったのを見ると、今頃は下で夕食を食べているのだろう。

と、でもね、とハルシャは呟いて振り向いた。

「アステイナさんには悪いけど、嬉しかったかも。けど、あなたの立場、これでまた一つ危うくなっちゃったわね」

「あの号外のおかげで、君の立場もね」

「でも、どうして漏れちゃったと思う？」

そう言って、彼女は部屋の中へ戻った。そして窓を閉める。

「誰も喋らないわよね？ 普通。知ってる人たちだって限られてるし、みんな口堅いと思うし、国家機密情報なのに……」

ハルシャはため息をつきつつ、やって来るとベッドに腰掛けた。

「こんなこと、想像もしてなかった」

「誰だって予想できないよ」

ゆつくりとルイセラードは体を起こした。

「君の所も、まさか皇帝とメアリルが喋るなんてことないし、僕
所だって、まさか父上と母上と姉上が口を滑らす訳ないし」

「リヴェンティ大佐だって、お姉さまに口止めされてるはずだし」

「ホグール將軍とシヴィット大佐だって、そう簡単に秘密を漏らす
ような人じゃないし」

「レイーナさんとクラルグさんも、絶対に守ってくれるし……」
——って。

そりゃちよつと待て。

「ハルシャ」

「ふえっ」

ルイセラードは背後からハルシャを抱きしめた。そしてぐにぐに
と頬をつつく。

「あいつら口が堅いつていう保障は？」

「あるわよ」

若干頬を赤らめ、ハルシャは頬をつつく手を払った。

「だって……あの人たちもそうなんだもの」

「は」

ぱちくりとルイセラードは目を見開いた。「そうなんだもの、つ
て……」

「私たちと一緒になのよ。お互いの一番の良き理解者なんだって。前
に言ってた」

「嘘つけ」

「私が嘘つくと思う？　今まであなたにどんな嘘ついた？」

「……うーん」

と、その黒髪に顔をうずめる。甘い匂いがした。

「……ない」

「でしょう？」

「ごめん」

「あの……ときどきするから放してくれない？」

「そうやって断られると自棄になりそうなんだけど」

「お姉さま譲りの肘鉄食らいたいの？」

「照れてる。可愛い」

「……っ」

と、その時だった。

「——！ お嬢さまに何してるのよこのろくでなし王子——っ！」
……いつの間に。

何事かと目をやった扉はいつの間にか開いていて、その向こうの廊下に息を切らしてレイーナが立ちすくんでいた。そしてその隣でアステイナがぐえっほぐおっほと思いい切りむせ返っている。

「今すぐ離れる！ とつとと離れる！」

びしつとレイーナはルイセラードを指した。

「お嬢さまに手を出すな！」

「手を出すなって……それは無茶な要求だと思っただけけど」

「無茶でも従え！」

「そりやどうか」

「とりあえず離れる！ 離れる！ 殺されたいのか！」

一つ一つの言葉がそこら中に響き渡る。

——しょうがないか。

仕方ない、とルイセラードはハルシヤを放した。

そしてベッドから降りて、部屋の隅まで下がる。

「これでいい？」

両手を上げ、なにもしませんよと涼しい顔でレイーナを見る。と、

「お前も大変だな」

ざっ、とバルコニーに人影が——屋根の上にいたクラルグが降りてきた。

「それにしても、レイ、お嬢さまの前で怒ったりして見苦しい」
と、は？ とレイーナは首をかしげた。

「どこが見苦しいっての」

「おせっかい保護者も程々にしておけ。いわゆるお前はお邪魔虫だった訳だ」

「おじゃ……お邪魔虫？」

「相手はお嬢さま。我等は従者。即座に戸を閉めればいいものを」
まったく呆れる、と彼は目を伏せ、指で額を押させた。

「もう少し周りを考えれるようになれ。もう子供じゃないんだつたよな？」

「……分かったわよ」

むすーつとレイーナはクラルグを見据えた。

と、彼は額から指を離し、そしてその手をすつと前に出したかと思つと、くいくいと指先で彼女を呼ぶ。

「ちよつとおいで」

「い」

レイーナは顔をしかめた。「あの……嫌……つて言ったら……？」
「受け付けない」

「あ……あたし今日はそんな気分じゃ——」

彼女はさささつとアステイナを盾に隠れた。

「匿つて！」

「……そういう筋合いはない」

「とりあえず助けて！」

「匿う筋合いは毛頭ない。バカも休み休み言え——」

と、その時だった。

爆発の凄まじい爆音と共に隣の部屋の壁が粉々に吹っ飛んだ。

「な……」

砂埃がその場に充満し、げほつ、と思わず咳き込む。

と、その中からヒュつとなにか影が飛び出してきたかと思つとその刹那——。

「きゃあっ！」

「大人しくしなさい！」

ハルシャの悲鳴と、知らぬ女性の声がした。

そして、ぶわっ、と窓から風が吹き込み、砂埃が舞い上がり視界が晴れていく。

と、ベッドの上には――。

「ハルシャ！」

そこには、彼女を押し倒し、首筋に剣の切っ先を突きつける赤褐色の髪をした女がいた。瞳の色は――やや明るい、桃色をしている。その長いブロンズの髪はくるりと縦巻きにされており、左耳には小さな水晶が埋め込まれた耳飾りを、そして彼女は黒衣に全身を包んでいた。

「はい周りは動かない。――でもさあ、もう少しましなやり方ないわけ？」

彼女は爆発で吹き飛んだ壁の向こうに声をかけた。と、

「しょうがないだろう。僕は爆発が好きなんだ」

そこには、薄茶色の長い髪を後ろで束ねた一人の少年がいた。ゆっくりと彼は、瓦礫を踏み越えてこちらの部屋に入ってくる。

だが、その容姿に、ルイセレードはもちろん、アステイナも目を見開いた。まず、彼は赤褐色の髪の彼女と同じような黒衣を体にもとっていた。そして腰にはやや長めの剣を携えている。

そこまでは驚くほどのことではない。

右耳には同じく、小さな水晶の埋め込まれた耳飾りを、そしてなによりも――。

右の瞳は、若草色をしていた。

――だが、左のその瞳は、鮮やかな碧眼を。

有り得ない。

「なにしに来た」

と、静かにクラルグが彼に問いかける。

「……殺し屋め」

「君に言われたくない台詞だね、それは」

彼は言って、すっと右手を差し出し、手のひらをクラルグへと向

けた。

「邪魔だよ。名ばかりの死神は、この場にいらなくていい」

瞬間、彼はにこりと微笑んでなにかを唱え始めた。言葉の途中で、ふいにぞわつと寒気がクラルグの背筋を駆け抜ける。

「お前、なにを……」

「——困るんだよ」

瞬間、彼はその場に大量の血を吐いた。

「クラルグ！」

「その調子だと、二ヶ月が限度だろうな。今まで通り生きるならば」
「な……」

膝をつき、床に手をつき、彼は咳き込む。

「ふざけんじゃないわよ！ ウェルリー・サルディナクロス！」

レイーナは槍を取り出して構える否や、床を蹴った。

「その左目、いい加減潰してやる！」

そして彼の肩を掴み、振りかざす。だが、彼は別に驚きもせずと言いつつ放った。

「この病気の進行を止める方法、分からなくなっちゃうよ？」

その瞬間、彼女の動きは止まった。

「僕を殺せば、この病気をどうやって引き起こしたかも、分からなくなるけど？」

「卑怯者……！」

震えている切っ先を向け、切り裂こうと思っても、動けない。

「それに僕を殺せば、シュレーヌが黙っていない。ハルシャ嬢の喉を切り裂かない保障なんてないんだから、気をつけた方がいいよ」

「ほざけ！」

「その言葉、そっくりそのまま君に返すよ」

刹那、キツと彼はその碧眼でレイーナを睨む。すると、突如彼女の体は吹っ飛び、壁に叩きつけられた。

「レイーナさん！」

ハルシャの叫びがこだまする。壁に叩きつけられた衝撃で気を失

ったのか、レイーナの体はずりと床に落ちた。

「……こんな」

目を見開き、呆然とハルシャはその姿を見ていた。

「大丈夫、死にはしていませんよ。手加減しましたから」

「手加減、つて……！ 放してっ、放してよ！」

「できません」

「できない、つて……！」

彼女は少年を睨みつけた。

「あなたたち、一体何者です！」

「これは失礼。私はウェルリー・サルディナクロス。そしてあなたを人質に取っているのが、シュレーヌ・フォルクスティングといいます。以後お見知りおきを」

彼はそう言つて、ふつと上品に笑った。

「このような手荒な真似、失礼とは思いますが、今日はこうするすしかなかったんですよ。なにせ、あなたを意地でも人質に取らなければ、彼は捕まらない。神出鬼没、それ故にいつ何処にいるか予想がつかない。——そうでしょう？ ウェランドルス第一王子、もと、ルイセラード・クロスキーズ」

なにを、とルイセラードはごくりと唾を飲み込んだ。

「……僕に用か」

「まあね。信用を失った君を見るのが、僕は楽しみで楽しみで仕方がなくてね。その誇りが傷つくのを、ちよつとこの目で見たくつてさ。民の信用を失った時の顔を見て、大笑いしてみたくない？」

「悪趣味だな」

言つてルイセラードは、ドアの所で立ちすくみ、こちらを見ていたアステイナに目配せした。ベッドの脇に置いてある、彼からは見えない位置に荷物と剣がある。剣さえ手中にあれば、もしかしたら対等に渡り合えるかもしれない。

だが、その時だった。

「……やめておけ」

言ったのは、気配を察したのか——クラルグだった。

「お前は……こいつには、勝てない。勝てるのは、クラウディスルグ国王、だけだ」

息も切れ切れに、彼は立ち上がった。そして剣を抜く。

「剣術と魔術、どちらが上かと言えば……魔術になる。それにこいつは、その魔術を使う奴等——碧眼の、ケイル族の長、クラウディスルグ国王に力を与えられている、見ての通りのアルシイリスだ。その碧眼は、その分け与えられた魔力によるもの。要するにこいつは、魔術を使う中では二番目に強い。白兵戦に有利なお前も、遠近戦に持っていかれては、まるで歯が立たないのは、目に見えて分かる」

と、違うね、と彼——ウエルリーは笑った。

「魔術を使わせれば、僕より強い奴がもう一人いる」

「……なんだと」

軽くクラルグは咳き込んだ。「それは、初耳だな」

「だろうよ。だって奴は作られた方ではなく天然のアルシイリスだもん」

ふっとウエルリーは笑う。と、依然ハルシャに切っ先を向けている彼女——シュレーヌもくすくすと笑い出した。

「ウエルリー、もう単刀直入に言っちゃいなさい」

「じらすからこそ格好良いんじゃないか。……まあ、相手は自分がアルシイリスだとは十中八九気づいてないんだけど」

と、彼はその場に片膝をついた。そして、すうつと息を吸って——
気に、

「——『ウエリヴェス・イア・サメスト』！」

ばん、と床に手をついた刹那、青白い光を放つ線で描かれた、なにかの円陣が一瞬だけその場に広がった。

「一体なにを……」

だが、呆然と、一体何の術をかけたのかと思ったその時だった。

——な……。

体中の力が突如、がくんと一気に抜け、ルイセラードはその場に倒れこんだ。

「かかった」

それに、してやったりと言わんばかりにウエルリーはにやりと笑った。

——なんで。

立ち上がろうと思っても、全く体に力が入らない。体を起こそうと思っても、腕に力が入らない。かろうじて指先が動くだけで、首を振ろうとすれば少し振れるだけで、他は全く動かせない。それどころか、段々と、腕が、足が、頭が重く感じてくる。

「でも、驚くほど純粹にかかるんだね。抵抗結界」

近くに来た彼はしゃがみこみ、ルイセラードの顔を覗き込む。

「びつくりしたよ。幼児並じゃん？ まるで」

「なに、を……」

「いいことを一つ教えてあげよう。これは本来、ケイル特有の魔力を一部使わせなくする結界なんだ。力には段階があつてね、僕くらいになると、高い位の術を二つ程、制御されてしまう。——だけど、まだ魔力の扱いを知らない幼い子どもは、こんな風にするりと力が抜けてしまうんだよ。私生活に力を知らず知らずの内に使っている傾向があつてね」

にっこりと笑って、ウエルリーはルイセラードの胸倉を掴み、無理矢理立たせた。

「どうして君にその術がかかったか、知りたい？」

「……ほざくな……そんなも——」

「君のその右の瞳が、青い色をしているからだよ」

言つて、失礼、とウエルリーはルイセラードの鳩尾に一発食らわせ、意識を失わせた。

そして、そのぐったりとした腕を肩に回す。

「シュレーヌ、お仕事終了だ。夜ご飯までには帰ろう」

「分かってるわよ。お腹空いて死にそう」

と、その瞬間、彼女はハルシャの口に布を当て、なにかの薬でも吸わせたのか、彼女の意識を失わせた。そして抱き上げてウェルリの方へと歩いて行く。だが、一気にその場をすさまじい殺気が駆け抜けた。

「――逃がすかよ」

言ったのはクラルグだった。

「お嬢さま、返してもらおうか」

「性懲りもないわね。寿命縮めてあげるわよ？」

「人はどうせ死ぬ。俺はそういうのはいちいち気にしない」

さあどうするんだ、と切っ先を向け、鋭く睨みつける彼に、シュレーヌもウェルリもさすがに顔をしかめた。

「……やな寒気」

それはドアの所にたたずんでいたアステイナも同じだった。なにかしなければと思い、彼女はそつと気づかれぬように、剣の柄に手をかける。だが、斬りかかろうとしても、一步を踏み出そうにも、この場に立ち込める殺気に足がすくんで動けない。

それに、――助けるどころか、冷や汗が額を伝う。

と、その時だった。

「バカだね、死神」

ウェルリはそう言って、ぼそりとなにかを唱えた。と刹那、ふわつと風が舞い上がり、その風が彼を包むように渦巻いた。

「風はものを運ぶ力。雲を動かして、波を起こさせる。そんな天の力だ。……そうそう、後ろの銀髪のお嬢さん。ウェランドルス国王並びに王妃によろしくお伝えできるかな。

『クラウディスルグが返してもらおう』と。返して欲しかったら、オルンクールへ来るんだね。――これからの時代はクラウディスルグが支配する。もう下準備は整った」

「……ちよつと待て、それはどういう――」

と、くすりとウェルリーは笑った。そしてぱちんと指を鳴らした刹那に突風が舞い、思わず目を閉じる。そして再び瞳を開くまでの、その一瞬に――。

「……消……えた」

ぱちくりとアステイナは目を見開いた。

――そんなバカな。速い。

だが、いくら見渡しても、自分と灰髪の彼とレイーナの姿以外を彼女はそこに見いだすことができなかった。

「七章…あの子の秘密…3」 (後書き)

事件起きました。(あとがき、それだけ!?)

「八章：隠された真実：1」

「……暇です」

ベッドの上にちょこんと座っていたジュリーナは、ぽつりと呟いた。

「退屈です」

なのに、相手は聞こうともしない。

安楽椅子に座り、視線は開いた本に注がれ、右手の人差し指は結われずに垂れ下がった横髪をくるくるといじっている。さつきからジュリーナはずっとその動作を眺めていたが、もういい加減きらきらと光に反射する銀髪を見るのも飽きた。

遂には、そんな紙相手になにが楽しいんだろつかと彼女は思い始めた。

かれこれ、もうどれくらい彼は読書に没頭しているのだろうか。ぶふうっと頬を膨らませても、彼は静かにページをめくるだけ。気づいてくれさえもしない。かといって、読書の邪魔は出来ない。

だが、面白くない。

と、丁度その時、コンコンとドアがノックされた。

——しめたっ！

ぱあっと瞬時に彼女の表情は輝いた。

退屈の境地から解放される。ふと見たアルディクもノックされた音の気づき、本から扉へと視線を移していた。

はあい、とドアの向こうに返事して、彼女はにこにこ顔でアルディクを見る。

「誰でしょうかねっ」

「なんだか嬉しそうだね」

と、その時だった。

『入るぞ』

——メアリルさま！

更にジュリーナの表情は輝いた。

ガチャリとドアが開く。が、中を覗くや否や、彼女——メアリルは眉をひそめた。

「……なにを尻尾を振る子犬のように……」

「なんです？」

「やけに嬉しそうに見えるんだが」

「誰かが来てくれて嬉しくて、メアリルさまだったからもっと嬉しかったんですっ」

「……」

メアリルは顔をしかめた。なんだそれはと、後ろ手にドアを閉める。

「普通私が出来たら、なにかあるなと思っていいはずなんだが」

と、不思議そうにジュリーナは首をかしげた。

「遊びに来てくれたんじゃないんですか？」

「一体あなたは私を誰だと思ってるんです」

「……メアリルさまです」

しょんぼりとジュリーナは膝を抱えた。ふと見ると、またアルデイクは読書に戻っている。

退屈と暇は大嫌いだ。眠い時は昼寝が出来るからいいと思うが、目がぼつちりと冴えている時は本当に嫌になる。相手にしてくれないと寂しくなるし、空しくなるし、泣きそうになる。昔から、言いたいことはつきり言えない。遊んでほしいのに、こうやって目の前で自分の世界に没頭されると、ねだれない。

アルデイクが読んでいた本に、メアリルは目を留めた。

少し分厚めの、表紙は茶色でしっかりとした、その本は——。

「アルデイク殿下、それ——」

尋ねると、彼は、帝王学ですよ、とすらりと答えた。

「あつたから借りました。……父上の国を滅ぼして、新しい政権を無理にでも立ち上げてやろうかと思っていまして」

「冗談を」

「半分は本気です」

「……怖いお方だな。ちなみにどのような政治を目指す？」
「議会政治を」

ほう、とメアリルは腕を組んだ。

「帝国なのに議会政治を？」

「民を政治に参加させてはいけない意義が、僕には分からないんですよ」

しおりを挟み、パタンとアルデイクは本を閉じた。

「神聖なる政治に、民の手は触れさせない。——何故です？ 国は皇帝だけでも成り立ちはしない。下に民がいてこそ、皇帝というものが成立するんです。その民を政治に参加させない意義が、私には理解できなくて。私ですね、しょっちゅう無能だとか罵られるんですけど、絶対に父上の方が今の時代には無能だと思います」

「酷い皇太子だな」

「表向き天然でも、中身は腹黒いつたらありやしません」

安楽椅子の肘掛に肘をつき、彼は頬杖をつく。

「天然で無能で良い子に見える皇子でも、実はえげつない反抗期真っ盛りなんです」

「それが理由で、スルリエズにいた」

「そういうことです」

お互いに、互いの目をみたまま視線を迷わせない。

「リメンバーを盗み出して家出なんて、我ながら良くやりましたよ—— 思い知ればいい。今まで無能だと腑抜けだと、よくぞまあ、あれだけ実の息子に言ってくれたもんです。そして、皇位は娘に—— 僕の妹に継がすと言っている。己の思想を理解してくれるというだけで、実の娘に腐った玉座を明け渡す親が何処に居ますか」

「妹思いだな。私とは大違いだ」

「そうですね」

と、アルデイクはふと視線を逸らし、再び本を開いた。

「それで、なんの用で来たんですか？ 用も無しにやって来るお方

ではないはずですよ」

「ジュリーナさまのリメンバーを渡してもらいに来た」
アルディクは眉をひそめた。

「……そのことですか」

「ああ。奪わなければ攫った意味がない」

「ジュリーナが嫌だと言ったら」

「渡してもらうまで帰らん」

と、その時だった。

「じゃあ渡しません！」

きつぱりとジュリーナは言い切った。かと思うと、キラキラと表情を輝かせる。

「メア Ril さま、帰らないでくださいねっ！ さっきからアルディクさまっただらうとずーっと本ばかり読んでちっとも相手にしてくれないんです！ 見向きもしてくれないんです！ 暇だと言っても退屈だと言っても遊んでくれないんです！」

——と。

「え」

ぽかんとアルディクはジュリーナを見た。

「気づいていなかったんですかつ」

ジュリーナはぶうつと頬を膨らませた。思わずアルディクは吹き出して笑い出す。

「なんで笑うんですか！」

「ごめんごめん。悪かったよ、気づかなくて。もう今日は本読まないから」

「本当に？」

「今までに僕が約束破ったことある？」

「じゃあ私のこと退屈させないでくださいね。暇なの大嫌いなんですから！」

「わかったよ。メア Ril 嬢、彼女に遊ばれなくなかったら今日は諦めてくださいね」

「……仕方ない」

くるりとメアリルは二人に背を向けた。そして少しドアを開けて、再び二人の方に振り向く――と。

「ウェランドルスとグランディスナも、悪くはないかもな」

え、と絶句した二人に、にやりと彼女は笑いかけた。

「この城を建て替えるだけの石が欲しいと思っただけのところだね。ジュリーナさまのリメンバーはまた近いうちに催促するでしょう。言っておくが、二度と同じ手は通じんぞ」

では失礼を、といつにもななくにつこりと微笑んで、メアリルは部屋を後にした。

「……疲れる」

怒るのにも疲れ、うなだれて、彼女は廊下の壁に手をついた。

やけに疲れた気がして、ため息をつく。大半があの手外れのせいだろうか。いや、それともあの朗らか満点少女のせいか。どっちにする、ウェランドルスが元凶なのに変わりはない。

「……くそっ」

悪態をつきながら、メアリルは、一步、また一步と壁に手をつきながら歩みを進めた。そして右手に見えた階段を降りる。

今日はもう、部屋で休もう。

こんなに気が滅入っているのは、することが何も手につかない。

よろよるとメアリルは一段ずつ階段を降りていく。そして踊り場に降り、更に下の階へと続く階段を降りようとした。だが、一步を踏み出したその瞬間――。

「あ――」

足を滑らせ、一気に彼女はバランスを失った。

真正面から階段に突っ込むと、体が倒れる。

――落ちる。

と、その刹那、ぐつと後ろから誰かに服を引っ張られ、しっかりと抱きとめられた。

「大丈夫ですか？」

「か……かたじけない」

「お体の具合でも？」

「……いいや」

と、メアリルは階段に足を着いて立とうとした。だが、立てない。
「立てますか？」

「……」

もう一度ちゃんと足を地について、立とうと試みる。だが、力が入らない。あまりに突然のことで腰が抜けてしまったのだろうか。すると、それを見てか、相手は急に彼女の体を抱き上げた。

これはいわゆる、お姫さま抱っこ――。

「ちよっ――」

「立てないんでしょう？ 宜しければ部屋まで送ります、内親王殿下」

「な――」

と、初めてメアリルは相手の顔に目をやった。

青年だった。真っ直ぐに伸ばされた、同じ長さで切りそろえられた長い黒髪。そして黒曜石のような漆黒の瞳をしている。

「考え事もほどにしないと、大怪我しますよ」

言って、彼は微笑んだ。「それとも、本当に体調が優れませんか？」

「そなた、見ない顔だな」

「エルスト・アルベリヒルと申します。以後お見知りおきを」

「誰に用事だ」

「人を探していたら、こちらだと伺ったのですけれど、行き違えてしまったようで」

「そうか」

と、情けなそうにメアリルは笑った。

「悪いが、本当に腰が抜けたようだ。……すまない」

「では、部屋までお送りしましょう」

そしてゆつくりと、一步步彼は階段を降り始め、案内すると彼女の自室の椅子までご丁寧に運んでくれた。そして、座らせたところで、彼——エルストはふと微笑みかけてメア Ril に尋ねる。

「誰か呼びましょうか？」

「……いや。礼を言う」

「いえ」

彼は依然微笑んでいた。

「でも、私が通りかからなかったらどうなっていたと思います？」

考え事ばかりして、周りが見えていないようでは困ります」

「……説教は嫌いだ」

メア Ril は不満そうにため息をついた。

「お茶でも飲んでゆつくりしていけ」

そしてエルストに目をやると、ぱちくりと彼は目を見開いていた。

「いいんですか？」

「仮にも恩人だ。無理に追い返しては、私も気分が悪い」

と、その時、コンコンと戸がノックされた。

『お嬢さま、失礼します』

そしてゆつくりと戸が開く。が、部屋の中に来客がいることに気づいた召使いの、まだ若い女性ははつと息を呑んだ。

「し、失礼しました」

「気にするな。用はなんだ」

「皇帝陛下がお呼びです」

父上が、とメア Ril は肩を落とした。そして召使いにひらひらと手を振る。

「悪いがそんな気分ではないと言っておいてくれ。それより、お茶でも入れてくれないか。——二人分」

「かしこまりました」

と、召使いは頭を下げ、戸を閉めた。

「いいんですか？ 皇帝陛下からの呼び出しを拒否して」

エルストは少々呆れ気味に微笑んだ。仕方ないだろう、とメア Ril

ルは言い返す。

「部屋に運ばせた理由はなんだ？」

「……あ」

呟いて、次に彼は吹き出した。そしてくつくつと笑い出す。

「笑うな」

「すいません」

笑って謝る彼に、メアリルは呆れてため息をついた。

「まあいい。お前みたいな奴には慣れてる」

「え？」

「……」

笑顔で言い返してきた彼に言い返す言葉もなく、メアリルはもう一つため息をついた。

「……お前みたいな奴は初めてではないのだよ」

指でこめかみを押さえ、彼女は再びため息をついた。

「八章：隠された真実：2」

——いいか。俺たちはお嬢さまの姉君にこのことを知らせに行く。レイーナの体を抱き上げ、彼はそう言った。

——下の奴らが騒ぎ立てる前に、ここを去った方が賢明だ。そしてお前はウェランドルスに行つて、国王と王妃に事の顛末を全部説明して来い。グランディスナ皇女なら、それぐらい容易いことだろう。

そしてそれ以上にも言わず、彼は窓から下へ降り、あの部屋を去った。

アステイナは彼に言われた通り、荷物をまとめて宿を出た。

野宿といえは森の中。だが、そう易々と見つかるはずもなく、その中で彼女は彷徨つていた。剣で木に目印をつけながら進んでいるので迷うことはないだろう。だが、このまま遭難していても、らちが明かない。

連れて歩いているゲオルドとハルヴィートだって、疲れの色を見せている。

——つたく。

足を止め、アステイナは気まぐれに空を見上げた。

疲れて肩が大分重い。だが、見つけなければ。と、そう思ったその時だった。

「わ、わわっ！」

突然掴んでいた手綱を引っ張られ、思わず放してしまった。見るとハルヴィートが森の中を駆け出していく。

「おいっ——」

止まる様子はない。慌ててゲオルドに飛び乗り、アステイナは脇腹を蹴った。だが、さすがと言ったところだろうか、その俊足に段々と引き離されてしまう。

——と、その行き先に、アステイナは光を見つけた。

この光は、火、だ。ハルヴィートはそれを見つけたに違いない。でかしたぞ、とアステイナはにやりと笑み、スピードを落としてゲオルドを止めた。そして、ゆっくり行こう、と彼から降りる。

「見つけたら急ぐことはない。休みながら行こう」

ぽちゃん。

石は何事もなかったかのように川の中に落ちた。

「へーたーくーそー」

「うるさいわよっ」

ステイルグの野次に言い返し、ジェーナは小石を拾うと、もう一度水面に向かって横投げした。だが、またしても一度も跳ねずに石は沈んだ。

「……どうしてよう」

「才能なしだな」

「なによそれ」

ジェーナはぷうと頬を膨らませた。と、まあ見てな、とステイルグは平たい小石を拾った。そして素早くひゅんつと横投げする。すると、石はぴちゃんぴちゃん、と水面を二回跳ねて水の中に沈んだ。

「なんでっ!」

「慣れだよ、慣れ。まあせいぜい頑張るんだな」

「せめてコツくらい教えてくれてもいいじゃない!」

「やだ」

もういいっ、とジェーナは踵を返した。そしてたき火にあたりに行く。

「なんだよ、もうおしまいかな?」

「いいじゃない別にっ」

「つまんねー奴だな」

「あんたに言われたくないわよ」

しゃがんで、炎に手をかざして体を温める。

と、ステイルグはもう一つ小石を拾った。

「それで、もうずっとこっちにいるつもりか、お前は」

「あつたりまえでしょう。あんた、逃げるかもしれないじゃない、あたしがいないと。……あ、もしかしていない方がいいと思ってる

！ 逃げようとか考えてたっ！ でも逃げたってどうするのよ！

行き場所なんてないくせに」

「行き場所がないは余計だ」

振り被って、さっき拾った小石を川に投げる。ぼちゃん、と音を立ててそれは沈んだ。

「イルグリストに強制送還は嫌だな」

と、その時、蹄の音が段々と近づいてきた。かと思うと森から一頭の栗毛の馬が飛び出してきた。

「あれっ」

スピードを落とした馬は、小走りでジェーナの方にやってきた。

「どうしたのさ」

ジェーナは立ち上がって、寄ってきた彼の鬣を撫でた。

「あんたハルヴィートでしょ？ 一人でやって来たわけ？ ん？

飼い主にいじめられでもした？ それとも、飼い主の方が家出でもした？」

「どっちも可能性大だな」

言って、ステイルグはもう一つ小石を川に投げ入れた。

「あんなろくでなしが飼い主だなんて可哀想に」

「まだそうって決まったわけじゃないでしょ。それとルイセラードはろくでなしって言うほどろくでなしじゃないと思うけどな。根性なしなだけで」

と、その時、くつくつと忍び笑いが聞こえてきた。

「根性なしとは酷いな、ジェーナ」

呼ばれてジェーナは、はっとハルヴィートの向こうに目を移した。すると、

「アステイナ！」

「探したぞ。……まったく、せめて場所くらい訊いとけばよかったな」

「それで、なに？ みんなして家出？」

「家出ではない。来た理由は他にある」

ゲオルドの手綱を放し、アステイナはぽんつと彼の背を叩いて川辺に促した。

「水でも飲んで来い」

すると、ゲオルドに続いてハルヴィートも川辺に歩いて行く。

「それでアステイナ、どうして家出なわけ？」

馬たちを眺めつつ、ジェーナは尋ねた。

「それが」

アステイナはたき火の近くに腰を下ろした。

「少しどころじゃなくて大変なことになってしまった」

「は？」

そして三人で焚き火を囲み、事情をありのままに話せば、ジェーナは固まりスティルグはぽかんと開いた口が塞がらないようだった。

「それって、あたしたちが関わることじゃ、なさそうよね」

「ああ。ウェランドルスとロルディオリーズと、クラウディスルグの問題だろうな。もしかしたらグランディスナも関わっているかもしれない」

「でも……あの子、皇女さまだったなんて」

ジェーナは膝を抱えてそっぽを向いた。

「なんか複雑。でも、これからどうすんのよ。アステイナ、お兄さん探してたんでしょう？ まあルイセラードだってお姉さん探してたけどさ。その例の号外新聞じゃ相手はロルディオリーズじゃない」

「ウェランドルスに行こうと思っている。まずはそれが筋だ。幸いホグール將軍とシヴィット大佐には面識があるから、非公式に訪れても追い返されはしないだろう。明日の朝にはラルバートを出ようと思っている。……四日あれば着くと思うか？」

「大丈夫なんじゃない？ だってゲオルドもハルヴィートも足速い

し。ま、馬の足の速さがどれが速くてどれが遅いかは知らないけど。とりあえず四日もあれば着くでしょう。っていつか四日もかからないんじゃない？」

「そうかな」

「だったら、今日は早く寝て、明日早く起きる」

言って、ジェーナは立ち上がった。

「顔洗ってくるわ。疲れたし、寝よ」

「八章：隠された真実：3」

——結果、ジェーナの言った通り、四日も日数はかからなかった。翌日、一行はラルバートを出た。そして三日目にはスルリィエズとウェランドルスの国境を越え、その日の夕方に首都へと到着したのだった。

辺りは薄暗く、町は夕食時、今行けば丁度ディナーにありつける。そんな時間に門番に理由を話して、果たして通じるのだろうか。内心アスティナはハラハラしていた。だが、ハルヴィートが一緒だったことと、彼の剣が手元にあったのが不幸中の幸いだった。しばらく待つように言われて門の外で待っていると、ホグール將軍が姿を見せた。

「これは。アスティナ殿下と、ジェーナ嬢まで一緒とは」

どうぞ、と將軍は一行を城の中へと促した。

まず、その大きな入り口から入り、中に広がっていたのは広すぎると言っても過言ではない空間だった。灰色の石レンガの壁に、火の灯された蝋燭。その壁には肖像画が飾られている。奥にはもう一つ大きな扉があり、そして広間の左右には、赤い絨毯の敷かれた階段が上へと続いていた。エントラス、ということだろうか。

そのあまりの広さにジェーナとアスティナは顔を見合わせる。

「お城って、こんなにすごいものなのね」

「グランデイスナの宮殿が家畜小屋に思えてきたぞ、私は」

ウサギ小屋とはあえて言わない。

大きな扉の向こうへと通されると、そこは先ほどの場所よりは一回り小さい広間で、奥の床より一段高くされた場所に、紅いビロードの椅子が二脚置いてあった。国王と王妃の座であろう椅子、なのだろう。奥には、左右に扉が二つ。その向こうは食堂などがあるのだろうか。

見とれていると、將軍は広間の中心ほどまでにきた所で足を止め

た。

「……どうかされたか？」

不審に思つてアステイナは尋ねる。と、来ますよ、と彼は言った。その時だった。

『そんなにむきにならなくてもいいじゃないですかー』

『うるさい！　ちよつとは黙れ！　そして止まれ！』

明らかに二つあるうちの、左の方のドアの向こうから突然聞こえた二つの違う男性の声に、ぴくつとアステイナは肩を震わせる。

すると、將軍は軽くため息をついた。

「根はしっかりしているんですけど……兄弟喧嘩中ですよ」

「兄弟喧嘩？」

「ええ。弟の克蘭ディートさまと。今度はなにが原因で喧嘩になったんだか。本当に大人気ない」

「兄弟喧嘩つて、まさか国王陛下——」

と、その時、バンっ、と左側のドアが開いたかと思うと一人の男が飛び出してきた。彼はこちらに気づくなり、あれ、と足を止める。薄い色の長い金髪を後ろで一つに束ねていて、薄い空色のシャツの上に、少しくすんだ色をした白の上着を着ていた。

「ホグール將軍、お客さん？」

「王太子殿下のご友人であらせられます。克蘭ディート殿下、あんまり国王陛下を怒らせるようなことはしないでください。血压が」「怒るなら僕じゃなくて兄上を怒ってくれよ。……でも、あのルザに友達なんて間違いないの？　大雨とか大雪とか降るよ」

ですかね、と將軍はアステイナを前へと促した。

「グランディスナ皇女、アステイナ・フェルナンデイル殿下であります」

その言葉に明らかに彼はうげつと言う表情をした。

「そうならそうと言ってよ……人が悪い」

「言つたところでちゃんとするんですか、あなたは。アステイナ殿下、堅苦しい挨拶はなしでいいですよ。ウェランドルスの国王御一

家はかしこまったのが皆様お嫌いなので」

「……想像はつく」

アステイナは克蘭ディートに向き直った。

まあ、非公式に訪れたのだし。将軍がこう言うなら、別にいいの
だろう。

「お初にお目にかかります、克蘭ディート・クロススキーズ王弟殿
下」

言つと、どうも、と彼は笑みを取り繕った。

「こちらこそはじめまして。甥っ子が相当世話になつてゐるみたいで、
友達がここに来た——なんて、兄上も義姉上も喜ぶよ。なにせ、ハ
ルシャ嬢以外の女の子って初めて」

「と、言いますと」

「ま、そんなことは気にせずに」

「なにが気にせずに……だ」

と、開け放たれた左の扉の向こうから、よろよろとした足取りで
もう一人——克蘭ディートよりは数倍眩しい色をしている金の髪
をした男が姿を現した。普段きちんと着こなされているであろう茶
色の上着はだらしなく右肩の所が腕の方にずり下がり、その黄金の
髪はぼさぼさに乱れている。

その姿を見るなり、将軍は顔を引きつらせた。

「なんつて格好をしてるんですか、あなたは」

「……年だな」

彼はぼそりと呟き、ドアの枠にもたれてるなりその場にずるずる
と座り込んだ。慌てて将軍は駆け寄り、すぐ傍で片膝を折る。する
と、

「……ず……」

「はい？」

「……みず……」

「ああ、はい。——誰か水を！」

将軍は奥の部屋に向かって叫んだ。そして、大丈夫ですか、と肩

を貸す。

「もう三十六なんですからね。三十路超えたら無理は禁物だ、と先代の女王陛下も仰っていたでしょう。ですから、本当に無理しないでください。寿命が縮みます」

「王妃に同じことを昨日言われた」

「なら、きつと今日も言われますよ」

そしてあの紅いビロードの椅子の方へと連れて行く。だが彼は、そこでいい、とその椅子の周りだけ一段高くなっている所を指差し、そこに腰を下ろした。

「……疲れた」

うなだれて髪をかきあげる。「今日の夕食はワイン三昧だな」

「少しは禁酒なさったらどうです」

「疲れた時には酒だ、酒」

「いけません。ところで、あなたにお客さまがお見えですよ。話したでしょう、アステイナ・フェルナンデイル殿下のこと」

將軍は振り返り、啞然と立ちすくむアステイナに苦笑いした。

「こんな国で申し訳ありません」

「失礼ですが、陛下で——？」

「ええ。ジェルド・クロススキー陛下です。頭などさげなくても良いですよ、しきたりとか作法とかを徹底的に無視するお方なので」

「だが——」

アステイナは將軍の後ろでうずくまる男に目を移す。

思っていたよりも若いが、国王がこんなにゼーゼーはー言っているのだろうか。そんな、なんとも言えない異文化衝撃をアステイナは感じていた。

いい、とひらひらと目の前の相手——ジェルドは手を振る。

「堅苦しい挨拶はいい。突然押しかけてくれて礼を言おう。こんな姿で申し訳ない」

「いえ」

と、水の入ったコップを持った女の召使いが彼の方にやって来た。

そしてどうぞ、とコップを差し出す。

「いい加減じつとしてください、国王陛下。それと、城内を荒らさないでくれますか？」

「物を投げてきたのは克蘭ディートだ」

一気に水を飲み干し、召使いを恨みがましく見上げる。

「私はむしろ被害者、だ」

「さようですか。でも、片付けるのは私たちなんですからね」

「私たちなんですから！」と、力強く念を押し、コップを回収するなり召使いはその場を去った。

「……まいったな」

苦笑いを顔に浮かべ、ジェルドは肩を落とした。

「誰か私を庇ってくれ」

「自業自得です」

「それで、そちらの銀髪のお嬢さんが、あの頑固じ——失礼、グランディスナ皇帝の娘さんってこと」

一息ついてジェルドは立ち上がり、アステイナに向き直った。

「ひとまず部屋へ通そう。克蘭ディート、そちらの金髪のお嬢さんを三階の手前が空いているからそこへ案内するように」

「えーっ」

「うるさい。国王命令だ。それと——」

ジェルドはアステイナの向こうにいる、がっしりとジェーナが先程から捕まえているステイルグに視線を移した。

「やあ。わざわざ捕まりに来てくれたのか？ ステイルグ・レオゼワール」

「れおぜわーる？」

ジェーナは首をかしげた。と、偽名、とステイルグは呟いた。

「前に言っただろ」

「あ」

じゃあ、とジェーナはステイルグをホグール將軍に突き出した。
「將軍さん、こいつルイセラードからのお土産。お買い得品でしょ」

「？」

「こんな少年だとは思わなかったですな」

將軍は彼の腕を後ろでひねり上げ、動けないようにする。

「っ……痛いっの！」

「それでジェーナ嬢、その王太子殿下は何処です」

「そういえばどうした。姿を見んが」

ジェルドも首をかしげる。とジェーナは、あ、と声をあげ、アステイナはジェルドと將軍から視線を逸らした。

「それが……少しややこしいことに……」

「話せ」

きっぱりとジェルドは言い切った。アステイナはちらりとジェーナを見やる。すると彼女は小さく頷いた。

「では単刀直入に」

アステイナは一息ついて気を取り直した。

「ウェルリー・サルディナクロスという少年から伝言を預かっています。クラウディスルグが預かったと国王に伝えとけ、と。どうしても取り返したいなら、ロルディオリーズのオルンクールに来るようにも言っていました」

ジェルドは目を見開き、ぱちぱちとしばたいた。

「どういうことだ？ それは」

「とりあえずそういうことです。国王陛下、なにか心当たりは」

顎に手をやり、ジェルドは目を細める。そしてしばらくして、ちつと舌打ちすると立ち上がった。

「詳しく聞かせる。克蘭ディート、そちらは任せた」

「弟使いが荒いんですけどー」

「文句言っても効果はない」

行こう、とジェルドはアステイナを促した。

「なにがあつたか、覚えている限り初めから全て話せ。わかったな」

「うわー、ひろーいっ」

広い部屋。彫刻の施された家具。天蓋のついた、ふかふかのベッド。全てが初めてで、尚且つ金持ち使用で、ジェーナはきらきらと目を輝かせた。

「あの、本当にここあたしなんかの庶民が使っていていいんですか？」
連れて来てくれた克蘭ディートに尋ねる。すると彼は、当然、と笑った。

「高貴なウィールントゥールン家のご令嬢とあらば」

「でも、あたしなんか宿屋の住み込みの端くれなのに」

「召使いに着替えを持ってこさせましょうか？　めかしこませるのが好きな奴がいますね」

「あら素敵。でも結構、このままでいいわ」

「では、またのちほど。誰かさんみたいに勝手にいなくならないでくださいよ」

「大丈夫、大丈夫。おとなしくしますから」

うふふふとジェーナは笑んだ。そして部屋を出る克蘭ディートにひらひらと手を振る。だが、彼が部屋を出る刹那、気になって彼女は尋ねた。

「あ、あの！」

「はい？」

克蘭ディートは足を止めて振り返る。「なにか不都合でも？」

「じゃなくて、えっと——捕まった罪人ってウェランドルスだったらこれからどうなるのかなって思っ」

別に訊いたってどうなることじゃないと思うけれど。

それでも、腐れ縁だし。

「さっきの盗賊くんのことなら、一日二日は留置所にでも入れられるんじゃないか思われますよ。それから事情聴取じゃないでしょうか。とりあえずイルグリスト政府に連絡を取らなければいけないから——本格的な話はそれからですけど」

「……死刑になっちゃうとかは？」

「それはイルグリストの方に訊かないと。でも、盗賊なんてイルグ

リストには五万といるから、そう易々と死刑にはならないと思われますよ。いくら彼があのだジルヘウスの若頭だったと言っても、まだ子供だし。……心配？」

「……ちょっとだけ」

と、大丈夫、と克蘭ディートは笑った。

「そこまで酷い刑にはならないよ、きっと」

彼は部屋を出て行った。

一人になって、ジェーナはふかふかのベッドに腰掛けた。真っ白なシーツの敷かれたベッドは、今まで眠ったどのベッドよりもふわふわしていて心地よい。赤と緑のクッションが並べて枕元に置いてある。

赤い方のクッションを抱いて、ジェーナは横になった。

横になると、すうつと眠気が襲ってきて、耐え切れずに目を閉じる。

「……せこいわ、ルイセラード……」

——一方。

アステイナから、旅路の全て話を聞き終わったジェルドは、テーブルに頬杖をついて考え込んでいた。クラウディスルグが……クラウディスルグが……としきりに呟いては、ジェルドは指でテーブルを叩く。そのテーブルの上には、空になったカップが二つと、例の黄金の剣が置いてあった。

「……とりあえず、ご苦労だった。わざわざありがとう」

「いえ、陛下」

「娘と息子がグランディスナに迷惑をかけて申し訳ない。だが、私も少しやりすぎたな。ジュリーナのことなんだが、十八というのはそろそろ、嫁入りの話があってもいい年頃だろう。……泣きながら嫌だと言っていたのをまともに受け止めずに、無理矢理に縁談を押し付けた」

「私の兄上の方が百倍——いいえ、無限大に悪いです。こちらこそ申し訳ありません」

頭を下げると、よしてくれ、とジェルドはため息をついた。

「実を言うと知らなかったよ。シヨンズルグルスのメルナ・レシュリーカ姫以外に友達がいた——それも男友達がいたなんてことは。気を遣わせていたのかもしれないな。あの問題児のこともある。ジュリーナもあれで姉だ。そこら辺しっかりしているのは当然かもしれない」

と、その時だった。

「ジュリーナは多分、あなたに叱られなくなっただけです」

鈴の転がるような声がして、アステイナは、はっとドアの方へと目を向けた。

そこに一人の女性が立っていた。後ろで青のリボンに結わえられた淡い金色の横髪に、淡い青のドレス、そして肩には白い肩掛け。いやそれよりも、アステイナは彼女の声の綺麗さと、容姿の美しさにすっかり見とれてしまっていた。今まで見た女性の中で、絶対に一番綺麗だ。優しそうな雰囲気、整った顔立ち。

自分も女なのに、つい頬が熱くなる。誰だろう。

「突然お邪魔してしまってごめんなさい」

彼女はそう言ってやわらかく微笑んだ。

「あなたが噂のアステイナさん？」

「え……あ、はい」

「うちの子が随分とお世話になったみたいで、ごめんなさいね」

がん、と頭に衝撃が走った。その言葉で全てが分かった。

「王后陛下……キャルリアローザ陛下でございますか」

思わず席を立つ。だが、いいのよ、と彼女は座るようにアステイナを促した。いいのだろうかと戸惑いながらも、アステイナは椅子に腰を下ろす。

と、ジェルドが言った。

「皆そなたのことは知っている。挨拶は省いていい。それで前、いつからそこにいた」

「いつ、って……今、さっきです」

彼女は部屋に入り、テーブルにティーセットの乗った銀のトレイを置いた。そしてカップにお茶を注ぐ。

「王妃が自分で茶を入れるな」

「召使いたちに聴かれたら困りますでしょう。それで、ジュリーナは多分、あなたに怒られなくなかったんですよ。ハルシャさまのことでいつもルザが貴方に怒られてるから」

「何故そう思う」

「母親ですもの」

にっこりと彼女は笑った。

「それで陛下、また克蘭ディートさまと喧嘩したんですって？

筋肉痛でよろめくのはよしてくださいね、明日も謁見が待ってますから」

「わかってる。——王妃」

「はい？」

「……腹を括れ」

なぜです？ と彼女は首をかしげた。ジェルドはカツカツと爪で机を叩く。

「先程アステイナ嬢からなにがあつたかを全て聞いた。どうしてあれだけが帰ってきていないか、その理由がはつきりわかった」

「はい？」

「——奴が出てきた」

苦味を漬したようなジェルドの表情に、彼女はまさかと目を見開いた。

「……へい、か……？」

「最悪だ」

「そんな——！」

と、彼女はくるりと踵を返し、部屋を出て行った。

「王后陛下……？」

「アステイナ嬢」

「は、はいっ」

呼ばれてアステイナは慌てて返事をした。と、ジェルドに真っ直ぐ目を見られる。

「今から話すこと、誰にも喋らずに墓の中まで持っていくと誓うか」
「は、墓の中……ですか？」

「いずれあいつにも話すことだ、もう全てを隠す必要もないだろう。ホグル將軍とシヴィット大佐がシューレゲンジュナートに帰ってきた時、話を聞いた。王太子殿下に良いご友人ができた——とな。これから先、あいつは随分と苦しめられるかもしれない。そんな時、道標を作ってやってはくれないかと私は思う。だが口を滑らせた時、グランデイスナが滅びると思え」

「……そんな」

アステイナはごくりと唾を飲み込んだ。

「そんなこと……私には守りきれぬ自信が……」

「いや、そなたなら守れる。信じられて、それを裏切りはしないだろう？」

こくり、とアステイナは頷いた。それならば上等だ、とジェルドは笑った。

「話しそうになったら、本人に愚痴ればいい。ただそれだけの話だ。私はそなたを信じて、この話をする。だから、それを決して裏切らないでくれ。——わかったな」

——それって。

多分、今からなにか重大なことを話すのだろう。それこそ、国に行く末を左右するような。それを、私を信じて話してくださる。ならば、こちらもそれに報わなければならない。

アステイナはぐつと覚悟を決め、頷いた。

「墓の中だろうが何処だろうか、持って行きます。——話してください、国王陛下」

「八章：隠された真実：3」（後書き）

折り返し地点です。（え、それだけ？）

「九章：偽られた碧眼：1」

意識が戻り、最初に気づいたのは、そこにハルシヤがいるということだった。ぼんやりと瞳を開くと安堵した彼女の顔がそこにあった。

「気がついた？」

「……うん」

どうやら彼女の膝の上に頭が乗っかっているらしい。

「目覚めないかと思っちゃったわ」

良かった、と彼女は一息ついた。

「僕は……」

体を起こして、辺りを見渡す。床は石畳。苔の生えたボロボロの木の扉が一つ。そこに作られた、小さな格子窓。石畳の石と石の間からは雑草が伸びてきている。

どうして自分はこんな所にいるんだろう。ぼけっとする頭にそれが浮かび、記憶を辿って理由を見つけようとしたその時だった。なにか思い出したくないものを思い出しそうな嫌な予感がして、一端ルイセラードは思考回路を停止させた。このまま思い出さない方がいいようなそんな予感が――。

「大丈夫？ もうちょっと横になる？」

そうハルシヤは彼に問いかける。

「……いや、大丈夫。怪我とかない？」

「なんともないわ。それよりも……どうやら閉じ込められちゃったみたい」

「え？」

辺りを改めて見渡すと、明らかに壁に囲まれている。鉄格子のついたこの扉も含めて考えると、どうやらここは牢屋らしい。今が昼なのか夜なのか、朝なのかさえもわからない。完全な独房だ。

「扉、開かないの？」

「がっちりと施錠されちゃってるわ。びくもしないの。完全に閉じ込められちゃった」

「参ったな。なんで——」

と、その時、ガチャリと牢の鍵が開けられた。そしてキイと音を立てて扉が開く。

「おはよう。やっと起きたね」

こちらを覗いたのは、深く鮮やかな、海のように青い瞳をした一人の男だった。瞳よりも深い色をした、群青の衣に身を包んでいる。ゆるやかに波打った長い茶髪は、腰の辺りまで伸びていた。

「お久しぶりですね、ハルシャ・マディスリート内親王殿下」

「え……」

ぱちくりとハルシャは目を見開いた。「どうして私のこと——」

「お忘れですか？」

ハルシャはぱちぱちと目を瞬いた。そして、あつ、と声を上げ、言葉を失う。

「……ハルシャ、知り合い？」

ルイセラードは尋ねる。すると、彼女は瞬時にこちらを盾に、肩越しに男を見上げた。

「クラウディスルグが一体なんの用です！ イルゼル・レステアウエール陛下！」

「——え」

ルイセラードは男を見上げた。「……それって……」

「君とは初めてだったかな。——内親王殿下、覚えていてくれて光栄です」

「なにをしに来たんです！」

ハルシャは叫んだ。「ロルディオリーズを滅ぼそうとか、そんなこと現実にできるはずありません！ お父さまとお姉さまが許すもんですか！ 絶対に許さないんだから！」

がっしりとルイセラードの肩を掴み、ハルシャは警戒心むき出しで男を睨み上げる。

「まあ落ち着きたまえ。今はそっちの彼に用があつて来た」

男はルイセラードを見てふと微笑む。

「なるほど」

「……は？」

「説明は後回しにしようか。話せば長い。……殿下、しばらくの間彼を借りたいのだが」

「嫌です！」

「私が彼を殺すとおもひか？ そんなことはしない。生きていてもらわなくては困る。なに、すぐ返すとも」

怪しげな素振りも見せることなく、相手はにつこりと笑う。

大丈夫だよ、とルイセラードは肩を掴んでいたハルシャの手をそつと放した。

「殺されやしないさ」

「戻ってくる？」

「戻ってくるよ。待つてくれたら戻ってくるから」

行きましよう、とルイセラードは立ち上がる。

「それで、何処まで行くんです？」

「それは行つてからの楽しみだ。なに、悪い場所じゃないから安心していい。——少しばかり辺鄙な場所だが」

彼に促され、牢の外へ出ると、すぐそこに緑に濁つた水路があつた。日の光が一つもないことから、ここはやはり地下らしい。そして通路の右手——更に奥へとイルゼルは進んで行つた。その波打つた髪が、歩く度にふわりと揺れる。

「……何処へ行くんです」

「そうだな、もう隠すこともない。ここはロルディオリースのオルンクール城の地下だ」

思わず足が止まつた。

「……っていうことは……」

だが、イルゼルは待つてくれずに一人歩いて行く。慌ててルイセラードは追いかけた。

「どういうことですか」

「このすぐ上には、君の事をおそらくこの世で一番嫌ってるであろうメアリアル殿下もいらっしやる。ときに、何故ロルディオリーズだと思っ？」

「……さあ」

「まずロルディオリーズを手に入れる。そうすれば、広大な領土が手に入る。帝国軍の新鋭部隊——銃撃隊も完成したらいいではないか。ウエランドルスとの戦争に備えたものらしいが、これに目をつけないわけではない。——肥やさせて、食う」

「そう簡単にいくもんですか」

だが、それはどうか、とイルゼルはくすりと笑んだ。

「皇女が、宿敵ウエランドルスの王太子と通じているなんて民はどう思う？ 不満多発、一部暴動、放っておけば、もしかしたら共和制になるかもな。そこに、援助という形でクラウディスルグが首を突っ込む。地位が見事に逆転してくればこっちのものなのだが」

「——あなたなんですか」

足を止めると、今度はイルゼルも足を止めた。

「あの号外を撒き散らしたのは」

「……秘密というのは、いつか漏れる。そういうものだ」

「はぐらかさないでください。僕と彼女の身内は誰も口を割りません。その特殊な、他の民族にはない魔術かなにかで情報を手に入れたんでしょう」

「気に入ったよ。思った通りの切れ者だ」

と、イルゼルは歩き出した。

「確かに私が根源だ。ウエルリーに真意を探らせ、彼に許可を与えた。彼はどうもお前が嫌いらしい。——彼の生家であるサルディナクロス家は、由緒あるローゲル・イートレス王国の公爵家だった。だが、革命が起き、貴族狩りに彼の家も遭った」

「……貴族狩り」

ルイセラードは眉をひそめた。

聞いたことがある。王政に不満を持った民衆が、亡命しようとす
る貴族たちを襲い、皆殺しにするという――。

「亡命の道中、民に襲われ、海路で密入国、一人クラウドイスルグ
に逃げ込んで、首都アーレルデンバーで行き倒れていたのを私が拾
った。この世の全てを抹消したいというのが滲み出た若草の瞳に、
魅入られたんだろうな――。シュレーヌの方は、自分から雇ってく
れと言ってきた。彼女もまた、ウエルリーと同じ被害者だった。だ
から、なに一つ苦勞せずに贅沢な暮らしをしているお前たちが気に
食わない。特にウエルリーの方は相当だな。……恨めしく思うか？
そんなことせずに、そつとしといてくれれば良かったのに、と」
「……」

無言で睨みつけると、くすくすと彼は笑い出した。

「だが、噂はいつか漏れるものよ。恨むなら恨め。判断を下したの
はこの私だ」

所々ランプで灯りの灯された通路を歩いて行く。足音だけがその
場にかツカツと響き渡り、ルイセラードはその音に神経を集中させ
た。

――こんなこととして、一体なんになる。

そして、しばらくすると、行き止まりに行き当たった所でイルゼ
ルは足を止めた。壁にかかったランプを一つ失敬し、その壁を照ら
す。

よく見ると、そこになにかの円陣が彫られていた。

「一つ教えておこう。これは、術者本人にしか開けないようにした
隠し扉だ。子供がよく宝物を隠す場合に使う。金庫などにも多い」
行き止まりの壁の左側を押すと、鈍い音を立てて、扉のように壁
が開いた。イルゼルは一人中へと入り、ルイセラードを中へ通すと
その扉を閉める。とたんに中はランプの灯りだけで灯される状況に
なり、微かに照らされた階段は、終わりがないように思えた。

その階段を降りていく。

そしてもう、いい加減足が疲れて来た頃、やっと階段が底を見せ、

そこに降り立つと目の前にまた壁があった。イルゼルが押すと、それはまた鈍い音を立てて開く。これには術はかけていないらしく、円陣は見当たらなかった。そしてまた彼は、ルイセラードを先に通してから自分も中へと入ると、その扉を閉める。

中はなにも見えず、以前真っ暗で、ランプの灯りだけが頼りだった。

「何処なんです、ここは――」

と、イルゼルはなにかを唱え、ランプを目の前にかざすと、ふっと一息吹きかけた。刹那、ぼぼっと次々に音を立てたかと思うと一気に灯りが点り、ここがどんな場所かが明らかになる。

そこは、広い一つの広間だった。床や壁、天井までもが黒曜石のような石でできており、正多角柱のような空間ができて上がっている。壁に開けられた小さな半円の穴に蝋燭が置いてあり、灯りはそれに点っていた。

「ここは、私自信は『銀翼の間』と呼んでいる」

こっちだ、とイルゼルは指でくいくいとルイセラードを招くと、広間の中央に歩いて行った。そして真下の床を指差す。

「見てみる」

指差されたその床を、ルイセラードは見下ろした。

真っ黒だと思っていたその床が、そこだけガラスのようで、その奥に一本の剣が横たわっていた。黒い中に浮き上がる銀色の柄と、白銀の刃。

「これは……」

「昔、クラウディスルグに強大な魔力を持った賢者がいた。その賢者は己の死を一週間前に悟り、その膨大な魔力を己の剣に封じ込め、この場所を作らせ、その剣を封印したという。――古代の地図ではここはクラウディスルグの領土だった。そして、三百年前の世界戦争でここがロルディオリース領となると、この地下を利用したオルンクール城がこの場所に建てられた。クラウディスルグの紋章が銀翼の鷲なのは、ここから来ている。今では言い伝えだと民間では言

われているが、王族の中では真実として受け継がれてきた。……ときに、理由はわからないが、年々私の力は衰退している。今ではケイル族のリメンバーの力を借りているのが全てと言っても、過言ではない。そこで目をつけたのがここ——というわけだ」

ルイセラードはその場に片膝を折り、床を覗き込んだ。銀の鷲が施された柄よりも、地中に埋め込まれた白刃の方が自分を惹きつけて放さない。見入っていると、銀というよりも、何処か青白いような印象を受けた。

「……ケイル族の魔術っていうのはなんでもできるものなんですか」「いや。全ての生き物の命を滅ぼすことはできても、作ることにはできない。ある程度命を永らえることはできるがな」

「要は人間と同じ……ですか」

すつと床に触れる。固く冷たい床の奥にある剣は、どうやったら取れるんだろうか。

——と、一瞬、まるでそこが液体になったかのように、指が沈み込んだ。

え——。

手を引っ込めて、もう一度触れてみる。だが、そこは元の通り、固く冷たい床に変わってしまったていた。

あれ。

「どうかしたか」

「……いえ」

首を横に振って、ルイセラードは立ち上がる。

「それで、僕を呼び出した理由はなんです」

「——そうだな、いい加減本題に入ろう。お前自身がツォグリスサナーでいてくれたおかげで、随分と手間が省けた。でも、自国の姫君でも美しい人はたくさんいるだろうに、何故よりによって彼女を選んだ？」

「嫌味ですか」

「ウェランドルスの民全部を敵に回してしまうはずだ。それにそれ

を黙り続けるというのは、皆を騙し続けるということだろう。それでも、彼女でなければいけなかった、か」

「……なにが言いたいんです」

と、イルゼルはルイセラードにくるりと背を向けた。

「私もツォグリスサーナーだったのにな」

——は。

呆然としていると、昔のことだが、とイルゼルは自嘲した。

「不思議なものなのだよ、世の中全てを敵に回しても、彼女でなければいけないと思ひ込む。……その彼女は、宝石のように綺麗な黄色の瞳をしていた。陽光に光る金色の髪は眩しく、触れれば壊してしまいそうな可愛らしい白い手に、優しくやわらかな声を持ってた。……初めて彼女をシュレーゲンジュナートで見かけた時、自分は夢を見ているんだろなんかなんて思ったものだ。女神が舞い降りたんじゃないだろうか、とな」

「シュフル族の女性……だったんですか？」

「ああ。お前もよく知っている」

「……はい？」

「当時、彼女は私にこう名乗ったな。——キャルリアローザ・エルステイン、と」

は。

「……って、待つ……冗談でしょう!」

「冗談なものか」

「母上がツォグリスサーナーだったなんて僕は知らない!」

「そんなもの、誰にも言えないだろう。お前ならわかるはずだ」

と、イルゼルはこちらに向き直り、懐から短剣を取り出すと、ルイセラードの布の巻かれた右目にすつと切っ先を向けた。するどい眼差しが身を貫く。

「お前は既に、恋人のことで民衆を騙している。だが、実はもう一つ騙していることがあるのだよ。ウェルリーから聞いたはずだ、その右目のことを。——ジェルド・クロスキーズ一人の意見に翻弄さ

れるな。隠し続けて一体なんになる。それを隠し続けるということ
は、民を騙し、欺くということだ」

「……な……にを、戯言を……」

「戯言かどうかは確かめてみてから言うんだな。お前はクロスキー
ズ家の者でなければ、純粹なシュフル族でもない。むしろ、この世
にいてはいけない一族の端くれだ。だが、私は歓迎する。何故か？
お前がレステアウエル家の血を引いているからだ。そんな偽善
染みた布など、切り刻んでしまえ」

そう言ってくるりと短剣の切っ先を自分の方に向け、ルイセラ
ードに差し出す。そして彼は、にわかに笑んだ。

「……お前は、私の子だ」

「九章：偽られた碧眼：2」

「……冗談……でしょう」

ルイセラードは一步退いた。「そんなバカな——」

「知らされていないだけだ」

「嘘だ、僕を陥れようとそんなでたらめを」

「少し聞け。こんなこととしてすまないとまず謝っておく。そして少
しでいいから耳を貸せ。——お前を連れてこさせたのは、私の血族
だからだ。血統から言えば、お前はこちらの人間に当たる。血の繋
がっていない王族にいても、本当に玉座が継げるとは限らない。そ
んなあやふやな未来を夢見るよりも、現実を見た方が確実だろう。
ウェランドルスに戻りたいというのなら戻ればいい。今のこの帰
ればどうなるかくらい、わかるだろうが。どうなると思う」

「……それは」

「いつも通りに行くとは思われないだろうな。何故ならお前は、現
在一番民の反感を買っている人物だからだ。それに、彼女のことは
どうする？ お前の身は確かに無事かもしれないが、彼女はお前よ
りも数倍の反感を買っていることになる。……それでも彼女と別れ、
帰るのなら帰ればいい。こうしたのは他ならぬ私だからな」

イルゼルは短剣を引っ込めた。

「彼女の身の安全は保障できないが」

「……それが狙いだっただんですか」

そんな風にして、仕向けて。だから、言いふらしたのか。

「こんなこととして楽しいですか。僕たちを陥れて、国を傾けて」

「ああ。これは復讐だからな。こんな風に世の中をかき回したのは、
長年クラウディスルグに不利な地位を強いてきたロルディオリース
への復讐だ。クラウディスルグの国内がどんなものかお前は知って
いるか？ ほとんどロルディオリースの侵略地と化している、その
状況を打破するにはこうするしかないのだよ。アーレルデンバーの

街もかつての活力はもうない。隣国のジロリアーナ、ローゲル・イートレスとの国交が唯一の慰めだ。……だが、それでも海の向こうの島々には物資が十分に行き渡っていない。国王はこの私だ。私がなんとかするしかない。——その結果、この道を選んだ」

「……」

ルイセラードは唇を噛みしめた。

「十年前に停戦条約が結ばれたが、ロルディオリーズは領土を手放さない。クラウディスルグを格下と決めつけ、まともな待遇をする気配もない。段々と国が傾いて、ぼろぼろの満身創痍になっていくのを見るのに精神的に限界が来たのか、条約が結ばれてから三年後に私の父は死んだ。後を追うように、母上も、私の妃も死んだ。はやり病に効く薬も手に入らないせいで、兄も、妹も弟も死んだ。残されたのは結局私だけだ。——この状況で他にどうしようと？ 残されたのはこのままでは未来のない貧しい国と、貧困に喘ぐ民衆だけだ。私の頭にはロルディオリーズとウェランドルスという大国の侵略以外に思いつかなかった」

「そんなもの……！」

無茶だ。第一力が違いすぎる。ロルディオリーズとウェランドルスを敵に回すなんて、そんなものは自殺行為だ。齒向かえば、父は絶対に黙ってはいない。皇帝とメアシルも、黙ってはいない。

「……だがな、無茶でもやるしかないのだよ」

イルゼルは呟いた。

「それに、私は切り札がある」

「切り札？」

「魔力と、お前だ」

がしつとルイセラードの肩を掴み、イルゼルはなにやら唱え始めた。

——なにかの呪文？

肩を掴んだ手を振り払おうとする、だが、

「っ……」

石になつてしまつたかのように、まったく腕が動かない。

『フェル・ア・ゲルベリーオ、トゥルエス・ア・シルヴィリアード、トゥルエス・ア・プフェルエワート（古の賢者よ、真実を映すその白刃よ、偽りのない泉よ——）』

と、ぐらりと足元が揺らいだ。

『メルノリー・オ・リアティズム！』

「！」

一瞬だつた。

急に足が沈んだかと思うと、周囲から闇に取り込まれ、視界が真っ暗になつたかと思うと急に呼吸が苦しくなつた。冷たい。目を開いて見ると、空気の泡が上へと昇って行くのが見えた。

——水の中……？

その水の泡だけがきらりと光つた。だが、息の苦しさが限界に達して、残つた息を一気に吐き出してしまふ。

溺れ死ぬつて、こんな感じなのかな。

ぼおつとしてきた頭がただ冷静に、そんなことを考えていた。

やがてうつすらと意識が遠のいていく。体はどんどん沈んでいく。

——殺す気、だつたのか。

まいったな、ハルシャを待たしているのに——。

——？

目を開けると、部屋の中にいた。ふわふわのベッドの上に寝転がり、ぱつと目に入つた窓のカーテンは閉め切られている。辺りはおかげで薄暗い。

ベッドを見下ろすと、高さがある。そこからシートと共に滑り落ちるように下に降りて、そのままずるとシートを引き摺り、扉の前までやって来る。

届かない取っ手に精一杯手を伸ばして、部屋の扉を開けた。そして次に廊下を右に歩いて行き、もう一度背伸びして、なんとか隣の部屋の扉を開ける。

『……あら』

部屋の中、一人ぼつんと椅子に腰掛けて白いハンカチに刺繍をしていた、金の髪をした彼女は、そう言つて手に持った一式を座ったまま傍のテーブルの上に置き、おいで、と両手を広げた。おぼつかない足取りで駆けて行き、ふわりとしたスカートを掴んで顔を埋めると、聞きなれた優しい声が降ってくる。

『支度をしましうね』

そして精一杯めかしこまされ、髪を整えられ、その手によって右の目に布が巻かれていった。

変な感じがする。嫌だ嫌だと思つても、彼女の手は止まらない。

『病気で、苦しい苦しいつてなつてね、お日様の光が嫌いになつてしまつたのよ』

言い聞かせるような彼女の口調に、言葉に、違和感はない。

そうして連れて行かれたのはバラの木のある庭で、見上げた隣には彼女がいた。そしてもう一人、長い金の髪を持った若い男が、咲き誇った紅バラの花びらを指でなぞっていた。

そして彼は、ぼつりと言う。

『……行こつ』

——気がつくと、真つ暗闇の中に自分は横たわっていた。

死んだんだろうか。

いや……夢を見ていた。

うんと幼い頃の、もう覚えていないような、長年封じられていた記憶だと目覚めてみて初めてわかった。

確か自分は一時期、母と二人で、何処かの屋敷で暮らしていたのではなかったか。

カーテンの閉めきられた薄暗い蝋燭の灯りだけの家で――。

理由はわからないが、母と二人で離れて暮らしていて、父とは、その屋敷の庭で初めて会つたのだ。右目にこれが巻かれたのは、その時が初めてだった。

初めて会った父の雰囲気はなんだか怖くて、だから、ずっと自分は母の傍を離れようとしなくて——そして王城で暮らすことになって、そこには二つ年上の姉がいて、祖母がいて——。

と、その時だった。

『……覚えていないことが一番の罪だと言っ』

ふっと風が起きた。とつさに体を起こして辺りを見渡す。だが、闇だけでなにもない。

「誰……」

『お前が見たものは、なんだった？』

声はそう尋ねる。

『どちらに進んでも暗闇という道で、どちらに進もうかお前は迷っている』

少し迷ってから、こくりとルイセラードは頷いた。

どちらが良いのか。

どちらも良くはない。どちらも暗闇ばかりが見えてくる。

——どちらに進めばいい？

『悩まずに自分に訊けば、おのずと答えは出るだろう。暗闇を作り出すのは光があるからだ。なにも悩むことはない』

受け取りなさい、という声が聞こえたかと思うと、闇の中に白銀の一本の剣が浮かび上がった。ゆっくりとそれは降りてきて、指先で触れると、吸い込まれるようにふっと姿を消した。

「……？」

『セーアレスト・オヴェル——全てを解き放ち、守るべき時が来た時、お前は一度全てを失うだろう。だが、風に加護が、きっと全てを良い方向に進めてくれる』

刹那、ぐらりと視界は歪み、体が倒れると同時にぶつりと彼の意識は途切れた。

次に目を覚ますと、自分は鋭く冷たい感触のする床の上に寝ていた。体を起こし、ふと目に入った床の奥に浮かび上がる一本の剣。

だが、その剣にあの青白い雰囲気は見られなかった。

「おかえり」

顔を上げると、すぐ傍にイルゼルが立ってこちらを見下ろしていた。

「良いものは、見れたかな」

「なにを――」

「記憶だ。……良い証拠になったろう。これでお前の罪は一つ、消えた」

――覚えていないことが、一番の罪――。

ふと頭の中をその言葉が過ぎった。

「……ええ。見ました」

立ち上がると、しゃきつとしろと言うが如く軽く背を叩かれた。

「戻ろう。彼女が心配する」

「……そうですね」

「……あれは、私の子でないのだよ」

「は？」

不躰にもアステイナはぽかんと口を開けて聞き返した。はっと己の醜態に気づき、彼女は深く頭を下げる。

「あ、す、すす、すいません！」

「いや。呆然とするのもわかる。……夢みたいな話だろう、そなたにとっては。幾度となく思ったよ。……奴の、イルゼル・レスデアウエールの影がちらつく度に」

はっとアステイナは彼を見た。ジェルドは自分を嘲笑う。

「いっそ、殺してしまいたいと」

「は」

「事故に見せかけて死んでもらえば、全てが振り出しに戻る。あいつが生きているせいでこんなことが起きて、彼女はまた苦しんで、私も既に精神的に限界だ。こんなこと言えばホグール將軍に怒られるが、私は何度も殺そうと思ったことがあるのだよ」

「……彼を、ですか」

「ああ。私はそれでも、あれを後継ぎとして育てて来た。あれは役立たずでもなければ、無能でもない。問題児ではあるが、誰よりもシュフル族の精神をまっとうしている奴だと思っている。聞きわけの良い、素直でいい奴だよ。一つを除いては、な」

「——ハルシャ嬢」

ぽつりとアステイナは呟いた。

「わかつてはいるんだ、私も、周りも、あれも。だが、あれは少し独りになりすぎた。だから、ハルシャ嬢一人に依存することを、私も王妃もジュリーナも、ホグール將軍とシヴィット大佐も、この城の召使いの誰も、頑なにだめだとは言えなかった」

「それでもお言葉ですが、私の父は、皇族だからといって許されることはなに一つないと言っていました」

だから、あんなにも兄の考えを否定するのだけでも。

「……もちろん、グランディスナとウェランドルスは違いますけれども……」

「いや、その父君のお言葉は正しい。あんまり甘やかすんじゃないかな。つたな。それと——アステイナ嬢、あの盗賊の若頭をどう思う？」

「と、言いますと」

「ジルヘウスのスティルグ・レオゼワールというのは、腕利きの剣術の使い手だと聞く。二本の剣を操るのはジルヘウス特有の剣術、このまま幽閉しておくのは、使える手駒を使わずして終わることになると思うのだが。……下手すれば戦闘になりかねないからな。一応軍をロルデイオリーズとの国境付近に配置はする。なにせ、クラウディスルグは本気で戦争を仕掛けてくるつもりらしいからな」

「は？」

「グランディスナはウェランドルス側に回ることにして、異存ないな」

「私一個人の意見として、今回だけならば、異存はありません。同盟を求められるのならば父に直接話を」

「……ああ。父上はお元気かな」

「はい。相変わらずの頑固じじいですが」

そう言っふと微笑んだアステイナに、ジェルドもまた笑った。

「すまない」

「いえ、事実ですから。……お言葉ですが、これからウエランドルスはどうするのです？」

「明日、軍を国境へ送るつもりだ。指揮官はホグール將軍故に、心配は要らないだろう。そなたは先にロルディオリーズに入って、自分の思うようにしろ。戦争になった場合は、責任は全て私が取る」

「承りました」

席を立ち、頭を下げる。

「陛下のご期待に沿えることができるよう、全力を尽くします」

「相手が望むなら、連れを連れて行け。少年の方には、私からシヴィット大佐に話をしておく。なに、ウエランドルスに身柄を拘束される身だ、逃げることはしないだろう。明朝、準備が整ったら発
て」

「はい。——必ずお連れします」

「九章：偽られた碧眼：3」

「……雨、か」

ざあざあという音に、メアリルは憂鬱そうにため息をついた。

——でも、雨でも晴れでも、奴は来るに違いない。

あれからほとんど毎日、奴とは城の中庭で遭遇している。鬱陶しいと言いつけているのに、なのに何故か憎めない。そんな自分もどかしくていらつく。

メアリルは指で額を押さえ、ため息をついた。

今夜は、皇帝主催の夕食会がある。公爵だとか伯爵だとか、オルンクール中の貴族はほとんど参加する。そしてもちろん、自分も出席しなければならない。既に召使いに着込まされた黒の正装に身を包んでいる。大抵、貴族も誰もかも、国の色である黒に統一して、皇帝主催の行事にはやって来る。特にこの夕食会は特に黒づくめが集まるので、『カラス会』とも呼ばれてもいた。

絶対に、現れる。奴は来る。

と、コンコンと扉がノックされた。なんだ、と返事をする、扉が開く。

「こんばんは」

「……やっぱり来たな」

メアリルはうんざりした様子で、こちらを覗いていたエルストにため息をついた。それも、その格好からして夕食会に出る模様である。いつもの黒衣に身を包み、今日は襟元を金の羽の形をしたブローチで留めていた。その長い髪はゆるく後ろで束ねられており、手には黒い手袋がはめられている。

「それで、なにをしに来た。カラスめ」

「綺麗ですね」

そう言つて、にっこりとエルストは微笑んだ。「とっても。やはり、あなたには黒が似合いますね。でも、もっと広がってるスカー

トはいてもいいのに。惜しいな、九十点」

「うるさい。それでお前、なにしに来たんだ」

「ああ」

と、エルストは部屋に入り、後ろ手に扉を閉めた。そしてメアリの目の前まで歩いてくると、上着のポケットに手をつ込み、手を出して、とにっこり笑って催促する。

不審に思いながらも、メアリルは右手を出した。だが、左、と彼は言う。

「手なんかどうするつもりだ」

言われるがままに左手に変える。すると、彼は小さな小箱を取り出した。そして蓋を開ける。

そこにあつたのは、小さな赤い宝石が中央に一つ埋め込まれた、銀色の指輪だった。

「確かに黒は似合いますが、黒ばかりじゃ、本当にカラスになっちゃいますからね」

そして、その指輪をずっと彼女の左の薬指にはめる。

それを見て、メアリルはエルストを睨み上げた。

「何故そこにはめる」

「綺麗でしょう？ 城下の宝石店で売ってたんです。あなたに似合いますだと思つて——すいません、安物ですけど」

「くれるのか？」

と、ええ、と彼は笑った。

「受け取ってください」

「……と言われても」

メアリルは、自分の指にはめられた指輪をしげしげと眺めた。赤い宝石は小さく、そんなに高価なものではないことが見て取れる。少なくとも皇女には似合わない。

「お前、やはり夕食会には出るのか」

「ええ。なんならエスコートしましょうか？ 黒のドレスの良く似合う、高貴な身分の美しいお方が隣にいるなんてそれはもう——」

「断る」

メアリルは即答した。

「断固として断る」

だが、またしても彼は耳をちつとも傾けずに続ける。

「でも、まだ九十五点くらいかなあ。ルビーの耳飾りに髪飾とか……濃い真つ赤な口紅でもしたら、私の理想なんですけど。百十点くらい」

「お前の趣味に合わせるつもりはない」

メアリルはくりりと彼に背を向け、窓際に歩いて行つた。

「第一、私を褒めたところでもなにも得はないぞ」

メアリルはめられた指輪を外そうと、手をかけた。だが刹那――

「やっぱり安物じゃお気に召しませんか。そう思ってたけど」
声が近い。はっとメアリルは今自分の置かれている状況を理解した。

「んな、な、なにすつ――！」

気がつけば、後ろからエルストに抱きしめられていた。

「はっ……放せつ、この無礼者！」

「なかなかつれないんですね。お堅いお方だとは聞いていましたが」
「訴えるぞ！」

肘鉄を食らわそうと、左腕を構える。

「そんなことしたって無駄ですよ」

「私の肘打ちは痛いので有名なんだ！」

と、その時だった。

何処からか、甲高い叫び声がその場を貫いた。仕方なしに、残念、とエルストはメアリルを放す。

「何事だ」

エルストを思い切り突き飛ばし、メアリルは窓を開けてバルコニーに出るなり辺りを見渡した。悲鳴の根源を探す。

「ネズミでも出たんじゃないですか？……でも、もっと後で叫ん

で欲しかったな」

口惜しそうにエルストは呟く。そんな彼を睨みつけ、
「バカを言うな」

部屋の中へ戻り、扉を開ける。すると、廊下の右側から転げ落ちるように召使いの女性が駆けてきた。

「お……じよ、お嬢さま、お嬢さま！」

「どうした。大きなネズミでも出たのか？」

と、召使いはぶんぶんと首を横に振る。

「……が……陛下が、皇帝陛下が、皇帝陛下が……！」
は。

そのただならぬ状況に、メアリルは父の部屋へと駆け出した。すると、扉の真ん前の廊下に、もう一人召使いが顔面蒼白で壁に背をつけて座り込み、必死に足だけで後ろに下がろうとしていた。

「ひいつ、いつ……！」

「どうかしたのか！」

すると、がくがくに震えた指が、扉の開いた、目の前の部屋へと向けられた。

——なにが。

「……父上？」

メアリルは部屋を覗いた。

だが、刹那。

その場の惨状に、背筋が凍りつき、彼女は両手で叫びそうになる口を押さえた。

——嘘……だ。

垂れ下がった手から滴る赤い血の音が、静かにその場に響き渡る。

こちらに向いた椅子に腰掛けたままの皇帝の胸を、深々と一本の剣が貫いていた。

〔九章：偽られた碧眼…3〕（後書き）

またまた事件。にしても、エルストさん出てくると楽しいです……
w

「十章：籠の中の鳥：1」

傍に膝を折り、首筋に手を添える。だが既に冷たく、ふと見上げた双眸は、相手に恨みを全てぶつけるがごとく、見開かれたままだった。なにを憎んだのだ。なにを恨んだのだ。今ではもう、完全に瞳孔が開ききったその目は、なにを見た。

そつとその瞳を閉じさせる。

——これは。

立ち上がり、窓を叩きつけるように降る雨に目をやった。

——……報復だ。

薄暗い牢の中、ルイセラードは一人、水溜りと見つめ合っていた。天井から滴る雫が、ぴちゃん、ぴちゃん、と音を立てて水溜りの中へと落ち、波紋を描く。その度に少し、そこに映る自分の姿が歪む。耳に聞こえてくるのはその音と、先に寝ついてしまったハルシヤの寝息だけだった。すぐ傍にいれば気も紛れ、その安心できる暖かさで眠りにつけるかと思っても、何度も浅い眠りですぐに目を覚ましてしまう。

水溜りに映る顔は疲れていて酷かった。少しでもいいから、深い眠りにつけられればいいのだが、今日はどうやら寝つきが悪いらしい。眠れるはずもない。

——これから僕に、どうしろと。

貧しい国内状況を、長年上に立ってきたロルディオリースのせいとし、領土を拡大し、ウェランドルスまでもを手中に収めれば、片がつく。そうせざるを得ない状況下に置かれていて、そうでもしない限り、飢え死にが後を絶たない。

だから、戦うと言った。

また、戦争になってしまふのだろうか。

そのきっかけを作っているのは、僕自身なのか。

「……」

誰だよ、と消えそうな声で呟き、ルイセラードは固く拳を握り締めた。

この水面に映るのは。

——僕は一体誰なんだ。

と、その時だった。

「なにを思い悩む必要がある」

はっ、と扉の向こうからした声に目を向けると、小さな格子窓から若草色の瞳が覗いていた。ウエルリーだ。

「逃げるかと思って来てみれば、悩みごとか。つまらない」
相手は言葉を吐き捨てた。

「残念だよ。半殺しにできると思って期待していたのに。その目があれば、ここから逃げ出すことなんて容易いんだろう？ 陛下から受け継いだ目だ。力を分けてもらったに過ぎない僕とは違う、天然のケイル族の力だ。それが例え半分だろうとも、一端のケイル族の力はあるだろうに」

「……僕はまだ信じたわけじゃない」

睨み上げると、バカか、と彼は嘲笑った。

「そう言って現実から逃れようとするのは、弱い人間の癖だろう。自分を守ろうということしか考えていない。本当は怖いんだろう？ その目を見るのが」

「……」

「凶星」

呆れ果てたようにウエルリーは大きくため息をつく。

「信じられないよ。そんな弱くて情けない奴が陛下の片腕になるなんて」

「まだ決まったわけじゃない」

「決まってる」

ウエルリーはそう強く言い切った。

「あの抵抗結界にかかった瞬間から、もう僕では陛下の片腕は務ま

らないと決まったわけだ。お前みたいな奴が片腕になるなんて、殺してやりたいほど憎たらしいよ。その力も、地位も、僕が望むものを、お前は自ら望んで手に入れたわけではないのに、それに悩み苦しむなんて、バカだろ」

「……だったら君がなればいいじゃないか」

「お前の後釜に入る気はない。期待して来るんじゃない」

最後に、殺せやしないのに、と踵を返す刹那に言葉を吐き捨てて、靴音を高らかに響かせ、彼はその場を去った。

そんなこと言われたって。

「つつ」

触れた水溜りは冷たくて、思わず手を引っ込めてしまう。

「……」

——バカでいいんだ。

どうせ僕は——。

拳を握り締めて、爪を立てた手のひらが痛かった。水溜りに映った姿が、酷く弱く見える。疲れていて、顔色も良くない。

……本当に、あれが真実なのか。

嘘で言う言葉じゃない。嘘であんなことは言わない。

「……」

そつと冷たい水溜りに、再び指をつけると、少しだけ水面が揺らいだ。波打った姿の向こうに、この目は彼の姿を見る。

それと同じ、深く冷たい青い色だなんて、信じたくない。

——悪い夢なんだろう？

水溜りの中に故意に倒れ込む。その冷たさに体が震えた。

寒い。

暖かい場所へ帰りたい。時間が巻き戻せるのなら、ラルバートでハルシャと再会した刹那に戻したい。こんなことに巻き込まれる以前に戻したい。

目が覚めた時、その刹那に戻っていればいいのに。そんなことを思いながら、目を閉じる。目の前は真っ暗で、感じるものは冷たさ

と寒さだけだった。

——戻っていれば……いいのに。

気がつけば、暗闇の中を堕ちていた。

静かに息を吐けば、泡となってそれは浮いていく。どうやら自分は水の中にいるらしい。だが、冷たいという感覚も、なにもなかった。

ただ、暗闇の中を永遠と堕ち続ける、わかつていたのはそれだけだった。

——参ったな。

息苦しい。がはっと息を吐き出すと、目の前が霞んできた。

『……』

瞳を閉じると、ずっと目の前に淡い映像が浮き上がる。差し出された小さな手に乗った、白く小さな花。手を伸ばすと、それは空をかいた。

『……』

辺りは若草の野の上、真っ直ぐに伸びた、少女の漆黒の髪が風に揺れる。

刹那、気づけばその場に風が吹き荒れ、次に違う方向から、呼ぶ声が聞こえて振り返った。若草の野に咲き誇る、色とりどりの花たちの中を駆けてくる少女の、今度は金色の髪に陽光が柔らかに反射して、目を細める。

春の日差し、暖かな空気と爽やか風、色とりどりの色彩。駆けて来る少女に、無意識のうちに手を伸ばす。ずっとこの場所で待っていた、そんな気がした。

唇からこぼれた名は、馴染みのないもの。

その声さえも、馴染みはなかった。

だが、自分は暖かい風の吹き荒れる若草の野に立って、その少女を待っている。丘を吹き抜ける風に薄い緑の色がついて見え、手のひらを返せば、風はくるくると笑って向きを変え、辺りを舞った。

次に、薄い空色をした風が、頭上を通り過ぎていく。

少女は美しかった。真珠色の肌、淡く光り輝く金色の髪、そして宝玉のような透き通った瞳、全てがこの世の誰よりも美しかった。人は彼女を、伝記に記された美の女神そのものと呼ぶのだろう。それ程にその姿は眩しかった。

だが、その彼女は一体誰なのだろう。こちらに眩しいばかりの笑顔に向け、誰かを呼んだ。

「――」
これは――。

――この名は――。

刹那、風が強く吹き荒れ、思わず目を閉じる。そして次に襲った冷たさと寒さに、目の前が一瞬で変わった。

気づけば、目の前は再び、漆黒の闇だった。

硬く、鋭い冷たさを感じる、漆黒の石でできた床、そして見上げた天井も黒く、誰かがふとこちらを覗き込んだ。真っ白な衣を頭から被り、それが邪魔で顔はわからない。

――……夢？

相手はなにも喋らない。初め、自分は幽霊でも見ているのかと思った。真っ暗闇の空間で、その白色だけが不気味に映える。そしてずっと、こちらを覗き込んでいる。問いかけようにも、言葉が出ない。

ただ、悪いものではないらしいと、自分なりに感じ取った。

静かに自分が息をする、その音だけが聞こえる。目の前の白い衣の人影はゆらりと揺らぎ、かと思うと、一瞬笑ったような気がした。そして溶けていくように姿が消え、右の手に、冷たく硬い感触を覚える。

握り締めたそれは、鈍い銀色の柄。握り締め、その白刃の切っ先を目の前の闇に、腕を伸ばし、向ける。

「……」

暗闇を切り裂けるかもしれない、と思った。

これが恐怖というものならば、切り裂けるのかも。

青白い光を弱く放つ刃に己を映すと、水滴が一つ鼻の頭に落ち、頬を伝った。冷たい感触が残り、まるで涙のようだった。ゆっくりと目を閉じると、両方の目から、それに似た、今度は温かな、なにかがこぼれる。

目の前にかざした白刃の剣は、もう手元になく、漆黒の床が揺らいだ。

気づけばまた、この体は堕ちていた。

真っ暗な中を、ただ、空気の泡がのぼっていく。

ただ、暗闇ばかりが見える水の中を堕ちていた。

明け方の、ほんのりと紫色の混じった白い空を天に、緑の森を背景にそびえるオルンクール城を一望できる、今は廃墟と化した修道院があった。オルンクールの西の外れにある、そのアウスブロック修道院の赤い屋根の上には今、二つの人影がある。

「体の調子はどうだ」

「まだ完全には」

すがすがしい風を切って空を飛ぶ白鷺へと腕を差し出しせば、それはそこへ止まる。

「だが、良くやってくれた」

「ありがとうございます」

薄茶色の長い髪がふわりと風に揺れる。「けれど……すいません、しばらく陛下のお役に立てそうになくて」

「いいよ。少し休んでいて良い」

「ですが」

「休んでおけ。お前にはまだ役に立つてもらわねばならない」

吹きつける風を、ふつと手で撫でてくるりと方向を変えてみる。

透明な色が彼の目には見える。風の向きも、表情も、言葉も。風を扱うのは、昔から得意だった。

「ところで、あのちょこまかとしたロルディオリースの狗どもはど

うした」

「策は打ってあります。三週間しか生きることができない体の彼を連れてでは、まず間に合いません。それに、途中に罫を山程仕掛けました」

「いつもだが、甘いな。殺してこればいいのに」

ふっと笑み、彼は戯れる風の向きを変えた。

「……申し訳ありません」

「いや。ことを無事に始めるには十分だよ。そういえば、シュレーヌはどうした」

「まだ寝てます」

「そうか。——少し私用で出てくるよ」

そう言って、くるりと周囲に風を集めると、ふっと彼の姿はそこから消えた。

——誰かが、呼んでる？

あれからずっと、気づけば真っ暗な闇だけの空間で、彷徨っていた。誰かが自分と呼んでいる。薄っすらと目を開き、暗闇に光を取り込むと、今にも泣き出しそうに顔を歪めるハルシャの顔がすぐ近くにあった。状況を把握してみると、どうやら自分は、その華奢な腕に抱きかかえられているらしい。

「よ……良かった……良かったあ……！」

「……ハルシャ？」

「バカあつ！」

そう叫ばれたかと思うと、がばっと思いい切り抱きしめられた。

「うおっ」

「なんでこんなに冷たいのよおっ！」

そう震えた声で叫んで、わんわんと彼女は泣き出した。

「どっ、どれだけ呼んでも応えてくれないし、私、どうしようかと……！でもっ、でも、ちゃんと起きてくれて良かった……！」

「あ……」

そういえば、水溜りの中に突っ伏して。

——そのまま、眠っていた？

「……ごめん」

「起きてくれたからいいつ、もういいわよっ！ バカ！」

さっきまで全身が水に浸かっていたかのように、体が冷たい。

あの時と同じ水の中を、この体は落ちていた。あの同じ術なのだろうか、これも。今思えば同じに見える。見せたかった残像があれなんだろうか。それとも、ただの夢だったのだろうか？

吐く息が震えた。あれからどれくらい時間が経っていたんだろうか。気だるく重い腕をなんとか動かし、体に回されていた彼女の腕を解き、その場に座り込む。

どうして、あんなものを見たんだろう。

どうして。

「……嫌な夢を、見たよ」

「夢？」

一つ、力のない笑みがこぼれた。

起きてから気づくなんて、やっぱりそれは夢だったからかもしれない。あの目の前の少女は一体誰なのか、今ならわかる。

あれは——。

「結局なにも知らないことばかりで、本当は……」

あんな笑顔、見たことがなかった。今思えば、頭に浮かべることにすら不可能に近い。

その笑顔があつて、本当に綺麗な人なんだということを知らなかった。寂しそうな顔をしていたのは、何処となく憂いはあつても楽しさが見えなかったのは、幼い頃から感じていた空しさは、全て、僕がいるからなのか。

笑ってほしくても笑ってくれなかったのは、僕が近くにいたせいなのか。悲しげな表情を見るのが嫌で、笑ってくださいと言っても泣きそうな目をして寂しそうに笑うだけで、本当にハルシャのように無邪気に愛らしく笑う姿なんて見せてくれなかったのは——いや、

笑えなかったのかもしれない。それがいつもこつちまで寂しくて、悲しくて、幼い頃少しだけ傷ついた思い出がある。年月が経つに連れて、それが普通なのだと気にしなくなったけれども。

だけど、それがもし僕のせいなら？　僕の知らない過去のせいなら。

——だとしたら、あんな笑顔、疑えないじゃないか。

「……世間知らずなのかな」

「そんなこと、ないと思うわ」

と、きゅつと服の袖を掴まれた。

「ない。誰よりも外の世界を知ってるもの」
違う。

知っているんじゃない。それはただ、堅苦しい身分から逃げたいただけだ。

押し潰されそうになる程の重圧と、何処かしら感じていた冷たい空気から逃れたかったただけだ。本当は心の何処かで気づいていたのかもしれない。あの二人の間に目に見えない深い溝が存在することを、本当はとうの昔から知っていたのかもしれない。

——あれは、母上だった。僕の知らない、幸せそうに笑う——。
「……違うよ」

服を掴んだ黒髪の少女の手を掴んで、引いて抱き寄せ、肩に顔をうずめる。突然の行動に戸惑われてしまったのがわかったけれど、なにも言わずに彼女は抱き返してくれた。

幼い頃はなにも疑わなかった。感じていた溝も、それが世の中の当たり前だと思っていた。だが、今思えば、この年になっても疑わずして生きてきたのが間違이었다のだろうか？

わからない。どれが真実でどれが偽りなのか、考えれば考える程こんがらがっていく。糸がもつれて、解けないくらいに乱雑になっていく。

もう一度、会おう。

このままでは、もう解けなくなってしまう。

——今、真実に最も近いのは、あの人なのだから。

「十章：籠の中の鳥：2」

出発の準備を済ませ、ハルヴィートとゲオルドの手綱を引いて、アステイナは城門へ向かって歩いていった。

あの夜、ウエルリーが言った言葉が、ふと脳裏を過ぎる。

——君のその右の瞳が、青い色をしているからだよ——。

その言葉が浮かぶ度、頭を振って振り払う。国王陛下は嘘を言っている。そうだと思いたい。そんなことがこの現実にあるはずがない。あつてはいけない。伝説なんて私は信じない人間なのだから。

「……そんなこと……」

つい先程のことだった。早くに目覚め、すっかり準備が整った頃、王妃が部屋を訪れ、自分に一通の手紙を差し出し、言ったのだ。

『あの子に渡してもらえるかしら』と。

その手紙は今、荷物の中に紛れている。

「ハルヴィート……お前は、知ってたのか？」

だが、問いかけても、相手はなにも応えてはくれなかった。かぶりを振り、アステイナはパシッと自分の頬を叩く。

「しっかりしろ。……仕事が、あるんだ」

「んーっ」

早朝といえど、いつもの通りに目覚めたジェーナは一人、門の前で一伸びした。準備は万端、荷物も完璧、後は、先に行けと言ったアステイナが来るのを待つだけ。

「いい朝ーっ」

ふわふわのベッドで眠れて、毎日がこんな生活って、どれほど幸せなんだろうか。でもやっぱり一番は、自分で作った小麦で作ったパンを食べて、畑仕事の為に早く起きて、野菜のできなんかを見守る、そんな毎日だけだ。

——何処か土地を買って、畑でも持とうかしら。
と、その時だった。

「相変わらず、なんでそんなに早く起きれるんだよ」

声のした方に、ぱつとジェーナは目を向けた。刹那、彼女はぱあつと表情を輝かせ、そちらに駆け出す。

「ステイルグーっ！」

「うえっ」

どすん。

思い切り抱きつくと、その勢いで思い切り共倒れになってしまった。

「くそっ、なんだよいきなり！」

「捕まったんじゃなかったんだ！　どうして？　釈放？　仮釈放？」

「まずは、どけ！」

「あ」

気づくと、倒れた体の上に乗って、これでは完全に彼を押しつぶしている。

「ごめん、つい。でも軽いでしょ？」

それでどうして？　とぐつと顔を近づけてもう一度尋ねる。

「仮釈放、だ」

「それって、ちょっとは減刑されたってこと？」

「いや。昨日の夜に国王からの使いが来て、お前に仕事をやるって言われてさ。その見返りとして望みを一つくらい叶えてやる、って言うから引き受けたんだよ」

「望み？　お願いごとなんてあるの？」

「うるさいな。退けよ、バカ」

「あ、ごめん」

と、ジェーナは立ち上がり、彼に手を差し出した。だが、その手は払い除けられる。

「なによ、せつかく人が——」

「親切なんてお前には似合ねえ」

スティルグは立ち上がり、衣服についた砂を払った。と、背後から、

「早いんだな。二人とも」

「……。遅いわよ、アステイナ」

じろりとジェーナは相手を睨んだ。

「なにやってたの？ 待ちくたびれたわよ」

「すまない」

アステイナは歩いてくると、スティルグにハルヴィートの手綱を差し出した。

「良かったな。仮釈放か」

「そうらしい」

そう言つてスティルグはハルヴィートに飛び乗る。

「急がねえと、駄賃が無駄になる」

「駄賃？」

アステイナはゲオルドに飛び乗り、後ろにジェーナを引っ張り上げた。

「賄賂か？」

「安心しろ、堅物皇女。金じゃねえ」

「ならいい。ジェーナ、しっかり掴まってる」

行くぞ、とアステイナはゲオルドの脇腹を蹴った。

——三人を乗せた二頭の馬が城の佇む丘を駆け降りていくのをその頃、バルコニーからジェルドは見送っていた。隣でホグール将軍も同じように見送っている。

「これから、どうなさるんです」

「国境まで軍を出す。国軍のお前の部隊だけでいい」

ホグール将軍は軽く目を見開いた。

「戦うおつもりで？」

「指揮は私が取る。昨晚、寝る前にクランディートに話しはつけた」
そんな、とホグール将軍はうなだれた。

「本気で言ってるんですか……あなたって人は。まったく……」

「向こうはあいつに手を出してきた。それに、ロルディオリーズに手を出すというのなら、停戦条約に基づいて軍を出す義務はある。不可侵、時により相互扶助だろう？ 先程だめもとで入国許可願いは出した」

「皇帝陛下に、ですか」

「メアリル嬢に、だ。彼女に頼むしかないだろう」

「王后陛下には、仰られたんですか」

「言ったよ。……なあ、將軍」

目をやった先にはもう、二頭の馬の姿はない。三日もあれば到着するだろう。迷うことはまずない。最短距離の目印が、所々に記してあるはずだから。

「あの時、私は王妃を力ずくで連れ戻して、それが正解だったんだろうか」

結婚した時からずっと、国家の面目と自分の地位の為に、この世の摂理という籠の中に閉じ込め続けている。あの目が見る先が、ロルディオリーズを通り越した遙か東であることなんてわかっている。ずっと、籠の中に白鳥を飼っている。

飛び立てないように、羽を縛って。

「地獄へ堕ちないように、祈っておいてくれ」

そう言っただけでエルドは踵を返し、部屋の中へと戻った。

あの時、もし逃がしてやれていたのなら、こんなことになるはずもなかった。美しすぎる彼女は飛び立つべきだった。飛べない白鳥など、いてはいけない。

——飛べなくなったのは、否、させたのは、他ならぬ飼い主と化した自分だ。

「十章：籠の中の鳥：3」

昨晚降り続いた雨は上がった。

目が覚めると、いつの間にかベッドの上に横になっていた。枕元にある書置きを見て、ずっと彼がいてくれたことに気づく。

『良く眠れましたか？ 温かい飲み物をもらってきます』

それを読んでベッドから降り、窓の外を見ると、すっかりと青空が晴れ渡っていた。時間的に大分寝過ぎしてしまっただろうか？ 時計を見ると、昼を回っている。

と、その時、部屋の扉が少し開いた気配がした。振り返ると、そこにカップを二つ手に持ったエルストが立っている。

「おはようございます」

彼が部屋に入ると、扉はパタンと閉まる。そしてエルストはメア Ril の方にやって来ると、どうぞ、いつものようににっこり笑ってカップを差し出した。

受け取ったカップは温かい。かたじけない、と呟いて口に運ぶと、すうっと体が温まったような気がした。ついたため息と同時に、ふと笑みがこぼれる。

「おいしい、ですか？」

問われて、ああ、とメア Ril は呟く。

「……悪かったな。それも、ずっといてくれて」
「いいえ」

昨晩はあれから部屋に戻り、暖炉の前にあるソファに腰掛けて火に当たりながら、二人ですっととりとめのない話をしていた。彼が訊くことに答えるばかりで、こちらからはほとんどなにも訊きはしなかった。ただ、幼い頃のことや初めて銃を持った時のこと、父は絵に描いたような支配者で母は幼い時に死んだことなどを、ずっと話していた。幼い頃から今までの記憶をただ、綴っていたようなものだ。

彼なりに心配してくれたのだろう。肩を抱いて部屋まで連れ戻してくれたのも、駆けつけたリヴェンティ大佐に指示を出してくれたのも彼だったことを、うつすらとだけれど覚えている。

皇帝は――父は、こちらに対しては冷たい人間だった。妹に笑いかけても、私には怒鳴る。妹に優しくしても、私には辛く当たる。そんな生活をかれこれ二十年弱続け、それが権力者というものなのだと認識していた。

そんな関係だった故に、変な気持ちが今でも少し続いている。死んだのは認識しているが、悲しいかと問われればそうではない。むしろ、願いつけてきた地位と権力がこんなに若くして手に入ることに対して、誇らしげな気持ちも多少芽生えていた。もう全てを握っているのだ。下手すれば高笑いが出てもおかしくない状況だ。

だが、何故かそんな笑いも出なかった。

エルストに言わせれば、それが心の底から悲しいということらしい。

『妹君に対して嫉妬して、本当は、まだ幼かったあなたは父君に甘えたかったんでしょう？』

その言葉が、何故か心に染みた。

『そうかもしれない』

微かに笑みが零れると、そうですよ、と彼はいつものように微笑んだ。

誰からも愛されるハルシャが羨ましくて、だから同時に憎らしい時もあった。彼女は自由で、権力と地位に縛られて一生を終えることもない。自分の自由は、国を牛耳ることだけだ。そしてそれは仕方のないことで、皇位継承者なのだからと決め付けていた。そうでなければ皇帝は務まらないと。

でも結局は、それが自分を冷酷にさせていた。

『寂しいな』

それからしばらくして、ぽつりとエルストは呟いた。

『だって……誰からも、こんなことされたことないでしょう？』

そう言われたかと思うと、やんわりと優しく抱きしめられた。その腕の中が心地よくて、暖かくて、後ろから突然抱きしめられたあの時のように振り解こうと思えなかった。人に嫌われたり冷たくされたり、さげすまれたり、いつもそんな状況下に置かれていたせいか、感じた大きな優しさに、振り解くどころか気づけば身を委ねていた。

『人は誰しも、愛されて生まれてきて、愛されて生きていくんです。……今までの分、私が傍にいてはいけませんか？　こうやって、ずっと抱きしめててあげますから』
嬉しくなかったと言えば、嘘になる。

「……」

隣に立つ彼を見上げ、改めてその背丈が高いことにメアリルは気づいた。頭ひとつ分高くて、自分が小さく見える。その時、きょとんとした目で見下ろされて、慌てて彼女は視線を逸らす。

「なにか顔についてます？」

「なんでもない」

「じゃ、見とれてたとか」

と、エルストはメアリルの肩に手を回した。

「素直に認めたらどうです？」

「……バ力野郎。そんなのではない」

でも、もうその手を振り払おうとは思わない。寄りかかって、大人しく黙ってシヨコラを口にすると、ぱちくりとエルストは目を見開いた。

「怒らない……んですか？」

「怒る？」

「自慢の肘打ちを食らわすどころか、大人しいんですもん。殴られるかと思ったのに」

と、その時、コンコンと扉がノックされた。

「……朝っぱらからなんだ」

「もう昼ですよ？」

「どっちでもいいだろう」

エルストの手を解き、テーブルにカップを置いて、ソファにかけてあった上着を羽織る。そして、入れ、と言うと扉が開いた。その相手に、メアリルは顔を引きつらせる。

「寝起きからなんだ。リヴェンティ大佐」

「すいません。ですが、急ぎの用なもので」

と、リヴェンティ大佐はエルストに軽く頭を下げ、部屋に入った。そしてメアリルに手に持っていた紙切れを渡す。

「というのも、ウェランドルスから伝書鳩が」

刹那、それを引ったくり、急いでメアリルは内容に目を通した。

だが、その内容に思わずかちんときて、ぐしゃぐしゃに丸めてリヴェンティ大佐につき返す。

「やれん！ 一歩たりともあの腰抜け国王に国境はまたがすな！
絶対にだ！」

親愛なるメアリル嬢、相変わらずお元気だと思うが、どうかこの手紙を燃やしたり丸めて捨てるなどせずに、最後まで読んでほしい。実はクラウディスルグがお宅に攻め込むなんて情報が入ったものでね。運が悪いことにこちらの倅も、お宅の姫君も巻き込まれているらしい、運がいいのか悪いのか。とにかく私の分だけでも入国許可を貰えないだろうか。停戦条約の裏で取り決めただろう？ 基本的には不可侵だが、相互扶助も有り得る、と。皇帝陛下によりしく取り次いでくれると非常に有り難い。

「……そう言われると思っていました」

リヴェンティ大佐はぐしゃぐしゃに丸められたそれを、とりあえず広げて折り畳んだ。

「あの国王は確かに癪に障ります。私だって嫌いですよ。が、嘘は言いません」

「だが、クラウディスルグが齒向かってくる動機が、一体何処にあ

る。処遇は悪くないはずだ。イルゼル・レステアウエルは戦いを好むような奴ではないだろう？ 連絡を取って、真実かどうかを確かめなければ――」

「それが、その必要もなさそうなのですが」

「は？」

「先程入った情報なのですが、三日前、ラディスカルスのレルバがクラウドイスルグ軍によって落とされたそうです。軍の勢力はおよそ三万、立ち向かう術もなく降伏せざるを得なかったとか」

「なんだと……！」

嘘だろう。

三万の軍勢が、レルバを落とした？

ラディスカルスのレルバは、クラウドイスルグ寄りの、首都の次に大きな街だ。あそこには鉄の取れる炭鉱がある。リルグルスも他の都市もあるにしても、そこが一番鉄鋼の街としては栄えている。そこを奪われては――！

「クラウドイスルグが……！」

よりによって、こんな時に。メアリルは頭を抱えた。

どうすればいい。ラディスカルスへ今から軍を向かわせても、間に合わない。だったらリルグルスで迎え撃つか。だが、そのまま南下されては――。

「……大佐、すぐに皆を集めてくれ。緊急に軍事会議を開こう」

わかりました、とりヴェンティ大佐は踵を返した。だが、ふとメアリルの方に振り返る。

「申し上げにくいのですが、即位式の方は、このことが終わってからに致しますか」

「犯人の目星は」

「内部なのか外部なのかも、わからない状況です。なにせ、不審者を目撃したという情報ありませんので……。いくら召使いや護衛を皇帝陛下が遠ざけているにしても、気づかれずに部屋の前までたどり着くことは不可能です。庭の護衛を避けるのも不可能、だとす

れば犯人は何処から入り、どうやって去ったのか……わからないことだらけです。……お嬢さま、体調の方は」

「お嬢さま、はよせ。陛下でいい」

「そう仰ると思いました」

と、リヴェンティ大佐はメアリルにふっと笑いかけた。

「お元気そうで、安心しました」

「お前もな」

「お気遣いいただき、ありがとうございます」

そして彼が部屋を去り、段々と足音が遠ざかっていくと、

「また、戦争ですか」

窓の外を眺めながら、エルストはそう言ってシヨコラを口に運んだ。

「それと、クラウドイスルグが齒向かう理由、本当に見当たりませんか」

「私は見当たらない。良き同盟国で、戦争の際にはこのロルディオリースに尽力してくれた」

「でも、探せばあるでしょう」

エルストは一気にシヨコラを飲み干した。そして静かにカップをテーブルの上に置く。

「理由なしに戦争を仕掛けるなんて、誰もしないでしょから」

〔十章：籠の中の鳥：3〕（後書き）

主人公が吹っ切れるのは次の章かしら……？

「十一章：裏切りの風：1」

「……これって、道標？」

見上げた木の枝に結ばれたロープを指差し、ジエーナは振り返った。視線の先にいたアステイナは、さあ、と首をかしげる。

「道標など、そんな親切なものがあるか？」

シューレ・ゲンジュナートを出て森に入り、とりあえず東へ突っ切ろうと思ったのが間違이었다。方向を探ろうとしても、磁気が滅茶苦茶なのか、何処が北で何処が南か、定まらない。そして馬を下りて、しばらく彷徨っていると、一向はこのロープを見つけたのだった。

「……畏かしら」

ジエーナは辺りを見回した。と、少し行った所に、また同じように木の枝に括り付けられたロープを見つけた。

「あっちにもあるわよ」

「慎重に行こう。本当に畏かも——」

と、その時だった。

「バカ。ロールディオリースへの道標を作るなんて、あいつしかないだろうが。気づけ」

言ったのはスティルグだった。ぶっきらぼうな物言いがジエーナの気を逆撫でる。

「バカとはなによ——！」

「ほら、とつとと行く」

「……覚えてなさい」

木に結ばれたロープの道標は、途切れることなく続いていた。途中で見つけた野いちごを頬張りながら辿っていく。

「わからないわ」

不意に呟かれた言葉にアステイナは首をかしげた。

「なにが？」

「だって、こんな印つけてまでマジユエティール族に会いに行くシユフル族なんて、珍獣よ、珍獣。あれだけ民族的に敵対してて、お互いに睨み合ってて、いつまた戦争が起きるかわからない。それだけ憎むべき相手でしょうが普通は」

「私もそう思うよ」

その時、水の音が聞こえたような気がして、ふとアステイナは足を止めた。

「どしたの？」

「静かに」

ジェーナを制して、アステイナは耳を澄ます。すると、微かにだけれど確かに聞こえてきた。どうやらこの行く先かららしい。

「川だ」

「川？」

「そこまで歩こう。きっとサンドウリアス川か、それから分かれたうちの一つだろう」

そうしてしばらく歩いて行くと、森が開けて、アステイナの予想通りそこには確かに川が存在した。大きいとは言えないが、滝がある。

「やっぱりお昼ご飯は必要よ！」

川岸に駆け寄って、ジェーナは水の中を覗いた。きらきら光る水面下には、小魚がたくさん泳いでいる。

そして、スティルグ！と彼女はぱつと振り返った。

「魚っ！」

「俺に頼るな」

そう言ってスティルグはハルヴィートを放し、川の方へと促した。

「自分で頑張れ」

「あたしがまた溺れてもいいっていの？」

「あれはお前が勝手に転んで勝手にずぶ濡れになったんだろっが」

「そりゃそうだけど。ほら、野いちご最後の一つあげるからさあ？」
「物で釣るな」

と、ステイルグはジェーナの隣までやって来ると、その野いちごをひったくって、口の中に放り込んだ。

「あ」

「ただし条件付きだ」

と、ステイルグは川原に落ちていた石を一つ——平たい石を拾うと、ジェーナに差し出した。

「三回水面を跳ねさせたら、お前の分も獲ってやる」

「え」

「その代わり、跳ねずに落ちたらお前が獲る」

「なによそれ。あたしが圧倒的に不利じゃない！」

「ほーう、逃げるのか？」

「……わかったわよ。やってやるわ！」

意気揚々と石をひったくって、ジェーナは構えた。

「見てなさい。絶対に獲らせてやるんだから！」

そして勢いをつけて、ひゅんつと石を横投げした。だけれども。

——ぼちゃん。

「……っ」

一回も跳ねずに石は川の中へ沈んだ。

「さあ頑張つて来い」

「わかったわよっ！ 獲ればいいんでしょ獲れば！ 行つてやるわよ！」

靴を脱いで、袖を捲し上げ、裾を捲し上げ、ジェーナは意気揚々と川の中へ入っていった。

「その代わりあんたの分は獲つてやらないんだから！ 見てなさいっ！」

「溺れるなよー」

「わかつてる！」

そう言つて川の中に手を突っ込み、魚と格闘し始めたジェーナはさて置き、ステイルグは川原の上にごろりと寝転がった。

「応援してやらないのか？」

隣に腰掛け、アステイナは一心不乱に魚と格闘するジェーナの行動を目で追う。

「遊ばれてると気づいたら、怒るぞ。彼女」

「バレたか」

「バレバレだ」

まっさらな空を見上げ陽光の眩しさに目を細める。と、その時だった。

「いやああ——っ！」

——ばっしょん。

「ジェーナ！」

慌ててアステイナは立ち上がり、川岸へ走った。

「おい！」

「つつ、がばっ、ぶはっ……もう！」

なんとか溺れずに済んだものの、川の中に座り込むようになってしまったジェーナは、またしても頭からずぶ濡れだった。

「最悪……っ！」

「大事無いか？」

「あたしって魚獲りの才能ないみたい」

なんとか立ち上がって川岸まで引き上げる。

「着替えを出そう」

「ありがとう」

アステイナは荷物を置いていた木陰へと駆けて行った。とりあえずジェーナは絞れるだけ服を絞っていく。

「ったく……またびしょびしょ……」

「学習能力なし」

寝転がったままそう言ったステイルグをジェーナは睨みつけた。

「ステイルグ！」

「ありのままを言ったただけだ」

「なんですって！」

「……喧嘩はよせ。ほら」

そう言つて、アステイナは持ってきた替えの服をジェーナに差し出した。ありがと、と彼女はそれを受け取り、草むらの影へと歩いて行く。と、ふとステイルグの方に振り返り、

「覗かないでしょね」

「誰が」

「……早く着替えて来い、ジェーナ」

「はい」

そうして着替えに行ったジェーナを見送り、ステイルグに目をやり、くすくすとアステイナは笑い出した。それに露骨に嫌そうな顔をして、ステイルグは彼女を睨む。

「なんだよ」

「仲が良いんだな、と思つて」

「誰が」

「仲睦まじいというのは、いいことだぞ。……話は変わるが、国王陛下と一体なんの約束をして、私たちについてくる氣になった。ウエランドルスは敵だろう？ どうして敵に味方する。それほどの大きな約束を取り付けたのか？」

「あんたには関係ない。俺の問題だ」

「なら深入りはしない。——せいぜい役に立つてもらつぞ」

「……そうかい。あんた、根っからの支配者だな」

「なにか言つたか」

「……いんや」

と、ジェーナが服の袖をたくし上げながら戻ってきた。

「おまたせ。二人でなんの話をしてたわけ？」

「別になにも？」

なあ、と見下ろすと、ステイルグはそっぽを向いてしまった。だが、

「……随分と寸法が合つてないじゃないか」

ステイルグは消え入りそうな声でさり気なく呟いた。だが、ジェーナはそれを聞き逃しはしなかった。

「あんたに言われる筋合いはないわよ、チビ」

「言つとくけど、俺の方が生きてる年数は短い」

「あーら、それがお姉さまに対して使う言葉？」

「それでもお前の方がちっこいのは目に見えてわかるだろ。どチビ」
欠伸を噛み殺し、ステイルグはジェーナに背を向けた。

「ステイルグ、あんたって奴は……。いいから昼ご飯なんとかしなさいよ」

「頼むときは『お願いします』って頭を下げるもんだろ」

「ほんと可愛くない……！」

と、まあまあ、とアステイナは二人の間に割って入った。

「苛々が募ると余計に腹が減るぞ」

と、その時、川の水を飲んでいたハルヴィートが歩いて来た。かと思うと、ステイルグの羽織っている衣をぱくりと口でくわえて――

「あ」

アステイナは声を上げる。と、次の瞬間だった。

「ちょ、ちょっ、引つ張るなつての！」

なす術もなく、抵抗する術もなく、ずるずるとステイルグは川の方へとハルヴィートに引きずられて行った。

「……」

「……似てるかも」

その場に取り残されたジェーナとアステイナは、ただ呆然とその光景を眺めていた。

「……馬も、飼い主に似るのね」

〔十一章：裏切りの風：2〕

二階、会議室。国内、国外で我が国に関わった事件が起きると、皇帝中心に、家臣たちがこの部屋に集まる。側近に使えさせているリヴェンティ大佐はもちろん、陸軍将校数名、そして新しく完成させた銃撃隊のトップに立つ將軍も集まっていた。

縦に長いテーブルの、皆が見渡せる端に座るのは皇帝。その近くから遠くへと、地位の高い者から順番に座っている。テーブルの上には、ロルディオリーズ全体と、周囲の国々の見渡せる世界地図が広げてあった。

皇帝の席に、メア Ril がいる。そして彼女がついこの間まで座っていた席に、リヴェンティ大佐がいた。

変わらない面子。変わらない国。変わったのは支配する人間だけだ。

「……それで、ウェランドルスの際はとりあえず断る。それが筋だろっ」

メア Ril が言うと、周りは頷いた。

「だが、問題はクラウディスルグだ。説明を」

そう促した相手は、陸軍を束ねる要、ゲイダス・ボルナード將軍。「今朝入った情報によりますと、クラウディスルグ——三万の國王軍が、ラディスカルスのレルバを落としたと。北からロルディオリーズに入るつもりなんでしょう。要所要所を潰していけば、我が国の生産能力も落ちる。この調子でいけば、オルンクールに辿りつくのは、一週間後かと。ですが、奴らはご存知の通り、特殊な能力の使い手。それを使ってくることを考慮すれば、もしかしたらもっと早く、攻め入ってくるかもしれません。それと、一つ不可解なことがあるのですが、銀翼の鷲の紋章を掲げている——それは、イルゼル・レステアウェール本人が軍を出したという証拠。ですが、そのイルゼル・レステアウェール、一ヶ月前から行方不明だという情報

「があります」

「なるほど」

腕組をして、メアリルは椅子の背にもたれた。

「頂点に立つ奴は、何処で指示を出している？　なにを企んでいる？　とりあえず、各国に散らばる格軍勢には、カラスを飛ばせておいた。全力で対応するようにとは言っているが、果たしてそれが持つかどうかはわからない」

「オルンクールで迎え撃ちましょう」

と、ボルナード将軍が声を上げた。

「ですが、それはあまりにも犠牲を出しすぎます」

言ったのは陸軍第二部隊、アウラン・ヘルバン中将だった。「もつと北の、国境の方へと軍を出し、そこで迎え撃つべきです」

「だが、それでオルンクールを守る軍勢を出して、奴らがその隙に攻め込んできたら、オルンクールは陥落し、ロルディオリーズは落ちるぞ」

メアリルの言葉に、ヘルバン中将は口をつぐんだ。

「忘れるな。奴らは我々とは違う種族なんだ。それに、オルンクールで迎え撃つならば、銃撃隊の威力を試せるだろう。それよりも、何処かで指示を出しているイルゼル・レステアウエルを探し、ひとつとらえるのが先決だろうな。反逆罪なのだから、これは」

と、メアリルは席を立った。そしてペンの先で、地図上のウェランドルスとの国境を示す。

「オルンクールの軍は出さない。ウェランドルスとの国境警備に当たっている軍勢を、全てクラウデイスルグの進路、国境へ配置。そこで受け止めても突っ切られた場合、ここで迎え撃つ。異存は」

そう言っただけでも、誰もなにも言わない。

「ならば、会議は終了だ」

と、周りは皆起立し、メアリルに向けて敬礼の姿勢をとった。

「リヴェンティ大佐、行くぞ。即位のことで話がある」

「はっ」

そして、メアリルは大佐連れ立って部屋を出た。と、その時、
「終わっただんですか」

声のした方に目を向けると、少し離れた所にエルストが立っていた。

「ああ。ここだなにをしている」

「なにつて、そろそろかなと思ってお迎えに。でも、この様子だと散歩に出る余裕もなさそうですね。仕方がない、今では皇帝陛下だから」

失礼します、とエルストはメアリルを通り越して行った――が、すれ違う刹那、

「待て」

メアリルはエルストの腕を掴み、彼を引き止めた。

「？」

「帰るのか？」

「あ」

と、エルストはいきなり笑い出した。

「その目はなんですか？　いてほしいのならいてほしい、って素直に言ってくだされば、私はずっと――」

どっつ。

一発、メアリルはエルストの腹に拳を食らわせた。

「う……」

「バカ野郎。誰がそんなこと」

そう言つて、彼女は声を潜めた。「後で会おう。裏庭でいいか」

「ええ。待つてます」

「ああ。――！」

彼女がその場を去ろうとしたその一瞬、エルストはメアリルの手を引いて、彼女の額に軽く口づけを落とした。

「んなっ……！」

「失礼します」

自信満々な笑みを見せ、エルストは笑いながら彼女を通り過ぎて

行く。

「この私を一体誰だと……！」

「お似合いですよ」

傍観していたリヴェンティ大佐は、そう言ってくすくすと笑い出す。

「なっ、なにを言う！ 行くぞ！」

そう叫んで、メアリルは踵を返した。

まったくなにをするかと思えば、それもこんな人前で。あんなことをするか普通。

——頭にかあつと血が上って、だが、頬が熱くなっている自分がまったく情けない。

だけど、額に触れた唇は柔らかくて。

「くそう！」

本気で拒否するほど嫌に思っていない自分が、思えば思う程腹立たしい。

——昨夜からどうかしているぞ、私は。

冷徹な皇女、メアリル・マディスリートが聞いて呆れる。

——あいつはただの無礼者ではないか。

「誰が似合いだ！ 二度と言うな！」

「顔が嬉しそうですよ。良かったですね」

「うるさい！」

——その頃の、そのオルンクルの地の深く。

朝なのか夜なのか、昼なのかもわからない。蠟燭の明かりだけで時間は判断できず、お腹の空き具合で判断しようにも、食欲がなくてわからない。

もう、どれくらい閉じ込められているのだろうか。

言葉数も少なく、考えることもなく、考える程頭は働かず、単調な時間の過ぎ方に、段々と二人とも互いに言葉を交わすことがなくなってきた。

今、一番会すべきあの人も、姿を見せない。

沈黙に耐え切れず、ハルシャが幾度かこちらに話しかけようとするのがわかったが、それでもルイセラードはずっと目を逸らし続けていた。

そしてまた、長い沈黙が続いて行く。

ハルシャも遂に話しかけることを諦めたらしく、お互いの呼吸の音が聞こえる程に静かに時間は過ぎて行つた。

そしてずっと長い沈黙が続き、ハルシャがこっくりこっくりと船を漕ぎ始めた時だった。

——こつん。

「……」

微かに聞えた靴音に、はっとルイセラードは顔を上げた。それにハルシャも目を覚ます。

——こつん。こつん。

段々と音が大きくなってくる。

「……誰が来る？」

寝ぼけ眼をさすり、ハルシャは大きく一欠伸した。ルイセラードは座り込んでいた冷たい床から立ち上がり、小窓から扉の外を覗く。靴音が段々と大きくなってきて、相手が姿を現す。——が、それは、望んでいた彼ではなかった。

「いつまでうじうじしている気だ」

ガチャリと音を立てて鍵が開けられ、扉が開く。

彼の手には、スープの乗った皿が二つと、パンが二切れ乗った、銀のトレイがあった。

「メシだ、囚人」

扉を開け、ウェルリーはそれを床に置いた。

「安心しろ、毒は入ってない。毒殺よりも楽しい殺し方があるからな」

「……それは殺される側にとっては楽しくないんだろ」

「良くわかってんじゃないか。……でも、陛下に『あまり怒るな』」

と言われたんだけどね。僕はどうにもこうにもむかついて苛々してるんだけど。この手は殺したくてうずうずしてるし、目は苦しむ姿を見たくて見たくてたまらないらしい」

「要するに僕が嫌いなわけだ。それは聞いたよ、陛下から」

ウエルリーは扉を閉め、目の前までやって来た。そして思い切りルイセラードの胸倉を掴み、立てよ、と無理矢理立たせ、思い切り壁にその体を押し付ける。刹那、かすかにハルシャの悲鳴が聞こえた。

「いい加減認めちまえよ。陛下があんたを必要としてんだぞ。それがどれだけ光栄なことか、わからねえのかよ！ この頭は！ ああ？」

「……光栄」

呟いて、自嘲染みた笑みがこぼれた。

「何処が」

「あんたはこれから陛下の片腕になるんだ。陛下がそれを望んでいる。言っただろう、僕ではその役は務まらないんだよ。どうして与えられたものを、お前は拒否しようとする。こちらがどう頑張っても手に入らないものを、どうしてお前はそう簡単に認めずに信じずにいられるんだよ！」

ウエルリーの手は容赦なく、首を掴み、思い切り壁に押し付けた。

「っ……！」

息が――。

だが、彼の手を掴み、解こうと思っても、腕が上がらない。ふと見たその左の碧眼が、鋭く冷たい光を放つがごとく、こちらを睨んでいるところを見ると、ケイル族特有のその力みみたいなものが発動しているのかもしれない。

耳の奥で、微かにハルシャの悲鳴が聞えた。

「やめて、どうしてこんなこと――！」

だが、邪魔だ、と一言で切り捨て、ウエルリーは掴みかかってきた彼女を力任せに振り払った。

「きゃあっ！」

その勢いで彼女はバランスを崩し、体が倒れ込む刹那に頭を壁に打ち付け、それからぐったりと動かなくなる。

「……！」

ハルシャ。

——どうして彼女が。

ぐっと首を締め付ける力が強まった。

「さあ、どうやって殺してほしい？ 認めないつもりなら、お前はウェランドルスの王太子だってことだ。殺したってバチは当たらない。このまま絞め殺すのは惜しいから、僕としては急所を外して刺し続け、出血多量で死んでもらうか、それとも大好きで仕方ない爆発に巻き込まれてくれるか——どっちがいい？」

彼の言葉が頭を通り抜けていく。視界に入る彼女はぴくりとも動かない。

どうして彼女がこんな目に遭う。

——どうして……！

段々と目の前が霞んでいく。だが、それとは裏腹に、なにかが疼いた。指先に、微かにだが、するりとなにかが絡まる。

——なんだろう。

風？

だとしても、どうしてこんな場所に、風が起きるんだろう。目を閉じて指先に絡まるそれを感じ取る。そして、ふわりと頬をなぜた感触に、どうしてか親しみを覚えた。

ウェルリーが息を呑んだのがわかった。だが、更に首を締め付ける力は強くなる。

「お前ばかり……！ どうしてお前ばかりなんだ！ 陛下も、世界も！」

お前ばかり？

——それはどうして。

苦しいという感覚ばかりか、全ての感覚はもう、ほとんどなかつ

た。ただ、死ぬかもしれないと、この頭は思っていた。

——……放して。

思ったその言葉に、ふと、デジャヴを感じた。

前にもこんなことが、確かあったような。

放して。そう願っても、子供の——そう、まだずっとずっと幼い頃だった。思い出したくなくて忘れていて、そして微かに残像が脳裏に浮んでくる。

殺気を持った鋭い眼光。鮮やかな山吹色の瞳。こがねの髪。

どうして殺されそうなのかわからなくて、ただ、感じたことのない恐怖に涙が滲んで、どうしてと問い続けていても、いずれは言えなくなつて。

——死ぬ、かな。

いや、死ぬんだな、と思った。

いつそのこと死ねた方が楽かもしれない。死ねたら全てが楽になる。悩むことなんてなくなるだろうし、天国は物語りによれば良い所らしい。でも、自分は果たして天国なんかに行けるんだろうか。

この世の摂理に逆らつて生きてきた。父を怒らせてばかりで、母を喜ばすこともできなかった。それにこの世界を作った神様が天国にいるなんて言うのなら、間違いなく僕は叛逆罪を犯しているだろうから——。

幼い頃より、黒い瞳をした少女を恋い慕ってしまった自分は、きっと地獄行きだ。

——死ぬのか？

目の前に広がる暗闇は、夢の中で落ちている暗闇の中のようなだった。なにも見えず、ただ、真っ暗闇が目の前に広がる。

——死ぬのか。

彼女を一人置いて？　まだ十四年しか生きていない幼い少女を置いて？

笑いかけてくれるその姿も見れなくなるというのに？

自分を呼ぶ声も聞えなくなるかもしれないのに？

なによりも、自分がいなくなることによって彼女が悲しむとしたら、涙を流すのだとしたら、そんなことは――。

瞬間、指先に感覚が戻った。くすぐる風が、もっと強く渦を巻いて絡まった。

心臓が同じ速度で鼓動する。まだ生きている。

――できない。こんなところで。

「……放せ！」

目を見開き、首を締め付ける手を思い切り両手で掴む。そして振り解こうと力を入れた瞬間、壁だけの背後から突風が吹きぬけ、相手を突き飛ばし、体を扉に叩き付けた。

「っ……！」

「……っ、ごほっ」

息を吸う度に、解放された喉は咳き込む。息を取り込むごとに、頭が段々冴えてきた。

「なんだってんだ……！ この野郎！」

相手は悪態をついて立ち上がると、携えていた剣を抜いた。

「殺してやる！」

だが、彼の若草の目に映ったものは――。

かろうじてその場に足を着いて立ち、その周りを緩やかにふわりと風が舞う。少しずつ呼吸が整うにつれ、それは段々と緩やかになり、淡い茶色の髪を揺らしていた。

そして、くすんだ色をした、右目に巻かれた包帯がはらりと解け、肩にかかる。

「……誰を殺す、って？」

その双眸は、しっかりと真っ直ぐに相手を見据えた。迷いの見えない輝きに、相手は後ろへ退く。

「どうした。来ないのか？ 殺したいんだろう？」

「くそっ！」

ぐっと剣を握り直し、ウェルリーは地面を蹴る。

片や、すっと目を閉じ、ルイセラードは頭に響く言葉を読み取っ

た。

——全てを解き放ち、守るべき時が来た時、お前は一度全てを失うだろう——。

そして、ただ、今は。

あの言葉を高らかに謳うだけ。

「『セーアレスト・オヴェル』！」

手のひらの中で風が瞬時に姿を変える。それを握り締め、次の瞬間、鋭く痛い金属音がその場に響いた。

自分に向かつてきた白刃を受け止めたものは、まごうことなき、青白い光を放つ白刃。そして鈍く光るは、鏢に彫刻された、鮮やかに羽を広げる銀翼の鷲。

「な……！」

「……まだだ。僕はまだ死ねない！」

そう叫んで、ウエルリーの剣を弾き飛ばす。相手がよろめいた隙に、胸倉を掴み、思い切り鳩尾を殴る。そして次の瞬間、首の後ろに一発手刀を食らわせると、彼はその場に倒れ込み、それきり動かなくなった。

大丈夫、殺してはいない。

「……」

続いて見た先に横たわっていた少女は、気を失っているだけみたいだった。握り締めていた剣は、手の力を抜くと、するりと手に絡まる風へと姿を変える。それもやがてふっと姿を消し、牢の中はいつも通りの空気へと戻った。その瞬間、弱まっていた蠟燭の炎が、消えた。

外の通路の光が小窓から差し込むだけで、辺りは薄暗い。その中で、少女を見下ろす瞳が、輝いていた。

——金と、片や深く鮮やかな、それでいて冷たい、青い色をした瞳が。

〔十一章：裏切りの風：3〕

——曇りかけた寒空の下、彼女の体を抱いて、歩いていた。

地下から上がった地上には、数年もの間ずっと放置されていたような庭園風景が広がっていた。牢のあった場所の上に立っていたのは、灰色の石が壁として積まれた、随分と古びた塔だけで、周りには草木しか見当たらなかった。

オルンクール城と言っても、その敷地の広さは計り知れない。それを思うと、この場所は以前使われていた城の一部の成れの果てと見て、まず間違いないだろう。

——上着を頭から被って、顔を上げず、彼は歩いていた。

手に入れたはずの自由は、少しも心地よくはない。これからどうしろというのだ。暗い独房から逃げ出しても、行き場所なんて何処にも見当たらない。一筋の光さえも掴めてはいない。道標なんて何処にも立っていない。

辺りを暗闇に囲まれた中、自分が今、やろうとしていることはなんなのだろう。

——いつそのこと、全てを消し去ってしまえたら、楽だろうに。

そして、全てを受け入れてしまえば、それでいいのに。なにがそれを拒み続け、足取りを重くさせているのだろう。何処に行けばいいと尋ねても、答えは返ってこない。それが現実だと思い知らされた。灰色の空を見上げて、その曇天はまるで今の自らの心のように、息苦しくてまた顔を伏せる。

光もなにも見当たらない。

——その闇の中をまた堕ち続け、行き着く場所は何処なのだろう。

垣根の硬い深緑の葉に触れ、エルストはくすりと笑みを漏らした。左手に持った銀の懐中時計は、もうすぐ三時半を指す。急にあんなことをして、顔を真っ赤にして怒った彼女を思い出すだけで面白い。

——氷のように冷たい人だとしても、それのもととなる水は澄んでいて綺麗だろうに。

と、その時、背後に気配を覚えた。

「……バカ者が」

振り返ると、いつもの黒衣に身を包み、懨然とした表情で彼女はそこに立っていた。

「一般常識というのを習わなかったか」

「どんな一般常識を？」

「仮にも一国のじき皇帝にあの態度はなんだ」

「あなたこそ、社交辞令つてものを習いませんでした？」

そう言つて、にっこりとエルストは笑った。

「召使いたちの中じゃ、既に公認の恋人同士だという噂も——」

「……なにが公認だ。なにが……！　じゃかあしい！」

顔を真っ赤にしてメアシルは怒鳴った。

「それに今はそれどころではないだろう、我が国は！　わかるだろう、お前に構っている暇などない！　戦争が始まっているんだぞ！　父上が亡くなって、私の即位式だってまだ済んではおらん！　こんな状況でそんな生温い平和染みた話など、どうでもいいことだろう！」

「……つまんない」

つん、とエルストは唇を尖がらせ、そっぽを向いた。それに呆れ果てたようにメアシルはため息をつく。

「……お前な」

「せっかくお役に立ててると思ったのに、邪魔者扱いなんてあんまりです。追い出す為に呼び出したんですか？　だったらこのまま帰りますけどね」

そしてわざと強気の口調で言い切り、様子を伺う。帰って欲しいのなら帰れと言うのだ。だが、もし帰って欲しくないと思っているのなら、後ろから抱きついてほしいところだ。そして涙でも流して、傍にいてくれなんて、なんてロマンティックだろう。

「……悪い。気が立ってるんだ」

思惑空しく、メアリルはそう言って、彼に背を向けた。

「即位も済まない間から、どうして戦争なんて起きる。ロルディオリースがそういう国だというのはわかってる。だが、どうも平和ぼけしすぎて……」

「自信がありませんか？」

「そうなのかもな。こう見えてただの十九の小娘だというのはわかってるだろう」

その声は、彼女らしくなく弱々しいものだった。

「……」

背中合わせに立っているわけでもないのに、その背中が震えているように感じる。

「裏切りには、慣れている」

背を向けたままメアリルは呟き、嘲笑した。

「ロルディオリースの味方は何処にいるんだ？ このままでは、孤島の帝国ではないか。私の代でこの王朝は終わるのか？ 周囲はそれを望んでいるのか？」

「負けるかもしれない、と仰るので」

「……レルバが三万の軍勢に倒されたんだぞ。それも国王が指揮官にしている可能性もある。海から攻められるのか、陸から攻められるのか、どちらにしろ国同士の掟を破り、あの魔術を使ってくるのなら厄介なのは目に見えている。その魔術を買って同盟を結んだも同じなのだからな。いくら銃撃部隊が完成したとはいえ、実用もしていない軍隊だ。それでもしオルンクールが落とされるようなことになれば、この国は終わる」

「ウェランドルスへの援軍要請は」

「ぬかせ。ハルシャが言い出すならわかるが、お前が言うとは似合わない。どちらにしろ、先のウェランドルスとの大戦で兵力は削がれ、持ち直したといえど、要は未完成に留まっている。それに最近、民衆の中での抵抗勢力の噂を聞いた。いろいろ思うのだが、もう我が

マデイスリート家は――」

「なにを弱気なことを言ってるんです。一国の皇帝ともあろうお方が」

「皇帝？　こんな若造を？　こんなただの十九の小娘を？　まだ即位式も済んでいない、ただの皇女を？」

「例えそうだとしても、あなたはメアリル・マデイスリート、そうでしょう？」

振り返り、ほら、と彼は笑いかけて彼女へと両腕を広げる。

「そうして生きてきたことに自信を持ってください。弱々しいあなたも護つてあげたくなりますけど、それ以上に私は支配者として自信家であるあなたも好きなんですからね」

メアリルはちらりと振り返り、

「……バカ」

そう言つて、泣きそうな顔で小さく笑った。

「なんだ、その手」

「慰めてあげようと待ってるんです」

「……私はそんな、都合の良い人間ではない」

「無理しないでください」

と、エルストは歩いてくると、やんわりと彼女を抱きしめた。

「……放せ」

「泣けばいいのに、泣かないでしょう」

「……今ので涙も乾いたな」

メアリルは彼の肩を押しやった。そして振り解く。

「私はそんなに、弱くないぞ」

と、その時、

『……下！　陛下！』

遠くの方からリヴェンティ大佐に呼ばれたような気がして、メアリルは辺りを見渡した。するとそれは気のせいではなく、慌てた様子でリヴェンティ大佐本人がこちらに駆けて来る。

「陛下！」

「どうした。なにか相手に動きでも——」

と、リヴェンティ大佐は足を止め、いいえ！ と首を横に振った。
「……さま、が、ハルシャお嬢さまがお帰りです！」

なにが起こつたのか、覚えていなかった。

気がつけば覚えのある香りのある部屋の、落ち着くベッドに横になつていた。しばらくは、どうして自分がここにいるのか、ただそれだけが頭の中を巡っていた。手にしていた擦り切れた包帯も、頭に走った衝撃も、目が覚めたその時は一体なんなのか思い出せなかった。

——これは夢なのかしら。

そう思つてベッドから降りて辺りを見回してみる。見慣れた家具、見慣れた雑貨——間違いなくそこは自分の部屋で、自分の部屋以外のなにものでもなかった。

「私、は……」

と、その時、

「——ハルシャ！」

勢い良く扉が開いたかと思うと、見慣れた姿がそこにあつた。だが表情は剣幕そのもので、とても、心配の様子も安堵の様子も見えない。

「お……姉さ……ま……？」

「お前——」

メアリルは大腿で歩いてくると、がっしりと彼女の肩を掴み、ベッドに押し倒した。

「お前、何故戻ってきた！ 誰が戻ってきていいと言つた！」

「陛下、そんな乱暴な——！」

慌ててリヴェンティ大佐がメアリルを力ずくで引き離す。

「よしませんか！」

「何故戻ってきた！ ええ？ お前、戻つてれば今度こそ機会は与えないと言つただろう！ すなわちあれか、奴らを私が始末して

もいいということだな！ 全て私が処理していいと――」

「どうか落ち着いてください！」

「落ち着いていられるか！ ……意を決して送り出したんだぞ。後悔せぬうちに奴の所へ手放してやったのに、その恩をお前は仇で返すぞ！ 何故戻ってきた！ どうして奴の許へと行かなかった！」

彼女はそう叫びきり、その場に沈黙が訪れた。開け放たれたままの扉の所でエルストは立ちすくみ、その光景を見ていた。罵った姉と、それに怯える妹と、間に立つ彼女の家臣と――そしてくるりと踵を返し、彼はその場からそつと立ち去る。

「……どうしてなにも答えずに黙っている」

メアリルはリヴェンティ大佐の手を振り解いた。

「どうして帰ってきた。その理由も答えられないのか」

「……ごめんなさい」

「私は理由を答えると言った。謝れとは言っていない」

と、陛下、とリヴェンティ大佐はメアリルをたしなめた。

「気を失っていたのを、届けに来た者がいるようです」

「は」

「城への道中で倒れていたのを、城の者かと思い、お連れした――と門番に言ったそうです。門番から直接話を聞いた召使いによりますと、その恩人の顔は見えなかったが、その――微かに、淡い茶色の髪を合間見たと」

「バッ……」

「……どういう、こと」

ハルシヤはゆっくりと体を起こし、ベッドから降り、おぼつかない足取りでリヴェンティ大佐へ歩み寄った。

「どうして、あの人」

殺されそうだったあの方は、無事だったの？

どうして、オルンクールに私はいるの？

「……どうして……」

ついさっきまで、すぐ傍にいたのに――。

「……どうして」

温もりがまだ、残っている。その声も、なにもかも、まだ――。

溢れる涙に、彼女は顔を両手で覆い、その場に泣き崩れた。

虚ろな目をして遠くを見ていた。何処か辛そうなのはわかっていた。だけれども、またこんなにすぐ離れて、一体私を置いて何処へ行ったの――？

状況が読めずに、メアリルはリヴェンティ大佐と顔を見合わせた。

「本意では、なさそうですね」

「……だな」

ふと彼女は扉の方に目を移した。だが、そこには誰もいず、ぱちくりと彼女は目を開く。てっきり、ついて来てそこに立っているのかと思った。いつもいつもいるなんて、そんなことはあるはずはない。だが、朝からずっとこの城にいたせいか、感覚がすっかりと麻痺してしまっている。

「……リヴェンティ大佐、誰か呼んでシヨコラでも入れてやってくれ」

「ええ。……あの」

「なんだ」

「父君のことは、あなたからお話しますか」

「……いや。お前から言ってくれ」

そう言って視線を逸らし、彼女は自嘲染みた笑みを漏らした。

「私から言っても、この冷静さを見て悲しんでないだろうなどと言われるだけだ。……少しこれからのことで整理したいことがある故、

私は部屋に籠る。オルンクルの全軍に戦闘準備を呼びかけておけなにか用があれば、部屋にいなければ射撃訓練場にいる」

そしてメアリルは踵を返し、部屋から出て行った。

「……何処に行った。あいつ……」

影武者のようにつきまといってくるから、すっかり隣にいるのが当たり前前に思っていた。でも、ちょっかいを出してくるのが鬱陶しいくせに、どうして一人だとも落ち着かない。

「……」

らしくもない。頭を振って、メアリルは考えを吹き飛ばした。先に射撃に出かけるか。久し振りに訓練するのも、悪くない。しばらく相手にしてあげていなかった戦闘用の銃を、手入れしてやらないと——自分も軍人なのだから。

オルンクルの校外にある小高い丘を登っていくと、小さな廃れた教会がある。

感じたことのない力の気配を、ふと感じ、胸騒ぎを覚えた。昔から他人の力の気配には敏感だ。自分より弱いのか強いのか、どんな属性を持っているのか——それも感じ取ってしまう辺り、この才能は伊達ではないと、いつも思い知らされる。

——悪魔の子か、私は。

そう思うことも、少なくはない。

感じた気配はまだ未完成でありながらも、自分と同じ色を発していた。周囲の風が疼くことから、どうやら嬉しいことに、同族らしい。

辿り着いたその建物の中に、どうやら胸騒ぎのもとはいららしい。扉を開けると、彼は廃れた神の像を見上げ、立っていた。

「そんな所で、最後の懺悔か？」

はっと相手は振り返った。

「どうやってあの地下から逃げ出した？——まあ、さすがだと言っておこうかな。それにしても、ハルシャ嬢までちゃっかり姉君の許へ返してしまって、これからどうするつもりだ。なにも言わずにウェランドルスに戻るのか？ それとも……」

「どうして、帰したってわかるんです」

ルイセラードは眉をひそめた。

「よりによって、この、僕が」

「私が誰か、忘れたわけじゃあるまい？」

そう言ってイルゼルは不敵に笑んだ。

「それはさて置き。君の友人が、どうやらこちらへ向かっているようだ」

「……は」

「そんなまさか。——アステイナたちが？」

「良い友人だ」

「……そうです、ね」

「ところで、その目を私に見せているということは、こちら側にいてくれる気に？」

「……あなたが思っている程、聞き分け良くありません。僕は」

埃の被った長椅子に腰掛け、ルイセラードはため息をついた。

「ここへ来たのは、懺悔のつもりじゃない。大体、僕は神に逆らい続けてきた人間ですから、その神に己の罪を浄化してもらおうなんて考えていない。あなただってそうなんでしょう？」

「だが、あいにく私は創造主たる神は信じないのでね。罪人意識もない。だから、自分で神になろうと高みに近づく」

中央の通路を歩き、イルゼルは隣までやって来た。そしてルイセラードの肩に手を置く。

「これからどうする？」

ん？ と、イルゼルは微笑んで首をかしげた。ちらりとそれを見上げ、ルイセラードは再び顔を伏せる。陽の当たらない薄暗い教会の中へ、割れた窓から、ふわりと風が吹き込み、頬をくすぐった。

「……一つ訊いても」

「ああ」

肩に置かれた手は大きい。髪を撫でた手は暖かった。

そう思ってしまう自分が少しばかり憎たらしい。自分の父親はあの人一人だと信じて生きてきた。なのに、脳裏に甦ってくるものは、殺意のこもった山吹の瞳、そして息苦しい首を締め付ける感触——。

忘れること、それはすなわち、人間の記憶に対する防衛本能。

思い出したくないことを思い出すわけもなく、ただ綺麗な浄化された記憶だけを持って、自分は彼に——。

「……あなたは、僕を殺さない？」

訊くと、どうして、と訊き返された。

「思わないよ」

「本当に……ですか」

「もちろん」

ああ、暖かい。

「……僕はここにいますから…… なにか用があつたら、呼んでください。お役に立てれば幸いです」

と、イルゼルは訝しげにルイセラードの顔を覗き込んだ。

「そんなこと言っているのか？ オルンクールが戦場になるんだぞ。今、城には彼女が——」

「……いいんです。ウェランドルスが軍を出すかもしれないでしょうし、そうなれば、あなたはウェランドルスとも戦う。ある程度割り切ってるんでしょう？ ……それに、彼女のことを割り切るにはいい機会です。敵同士は元々ですから」

「……そうか」

それ以上イルゼルはなにも言わなかった。ずっと存在が離れて、それがなんだか名残惜しくて、だけれど彼は踵を返して歩いて行く。廃れた神の像が見下ろす、その視線が痛かった。

これからどうしたいのかと問いかけるような目で見ている。割れた窓ガラスから、冷たい風が薄暗い教会の中へと吹き込む。

それがなんだか、寂しさを煽った。

「ち」

彼女の舌打ちの後、雷鳴のごとく、銃声がその場に響き渡る。的確は中心を射抜かれ、続けて同じ箇所にもう一発弾が打ち込まれた。肩に担いでいた戦闘用の銃を下ろし、メアリルは額に浮き出た汗を拭う。この銀の装飾銃は、彼女が特に好んで愛用するものだった。二頭の蛇——ロルディオリースの紋章が彫られたそれは、王族だけが手にすることを許されるものだ。

その時、ざわつと木々が風に揺れた。そして背後に気配を感じ、彼女は振り向く。

「お見事です。噂に聞く以上だ」

「……エルスト」

そこには、いつの間にかなくなっていた黒衣の青年が立っていた。

「頼もしい皇帝陛下だ」

「よせ。何処に行っていた」

「お邪魔みたいでしたから、ちょっと散歩に。そうしたら、銃を構えるあなたを見つけて……随分集中されているようなので、話しかけずに木陰から見えていたんですけどね？でも、あまりにも凛々しくて見とれていた——が正しい表現でしょうか。妹君は？」

「リヴェンティ大佐がついている」

「なら、心配することもないですか」

「ああ。ない」

メアリルは銃を構え、的を見据えた。と、その時、ふわりとなにかに背後から包まれ、彼女は思わず息を呑む。

「……エルスト？」

「なんでそんなにそっけないんです？ 言い切らなくても……たつた二人きりの姉妹でしょう……？ それでは妹君が可哀そうですね、お姉さん」

微かな吐息が頬にかかる。腕の力が抜け、メアリルは地面に銃を落とした。なにを言っているんだ、この男は——そんな言葉も脳裏を過ぎったが、何故か言い返す気も起きなかった。

「……放して、くれないか」

「それは私が嫌いだから？」

「いや、嫌いだとかそういうのではなく……だ……誰か見ていたら変な誤解を……」

「構わない。……だって事実でしょう？」

そう言っ腕の力を緩めたかと思うと、エルストはメアリルを自

分の方へ向かせ、左頬に右手を添えた。見つめられた黒の瞳にいつもの悪戯っぽさは見られない。

「……て、照れるんだ、が」

「ちゃんと女の子なんじゃないですか」

「な——」

そして彼は啞然としている彼女に、刹那、その唇にそつと口付けた。

〔十一章：裏切りの風：3〕（後書き）

一言。いつの間にラブコメになつたんだ！ていうか主人公、遂に裏切りましたね……第三部突入、終わりの近い！？

「十二章：犠牲の駒：1」

森の中にある『目印』のおかげで、迷うことなく一向はロルディオリーズへと最短距離で歩けていた。この数日、食事の度ハルヴィートに、お前が食料を調達して来い、と言われんばかりに引つ張られるのがいい加減嫌になって大人しく調達係になっていたスティルグは、今ではすっかりジェーナの荷物持ちに成り下がっていた。

ただでさえ小さな体が、彼女の荷物を持つのに疲れてくると、更に背が曲がって小さくなっていく。ああ絶対こいつは嫁に貰われな——そんなことを思っても、にっこりと笑って、先を歩いている彼女はその刹那に振り返ってくるのだから、そんなこともおかげさまでもう思えなくなっていた。

——情けない……。

よっこらしよ、と荷物を背負って歩きながら、今日もその一言に尽きる。

「重いんだよ、この……」

「なにか言ったかしら？」

にっこりと笑うその腹黒さ満開の笑顔が、近頃恐ろしい。

一人暗い影を落とした少年はさて置き、アステイナとジェーナは順調に足を進めていた。また目印が一つ。歩かないと見落とす可能性があるので、馬には乗れない。

「予定では、もうそろそろこの森は抜けるはずだが。今日中には抜けるだろうか」

「行けるんじゃないの？ 誰かさんがもっとシャキシヤキ歩けば」

「あんまり虐めてやるなよ」

「こき使ってるだけよ」

きっぱりとジェーナは言い切る。

そうして歩いているうちに日は高く上がり、そしてまたしばらく経って傾き始めてきたその時だった。

「……家だ」

ぽつりとアステイナは呟き、足を止めた。「いや……にしてはでない」

「でも、建物！」

「お、おい」

ジェーナは一人走り出した。だがその時、草むらからなにかが飛び出てきて、思い切りぶつかり、彼女はその場に大きくしりもちをつく。

「いつ、いった……っ！ ちょっと、なに——」

「う……」

「え？」

だが、目の前にいた相手に彼女はぱちくりと目を見開いた。

——子供？

長く伸ばされた金の巻き毛と、自分と同じ紫の目。四つか五つくらいの子だろう。その大きな真ん丸な目にたくさん涙を溜めて、今にも泣き出しそうにこちらを見ている。さすがのジェーナもそれには焦った。

「ご、ごめんね、大丈夫だった？」

だが次の刹那、少女はわんわんと声を上げて泣き出す。

「あ……な、泣かないで、ね？ お姉ちゃんが悪かったから……」

！ 何処か怪我したの？ 何処が痛い？ ねえ……」

でも、少女は大声をあげてわんわん泣くばかりで、ジェーナは心の中で白旗を揚げた。背後から冷たい視線を感じ、なによ、と彼女は振り向く。

「そんな鬼みたいな顔しても逆に泣くだけだし」

「なんですって！」

その声に反応するかのように少女は更に泣き出す。それに、嫌味なステイルグに反論する気も、もはや起きなかった。あいにく子供相手の対処法は知らない。接客なら自信はあるが子供の世話は自信がない。

と、その時、退けよ、と彼はやって来ると、ジェーナを押しつけて少女の傍にしゃがみ込んで視線を同じにした。そして、ぽん、と少女の頭の上にその手を置く。

「びっくりしたんだよな、お前。こんなおばちゃん出てきて」

「おばっ……」

「俺よりは年食ってるだろうが」

スティルグは慣れた様子で少女の涙を拭い、軽々と抱き上げた。

「嬢ちゃんのおうちは何処なのかな？ あっちなかな？ そっちなかな？」

「——それともお空の上？」

「うっ……あ、あっちの、あそこっ……」

「なら、帰ろっか」

と、こくりと少女は頷いた。そして不思議そうに首をかしげる。

「おにいちゃん、だあれ？」

「さあ、誰でしょう。でも通りすがりの魔法使いなんて綺麗なものじゃないよ。——堅物、そっちのバカ馬よろしく」

そしてスティルグはしてやったりな顔でジェーナを一瞥すると、建物の方へと歩き出した。それにジェーナはギリギリと奥歯を噛み締める。

「なによ……むかつく……！」

「今怒ると、また泣き出すぞ、女の子」

「アステイナまで！」

「でも、子供に慣れてるんだな、奴は」

「……」

ジェーナは一つ思う節に行き当たった。だが、知らない！ と言いついて歩き出す。

思い切りしりもちをついたおかげでお尻と腰が痛い。

先に行く少年と幼い少女の一行を見て、子供だからっていいよなあ楽できて、なんて思ってしまう。

——年取ってるのは、確実よね……。

そんな悲しい現象を感じながら、とぼとぼとジェーナは歩いて行

った。

辿り着いた建物は、二階建ての屋敷だった。ごめんください、とアステイナが扉をノックすると、しばらくして黒髪に白髪混じりの老人が出てきた。

「じいさま！」

ステイルグに抱きかかえられていた少女は、その老人を見るなり声を上げる。彼が降ろせば、彼女はとたとと走って行った。そして老人の足に抱きつく。だが、その老人の瞳は、双方とも黒い。

「セルリイを送り届けてくれたのかい？」

老人はアステイナを見て言った。

「え、ええ。こちらの連れとぶつかってしまつて……すみません。

怪我がなければいいんですけど——」

「セルリイ、どこもけがしてないよ」

少女はそう言つて老人を見上げた。「あのね、じいさま、おにいちやんたちとまるところがないんだつて。あのおにいちやんみたい！」

「旅のお方……かな？」

そう言つて老人はアステイナたちを見比べた。

「良ければ、部屋は空いているのだがね」

「え、ですが——」

「いいじゃない、アステイナ」

と、ジエーナが言った。「悪いんだけど、あたし、腰痛いのよね」

「だが、できるなら今日中にはオルンクルの手前には——」

と、その時だった。

「オルンクルは行かない方がいい。先日皇帝陛下が崩御されて、息を潜めている反政府団体が動き出したという噂も聞く」

老人の言葉に、アステイナとジエーナは顔を見合わせた。

「とりあえず、部屋へと通そうかな。旅の人」

彼は、こつちだよ、とセルリイを連れ、建物の奥へと薄暗い廊下を歩いて行った。

まず二階の部屋に通され、荷物を置いた後に、次に一行が案内されたのは屋敷の裏にある広い庭だった。

そこには他にも数人の幼い子供たちがいて、泥団子を作ったりして遊んでいる。黒い髪と同じ色の瞳をした男の子と女の子、それに見覚えのあるミルクティー色の髪と、オレンジの瞳をした少女が二人、茶色い髪と水色の瞳をした少年が一人、そしてセルリィを合わせて――六人。

「……ほう」

ぼつりとアステイナは呟いた。オレンジの瞳と水色の瞳を見て、ふと脳裏にあの二人組みが過ぎる。あれから無事に、ロルディオリズへは入れたんだろうが。まあ、悪人の心配をしてもどうしようもないが。

「おじいさん。この子たちは……」

「ああ。ウェランドルスの侵攻のおかげで……親とはぐれた子や、亡くした子、いろいろだ。グランディスナは中立、だったかな」

「ええ。ち――皇帝陛下が、そういう面倒なことに首を突っ込むのが嫌いなので」

危ない。

なんとか父上と言いかけたところを抑え、アステイナは一息ついた。

「この子らにとっては、この子ら皆が家族だ。……そういえば、自己紹介もまだだった、かな。私はジョルズ・トールスという。あなたは？」

「アステイナです。そっちの紫の目はジェーナ、少年はスティルグと」

「……ほう？」

と、ジョルズはアステイナの顔を覗き込んだ。

「な、なにか」

「……なるほど。あまりに別嬪さんなもので、区別がつかなかった」

「は」

と、その時、ジェーナが大声を上げて笑い出した。

「アステイナ、あんたやっぱおしゃれした方がいいって」

「なにを」

「女の子に見えないでしょう？ そんな剣まで持ってちゃあ、尚更ね」

「いいんだ。女よりは男に見られた方がいい」

と、次にはジョルズまでもが小さく吹き出した。

「では、中でお茶でも飲みながら、話そうかな。今のロルディオリズのことについて」

「あたし、抜けるわ」

と、ジェーナは庭に置いてあるベンチに腰掛けた。「かつたるそ
うだもの。でも——そうだな、おじいさん、夜ご飯の準備するんだ
ったら呼んでくれない？ お手伝いするわ。とっておきのごちそう
作ってあげる」

「ああ。助かるよ」

と、ジョルズは屋敷の中へと入っていった。それにアステイナも
続く。それを見送って、はあ、とジェーナは一息ついた。

「……あんたはどーすんのよ。荷物持ち」

「誰がそんなものになった」

言葉で一蹴りして、ステイルグは空を見上げた。

「そうだな、飯食ったら寝る、とか」

と、その時、くいつと衣の裾を引っ張られ、彼は足元を見下ろし
た。

「……？」

こちらを見上げていたのはセルリイで、彼女は衣を握ったまま放
さない。

「……ふわふわしてる。あったかいの？」

「あ……」

「おにいちゃんも、いつしよにあそぼ？」

「……」

目の前の少女が、黒髪の幼子と重なって見えた。手を伸ばして、ぼん、と少女の頭に手を置き、ぐしゃぐしゃと彼女の頭を撫でた。

「ふぎゃああ」

「あとで、みんなと」

そしてその小さな手をそっと引き離す。

「あとで？　ほんとに？　ぜったい？」

「ほんと。じゃあな」

普段は作らない笑顔を無理に繕って、ステイルグは踵を返した。足早に中へと戻り、先程案内された部屋に戻ると、まもっていた衣を脱ぎ捨て、丸めてベッドに投げつける。

擦り切れて、つぎはぎだらけになった服、腕には無数の傷。

振り返りざま、ステイルグは手のひらに爪が食い込む程拳を握り締め、思い切り壁をぶん殴った。みしっときしむ音がしたのは壁の方か、それとも自身の手の方か。――どっちだっていいけれど。

と、その時だった。視線を感じて思わずそちらを睨みつける。

「……てめえ」

「あ、ご、ごめん、悪気は……ないとは言えないけど」

「お前の場合、ありまくりだ」

ステイルグは壁にもたれ、そのまま床へと座り込んだ。

「あんた、あまり動くと、傷開くわよ」

「うるさい」

「うるさくない。あのフェイエルにやられたの、まだ治ってないでしょう」

「……うるさいな」

「あたしが言わなきゃあ、誰が言うのよ」

ジェーナは目の前にやって来てしゃがみ込むと、じろりとステイルグを睨んだ。

「見せなさい」

「治った」

「嘘つけ」

「嘘じゃない」

「頑固者」

「それはお前だ」

「……！」

「……なんだよその目は」

そしてしばらくにらめっこ、と、先にため息をついたのはスティルグの方で、やめようと一言、立ち上がって彼女を通り越す。

「お前相手に喧嘩しても楽しくない」

「あら、さりげなく侮辱してる？」

「寝る」

そう言つて、彼はベッドに倒れ込んだ。

「出てけよ。そもそもなにしに來たんだよ、お前」

「心配しに來たの。わかんないとも思った？ わかってないとも思った？ このあたしが。同じような経験あるから、独りで泣いてやしないかと思ってこうやって來てやったのに。似た者同士、腹割つて話せるから來てあげたのに。あんたの事情知ってるのあたしだけだから來てやったのに」

椅子の上に置いてあつたクッションを手に取り、ジェーナはそれを思い切り彼に投げつけた。

「いつ……」

「ありがとの一言もないのかな、おバカさん」

「……」

「まあ、気が向いたら言つてちょうだい。それはそうと、あんたも笑う時があるのね」

と、ジェーナはやってくると、ベッドに腰掛けた。

「休戦協定結ばない？ いい加減、あたし疲れてきちゃった。あんたに突っ込むの」

「そ」

そう一言言っただけ、スティルグは投げつけられたクッションに顔をうずめた。

「……帰れよ」

「戻ったって、セルリイの相手はあたしじゃきついわよ」

「それで俺に押し付けようたって、嫌だ」

「妹さん思い出すから？」

ぴたっ、とその場の時間が止まったように沈黙が訪れた。

「……。ふうん」

「……」

「凶星だね、少年。一人で泣く時間でもあげようか？」

と、ジェーナはベッドから降ようとした。だが腕を掴まれて、彼女はぱちくりと目を開く。

「……？」

「……余計な心配だ、バカ」

「でもどうして引き止めるかなあ？」

そう言っただけでベッドに腰掛けなおすと、刹那、彼は腕を放して彼女に背を向けた。

「寝る。うるさい。やっぱ出てけ」

そしてクッションを頭から被って、それきりスティルグはなにもしなかった。それにため息をついて、ジェーナはベッドから降りる。

「素直じゃないし、可愛くない。バカちび」

晩ご飯には起こしにくるからね、とジェーナは部屋を出て行った。

故郷の宮殿の食堂とは比べようもない、テーブルと蝋燭台だけがある質素な食堂にアステイナは通された。ジョルズは彼女に少し待っているように言っただけで何処かへ消え、なのでしばらく椅子に腰掛けて部屋を見渡していると、カップの二つ乗った木製のトレイを持って彼は戻ってきた。

「コーヒーは飲めるかね」

「ええ」

香ばしくて甘い匂いに、思わず顔がほころぶ。

「どうぞ」

ジョルズはカップをテーブルに置き、アステイナに差し出した。そして向かいの席に腰掛ける。

「なにか話そうかな、旅のお方。でも何故オルンクールに？」

「……」

アステイナはカップにかけかけていた手を、止めた。

「……友達が、待ってるんです」

「ご友人が？」

「ええ。それ以上は申し上げることはできないんですけれど。……変わった奴でしてね」

「だが、今のオルンクールは危険過ぎる。最近になって各地で反乱が起きているし、皇族への不満も溜まってきているんだよ」

ジョルズはコーヒーを一口飲み、だが、とため息混じりに呟いた。
「ウェランドルスとの戦争を開始しろという奴らもいる。そういう組織もある」

「だから、行かない方がいいと？」

「加えて、クラウディスルグ国軍が反旗を翻したらしい。オルンクール陥落が目的ではないかと、一部の人間ははやし立てている」

「……そう、ですか」

そう言っただけにしたコーヒーはほろ苦い。

——それでも、行かねばならないのだが。

「そして、戦争を」

「クラウディスルグは、味方にいけば頼もしい国だ。だが、そういう国は敵に回るとどうなるかわかるかね」

「脅威になるかと」

「……この戦争、ロルディオリーズは勝てないと、私は思う」

その言葉に、ぱちくりとアステイナは目を開いた。世界一の軍事大国であるロルディオリーズが負ける？ 同盟を結んでいる、東の

隣国に。あれだけの戦力を持ちながら、負けるというのか。あの黒い軍隊が。

「そんな――」

「クラウディスルグの術師は厄介だ。だから先代皇帝は味方につけた。敵に回したくなくてな。だが、それに反乱されてはどうだろう？ 指揮を執るのは、まだ十九の即位もままならない皇女だ。先代に似て支配者肌らしいが、まだ若すぎる。今の時勢、軍部内でクーデターも起きないとは限らない。オルンクールが混乱すれば、それだけ不利だ」

「それでも、ロルディオリーズ軍は」

「負ける時は負ける。倒される時には倒される。時代の節目はいつの時代もあるものだ」

「ですが」

そんなことはないと言いかけて、アステイナは口をつぐんだ。確かにそれも一理ある。現に、ウエランドルスが勝利すると思われた戦闘、ロルディオリーズは引き分けまでに長引かせ、持ち込んだ。

「それでも行くなら、紹介するがね」

そう言つて、ジョルズはアステイナに微笑みかけ、一切れのメモを取り出した。

「オルンクール、デイズベール通り三十二番地。シャドルズ・カフエ。世の犯罪者お得意さまのコーヒーショップだよ。最近では反乱を起こそうと時を待っている奴等のアジトとなっている」

「……は？」

首をかしげると、ジョルズは依然微笑んだまま、話を続けた。

「孤児院を開いて、十数年になるがね。私が引き取って育てた子の中に、夕焼け色の瞳をした少女と、水色の瞳をした少年がいた。今でも時折、彼らはここに来てくれる。もう世の中では有名なのだろう、リメンバー泥棒として名を馳せるフェイエルとシェイレルの存在は」

「なん……っ！」

ガタンとアステイナは思わず席を立った。

「なんですって！」

「彼らもここにいた。……戦争でロルディオリーズに流れてきた難民の孤児たちだった。その身体能力を買われて、何処かに引き取られたその日のことは、今でも鮮明に覚えている。それがまさか皇族に使われていたとは、ここ数年まで思いもしなかったが。なにも彼らからは話してくれないものだから——。ここは、その彼ら御用達だ」

「……あいつら」

脳裏に、あの陽気な少女と殺気を放つ少年の姿が浮かんた。あれからどうしただろう。無事にオルンクールへは来れたのだろうか。もしかしたら足止めに遭っているかもしれない。だが彼らなら、多分——。

「……ありがとうございます」

アステイナは差し出されていたメモを受け取った。

行ってみる価値はある。だが、犯罪者御用達のコーヒーショップなど、気が進まない。いや、それでも既に連れに犯罪者を一人抱え込んでいるか。

遠くの方で聞こえたような気がしたスティルグのくしゃみはさて置き、アステイナはまじまじとメモを見つめた。

——かの彼は一体、その街の何処にいるのだろうか。

ちゃんと和解していなかった。和解をせずに、あんなことになってしまった。彼の行為は許されることではない。だが、今それを否定すれば、彼自身の存在を否定することになる。

それを、肯定したくなかった。

ぽつかりと、穴が空いたみたいだった。

「十二章：犠牲の駒：2」

人の気配のない森の中を進む人影が二つ。気配を消して歩くのは慣れているが、今となってはもうそれも無意味な気がしてならなかった。気配を消しても足止めはやって来るものなのだから。それに――。

「……ねえ」

「なんだ」

「なにをそんなに殺気立ってるのよ」

レイーナは足を止め、前を歩くクラルグの服をぐいっと引っ張った。

「怖いんだけど。剣も背負わずに持ったままで」

「……別に殺そうとかは思っていない」

振り返り、クラルグは彼女の手を放した。

「それにお前を殺すつもりもない」

「当たり前でしょ、っと」

「うおっ」

と、レイーナはクラルグの背に飛び乗った。

「おんぶ」

「……お前」

呆れたように彼はため息をつき、飛び乗ってきた彼女を背負い直した。そしてのんびりと歩き出す。

「もう疲れたのか？」

「別に。血の臭いがする。また吐いたんだ」

「今は気分がいい」

「……そ」

ねえ、と彼女は灰色の髪に顔を埋める。

「初めて会ったのって、いつだったっけ？」

「さあ。……随分と前なんじゃないか。十年か、もしかしたらもう

少し先か」

「そうかな。砂漠で砂嵐の中一人迷子になって、このまま死ぬって思ってたなら、あんたがいたの。二人とも迷子なの。あたしは他の難民の人たちとはぐれて、あんたは気がついたら両親に置いてけぼりにされてたって言った」

「それで、ロルディオリーズに着いたら着いたで、いろんな孤児院やらをたらい回し」

小さく笑って、クラルグは足を止めて彼女を背負い直し、また歩き出した。

「あんまり覚えてないよ、その頃のこととは」

「あたしも。……でも、あんたで良かった。灰色の髪も水色の目も、大きな手も、あたしは好きだよ。お嬢さまの想いに負けないくらい、好きなんだから。……聞いている？」

「そういうことを、耳元で言うな」

足を止め、クラルグはレイーナを降ろした。

「おんぶは？」

「やめ」

「照れてる？」

「照れてない！」

だが彼の耳は真っ赤で、レイーナはお腹を抱えてケラケラと笑い出した。

「ごめんごめん、すぐ顔に出ること忘れてた」

「笑うな。今度無理矢理押し倒すぞ」

「やだ怖い。たまにはロマンティックを求めても罰は当たらないと思っただけだな——」

と、その時だった。

——ざわっ。

胸騒ぎがして、とっさに二人は剣と槍を抜き、背中合わせに立った。

「なにか、来る」

ざわざわと周りの木々たちが揺れる。頬を切り裂くような冷たい風が吹く。木の葉が散り、上空を舞う。風が森の中をうねる。吹き抜けるのではなく、まるで挑発しているかのような。

「……ウェルリー・サルディナクロス」

呟き、クラルグはぐつと剣の柄を握った。

「なんで来る。急いでいるのに」

「急いでるから来るのよ。要するに足止めでしょ。来ないでも思っただ？」

「バカ言え、予想はついていた。来ない方がおかしい」と、刹那、

「そう言ってもらえると、嬉しいな」

ざつと二人の行く手を阻むかのように、黒衣の人影が降り立った。きらりと光ったのは水晶の耳飾り、右手には磨き上げられた刀剣が握られていた。

「少しばかり気が立っててね。もう少し待っても良かったんだけど、予定が早まったんだよ。何処かのバカが、僕を殴り倒して逃げたもんでね」

無理矢理作っているその笑顔が、ぴくつと一瞬引きつった。

「逃げたって、それは誰が」

レイーナは槍の刃先を相手に向けた。

「……お嬢さまは何処」

「さあ？」

そう言って相手は唇の端を吊り上げて笑う。クラルグはレイーナの肩に手を置き、聞えない程度の声で耳元に囁いた。

「相手は一人だ。お前はお嬢さまを頼む」

まるでじゃじゃ馬娘を諷めるように、軽く頬にキスを添え、彼は敵に向き直った。

「……手を出すなよ、レイ」

「バカね。相変わらず」

ふふんと笑って、レイーナは相手を見据えた。そしてぼつりと、

五、とだけ呟き、地面を蹴って走り出す。右手には槍を構えて。それにウエルリーは右手に剣を構え、左手をすつと差し出した。刹那彼の呟く言の葉に周囲の風が強く吹き抜け出す。彼の左の青い瞳はこちらに向かつてくるレイーナへと向けられ、まさに術が発せられようとしていた。

——だが。

「遅い！」

そう叫んだ声は背後からで、目の前で彼女は高く跳躍する。

「なっ……」

上空でくるりと一回転して降り立つその身軽さは、噂に聞くフェリエルのもの。立ちはだかる敵を通り過ぎ、再び走り出す彼女に慌てて術の矛先を向けるが、すさまじい殺気が彼の神経を貫いた。反射的に反応した右手が、甲高い金属音を立てて向かってきた白刃をギリギリで食い止める。

「死神つてのは、神出鬼没だつてことを言うんだよ」

首筋に切っ先が当たる。下から見上げてくるその水色の瞳は冷たく透き通り、剣に込められたものは間違いなく本物の殺気。

「悪いね。聞き分けのいい相棒で」

「今更彼女を行かせて、なんになる。状況は変わらない。ハルシャ嬢が無事だということもわかってるはずだ」

「お前が信用できないからな。俺も、あいつも」

「……そういうこと」

と、ウエルリーは右手を素早く一払いした。反射的に危険を感じ、間一髪飛び退いたクラルグは、なんとか作り出された風の刃をかわした。そして瞬間、すぱん、という音に振り返ると、それは背後の木を丸ごと一本、切り倒す。

「……かまいたち」

「術者相手に一人は、さすがに道を誤ったんじゃないかな。君も」
そう言つてウエルリーは剣を構え直した。だが、違うな、とクラルグは首を横に振る。

「正解だったよ。彼女はここにいない方がいい」

「逃がしたのか」

「俺も誰かと同じでバカだから、そうしたくなる。——っ」

喉になにかがつつかえて、口を押さえてクラルグは咳き込んだ。

「それに、もう……長くないみたいだからな」

初めて血を吐いた頃とは違う、真つ赤な鮮血ではなく、手についたのは赤黒い血。もう生きられる時間は、二、三週間といったところだろうか。それは多分、彼女も知っている。知っているからあんなわがまま娘になったりするんだと、予想はついていた。ついたとしてもしてやれることは、そのわがままを聞くことくらいだ。

「死神らしくお前をあの世に送ってやるよ。……地獄へな」

殺してでも、食い止める。

——あいつには、指一本、触れさせやしない。

来いよ。そう目で語りかけて切っ先を向ければ、相手は地面を蹴った。そして最初の一振りを右腕一本で受け止める。甲高い金属音が、耳の奥に響いた。

「……そんなもんか」

普通の人間が両手で受ける攻撃を、片手で防げれるこの力は生まれつきのものだ。ラディスカルスの中でも、灰色の髪を持つ一族だけに見られる、一族特有の力。故郷では、その人離れた力と、この髪を生まれつき持つ者たちをこう呼ぶ。

——死神族、と。

死神と呼ばれる由縁の、それもまた一つだった。

「……僕は負けない」

ウェルリーは重なった剣を弾き、その場から飛び退いた。

「ここでお前たちを抹殺してくるよう、陛下から命じられた」

「その理由は俺たちが邪魔だからか？」

「ああ、そうだ。陛下の計画には邪魔だ」

風が吹き荒れ、砂埃が立つ。それは何処かクラルグに祖国の砂漠を思い出させた。

「いつも、お前が彼女を攻撃から守った。攻撃力はあるが防御に乏しい彼女の盾、それがお前だ。その盾を壊せば、彼女も無力となる」
「だから——、ごほっ」

咳き込んで、口の中に広がったそれは、唇の端から顎に伝い、赤い滴が地面へと落ちた。

「やっぱレイを行かせて良かったよ。……最後に見るのがあいつの泣き顔なんて、地獄へ落ちるにしても、まず浮かばれないだろうから」

軽く咳き込めば、また口の中に血の味が広がる。

「——お前を、刺し違えても殺してやる」

アステイナは手にメモを握りしめ、部屋に戻って眠っていた。辺りは静かだった。その静けさに身を委ねていると、いつの間にか夢の中にいた。

だが、甲高い幼い少女の悲鳴が聞え、アステイナは反射的に体を起こし、ベッドから降りて窓を開けて辺りを見渡した。

——なんだ、今は。

剣を握りしめ、部屋を出て、ステイルグのいる部屋の扉を蹴破ろうとした刹那、その扉が開く。

「お、銀髪」

「今の」

「庭だ」

それだけ呟き、ステイルグは廊下を駆け出そうとしたが——。

「めんどくさい！」

部屋の中に駆け戻り、窓を開けるなりそこから飛び降りた。その光景にぱちくりとアステイナは目を見開く。

——面倒くさいのはわかるが、なにも飛び降りなくとも。

だが、そんなことを考えている場合ではない。はっと我に返り、そんな飛び降りる運動能力のない自分は廊下を駆け出した。そして中庭へと走る。

一方飛び降りても無傷なスティルグも、剣を抜いて中庭へと走った。

だが、角を曲がり、中庭へと飛び出した彼はその場の光景に息を呑む。

「……お邪魔してるわ。緑の瞳の王子さま」

セルリイを抱え、首に切っ先を向けているのは、艶やかな桃色の瞳をした、黒衣をまとう赤髪の少女だった。彼女の周りには、小さくうめき声を上げる、先程までは元気に遊んでいたであろう幼い子どもたちが倒れている。そして、真っ先に駆けつけてきたであろう、あの老人も倒れていた。

「……お前。誰だ」

「シュレーヌ・フォルクスティング。銀の髪のお嬢さんから聞いてない？」

と、彼女——シュレーヌはセルリイを放した。

「おにいちちゃん！」

涙ながらに叫び、スティルグはその場に膝を折ると、飛び込んできた少女を抱きしめた。そして嗚咽の止まらないセルリイの頭を撫でる。

「大丈夫。大丈夫だから」

強く抱きしめてしまえば、潰れてしまいそうな華奢な体が震えている。

「……大丈夫」

耳元で呟けば、その少女の強張った体から力が抜け、落ち着きを取り戻していくのがわかる。と、その時、丁度中庭にアスティナが駆けてきた。この場の状況に彼女もまた息を飲むが、齒を食いしぱり、剣を抜いた。その向こうからジェーナも駆けてきた。

スティルグはセルリイの背を軽く叩いて立ち上がり、彼女を自分の後ろへと庇う。

「ジェーナ。セルリイのこと頼む」

すっと鞘から二本の剣を抜き、その白刃を構える。「銀髪、お前

は倒れてる奴らを、こいつらと一緒に」

「待て、お前一人でやるつもりか」

「見誤るな。これでも天下のジルヘウスの若頭やってた人間だ、俺は」

その鮮やかな緑の瞳が、ずっとシュレーヌを見据えた。そしてにやりと唇の端で笑う。

「甘く見んなよ」

小柄な彼の体が大きく見える。それは、放たれるあのシェイレル同様の殺気のせいだ。

「……なら。周りの人間の怪我、そんなに大したことはない」

と、アステイナは剣を納めた。

「ジェーナとセルリイに任せておけ。そいつは足止めだろう。私にはルイセラードとジュリーナさま、そして兄上を連れ戻す義務がある。……援護を」

と、アステイナは甲高く指笛を鳴らした。

「ゲオルドに乗って突っ切る」

「バカか」

「バカだ」

耳に聞えてきたのは、だんだんと近づく蹄の音。

シュレーヌはアステイナに切りかかるが、瞬間、二人の間にステイルグが割って入り、シュレーヌの剣を受け止めた。

「行け！」

「すまない！」

と、アステイナは蹄の音の方へ駆け出した。

「くそっ……！」

シュレーヌは悪態をつき、アステイナの後を追おうとする。だが、ステイルグが行かせまいと再び彼女の前に立ちはだかった。

「くっ……どきなさい！」

次の瞬間、甲高い金属音がその場に響き渡た。シュレーヌの剣を、ステイルグは右手の剣一本で受け止める。

「どくのよ！」

「あいにく俺は素直じゃない」

左手の剣で切りつけるが、寸前で彼女は身を屈めて逸らし、懐から取り出した短剣を手首を利かせて投げつけた。

「おっ」

それをステイルグはとつさに飛び退いて避ける。

「……危ねえな、やるじゃないのお姉さん」

「あなたを殺す。陛下から承った命は一つ。リメンバーの継承者の継承権の剥奪」

「……どういうことだ」

くすくすと目の前の彼女は笑う。

「それもこれも、陛下の作る世界の為。取り返すなんて無謀なことは考えないで、大人しく陛下に従いなさい。齒向かうのなら、最終的には——」

シュレーヌの艶やかな桃色の瞳に、すっと暗い影が落ちた。

「世界の為に、死んでくださる？」

「十二章：犠牲の駒：3」

「……つまんなーい」

そう言つて、ジユリーナは後ろから読書にふけるアルディクに抱きついた。

「ぐえっ」

「メアリルさまも来ないし。誰も来ないし。つまんなーい」

「メアリル嬢以外は来ないよ。僕ら、極秘で攫われて来てるっばいから」

「でも退屈嫌いー。本なんか読まないでー」

「……了解」

アルディクは、ぱたん、と読んでいた本を閉じた。そしてジユリーナの腕を解く。

「暇なら、脱出方法でも考えてみる？」

「え？」

「僕は自称やればできる人間だから、やってみる価値もあるかなと思つて」

「でも、メアリルさまに迷惑かかるもの」

「誘拐犯に迷惑はかかっていいと思うけど」

と、ダメ！ とジユリーナはアルディクの背を思い切り叩いた。

「い……痛いよ」

「そんなのダメ！ 絶対ダメ！ メアリルさまは悪い人じゃないものの！」

「でも、いい加減脱出でもしないと、殺されるかもしれないよ？」

「大丈夫！ メアリルさまはそんな人じゃないもん！ また叩くわよ？ 髪の毛いっぱい三つ編み作っちゃうよ？」

「……ゴメンナサイ」

まったく、敵わないんだから、困ってしまう。

アルディクは小さくため息をつく。その時、カチャリ、と鍵が開

いた。

「虫の居所が悪ければ、殺すぞ」

そこから覗いていた人物に、キラリとジュリーナは目を輝かせ、アルデイクは腰掛けていた椅子から立ち上がり、彼女を庇うように立った。――冗談半分か、銃口がこちらに向いている。

「いつからそこにいたんです？」

「さあ。……私を信用してくれるのは有り難いのだが、あいにくそんなお人よしではない。ジュリーナ嬢、遂にあなたのリメンバーを頂かなければならなくなりましたね」

「どうして？」

「その秘められた力が操れるものなら、利用してみたいものなんですよ、戦争にね。現にできる。――そのすべはある。あるからこそ、私は更なる軍力増強にそれを使わせてもらおうと思っている」

「……戦争？」

「そうですよ。戦争です」

そう言って彼女は笑う。だが、目は笑ってはいない。

「そして、もう用のなくなったあなたたちには死んでもらおうかなと思います」

彼女は引き金にかけた指の力を強めた。それを感じ取ったアルデイクは反射的にジュリーナを抱えてその場から飛び退く。刹那、雷鳴が轟いたかと思うと、

ガシャン！

「……」

目をやると、天井にあつたはずの照明が床に落ち、粉々になっていた。ジュリーナを抱えた腕は震え、額を冷や汗が伝う。

――まさか、本気で？

「メアリル嬢、あなた……」

「ここはオルンクルの敷地の中でも、外れに位置する塔の中。誰も来やしませんよ。……さあ、渡してもらおうか。ウェランドルスのリメンバーを」

そして銃口がこちらへ向く。

「アルデイクさま」

「渡してはいけない。ウェランドルスが配下に入ればどうなるか――」

だが、ジュリーナは首を横に振って立ち上がり、首からさげていた“それ”を外した。

「お父さまはこんなものに、頼りません。周りや家臣が頼るだけで、お父さまはこんなことに屈しない」

そして彼女へと差し出す。

「どうぞ。……でも、何処との戦争です？」

「さあ」

彼女はそれを受け取り、踵を返した。そして部屋を出る瞬間にふと振り返る。

「健闘を祈ります」

それだけ言い残し、彼女はその場を去った。鍵が再び閉められる。――どうして、渡したんです」

体を起こし、アルデイクはジュリーナを見上げた。すると、きよとんとした目で彼女は答える。

「あなただって、渡したでしょう？」

「……そうでした」

「それに、メアシルさまは悪い人じゃないもの。大丈夫」

そう言って彼女は微笑む。――まったく、敵わない。

「その言葉を、信じるのでしょうか」

と、その時、なにか焦げ臭い臭いが鼻先を掠め、アルデイクは目を細めた。

「……嫌な臭い……」

「嫌な臭い？」

嫌な予感が脳裏を駆け抜け、彼は慌てて立ち上がり、扉の鍵穴から外を覗いた。

「まさか……！」

「お魚でも焼いてるの？　なにか見える？」

「ジュリーナ、ちょっと下がってて。このままじゃ焼き魚とか燻製とかローストビーフとかソーセージになるかもしれない」

鍵穴から見えた――いや、なにかが目に染みて目を離せば、扉の隙間から入ってきたのは、紛れもなく白い煙。

「……なに、これ……」

「下がって」

と、アルディクは目をこすり、身構えた。そして扉に気合一発、回し蹴りを食らわせる。と、鈍い音がしたかと思うと扉は向こう側へ倒れ、部屋の中に真っ白な煙が一気に立ち込めてきた。

ぱちぱちぱちとジュリーナは拍手を送る。

「有り難いけど、拍手してる場合じゃあつ……」

外は真っ白な煙だらけ。

「なるべく煙は吸わないようにして」

「どういうこと？」

「火事だよ、火事！」

とりあえずジュリーナの手を引き、アルディクは部屋から出た。だが、鮮やかなオレンジ色の炎が勢い良く上がっていて、諦めて一端部屋の中に戻る。

「おいしそうなステーキになっちゃうわねえ」

「焼き加減はさしずめ、ウェルダムだよ」

だが、階段はここしかない。部屋に窓はない。逃げ道はない。

「ジュリーナと心中は嫌じゃないけど、死にたくはない」

「……ええ」

「怖い？」

訊くと、どうして？　と彼女は微笑んだ。

「だって、逃げるんでしょ？」

そう言って、うふふと彼女は笑う。「こういう場合、暖炉から何処かへの道が繋がってたりしません？」

「なら、僕らをここに閉じ込めた意味がない」

「でも、大昔に作られた通路だったら？　メアリルさまも知らないかもしれませんっ」

と、ジュリーナは彼から離れ、暖炉の中に頭を突っ込んだ。

「弟から聞いたことがあって。オルンクール城は、襲われた時に逃げるには土地柄が適してないから、何処の部屋にも郊外へ続く秘密の通路、なんてものがあるらしいんです。そこから進入したらハルシャさまの所へも容易く侵入できて、メアリルさまにも見つからない。でも、知られてる道はさすがに使えないから、最近はおっぱら待ち合わせだけど——って……」

コツコツ、と暖炉の壁を叩く。自分の部屋にも同じような仕掛けがある。一箇所だけ他とは違う、響く音がする場所。そこを押せば――。

「ジュリーナ、そうここも持たないよ」

「ちょっと待って」

上を見上げても、煙突は塞がれている。と、もう、と床を叩いたその時だった。

——ガコン。

「え」

はっと気づけば、床がない。

「きゃ、や、きゃあっ！」

「ジュリーナ！」

間一髪、後ろからアルディクに抱きかかえられ、なんとか落ちずに済む。

「……あ、ありがとうございます。でも、ほら、逃げ道発見です！」
「君ってすごいよ」

抱きかかえた彼女を引き上げて、アルディクは中を覗いた。壁に梯子が設置されているのはわかるが、他にはなにも見えない。

傍にあった椅子の足を持ち、蹴飛ばすと、ぱきつと足が折れた。それにアルディクは遂に部屋の中へ燃え移ってきた炎を灯す。

「でも、もっと早く気づいてよ」

「だって、こういうのって切り札っていうでしょう？ 切り札は――」

「最後まで取つとく？ ほら、先に入つて」

と、アルディクはジュリーナの肩を叩いた。

そして彼女を先に入れて、松明片手に自分も中へ入る。中は埃っぽくて、ざつと五十年は使われていないような感じがした。ねずみもいなければ、なにもいない。だが、白骨死体なら出そうな、そんな雰囲気だった。

「行くよ、お嬢さん」

「はいっ」

好奇心浮き彫りな、うきうき声で返事を返した彼女の手を引いて、とりあえず道の続く限りアルディクは足を進めようと一步を踏み出した。

だが、一本道で助かったが、しばらく歩くと先がない。

――つまり、行き止まりだった。

「塞がれてる……？」

掘った穴を塞いだのだらう。ということは、掘れば外に出る。だが、何処まで掘れば。通路の壁にかけてあった古ぼけたランプに松明の灯りを灯し、火がついたのを確認すると、松明を壁の土にこすり付け、アルディクは火を消した。

「ジュリーナ」

「なあに？」

「僕は、やればできる人間なんだよ。普段なにもしないだけで」

「ええ。本当にやればできるんだってびっくりしちゃいました」

「なら、普段はそんなやる気もないため人間を、後でせいぜい褒め称えてくれる？」

そう言つて、アルディクは火の消えた椅子の足で、目の前の土壁を渾身の力を込めて削り始めた。

「なら、ご褒美はなにがいいかしら？」

「そうだな……ご馳走が食べたい。ご馳走を君と二人で」

「じゃあ、私はここで静かに見守ってお祈りしておきます」

頑張つて、とジュリーナ——能天気娘は静かにアルディクに手を振った。そんな声援を受けながら、ぼそつとアルディクは彼女に聞こえない程度の声で呟く。

——キスの一つや二つしてくれたら、もつといいんだけどね。

遠い彼方に、カチャリとなにかの音を聴く。そして薄っすらと目を開いて、そういえば、と、メアリルは自室にいる理由を思い出した。

「……眠い」

ぽつりと呟いて抱え込んでいたクッションに顔を埋めると、こういう神経しているんですか、と頭を小突かれた。

「……痛いぞ、エルスト」

「部屋に戻ってきて、ちょーつと目を離れた隙に昼寝してるなんて、薄情にも程がありますよ」

「……疲れていたんだ」

あっちへ行け、とメアリルはしっしつと彼を追い払う。

「ところでお前、何処に行っていた」

「起こすのも惜しいので、外に出てました。寝顔を見ても、すぐに寝返り打っちゃうんですもん。でも、昼寝なんてしていいんですか？　している場合じゃないでしょう？　……皇帝陛下がこんな呑気に」

その大きな手が彼女の黒髪を撫でた。「いいんですか？」

「良くないのは重々承知だ」

と、メアリルは髪を撫でていた彼の手を取った。それにエルストは面白おかしそくに首をかしげる。

「あれ？　なんですか？　この手」

「落ち着く」

と、仕方ない子ですね、とエルストは肩をすくめた。

「でも、残念。あいにくこれから、野暮用で」

「……」

「真夜中にでも侵入してきましようか？」

「……バカ」

「それじゃ」

と、彼は身を屈め、さようなら、と彼女の手の甲にそつと口付けた。

「ちゃんと休んでください。また来ますよ。あなたに会いに」

手が放され、足音が段々と遠ざかっていく。そしてパタンと扉が閉まり、彼女は彼が部屋を出て行ったことを確信した。

「……バカ野郎」

ぼつりと呟き、彼女は体を起こした。だが、くらりと眩暈がして再びベッドに身を預ける。と、その時、静かに部屋の扉が開いた。この開け方は彼ではない。ちらりと目をやると、犯人は気まずそうにきよるきよると目を泳がせた。

「なんの用だ」

体を起こすと、ごめんなさい、とハルシヤは呟いた。

「起こして、しまいましたか？」

「文句でも言いに来たのか」

「い、いえ……。謝りに……。その、お姉さま怒ってると思って……。帰ってくるなと言われたのに帰ってきたこととか……。あの人のことも」

「お前が帰ってきたのはお前の意思ではないだろう。何処かのバカがご丁寧に送り届けてくれたせいだ。絶対に帰さないと思ったんだがな」

「ルザはそんな人じゃないです。いつも私のこと一番に考えてくれて、私の為になることをしてくれて、だからきつと私がここに帰ることが一番だと思って……。わかっていたのに」

私は今しか考えない、我侭だから。

——あの人はきつと、先の先まで見ているに違いないのに。それがいくら、私にとって辛いことでも、後できつと後悔は少ないから、

と。でも、こんな時に一番傍にいてほしいのは、あなたなのに――。

「……それと……リヴェンティ大佐から」

震えた声でそう言った彼女の頬を、涙が伝った。

「お父さまのこと……聞きました」

「……そう、か」

「殺された、って。どうして」

「さあ。今のところ、外部犯なのか内部犯なのかも……わからない」
すすり泣く彼女を慰めてやる言葉が、出てこない。出てくるのは
状況説明ばかりだ。また、いつものメアリル・マディスリートに戻
っている。すまないと謝ることもできず、ただ、そうか、と頷くし
かできない。

「ごめんなさい。……お邪魔しました」

と、ハルシヤは涙を拭い、静かに扉を閉めた。気配が去り、メア
リルは一息つく。だがしばらくすると、今度は勢い良く扉が開いた。
「陛下！」

「……なんだ、うるさいな」

やって来たのはお馴染みのリヴェンティ大佐で、メアリルは再び
ベッドに身を預けた。

「今日くらい休ませろ。仕事は全部した」

「ええ、そうでした。ですが……お耳に入れていた方がいいかと思
いまして」

「なにを」

「東の外れの、もう今は無人の塔――ありますでしょう。あなたの
おばあさまが冬場お使いになられていた」

言われて、がばっとメアリルは体を起こした。あのじゃじゃ馬と
へっぽこ王子を閉じ込めている場所だ。そのことは私と父しか知ら
ないはず。

「それがなにか」

「今は消火作業に当たっていますが、先程火が上がりました。火の
気のなかったことから誰かの放火の可能性も」

「死傷者は」

「いえ。誰も近づいた者はおらず、幸い不審火で終わりました。もしかしたら先代皇帝陛下暗殺となにか絡みもあるかと思い、捜査に当たっていますが――」

「……」

いない？

メアリルは首をかしげた。どうということだ。逃げられないよう、部屋には鍵をかけている。隙間風が寒いと、祖母は窓を塞いでしまったはず。煙突は塞いであるし、だとしたら――。

「……報告ありがとうございます」

「では」

と、リヴェンティ大佐は部屋を出て行った。

――一体どうして誰も見当たらない？

このオルンクール城には、抜け道がある。この部屋、父上の部屋、そしてハルシャの部屋――。地理的にまともに逃げるのが不可能な為、作られた逃亡の手立てだった。だが、もう使われてはいないその塔の通路は、ハルシャと奴との密会がばれてからすぐに塞がせただけ。確認を取る為に、直接自分で確かめた。ということは。

ふつとメアリルは笑みをこぼした。

「……袋のねずみだな」

現場検証が行われている限り、彼らは外に出ては来れまいだろう。ということは、しばらくは安全ということだ。だが、放火とみられるばやばや、一体なんだったのだろう。その通路を知っているもう一人の人物が仮に彼らを助けに来たにしろ、火をつける理由がその彼にはない。彼女たちにもないだろう。それに、逃げ道が塞がれていることくらい奴だって知っている。逃げ出すなら、外だ。

だとしたら、一体誰が。

メアリルは体を起こし、髪をかき上げた。

――誰が、あの塔に火をつけた。

「十二章：犠牲の駒：4」

「……入るなと言われると、入りたくなる」

返ってきた返信をまじまじと眺め、ジェルドは小声で呟くと丁寧
にそれを折り畳んだ。

国境ぎりぎりの森の中に数十人の一隊と一緒に潜んで二日目。隣
に立つホグール將軍は、それはそうでしょうね、と呟く。そして手
元にあつた新聞を開いた。

「あなたのことから。クラウドイスルグ国軍がラディスカルス
のレルバを落としてから四日——か五日、ですか。そろそろ、オル
ンクールへは来ますね」

「だが、ロルディオリーズはしぶとい」

「でも、クラウドイスルグ相手では分が悪いでしょう。術師は面倒
ですから」

「……そうだったな」

術師。そう言われて、あの日風を操った、一人の青い瞳の男を思
い出す。ウェランドルス一の剣の使い手と言われた自分も、その風
には敵わなかった。きっと彼女が彼のことを止めずにいれば、自分
は今ここにいないだろう。

「嫌な思い出しかないよ」

「それで、あなたはどうかされるんです？」

「決まっている」

と、ジェルドはホグール將軍の肩を叩いた。そして小声で囁く。

「私の個人的な感傷で“偵察”へ」

「言うと思いました」

「クラウドイスルグ軍の次の狙いはウェランドルスだ。お前はここ
に留まり兵を率い、攻め込んできた場合、なんとしても食い止める」
「はい」

「そして攻め込んで来た場合、誰か一人をシューレィゲンジュナー

トへと早馬として行かせる。あれだけは護れ。私が帰ってくるまで、せいぜい粘っておけよ」

そう言い、ジェルドは漆黒の毛並みの馬へ飛び乗った。その行動に、一瞬周りの兵士たちがざわめき出す。だが、ホグール將軍がそれをひと睨みして黙らせた。ジェルドのとんでもない行動力を身に染みて知っている兵士たちは、これも仕方がないのかと呆れたような表情を將軍へ向ける。

「……健闘を祈ってます。陛下」

主を見上げ、ホグール將軍は一つの小瓶をジェルドへと差し出した。

「ほう、気が利くじゃないか」

にやりと笑ってジェルドはそれを受け取る。「ブランデーとはな」「今回くらい解禁日です」

「ローザには言うなよ」

と、ジェルドは馬の脇腹を力強く蹴り、黒馬を走らせた。

礼拝堂の扉が、重く軋みながら開く。誰かが来たのだろう——いや、彼が来たのだろうと振り返ると、案の定の相手はにこりと笑んだ。

「ウェランドルスが動いたよ」

その言葉に思わずルイセラードは立ち上がった。

「動揺するところを見ると、まだ迷いがあるのかな？」

「……いえ」

「まあ、あのジェルド・クロスキーズが動かないはずがないと思っ
てはいたけれど、なんの為に彼は動くんだろうね。ウェランドルスの為？ それとも捕らわれの王女さまの為？ ローザに頼まれて私を止めに来たのかもしれない。だが、あるいは——」

「……僕の為ではない」

ぽつりとルイセラードは呟いた。どうしてそう思う？ とイルゼルは首をかしげる。

「あの人は、一個人の為に自分の身は犠牲にしない」

きつと次に攻め入られるのはウェランドルスだからだとか、そういう大義名分でしか動かない人だ。昔からそうだった。

「あなたは、どうして動いたと思うんです？」

「あの人は、私が嫌いなんだ」

参ったとも言いたげにイルゼルは苦笑いした。

「とにかく嫌われていて、困る。だからってわけではないが、とりあえず君に一つ頼みたくてね」

と、イルゼルは手に持っていた剣を、ルイセラードの方へと差し出した。

「ジェルド・クロスキーズのことを、君に任せたいと思って」

「……僕に？」

ぱちくりとルイセラードは目を開いた。と、そう、とイルゼルは頷く。

「君が行くんだ。処遇は任せるよ。シュフル族がいればロルディオリースでは騒ぎになるだろうから、彼はきつと森の中を遠回りしてオルンクール北からやって来る。そして森を出てからは、動くのは主に夜になるだろう。それを出迎えたまえ」

「……」

歩み寄り、目の前に差し出された剣を見て、ルイセラードはそれを取るか取るまいか躊躇った。なにをすればいいか大方予想はつく。――殺して来いと彼は言っているのだろう。

「僕は――……」

「自分で、鎖を切るか手繰り寄せるかは決めなさい。ただ、私はお前の帰りを待っている。――戻って来て欲しいと願う故に、戻ってくると信じている」

もう一度、剣を見る。

「……自信は、ありません」

視線を逸らし、彼を追い越して、立ち止まる。

「でも――その剣は要らない」

「何故？」

問われて、ずっとルイセラードは目を閉じた。礼拝堂の外で木々が風に揺られてざわざわと音を立てる。それに耳を澄まし、右の手にその風の感触を集める。

『……』

自分でも聴こえないような声で、言葉をその風の音に乗せる。すると、右手に硬く冷たいあの感触が甦った。目を開いて見てみると、確かめるまでもなくその手にはあの銀翼の鷲の剣が握られていた。

「これが、あるから」

振り返ると、イルゼルは目をぱちくりとさせていた。だが、すぐに彼は満足気に笑む。

「気をつけて、行っておいで」

やんわりとした声色が、温かった。

「はい」

そして吊られるように、ルイセラードは久し振りに、いつもの笑顔を顔に浮かべた。

〔十二章：犠牲の駒：4〕（後書き）

主人公、裏切りました。あと四章……？かな！？

「十三章：黄金の龍と銀翼の翼が交差する時：1」

荒い息遣いは段々と意識の外へと遠退いていく。

もはやこの四肢を動かしているのは反射と気力だけだった。重い白刃を振りかざし、振り下ろし、また口の中に鉄の味が広がる。だが相手の顔色も蒼白で、彼もまた、もう平常ではないのだろうと思えた。

ただ前に立ちただかる敵を排除する、死神としての本能が働く。

——殺すまで、どちらかが死ぬまで、終わらない。

ウェルリーは、その場から後退して言葉を唱え始めた。彼の右の碧眼が冷たく光る。その術が発動される前に、決着を——そう思い、無意識のうちにクラルグの足は地面を蹴り、手は剣を構えた。だが、彼は唱え終え、飛び込んでくるのを待っていたかのようににやりと唇の端だけで笑むと、彼へと右の手のひらを向ける。

——止まらない。

今更引き返すことはできない。口の中に血の味が広がっても切っ先を向ける。そして、脇腹へと切っ先が届くまさにその瞬間、ウェルリーは右手をその白刃へとかざす。だが、寸前の所で彼は顔をしかめた。

「——っ！」

切っ先に迷いはなく、それは深く身を貫く。

「……どう、して」

彼の唇の端を、赤い血が伝った。剣を抜けば更に多くの血を吐き出す。だが、

「お前……」

クラルグは彼の右の瞳から、その冷たい青さが失われる瞬間を見た。血に濡れた剣が、もう感覚の無い手から滑り落ちる。そして次に、力の入らなくなった体が倒れた。

同じように、彼の体も倒れる。

見上げた空は曇っていて真っ白で、その中を、紛れるかのように一匹の白い鷲が飛んでいた。

旋回して降りてきたその鷲へと、ウェルリーは最期の力を振り絞り、その腕を差し出す。羽を羽ばたかせ、彼のその腕へと舞い降りようとする白い鷲——だが、無常にも彼の手は力なく降ろされ、静かに目は閉じられた。

——舞い降りる場所を亡くした鷲は、再び、浮上する。

鷲は、再びその白い空へと、羽ばたいていく。そして何度も旋回しては、甲高い声で鳴いた。

息を切らし、再び、双方は対峙していた。

「……しぶといわね」

「悪かったな」

単なる盗賊だと思って油断していた。

得意の俊敏さも、力も、越されている。その動きはさながら狼で、なるほど、死神が左目を失った理由がわかった気がした。だが、こちらにも負けてはいない。

一度間合いを取ると、スティルグは軽く舌打ちして剣を構え直した。

「さあ、どうした」

あくまで強気の姿勢を崩す気配はないらしい。

「来いよ」

「ええ。——！」

と、その時、パリンツと音を立て、シュレーヌの水晶の耳飾りが砕け散った。顔をかすめた欠片の痛みに、思わず彼女は頬を手で押さえる。そしてはっと目を見開いた。

「……！」

どう、して。

——まさか。

この水晶の耳飾りは、イルゼルから貰ったものだった。ウェルリ

―とお揃いで、その身に良くないことが起きると、なにかしらの反応をしてくれるらしかった。

『だから、お互いが良くわかるだろう？』

陛下の声が脳裏に甦る。割れたならそれは、相手の死を意味するんだらうねとも、言っていた。

「ウエルリー……？」

止められ、なかったの？

そんなはずがない。死ぬはずがない。死んだはずがない。

「い、や……」

――死なないで、生きて国に帰りましょう。

そう言っただけなのに。若草の瞳と青い瞳は、いつもと変わらずだったのに。

「いや……！」

くらりと眩暈がし、シュレー又は膝をついて頭を抱えた。

――嫌よ。

負けるはずがない。負けたはずがない！

「いやああっ！」

――そんな、そんなことが起きるはずがない……！

目が覚めると、くすんだ白い天井が見えた。お気づきかしら、と枕元から声をかけられ、ふと目を移すと、そこには紫の瞳の少女がいた。

「おはよう」

「あなた……！」

体を起こそうとしたが、手足がベッドに拘束されていて身動きが取れない。

「幸いにも、子供たちとおじいさんは、気を失っていただけみたいだけだね。剣は預かってるわ。悪足掻きは無意味、よ」

「私は……どうして」

そう、戦って。

——水晶の耳飾りが弾け飛んだ。

「……っ」

頬がずきんと痛む。その痛みが、一気に彼女を現実へと引き戻した。

「……大丈夫？」

紫色の瞳が顔を覗き込む。だが、視線を避けるように、シュレー又は瞳を閉じた。

——ウェルリー。

家族を失い、故郷を失った自分の、弟みたいな存在だった。拾って育ててくれた陛下を父親のように思っ
て慕い、いつも一番に役に立ちたいと言っていた。それを買われて、彼は陛下からあの力を——右目に青い色を、手に入れた。

そんな彼が、死ぬはずがない。

拳を握りしめ、彼女は奥歯を噛み締める。と、その時、

「目、覚めたんなら話してもらおうか」

見れば、先程まで己と対峙していた少年が、少女の背後に姿を見せた。

「あのバカ王子の居場所」

「……さあ」

「ステイルグ」

ジェーナは制して彼を睨み上げた。

「ちよつとくらい間を置きなさ——」

「いいのよ」

と、シュレー又はジェーナの言葉を遮った。

「死んじやいない。生きてるわ」

「……攫った理由は。クラウド・スルグはなにをしようとしてる」

「戦争」

「は」

「知らないようなら教えてあげる。本来、ルイセラード・クロスキーズはウェランドルスにいるべき人間ではない。レステアウエール

家の人間よ」

ジェーナはスティルグは顔を見合わせた。

「クロスキーズの名を語っていても、彼の中にはその王家の血は流れていない。流れているのは陛下の血。彼は不幸にもそれを知らなかった。あなたたちも。——それだけ」

と、その時、外でなにかが崩れるような物音がした。ジェーナは窓を開けて訝しげに外を覗く。その時、

「——！」

目の前をすれすれで、物凄い勢いでなにかが駆けて行つた。

「……ジェーナ？」

「……」

彼女が呆然と見やった先には、駆けて行くのは一頭の馬。と、はつとジェーナは息を呑んだ。そしてスティルグの方へ振り返る。

「ルイセラードが近くにいます！」

「……はい？」

と、くすくすとシュレーヌは笑い出した。

「そりゃあ何処かにいるでしょうよ。ジェルド・クロスキーズの足止めには誰が？ 訊くと、陛下は問題ないと仰つたわ」

「それって……」

「寝返つたって言いたいのか」

「どういうこと？ 寝返るつたって、ルイセラードは——」

「可能性は無きにしも非ず」

と、スティルグはシュレーヌに目をやった。

「……あいつの右目、そういうことだろ」

「スティルグ、ちょっと待って、それって」

「黙ってる。俺はこいつに訊いてる」

シュレーヌは彼の緑の瞳を見て、ふっと微笑んだ。

「あなた、鋭いのね」

「勘には自信がある」

「……さすが盗賊さん……」

一息ついて彼女は天井を見上げた。「その年で、頭になるだけのことはあるわ。……さて、これからどうするの？ 私を殺す？」

「……殺さない」

ステイルグは踵を返し、扉の取っ手に手をかけた。

「……お前らの狙うあれは、俺のじゃない」

彼は部屋から出て行った。どういつつもり——シュレーヌはそう思っただけを見る。すると、彼女は寂しげに微笑んだ。

「……本当の所持者は、あいつの妹さんなのよ」

「妹？」

「あたし、あいつと良く話すんだ。前に言っただの、妹さんがどうしても本物を持ちたがってて、でもそれはあまりにも危険でしょう？ でも、何度言っても諦めなかった。……結局、良く似たものを盗品の宝石からこしらえて、それで我慢してもらったんですって」

その光景が微笑ましくて、思わず笑みが零れた。

「似合わないわよね。でもね、だから、俺のじゃないんだって」

「え……」

「取られちゃった本物を取り返したら、彼女のお墓に一緒に入れてやるんだって——。でも、自分の我儘で、周囲が崩れていくのが一番嫌いなんだって言ってた。そういうこと言うのって、やっぱり頂点に立ってた人間だからなのかしらね」

「あなたは？」

尋ねれば、え、とジェーナはぱちくりと目を見開いた。

「あなたにとつて、あれは、どんなもの？」

「……そうね」

と、彼女はふと視線を外した。そしてしばらくして、口を開く。

「おまもり、かしら」

「おまもり……」

「でもね、忌々しい思い出しかないの。父さんと母さんの形見でもあるけれど、いつも思い出すのは、ロルディオリーズ軍に村を襲われた時のこと。ものを盗んで暮らしていた時期のこと……嫌なこと

ばっかり。思うんだけどね、結構、手放しても後悔しないのかもしない。それに、ステイルグが要らないって言うんなら、尚更。先祖共々、運命共倒れ、運命共同体って思うの、あいつとは」

変よね、と彼女は小さく笑った。

「ご先祖さまの縁かしら」

「……好き？」

「それはないわ」

きっぱりと言い切ったジェーナに、シュレーヌは軽く吹き出した。

「彼、かわいそう」

「せいぜい弟なだけよ。……だから、もういいの。二個ともあんだにあげる」

と、ジェーナはシュレーヌの手首のロープを解き始めた。

「どういうこと……」

「あげるって言ってるの。あれ持っていると嫌なのよ、昔を思い出してばっかで」

手早く片手を解き、そしてもう片方も解く。次に足もさっさと解かれてしまい、シュレーヌは啞然とした表情で、起き上がるうとなかった。

「どうして……それに……自ら放棄するなんて」

「あんたの言う陛下も、あんたも、思わなかった？」

促されてゆっくりと起き上がれば、彼女は枕元の台に置いてあったコップに水差しから水を注ぎ始めた

「そういえば…… どうして継承権の剥奪なの？」

「え……」

「理由くらい聞かせてちょうだい。…… 気になるから」と、コップが差し出された。

「どうぞ」

「……ありがとう。そうね……」

どうしてか、目の前の紫の瞳の彼女には全く警戒心を覚えないうるで、心を見透かされているような心地だった。

「マティルグラスとイルグリストは、昔、術師の国だった。ううん、過去、ほとんどの人間がなにかしら、不思議な力を持っていた」

「力？ クラウデイスルグみたいな？」

「クラウデイスルグは、いろいろな分裂を逃れて、今でもそういう力を持っているんだと陛下は仰ったわ。あなたたちの国は……クラウデイスルグとはまた違う、けれど互いに似通った民族だった。けれど、力のせいで戦争が拡大したの。危険だと思った当時の政府の高官たちは、かの女帝と王子の魂を核に、そして、自らの命と引き換えに全ての力を封印することを決め、実行した」

「それって——」

「深緑の森を越えて。女帝と王子は、お互いに結ばれたかった。戦争を終わらせたかった。けれども、双方とも飾りだけで権力を持たない若者だった。……陛下はね」

コップの中の水に映ったこの瞳は、春の花の色だ。

——そう例えたのは、陛下だった。

「陛下は……そんな二人に、同情してるの」

「同情？」

「そう。……そして、必要ならばそこに封じられた利用を使うつもりでいる。国一つ焼いてしまう力を、陛下は持っているわ。でも、世界を変えたいって——その為には利用できる力と知恵は、全て使いたいんだって」

「殺して、あれを強奪しようって算段だった」

「あなたたちが、使って欲しいって思うのなら、死ぬ必要はない。嫌だっと言えば、私はあなたたちを殺さないといけなかった。……でも」

彼女は無意識に左耳に手を伸ばし、だが、虚空を感じてはっと息を呑んだ。

もうそこにはなにもない。

なにかあれば、これが、自分のおまもりだったのかもしれない。「ウェルリーがやられるのは、予定になかった……！ 最後に陛下

に会った時、態度がいつもと違ったの。雰囲気、接し方が――、
ウェルリーは気づいていなかったけれど、やはり今思えば、あれは

――」
目に涙が滲み、視界が歪む。

「捨て駒だったなんて、思いたくない！」

「バカ！」

刹那、ジェーナは叫んだ。

「あんたがそう思っちゃあ、元も子もないでしょう！」

「でも」

「でもないわ」

と、ジェーナは、ちょっと待ってとベッドの下に隠してあった彼女の剣を取り出した。そしてそれを彼女の手にしっかりと握らせ、微笑みかける。

「……？」

「行ってあげなさいよ。その相棒のところ」

「でも」

「教えてあげる。あなた、ずっと彼の名前呼んでたわよ。行ってあげたら？」

「だけど、私」

「そんな顔しない。それだけ大事に思ってる子がいるなら、行ってあげるもんでしょ。あたしだったら、自分の命が危なかるのが、命令なんて捨てて走って行っちゃうわね。――自分が好きな人の為なら、女の子は必死になるもんよ」

「十三章：黄金の鬣と銀翼の翼が交差する時：2」

一日で千里を走る馬がいるという。

ずっと彼は、待っていた。

辺りはすっかり日が暮れ、家に灯りが灯る。その闇に紛れ、姿を隠す為の黒い衣に身を包み、彼はオルンクルの北の端の建物の屋根の上に、遙か先を見据えて佇んでいた。

千里を走る馬——特別に育てられた、速く走り、そして遠くまで走れる上等な馬。そんな馬を、かの一国の国王は持っている。

それをルイセラードは知っていた。俊足が持ち味のハルヴィート以上の、俊足な馬。名をアーリシュテイン。一日でシューレッゲンジュナートからオルンクルまで駆け抜けることができる黒い毛並みの馬だ。きつと夜明け頃には、主を乗せて駆けてくる。

だけれど、そろそろ待っているのにも飽きた。

「……」

指を口にくわえ、ルイセラードは高らかに指笛を鳴らした。漆黒の夜空に、それは透き通る音色で、良く響く。屋根から地面へ飛び降りた。

アステイナがオルンクルにやってきているなら、きっと奴も一緒だ。しばらく待っていれば駆けてくるだろう。主人の顔を忘れずにいてくれるのならば。

「……来い。お前の主人はここだ」

青い瞳は虚空を眺める。迷いはなく、その輝きは鋭く、至って冷やかだった。その瞳を閉じ、心地よい夜風を体一杯に感じる。これが自分で、自分がこれで、これが自分の存在価値。

そしてしばらくして聴こえてきたのは、聞きなれた蹄の音だった。

「……？」

メモを片手に、アステイナは首をかしげた。

地図ではここだ。だが、石畳の続くオルンクルの街へ入り、更に日の当たらない裏路地へ入って、そのまた裏のような暗い場所に建つ、目の前の建物は崩れかけた廃墟にしか見えず。

「待っている」

ゲオルドの手綱をむき出しになった入り口の柱に括りつけ、アステイナは中へと一步を踏み出した。と、その時、

「……お前、誰だい」

足元から突然声がして、はっとアステイナは目を移した。

そこには、ぼろきれのような服をまとって座る、中年の男性の姿があった。パイプをふかし、彼は見上げる。

「……珍しいね。誰の紹介だ」

「ジョルズ・トールズ」

相手を見据え、アステイナは答えた。と、彼は立ち上がる。

「なんだい、ジョルズのじーさんか。で、なんの用だ」

「一つ訊きたい。私はそのジョルズという老人に、オルンクルには行かない方がいいと言われた。……話が聞きたい。ついでに、レイナ・スラグルスリーとクラルグ・ラファエドという人物への接触も求む」

と、ぎよつと門番は目を見開いた。

「お前さん、誰だい。自己紹介やりな」

「通りすがりだ」

「通りすがり？」

はん、と門番は鼻で笑った。「あんた、金持ちの匂いがするぞ」

「それはどうも。——アステイナ・フェルナンデイルだ。以後お見知りおきを」

と、ちゃんとわかってくれたのか、相手は目をまん丸に見開いた。そして刹那、彼は剣を抜こうと手をかける——が、彼が抜刀する一歩手前で、アステイナはがっしりとその手を掴んだ。

「……話が、聞きたいんだが」

「こんな場所になんの用だ」

「話を聞かせてくれれば、それでいい」

「皇族がか？ バカバカしい！」

アステイナの手を振り払うと同時に、相手は携えていた剣を抜いた。

「なにをしに来た！ ことと次第によっちゃあ生きて返さねえぞ」

「話を聞くだけがそんなにいけないか」

「当たり前だ！ この皇族風情が——」

と、その時だった。

「はいはい、ストップ。客人だと思って来てみれば、期待はずれだったけどまあいいわ」

と、奥から姿を見せたのは、見覚えのある、いつぞやの少女。

「クラルグだったら良かったんだけど」

残念そうに彼女——レイーナは微笑む。「あいつは馬に乗らないし」

「久し振りだな、フェイエル」

「そうね。来なさい、話さなきゃならないことがたくさん山積みよ。いろいろ変なことも起こっちゃって予定外なんだから。まずは情報交換といこうじゃない」

と、レイーナはアステイナを手招いた。

「こっち」

そう言われて連れられ、奥の本棚の裏にある隠し扉を通ると、そこには普通の酒場と変わらない風景が広がっていた。中は酒の匂いで一杯で、それだけでも酔いそうになる。一見、黒い瞳をした人間が一番多いように思えたが、レイーナのようにそうではない者も、少数いた。開いているテーブルに着くと、彼女はジュースを二つオーダーする。

「さ、あんたが訊きたいことはなに？」

「皇帝が殺されたんだろう」

「まあね。メアリアルたちは隠してるけど、あれはきつと暗殺。……そういえば、オルンクール城の使われていない塔が、今日の昼過ぎ

に――放火されたりしいんだけど。関連があるかもしれないわね」

「使われていない、塔？」

「ええ。お嬢さまのおばあさまがお使いになっただけ、冬だけの部屋。だから窓がないのよ。幸い、怪我人はなかったらしいけど。それと、あのメア Ril に恋人発覚。これはあんまり関係ないかもね」

そう言ってレイーナはくっくくと笑う。

「あたし、それが一番腰抜けちゃってさあ。でも、話は変わるけど、あたしメア Ril にお嬢さまのことを知らせに戻ろうとしたのよ。途中でウエルリーの足止めに遭ったけど……クラルグに行けって言われて、突っ切ってきちゃった。そしてオルンクールに着いたら、お嬢さまが――帰ってきてるって話」

「……は？」

アステイナは真ん丸に目を見開いた。

「待て。ハルシャ嬢はルイセラードと一緒に――」

「そう。そこなのよ」

と、レイーナはアステイナを指差した。

「クラルグから聞いたわ。あんたは見た。それに二人の関係も知ってる。不思議じゃない？ あのバカ王子が上手いこと逃げ出して、お嬢さまをメア Ril のもとへ返したってことなら、納得いくんだけど。絶対に二人は別々でも閉じ込められてるはずよね。だってメア Ril に通じるんですもの。ロルディオリース最高責任者に、イルゼルが手駒を動かしていることを知られていいのかしら？」

「……」

アステイナは眉をひそめた。

「ちよつと待ってくれ。頭を整理する」

「どうぞ」

と、アップルジュースが二つ運ばれてきた。それを口にしてまず

喉を潤し、アステイナは一つ一つ考えていく。ならば、ルイセラードの身はもう自由なのか？　だが、自由ならどうして出くわさないシューレ・ゲンジュナートへと真っ直ぐ彼が帰ってくるならば、何処かで出会うはずだ。

「ルイセラードは……」

どうしてハルシャ嬢だけが？

——そして彼が今、自由なら、何処でどうしている？

「……ハルヴィート」

久し振りに撫でた鬘は、いつもと変わらない。だが、相手は訝しげに、久し振りに会った主人を拒否し、後退りした。

「どしたの。僕だよ？」

だが、いつものようになつこうとしない。再び触れようとすれば後退りされるばかりで、それにちくりと心が痛んだ。

「わからない？　忘れてしまった？」

ひゅるり、と夜風が舞う。「僕だよ。ほら、おいで」

掴みなれた手綱を手に取り、横顔を撫でる。でも、その主を見る瞳は明らかに戸惑い、怯えていた。まるで、お前は違つても言いたげに。

「……どうしたの」

こつん、と額をくつつけ、ルイセラードは栗色の鬘を撫でた。受け入れようとしないその姿勢に、鼻の奥がつんと痛む。でも、それでもいい。もう一度だけ乗せてくれればそれで。

「お前にもう一度、乗せてくれ。お願いだ。——父上の所まで、僕を——」

と、相手は首をもたげ、確かめるかのようにルイセラードの頬に顔をすりよせた。

「……そう、僕だよ。わかるだろう？」

良かった。わかってくれた。

ルイセラードは微笑みかけると、手綱を掴み、その背中に飛び乗

った。

「お願いだ、運んでくれ。……夜が明けないうちに」

手綱を引くと、いつものように、ハルヴィートは進行方向を向いてくれた。

「——ありがとう」

言つと、ちらりと相手はこちらを振り返った。それに思わずまた笑みがこぼれる。

「行こう」

そして脇腹を蹴ると、彼はいつものように走り出した。

焼けて黒くなった塔の前に、ハルシャは来ていた。今は亡き祖母の暮らしていたこの塔には、オルンクルの外へと繋がる通路がある。この場所は、自分たちの住んでいる場所からは相当離れていて、辺りに人気もない。だから、好んで良く使っていた。

——だが、そのことがばれてしまった時、ここは塞がれてしまった。

それでも、他の塔の道を使ったり、こっそりと城を抜け出したりしたのだけれど。思い出せば全てが懐かしい。

何処に行けば、彼に会える。

もう、終わりなの？

視界が歪む。溢れてくる涙は、頬を伝って足元へと落ちた。

——私が役立たずだったから、何処かへ行ってしまった？

いつも優しくかったのは全部、嘘だった——そんなこと思いたくはない。でも、もう彼はいない。消えてしまった。いくら嫌だと心の中で叫んでも、信じたくないと思っても、もういないのだ。

これっぽっちも支えのない体は崩れてしまいそうで、その場から動けなかった。

私がこうして泣いていても、きっと彼は来ない。

そんな世界で、私はこれからどうやって生きていけばいいの。

一番つらい時に、どうして傍にいてくれないの——？

淡く青白い光の降り注ぐ、その暗闇の中を主を乗せ、ハルヴィー
トは疾走する。黒衣が風になびき、冷たい風が頬を切りつけるよう
に痛い。もうどれ程走っただろうか。その風に言葉を乗せ、ルイセ
ラードは右手に銀翼の鷲の剣を手にした。そして更にハルヴィー
トの脇腹を更に強く蹴る。と、その時、

「……！」

遠くの方で一瞬気配がすれ違い、反射的に思い切り手綱を引いた。
ハルヴィートは前足を上げて突然の制止に対応する。

「……どうどう。落ち着け」

鬣を撫で、彼は相棒から降りた。すつと見据えた先には間違いな
く、あの覇気がある。待ち伏せられていたとでも言おうか。

——あの人ならやりそうだ。

「……ありがとう」

呟いて刹那、ルイセラードは剣を握りしめて駆け出した。走るこ
とで起きる風が、ひゅるりと辺りを取り巻く。左手で風を操り、そ
れを目標へ向け、彼はただひた走った。その風で相手を捕獲しよう
と試みる。だが、駆けて行くにつれて視界に入った目標は瞬時にそ
の場からいなくなり、ルイセラードは行き場をなくした風を宙へ解
放した。そして振り返ったその瞬間——。

甲高い金属音が、夜空に響いた。

「……遺憾だよ。久し振りだな、ルイセラード」

「お変わりなさそうで、なによりです」

重なった剣を弾き、ルイセラードはその場から飛び退いた。

目の前に立つのは、黄金の髪をなびかせた、一国の主。それは見
慣れた、かつては頼り慕った父親の姿。だが、今ではもう信じるこ
とはできない。その山吹の瞳を、自分は信じない。

冷たく光る青の瞳で、ルイセラードはかつての己の師を、真っ直
ぐに見据えた。

「……いいんですか？ 過激な運動は医者に止められてるでしょう、

国王陛下」

「残念でならないな。そう呼ばれてしまうとは」
間合いを取りつつ、ジェルドは剣を構えた。

「もう、息子とは呼ばせてくれない、か」

ルイセラードは左手をすつと前に差し出した。彼の周囲を冷たい風が舞う。可愛い我が子をあやすように、手首を返したり指でくすぐったりして、風を遊ばせ、彼は悲しみ含んだような笑みを見せた。「本当はそんな風に、思っていないんでしょう？ 僕のことを、何度も——」

あなたは、本気で殺そうとしたんだ。

「殺しかけた」

彼は手首を返して風を一気にジェルドへと向かわせた。だが、凶器となった一本の空気の刃から、相手は手にした白刃を盾に身を護った。刹那、ルイセラードは地面を蹴り、剣を握りしめて真つ向からジェルドへ突っ込む。

切り付けようとする度、白刃が重なり、甲高い金属音がその場に響き渡る。

——もう、信じない。

負けじとジェルドも体制を整え、攻撃を受け止めた刹那にルイセラードの剣を払い、一瞬のうちに優勢へと転じた。

「お前には一度、ウエランドルスへ戻ってもらう。少なくとも、王妃は——ローザはお前の帰りを——」

「あなたに母上をそう呼ぶ資格はない！」

飛び退き、ルイセラードは無意識のうちに風に言葉を乗せた。そして手首を返して風の刃を向ける。反射的に両腕を立てにジェルドはそれを受け止めたが、風の勢いに押されて森の木に叩きつけられ、腕と頬から赤い血がじわりと滲み出た。

「……あなたに、なにがわかるっていうんだ。わかるなら、どうして僕はここに存在している。わからないから僕がここにいる。あなたに母上のなにがわかる」

「……くそっ」

剣を支えに、ジェルドは立ち上がった。そして血の混じった唾を吐き捨てる。

「わからないな。だが、お前がそこまで言うなら仕方ない——」

その山吹の瞳に、殺気が込められた。それにルイセラードはぞくりと悪寒を覚える。

「その前にここを通してもらおう。私はお前に用はない。イルゼル・レステアウエルに用がある」

「……どかない」

「どけと言っているのがわからないか。お前は今すぐにウエランドルスへ戻るんだ」

「僕は帰らない！」

ルイセラードは大きくかぶりを振る。だが、

「そんな我侭が通ると思うな！ ウエランドルスの王太子という身分、忘れたわけではあるまい！」

「ならば僕は今ここでそれを捨てる！ 僕はあなたを足止めする様に言われてここにいる！ あなたをこれ以上オルンクールへは近づけない！ あの人の——あの人の近くには絶対に！ あの人は僕を認めてくれたんだ！ あなたとは違う！」

「奴は誰も認めやしない！ ルイセラード、お前は——」

「うるさい！ 僕をだまして、母上を苦しめて……！ あの人はあなたとは違う！ あの人は……！」

ルイセラードは右手に剣を構え、ジェルドへと突っ込んだ。

「僕を殺そうとしたりしないと、約束してくれた！」

そして地に足を踏ん張って、手に力を込める。

「……っ」

目の前に辿り着いた刹那、見開かれたその山吹の瞳が、脳裏に焼きつく。迷いなくその剣を弾き、無防備になったその瞬間に、渾身の力が込められたこの剣はジェルドの体を貫いた。

「十三章：黄金の龍と銀翼の翼が交差する時：3」

部屋一つ分はあるであろう、石畳の殺風景な箱のようなバルコニーに、彼はいた。城からは高台に建っているおかげで、城下町が一望できる。

バルコニーの塀に腕を持たせかけ、吹きつける夜風を浴びている姿を捉え、メアリルは自身もバルコニーに出た。彼の真っ直ぐな黒く長い髪がなびく。外へ目をやると、陽は落ち、空は紺青、遠くの方にきらりと一番星が見えた。見下ろす灰色の街並みは、いつもと変わらぬ夕食時を迎えているのだろう。

「エルスト」

「はい」

呼ぶと、彼はいつものように笑みを含んだ表情で振り返った。

「疲れは取れましたか？」

「おかげさまで、な」

メアリルは彼の隣に立った。

「いい景色だろう。ここから見えるオルンクールは」

「そうですね。ずっとこの街にいたいくらいだ」

見てください、とエルストは、遙か彼方に光る星を指差す。

「なにかいい事があるかもしれませんよ。一番星なんて」

「なんだろうな。最近は悪いことが続いているけども気が滅入るから、丁度いい」

「私がここにいても悪いことですか？」

「……どうだろうな」

メアリルは目下に広がる街を眺め、小さくため息をついた。

「皇帝になると決めた時、お前みたいな存在は不必要だと思っていた。それに、妹もいたから、マデイスリート家の血筋が絶えることはない、勝手に思っていた。だが父上が死んで、お前がいて——
いてくれて、良かったと思うよ。本当に」

自分の役割は人を統率すること。誰かに愛されて愛する役割は、妹のものだった。全く性格の違う姉妹だからそういう風に割り切れてしまったのかもしれない。

——だがその時、

「でも、もうあなたの傍にはいられない」

突然発された言葉に、メアリルは彼へと目をやった。

「何故」

「時が来てしまったからです」

それは紛れもなく別れの言葉のように聞き取れた。

「……どう、して」

胸が締め付けられたように苦しいと例えていいのだろうか。それとも、喉がつかえていると例えていいのだろうか。妙に頭だけ冴えていて、体がおかしい。

メアリルは彼の手を掴もうと腕を伸ばした。だが、伸ばしかけた腕を思わずそのままに、彼女は目を開く。彼の腕を、いや、彼自身をなにかが舞っている。きらきらと時折光るそれは、まるで細く黒い絹糸のようだった。

「……退屈はしませんでした。あなたは女帝で、でも威勢の良さは裏腹に、本当はただの一人の女性で……正直言って、驚かされること多々ありましたよ」

そして、パチン、とエルストは指を鳴らす。刹那、その絹糸がはじけ、同時に起きた突風にメアリルは目を閉じた。

「でも、今では全てお気持ちだけ受け取っておきます」

風が治まり、薄っすらと目を開くと、そこには先程までいなかった一人の——淡い茶色の髪の男が立っていた。瞳は青く、波打つ長い髪は吹きつけた夜風に舞う。

彼女はその姿に見覚えがあった。幼い頃に一度。そして、皇位継承者として政治の場に姿を出すようになってから、二度。彼は紛れもなく、現在行方が知れないトリヴェンティ大佐が言っていた、一国の国王——。

「非常に楽しかったですよ。あなたといれて」

そう言って微笑んだ表情は、彼と同じで、彼女はますます息を呑んだ。

一歩、足が下がる。

「イ……ルゼル……、レステアウエル……」

「ええ。お久し振りとも言いましょうかね、メアリル・マデイスリート女帝陛下」

これは、一体どういうことだ。

もう一歩、足が下がる。そしてまた、一歩下がった。

心の中で問いかけても、答えは返ってこない。ただ、目の前で微笑む男は敵国の国王で、今までいた彼ではないということだけだった。

「何処に……やった」

「誰をですか？ 私がほら吹きなのはご存知でしょう？」

「——っ！」

メアリルは反射的に拳銃を抜いた。だが、いつもの冷静さは一体何処へ行ったのだろうか。手が震え、彼に向けた銃口が震え、引き金にまともに指がかからない。

「どうして……」

震えた手から、銃が石畳の床へと落ちた。

「騙して」

「いましたよ」

そう言って、イルゼルは城下へと目をやった。

「心の中で嘲笑いながら、表は優しく振舞って、あなたに近づいて利用した。……どうです、一緒に鎮魂歌でも歌いましょうか？」

そう言って、イルゼルはふっとメアリルに微笑みかけた。

「一緒に見物しましょう、メアリル。——この街が、真っ赤に染まるのを」

「十三章：黄金の龍と銀翼の翼が交差する時：3」（後書き）

宮部みゆき先生のクロスファイアに憧れて書いていたのを思い出します（エルストとメアリル）。懐かしいな！。

「十四章：私が帰る場所：1」

目の前には、柱が折れて、屋根の傾いた馬小屋がある。そこに当のハルヴィート本人しかいなかったことが幸いだったか。他に馬がいたら大変なことになっていたに違いない。

あれからシュレーヌを送り出し、ジェーナとスティルグは小屋の前に佇み、並んで傾いた屋根を見上げていた。

「お人よしだな、お前」

「……褒められた？」

「別に。良かったのかよ、要らないって言うて」

「うん」

と、彼女は足元に転がっていた錆びた鉄のバケツを拾った。

「あたしたちって運命共倒れみたいだし。共同体じゃないからね」

「言われなくても」

「そ」

と、その時だった。凄まじい轟音を立てて目の前の小屋が崩れる。

「あ……」

「こりゃ、ダメだな」

「とりあえず、放つところか。お茶でも飲む？」

きっかけは、目の前の土で出来た壁を掘るのを諦めて、休んでいる時のジュリーナの一言だった。

「私たちがいた場所、もう火、消してもらえてますね」

「は」

全く、鈍感な振りして鋭いから参ってしまう。

「だって、火事は消してくれるものでしょう？」

「あのね、そういうことはもっと早く言ってくれない？」

「だって今思いついたんですもん」

そして戻ってた——はいいのだけれど。

火は消されているようだったが、あの暖炉の真下まで来た時に話し声が聞こえ、部屋に誰かいることに気づいたアルディクは進むのをやめた。

現場検証にでも来ている憲兵だろうか？——そう思って身を潜めていると、その話し声は次第に遠ざかっていく。

人の気配が消え、にきつと顔を出すと、部屋には誰もいなかった。先に自分が黒焦げになった部屋へ上がり、ジュリーナに手を貸す。だが、あの時扉を蹴破ってしまったのが不味かった。

「誰だ！」

引つ張り上げかけていたジュリーナに暖炉の下へ戻るように言い、アルディクはやれやれと立ち上がった。剣を抜いた見張り二人に、別に怪しい者じゃないですよとへらつと彼は笑ってみせる。

「何処から出て来た！」

「……仕方ない」

アルディクはパキパキと指を鳴らすと、二人へ突っ込んでいった。振りかざされる剣をかわし、一人は顔面に拳。そしてもう一人にすかさず踵落としを食らわせ、彼は瞬時に二人ともを撃沈させた。そしてジュリーナを暖炉の下から引つ張り上げ、行こう、と部屋から出て行く。

どうやら塔の中らしく、階段を下りて行くと、出口が見えた。だが、そこでまたもや憲兵に出くわし、仕方なくアルディクは手刀と回し蹴りで処理する。

そしてその場に倒れる、伸びてしまった憲兵を二人見下ろし、ジュリーナは指を組んだ。

「ごめんなさい。悪気はないの。ごめんね」

「行くよ」

「強いんですね！」

ジュリーナは目を輝かせてアルディクを見る。

「私、知らなかった！」

「あのね、一応皇太子なんだよ。こーたいし。皇子さま。わかる？」

「武術だつて一通り習つたんだから」

そして塔から出て、やっと外の空気を吸う。こちらは疲れ果てたため息をついたが、まだまだ彼女は元気だった。

「楽しかったです。冒険みたいっ！　またしたいです！」

そう言つて笑うジュリーナに、アルディクもまた、もうここは笑うしかない。だけどそんな彼女が好きだ。と、その時だった。

『……ジュリーナ……お姉さま？』

ふと呼ばれた気がして、きよろきよろとジュリーナは辺りを見渡す。

「どしたの」

「呼ばれたの。誰か……」

と、森の方からガサガサと物音がした。アルディクは思わず彼女を背に庇つて立つが、その木陰から現れた人物に、あつ、とジュリーナは声を上げる。

「夢……でも、見てるんですか……？　私……」

目をこすり、そこから現れた一人の少女は、そう言つて二人を見比べる。月明かりに照らされた顔に元気はなく、目は腫れていた。そして、

「……ルザが、探していましたよ？」

と、ハルシャは弱々しい笑みを見せた。

先程からずっと目を閉じて、アステイナは酒場の騒ぎに耳を傾けていた。出てくる話題は、オルンクールの近頃の情勢や、政治の話ばかり。更に耳を澄まし、話を聞き取つても、そんな話ばかりが聞こえてくる。

「ねえ。銀髪の皇女さん」

「なんだ」

「どうしたの。さつきから、難しい顔しちゃって」

「……途中、出会った老人が言っていた。オルンクールには反政府の勢力があると」

「ああ、あるわよ。ここにいる連中たち、ほとんどがそう」

「お前は、どうなんだ」

と訊くと、レイーナは、めっそうもない、と首を横に振った。

「お嬢さまを裏切るなんて、出来っこないわ。メアリルは堂々と裏切れるけど、お嬢さまはあたしたちの命の恩人だから。ほんと、あのバカ王子にはもったいない」

アステイナは軽く吹き出した。

「そうだな。もったいない」

さて、そろそろ。

アステイナは席を立った。

「お暇するよ」

「なにすんの、これから」

「私はルイセラードを探しに来たんだ。手伝うか？」

「嫌よ、あんなバカ探すなんて。……でも、こんなこと言うとお嬢さまに怒られるわ」

同行しよう、とレイーナも席を立った。

「オルンクールにはあたしの方が慣れてる」

「助かるよ」

と、その時だった。酒場の入り口から、あの門番が血相を変えて転がり込んできた。その光景に、場が一気に静まり返ったかと思うと、門番は、

「き……来た！」

蒼白な顔と引きつった声に、辺りは騒然とする。なにが来たんだ、そうアステイナが問いかけようとした時、門番は声を張り上げた。

「クラウディスルグ国軍が、街を焼いてる！」

「なっ……！」

「なんですって！」

声を張り上げたのはレイーナだった。

「そんな、なんの予兆もなく奇襲なんて……！」
言った通りだ。

——国王陛下の。

ちっ、とアステイナは舌打ちする。だが、その時、刺すような殺気を感じ、抜刀する音が聴こえ、彼女たちは振り返った。黒い瞳の男たちが席を立ち、剣を抜いている。それはレイーナが言っていた革命家たち——いや、違う。

アステイナは自分の目を疑った。彼らの姿が、視界に歪んだかと思うと、次に見えたのは黒い瞳でも黒い髪でもなく、青い瞳と茶色の髪——。

「クラウドディスルグ……！」

アステイナは剣を抜いた。

——そうか。姿を変えて、革命家としてこの街に潜んでいたと。そういうことか。

だが、中には啞然とする黒い瞳の男たちもいた。敵を騙すにはまず味方からなどと言うが、それを見事に実行したわけだ。

「お前たち、クラウドディスルグ国軍だな」

クラウドディスルグの者との戦闘など、経験はない——だが、そう思った時、とある言葉が脳裏を過ぎった。

『もし術師とでくわしたら、とりあえず勝負は速さで決まるよ。それか、とつとと逃げること』

そう言ったのは、兄ではなかったか。

「そうだが、なにか？」

男のうちの一人が言う。彼らが持っていた剣を捨てると、それは砂のように粉々に砕け散った。そしてふと口々になにかを唱えれば、彼らの姿は歪み、その場からふと消え去る。その刹那、雷鳴とも呼べる爆音が轟いたかと思うと見上げた天井が目の前にあって——。

気がついた時には、全身に痛みと、真っ暗が目の前に広がっていた。

「それでは、お姉さまが……？」

焚き火はないものの、それを囲むように円になって座り、アルデ

イクは突然現れた見も知らぬ少女に全てを説明していった。そしてまた、出会ったばかりの少女も知っているであろうことを話してくれた。スルリエズのラルバートで、ジュリーナの弟に会ったこと。そして、そこで出会った彼の旅仲間。

——それは間違いなく、あの口うるさい妹だった。

銀の髪に灰色の瞳をした、剣を携えた少女だけ聞けばわかる。どうして彼女がそこにいたのか、その理由はきっと

『父上の命令で探しに来た』

そんなところだろう。

目の前の黒髪の少女は、同じ皇女でもそんな彼女とは似ても似つかぬ、おしとやかな雰囲気を漂わせている。やはり、容姿は何処となくメアリルと似ていて、姉妹なんだと感じさせた。

「でも、メアリルさまを悪く言うわけじゃありません。良い人ですもん」

と、ジュリーナが言った。そして彼女はハルシャの頬に手をやる。「ルザもいつまで経ってもいけない子ね。いつも影であなたを泣かせてばかりで」

「……そんな、こと」

ないです、とハルシャは顔を伏せた。さらさらの黒髪を撫でて、ジュリーナはふつと微笑む。と、その時、地面を揺るがすような爆音が遠くの方で轟き、一同は音のした方へと目をやった。

「……なんの音」

アルディクは立ち上がり、遠くの空を見、思わず目を見開いた。

——赤い。

戦争の悲惨さを描いた絵画がふと脳裏に過ぎる。その絵で一番の印象に残ったものは、殺される人でも、兵士でもなく、赤く塗られた燃える空だった。その絵画を見た時の、肩が、腕が震える感触は今でも覚えている。

十何年も前、他国では戦争が起きていた。ウェランドルス、そしてロルディオリーズの因縁の対決は、周辺の諸国を巻き込む世界規

模の戦争へと発展していた。

その中で、グランディスナだけが独立して平和だった。

甲高い悲鳴が聞こえることもなく、この手が血に濡れることもなく、そして村や街の殲滅に手を下すこともなく、ただなにも知らずに暮らしていた。

そんな時にふと見た、もつともつと過去の戦争を描いた一枚の絵画。

その時と同じような震えが、そしてそこに足された嫌な予感が、悪寒となって背筋を伝う。ざわざわと胸が騒ぐ。体が半分失われそうな、胸が挟られるような、まるでなにか失ってはいけないものが失われようとしているような、そんなとてつもなく恐ろしい予感がした。

『兄上の勘だけは、信用できますよ』

ふと、そう言った一人の少女の姿が脳裏に浮かんでは、消えた。

「……アルディクさま？」

まさか？

指をくわえ、高らかにアルディクは笛の音を鳴らした。

——来るな。

来ないでくれと切に願う。

「アルディクさま？」

ジュリーナが問いかけてくるが、耳を通り抜けていった。

「……来ないで」

だが期待とは裏腹に、しばらくして森の中を駆け抜けて来たのは、見覚えのある一頭の馬だった。

「くっそ、お前——！」

目の前に駆け寄ってきた彼は、立ち止まったまま地面を蹴ったりと、どうにも落ち着きがない。

「ゲオルド、あいつは」

その長い首に抱きつき、諫めるように鬣を撫でる。だが、心の中は憤りばかりだ。

「あいつは何処でなにしてる！」

ジュリーナとハルシャが息を呑んだのがわかった。

ふと見た、抱きついていた首の付け根にある、赤い血が滲み出ている傷が目につく。それを見つけて、勘は当たってしまったのだと実感した。

その時だった。

「……衛兵」

息を呑み、ハルシャは立ち上がり、ジュリーナをとつさに背に庇った。視線の先には、先程の笛の音に反応したのか、兵士の姿が二つある。

彼らは見覚えのない二人に気づき、槍を構える。そんな彼らを見据え、

「私に刃を向けるなど何事です！」

張り上げたハルシャの声に兵士たちが一瞬戸惑ったその隙に、彼女は背後のジュリーナを振り返る。

「行ってください」

「でも——」

「行って！ この街の何処かにルザがいます！ ……ちゃんと、国に帰ってあげてくださいね」

アルディクは呼びつけたゲオルドに跨り、ジュリーナを自身の前に引っ張り上げた。そして思い切り脇腹を蹴り、森の中を駆けさせる。

「アルディクさまっ！」

「彼女なら大丈夫。ゲオルド、アステイナの所へ」

——お願いだから——。

この戦火に、彼女が巻き込まれる前に。あの絵画のようになってしまふ前に。

——なってしまう前にと、そう思いたかった。

「……僕のせいだ」

「え……」

「掴まってて！」

アルディクは渾身の力を込め、ゲオルドの脇腹を蹴った。

「十四章：私が帰る場所：2」

所々から聞こえてくる、かの少年の好きだった爆発の音。それにふとイルゼルは口元を緩める。多分、あの少年はもう死んだのだろう。十分な力がなければなにもできない、それは私も同じことなのだから――。

「……どう、して」

力の抜けたように、メアリルは数歩下がり、ぺたんと座り込んだ。敵を、騙すには……味方から、か？」

「自分の目的の為には、なんであれ排除する。それが例え“自分を慕ってくれている者”であつても――。当初、あなたにはもっと早く、死んでもらうつもりでした」

彼は携えていた短剣を抜く。そして人差し指をすつと刃の上へ走らせた。鋭く磨がれたそれは薄く皮を切り、そこからぷつりと赤い滴が滲み出る。

「……人生の最後の我俎に、勝つことを選んでみたかった」

赤い滴は、何処までも綺麗に思えた。

「白状しましょう。皇帝を殺したのは私だ」

視界の端で、彼女の肩が震えた。だが、銃口は向かない。

「あの晩、家臣に成りすまして私が殺した。殺して、あなた方を利用してかき集めさせた信頼を奪い取り、その代わりにあらかじめ、不信任を世に撒き散らしておいた。フェイエルとシェイレルの記事、それとルイセラードと妹君のことも私が犯人だ。……後はあなたを殺し、国を焼き、信頼を各国に返還する――そして本物の我が国への信頼を得ることができれば、私はもう思い残すことなくこの世界から消滅できる」

彼女の手に銃が握られた。そしてゆっくりと、その銃口が真っ直ぐにこちらの頭へと向けられる。

「初めから全て、私たちを利用して――！」

「ええ」

首から提げていた青の石を取り出し、鎖を首から外す。

「古来より、このちっぽけな宝石は、信頼の証としても用いられていた。あらかじめ悪役を用意しておき、後、あたかも取り返してやったかのように持ち主へ返す。……そんなことで簡単に国が動く、全く持つて厄介で、利用価値のあるものだ」

イルゼルはそれを、バルコニーの外へと投げ捨てた。

「こんなものがあるから、民族意識が高まる。持ち主が放棄したりメンバーは壊せても、放棄しないものは壊せない、何故なら持ち主との間に絆があるからだ。イルグリストとマティルグラスものは特に利用価値がある。あれは現実主義者たちが、彼ら互いの魂を封じ込めることで永久に触れ合えないようにした、残酷の結晶だ。同時にそこに封じ込められた力もまた然り——」

「なにを、どう利用する……！」

「びっくり箱です。マティルグラスとイルグリストは古来、術師の国だった。だが、ある事件をきっかけに、とある魂を核にして、国の権力者たちがそこに全ての力を封じ込めた。壊してしまえば膨大な力が甦る」

仕事をきちんとこなす部下は、忠実に、所有権を剥奪してきたに違いない。

——それもまた、信頼なのだろうか。

けれども、別に壊さずとも戦は勝利しそうだ。ならば、研究資料とさせてもらおう。“彼”の為の、研究資料として。

「そういえば、まだ——あなたのものだけ、手元にありませんでしたね」

偽りの関係を築くだけで、此処まで来ていた。

——あれ程、鋼だった心は、今はただのガラスだろう。

「死んで、国ごと世界を見捨てますか」

彼女の目の前で膝を折り、ぴたりと銃口に額をつけてやる。

「それとも今、私を撃ちます？ ……いや、できませんよね。今の

あなたには」

銃を持つ手を重ね、銃口を彼女のこめかみへと移動させる。

「撃てば楽になりますよ。死ぬという行為が、人間にとっての一番の楽ですから」

「わ……たし、は」

「無理ならば、殺して差し上げましょう」

引き金にかけた指を解き、そこに自分の指をかける。

「……一発で楽になれる。これは、そういうものなのでしょう？」

「お姉さま！ 何処にいるんです！」

国の事情は聞いた。だが、肝心の要が居ない。

召使いは口を揃えて、もうあてになりませんでしょう、と言った。彼女の部屋にも姿はない。家臣たちは総司令官の代理を買って出たりヴェンティ大佐指揮のもと、民を城内へ匿い、それぞれ、軍を率いてクラウデイスルグ国軍を麓で迎え撃っている。

皇帝は姿を現さない。そして誰も探そうとしない。

そしてそれは他ならぬ自分のせいだと、ハルシャは身に染みて感じていた。

——あの妹の姉だから。

裏切った娘の姉だから、彼女もまた裏切るんだと聞く。

街はもうだめだ、と誰かが言った。十九の皇帝はあてにならないと、異口同音に聴こえてきた。全て焼けてしまったと、子を連れた母が泣いていた。

ハルシャは城内を端から端まで駆け回った。彼の加護を願う。きつと言うだろう、君が信じないで誰が信じる——と。

「お願い、お願いよ……！」

重い体に鞭打って階段を上がる。そして、最上階のバルコニーに辿り着いたその時だった。

こめかみに銃を突きつける男と、そして生気を失った彼女の姿を見つけたのは。

「お姉さまあつ！」

力の限り叫び、ハルシヤはその場にへたり込んだ。ゆっくりと、焦点の合わない瞳で彼女はこちらを見る。

「ハ……ルシヤ……？」

「姉から、離れて！」

ハルシヤは護身用の銃を、彼女の目の前にいる男へ向けた。

「イルゼル・レステアウエル陛下」

「邪魔をするおつもりで？」

その青の瞳が、ずっとこちらを向いた。

「彼女を殺せば、あなたは幸せを手にすることができるというのに。そして私を殺せば、間違いなくあなたは彼に恨まれる。それでも？」

立ち上がり、イルゼルは銃口をハルシヤへと向けた。

「どうか逃げてくれませんか。ルイセラードに恨まれたくないので」

「あなたは、あの人になにを吹き込んだんです」

「真実を伝えただけです。ウェランドルスの君主にはなれないという事実をね」

「よくもそんな、でまかせを——」

「全て事実です。そしてその存在は、新しい世界の希望になる。あなたと彼の希望にもなりうる。だとしたら素敵だと思いませんか？」

と、イルゼルはなにかに気づいたように、ふと寂しげに微笑んだ。その表情が、目の細め方が、誰かに似ていた。そしてぼつりと彼は呟く。

「……おかえり」

ふと暗闇の中から意識が浮かび上がり、初めに感じたのは背から全身を押し潰すような圧迫感だった。胸が苦しい。腕を動かそうとすれば、全身に痛みが走った。

「……う……」

——確か、爆発が起きて。

建物が崩れて、下敷きになったんだろう。と、なにかが崩れる音

と一緒に、ふつと体の上の重りが取れた。そして聞こえたのは、弱々しい息混じりの――。

「……アス、ティナ」

目を開ければ、視界に入っただのは安堵したレイーナの表情だった。

「良かった、生きてた……」

「そなた――」

彼女の額が血に濡れて赤い。

「怪我……」

「まあ、ね。……あばらが何本か折れてるわ」

左腕を握られると、凄まじい痛みが走った。苦痛に思わず顔を歪めると、あんたもか、とレイーナは苦笑いする。

「……ごめん、庇おうと思っただけ」

「どうして。私は、お前らには、邪魔だろう」

「あんたみたいな、サバサバした女の子は好き。もう喋らないで。」

あたしは常人より数倍頑丈だから、普通に喋れてるけど」

周辺に転がっている木材を手に取り、レイーナはアステイナの折れている腕をそれに添え、自身の上着を引き裂いて括りつけた。

「……とんだ窮地、ね」

軽く咳き込み、レイーナは膝をついた。そしてアステイナに肩を貸す。

「クラルグが、いたらって……思っちゃうわ。頼りにしないって、意地張ってるけど。とりあえず、巻き込まれたくないから動くわよ」

「……大丈夫か……？」

「これくらいの大怪我、慣れてるわ。あたしなにやってると思って

――」

と、突然言葉が途切れた。目だけで彼女を見やると、レイーナはその夕焼けの瞳を見開き、一点を凝視したまま動かない。自分もそちらを見ると、燃え上がる炎をその向こうに、上手く焦点が合わない目は一人の姿を見つけた。

右手に、剣を。その白刃は赤く濡れ、頬も同じように赤く、少し

着崩れた黒衣が熱風に揺れ、同じく赤く濡れた長い髪がなびいた。
段々と焦点が合う。そして、見つけた。

——見慣れない、青い瞳。

ふと彼は、なにかを見上げるように視線を外した。

四方を炎に包まれた街を前に、立ち竦んでいた。その炎の方へと
一步を踏み出せば、身に纏った風が防御となつて、街の中に入るこ
とができた。

だが、目の前には、まるで歩いていてそのまま倒れたように、た
くさんの血まみれの亡骸が横たわっていて、焦げ臭い臭いと、おび
ただしい血の臭いが鼻をついた。

「っ……」

酷い。

黒い瞳。方や、青い瞳。民間人、子どもに老人、そして壁にもた
れかかって息絶えている兵士。

——街を丸ごと飲み込むつもりか。

きつと、突然だったのだろう。ここはもうだめだ。きつと今では
もう城の攻防になっている。

——戻らないと。

そう思い、歩き出したは良かったけれども、しばらくして動けな
くなった。地面に剣を刺して踏ん張る。気持ち悪い。心地が悪い。
意識がその場から弾き出されそうだ。

その時、ふと声が聞こえた気がした。

『——おかえり』

オルンクール城？

目をやっても城は遠く、歩こうとするも、足が重くてびくりとも
動かなかった。その刹那のことだった。

「ルイセラード、クロスキーズ……！」

聞き覚えのある声で呼ばれて目を移す。建物の瓦礫の中、そこに
いた良く見知った二人がいた。

「何故、今更っ！」

力いっぱい叫んで感じた苦痛にレイーナは顔をしかめた。

「ルイセラード……？」

「喋っちゃ、だめよ」

そう言っただけレイーナは、吐息交じりの弱々しい声しか出ないアステイナを制する。そして目の前の相手を睨みつけた。

「お嬢さまは……！　なんで一緒にじゃない！　なんで返した……どうして……！」

「フェイエル……アステイナ……？」

「そうだよ」

レイーナはアステイナをその場に寝かせ、足元にあった細長の荷を手にとった。その布を剥けば、現れたのは愛用の相羽の槍。

「許さない。さんざんお嬢さまを振り回して、拳銃の果てにそれだなんて！　ウエルリーのようにクラウド・スルグに身を売ったのか！」

「……人聞きが悪いじゃないか」

「ならばどうしてクロス・スルグ家の人間が、その目をしている！」

クラウド・スルグに、イルゼル・レス・アウエルに身を売った他にどんな理由がある！」

そう啖呵を切るレイーナを、名を呼んでアステイナは彼女を制した。

「レイーナ」

「アステイナ、喋るなって言っただけでしょう」

「彼は、身を売ったりしていない」

「クロス・スルグ家の人間がどうしてそうなの」

「……違うんだ」

アステイナは無理矢理に体を起こした。それを慌ててレイーナは支える。

「どうということ」

「彼は、違うんだよ」

「……。は？」

レイーナは二人を見比べた。

「違うつて、なにが——」

「まったく、アステイナは察しが良くて困るよ。誰から聞いた」

「言えない」

「……そ」

ルイセラードは地面から剣を引き抜く。アステイナは苦味を潰したような表情で、雲が赤く染まりつつある空を見上げた。

「——血の雨が降りそうだ、な」

同じく空を見上げ、熱風が流す雲に目をやる。燃え盛る炎で夜空が明るかった。以前、戦争は嫌だと言ったら『しなければ仕方のないこともあります』とホグル將軍に言われたことがある。

確かにこれも、仕方のないことかもしれない。

それで片付けてはいけないことだとわかっていても、これが自分の従う道なら、従うまでだ。もう、一線を越えて向こう側に立ってしまった。

「いや……現に、降っている」

アステイナは剣を抜いた。

「アステイナ！」

「こいつをふんじばつてでも連れ戻すのは、私の仕事だ。……お前はお前のお嬢さまのところへ行つてやれ」

「あんた、自分の体の状況わかってんの！　こんな怪我負った温室育ちなんて——」

「誰が」

痛みを堪えて立ち上がり、彼女は片手で剣を構えた。レイーナは啞然と目を見開き、彼女を見上げる。

「私が連れ戻す。行くんだ」

「……わかったわよ」

見下ろされた灰色の瞳が、邪魔だ、と言っているのがわかった。大人しくレイーナはその場から城の方へと走り去る。

——これで、戦場に二人きりだ。
周りは炎と熱風と瓦礫しかない。死臭が鼻をつく地獄絵に、二人だ。

彼女の持つ剣の先が震えていた。きつと気力だけで立っている。いつもは強い意志を伺えたその瞳も、今は虚ろだった。

「ウェランドルスに……戻る気は？」

炎のせいだろうか、その灰色の瞳が彼女らしくもなく潤んで見えた。いつもは芯の通った声は、この時に限って震えて聴こえる。

「……ごめん」

「そなたがいなくなれば、ウェランドルスは」

「叔父上が居る。姉上もいる。人員には困らない」

「それは、本当に心からの望みか」

「——ああ」

「なのに、何故、悲しい顔をしている」

その言葉に、俯きかけていた顔が上がる。

「本当は、戻りたいんじゃないのか……！ 帰りたいんじゃないのか！ 帰ってはいけない理由が何処にある！ 自分が故郷だと思う場所に、帰ってはいけない人など居はしない！」

やはり君は、真っ直ぐで、自分の信じる道を行きたがる。

——だけど。それでも。

「……殺した」

声が、手が震えた。

「見捨てて、逃げた。……僕がやった」

「逃げた……？」

「ジェルド・クロスキーズを、殺したのは、僕だ」

彼女は息を呑み、目を見張った。

「殺し……た……？」

初めて人を刺した感覚が、鮮明に甦る。飛び散った血の緋色、擦れた声、森のざわめき、駆け出した暗闇——。

震えが止まらない。

本気だった。無差別ではない、動機はあった。生きる道をこの手で開きたかった。

「僕は――」

と、刹那、前方に馬の鳴き声が響く。視線を上げれば、銀の髪の青年と、良く見知ったかの黄金の瞳をした少女を乗せた馬が、瓦礫を燃やす炎を飛び越えて向こう側に飛び出してきた。

目の前の彼女は振り返り、目を見張る。瞬間、ルイセラードは上着のフードを頭に被せ、逃げるように踵を返して走り去った。

「ルイセラードっ……！」

胸の痛みを堪えて叫んだアステイナの声も届かず、彼はその場から居なくなる。

「アステイナ！」

馬から下りた銀の髪の青年が駆けてくる。

「兄上――！」

その姿を見つけて、強張っていた肩から力が抜けた。ふらりと倒れた体は抱きとめられる。

刹那、懐かしい故郷の香りがした。

「……兄上だ」

そして思わず笑みが零れる。――殴るつもりでいたのに。

「ごめん、アステイナ、本当にごめん！」

「……許してやりませんよ」

と、金の髪と黄金の瞳をした少女が、馬を引いてこちらにやって来た。

「アルディクさま」

「ジュリーナ」

その名に、アステイナは顔を上げて彼女を見た。

「ルイセラードの、姉上さま……？　そうだ、ルイセラード――！」

だが、立とうとしても体に全く力が入らない。

「アステイナ、無理は」

「追わないと、向こうに行ってしまう……！　まだ、私は、なんにも

謝っていない……！ 帰る場所はあるんだ、ウェランドルスにだって、彼の帰る場所はない――」

声が詰まり、代わりに溢れ出たのは涙だった。

「帰ってはいけない理由など、ないんだっ……！」

「十四章：私が帰る場所：3」

「あなたは、自分が今なにをしているか、わかっているのですか」
ハルシヤは言い放った。

銃口の向こうに見える——同じように銃口をこちらへ向ける彼は、動じない。

「あなたこそ、わかっているのですか」

そう言つてイルゼルは嘲笑う。

「あなたは、なにもわかつてはいない。どんな気持ちで、私があなたに銃を向けているのか、ここに跪いた彼女が、何故反撃をけしめないのか、そして——自分の最愛の人が、どうして敵になつてしまったのか」

「あの人の信念を、あなた如きに曲げることはできません」

「あなたは本当に、なにもわかつていない。面白い程に」

彼は拳銃を構えていない左手を、手のひらを上に、ずっと虚空へ差し出した。

「今の彼のなにを知っている」

人差し指が銃を指す。腕が動かない。

その青の瞳に縛られて、その視線に誰かと似通ったものを感じて動けない。

——どうしてその姿が、被つてしまうの。

「……っ、お姉さま、聞こえていますか」

ここで自分一人、彼を止められるだろうか。力をかければ、若干指は動く。

引き金を引いて、そうしたら、戦いは止まるかもしれない。だが、引き金を引くことができない。この指が折れてもいい——その覚悟は決まっているのに、彼を打ち抜く覚悟を決められない。

——だって。

姿が、佇まいが、その微笑み方が、重なる。

「お願いします」

こうなればもう、ただ、祈ることしか出来ないのだろうか。

「お願いです……！ このままこの国を見捨てないで！」

——だが、その時だった。

「うらあああああ！」

地面を力強く蹴り、バルコニーの塀の上高く現れたのは——そして鈍く光ったのは槍の二枚の刃。その姿を見てハルシャは歓喜の声を上げる。

「レイーナさん！」

バルコニーの塀を蹴り、彼女は一瞬隙の見たイルゼルへ刃を向ける。彼はとつさに手にしていた銃でその攻撃を防ぎ、槍の刃を間一髪かわすが、銃は弾き飛ばされる。だが、突如現れた少女は次の攻撃をしかけずに、座り込んだままのメア ril を無理に抱きかかえ、勢いに任せて地面を蹴った。

自身をクッション代わりにそのまま灰色の石の塀に激突し、レイーナは盛大に顔をしかめる。

「いつて……！ 史上最悪っ……！」

「……フェイエル」

痺れた手を押さえ、イルゼルはその名を呟いた。

「そうか、ウエルリーは」

「レイーナさん、クラルグさんは」

ハルシャは自由になった手で銃を構え直した。

「ウエルリーの足止めを任せています」

「軍の方は、どうでしたか」

「籠城状態です。——さすがに、やばいでしょう」と、その時だった。

今まで微動だにしなかったメア ril の体が動いた。石畳に手をつき、彼女はレイーナの持っていた槍を取り上げると、ゆらりと立ち上がり、目の前の相手を睨みつける。

「……頭が冴えた」

彼女の姿を見て、イルゼルは可笑しそうにくすりと笑う。

「残念」

「やはりお前はろくでなしだ。どちらでも、ろくでなしだ」

槍を構え、ハルシャを一瞥し、彼女は言った。

「レイーナと避難しろ。すぐに片付ける」

立ち止まっても、まだ手が震えていた。手首を握り締めても、しつこいくらいに震えて止まらなかった。

あの時は、あれで良かったんだ。だが、それは本当に良かったのだろうか。

見える城の方向を確かめて、ゆっくりと歩き出す。視線の先に飛び出してきた馬は間違はなくゲオルドで、乗っていたのは探していたはずの姉だった。そしてあの青年は確か——そう、アステイナの探していた、彼女の兄だ。

——それも、もう、関係あることじゃない。

だが、そう思っても後ろ髪が引かれるばかりだ。

せめて帰る場所があるなら、そこに帰れば、少しは楽になれるのだろうか。

「……僕の故郷は、クラウディスルグだ」

あの大国じゃない。

「ウェランドルスには、帰らない」

言い聞かせるように言い、また一歩進む。と、その時だった。

——ぱこつ。

馬の蹄の音に、思わず顔を上げる。そこにいた姿に、思わず呟く。

「あ……」

あの暗い森に、置いていってしまったのに。

「ハルヴィート」

なんだよ、あのまま、帰っちまって良かったのに。

近づいてきてかと思えば、目の前で足を止めて、その大きな瞳が顔を覗き込む。

「……大丈夫だよ。……元気だよ」

と、彼は乗れと言わんばかりに、体を横に向けた。

「……ありがとう」

と、その時、微かに地響きが足の裏から伝ってきた。辺りを見渡せば、北の丘にゆらめく金色の旗の姿を、この目は捉えた。

南の丘にも同じように、金色の旗がはためく。

「黄金の獅子……！」

間違いない。あれは他でもないウェランドルス国軍の証だ。それに混じって見えるものは、黒。城を挟み撃ちに、ロルディオリーズに加担し、クラウデイスルグ軍を潰しにかかるうというのか。

ウェランドルスが黒の旗を掲げるということは、そういうことだ。

「……どうして」

こんな無謀、誰が。——まさか。

「生きて……る……？」

ロルディオリーズに対して、こんなことを実行する人物など、一人しかいない。

「……行こう」

手綱を取って背に飛び乗り、脇腹を蹴る。

——もしかしたら、あの時、無意識に急所を外していたのだろうか。

「……そんなはずは」

頭に血が昇っていたのは事実だ。前面に押し出されていたのは殺意だった。それなのに、心の奥につつかえていたものが消えそうなの。この心地は一体なんなのだろう。

だが、しばらくして行く手は阻まれた。

——通れない。

血の臭い、鉄の臭い、火薬の臭いが一段と濃くなる。頭が割れそうに痛い。銃声が何度も鳴り響く。なによりも、あちらこちらに人——血に塗れた兵士、武器を持たない民が伏し、動くのは吹き抜ける風と、舞い上がる炎、崩れ行く瓦礫のみだった。

人の時間は止まったまま、動かない。ぴくりとも動かない。
風が立ち込める死臭を煽る。

明るかった空を、黒く染める程にカラスが舞い始めていた。

——嫌な汗が額に浮かび、ハルヴィートの背から降りる。

その時だった。

「殿下！」

懐かしい声がして、見やれば、駆けてくる二人の姿があった。

動けずにいると、白髪混じりの年寄りな軍人は駆けて来て、真っ

先にルイセラードを抱きしめた。——ホグール將軍だ。

「ご無事で！ お怪我は！」

「……ない、よ」

「殿下」

やんわりと声をかけられて、肩越しに目を向ければ、そこにいた

シヴィット大佐が頭を下げた。

「お迎えに、上がりました」

「迎え……？」

「陛下は、しぶといですから」

その言葉に目を見開く。

「生きて……？」

「アーリシュティンが、瀕死の陛下を送り届けてくれました。本当はもう立ってられないはずなのに、気力で軍の指揮を取っています。陛下自身で決着をつけたいのでしょうか——あなたのことを、力ずくでも連れて戻れと、仰せになりました。ただ、王妃さまの為だけに連れ戻すのだと」

「母上の、為……」

「——おわかりでしょう」

シヴィット大佐は言い聞かせるように言い、柔らかく微笑んだ。

「王妃さまの心を癒せるのは、あなただけなんですよ」

その時だった。大砲の音が空に轟く。

城の方へと振り返れば、微かだが、風向きが変わった。

「城が――」

破られたのか、それとも、ロルディオリースが反撃に出たのか――
または。

「父上は――！」

駆けて行こうとするが、ホグール将軍に腕を掴まれた。

「っ、放せっ！」

「放せません。……殿下は近づけるなという命令を承りました故に」

「どうして！」

振り解こうにも、力が強く、解けない。本気で行かせてはまずいのだろう。

「どうして、行かせてくれない！」

言い切れば、ホグール将軍も、シヴィット大佐も、目を伏せて黙り込んだ。

「……まさか」

二人はなにも答えない。

「ジェルド・クロスキーズは、殺すつもり、なのか？」

轟々と炎が燃え上がる。やがて、ホグール将軍が重い口を開いた。

「……申し訳、ありません」

「自分が、情けないのか、良くわからない」

ハルシャを連れて去ったレイーナを見送り、メアリルは言った。

「……自分に呆れて、なにも言えない」

「それはそれは」

満足気にイルゼルは微笑む。

「あなたは実におもしろい人だった。――私を飽きさせなかった。
大したものですよ」

「……初めてだった」

覚めてしまった一瞬の夢が甦る。

望むべきではないと、ずっと思っていた。憧れに手を伸ばさせ、
自分もハルシャのように生きてもいいのだと思わせた。

——けれど、やはりそれはただの幻だった。

と、彼はなにかを感じたのか、くすくすと笑い出す。

「なにが、可笑い」

「——あなたの意に反して、ウェランドルス軍が援軍に来てくれたようです」

「な——」

堀の向こうの城下を見下ろせば、その眼下で多数はためくものは

——こんじきの軍旗。

「黄金の獅子……！」

「きつとジェルド・クロスキーズでしょうね。彼意外にこんなことするバカはいません」

彼は堀へ向けて手のひらをかざす。刹那、石のレンガで出来たそれは粉塵となり、風に流れていった。

「やはり、彼はしぶとかったようだ」

彼はその向こうの虚空へと一步を踏み出す。啞然と目を見開けば、瞬く間もなく彼の体は空気へと溶けていった。

「風に、なった——」

メアリルは槍を下ろした。

新しい玩具を見つけては駆けて行くような、そんな無邪気な表情が、一瞬見えた気がした。気のせいだろうか。

石畳に落ちた銃を拾う。そして、メアリルは力強く槍の柄を握り締めた。

「十四章：私が帰る場所：3」（後書き）

戦場の風景をもっとこう、描写したいのですが、想像力が追い付きませんでした……。

〔十五章：救いの銃声：1〕

ジェルドは傷の痛みには耐え切れず、体を前に折った。

「くっ……」

見渡した先には、城を護るロルディオリース軍を襲うクラウディスルグ軍、そしてそれを挟み撃ちに、引き剥がそうとする我がウェランドルス軍――。

自分は一人、愛馬と共にここに残った。ずるりと体を地面に落とし、天を見上げて一息つく。

――確かにあの剣は、急所を狙っていた。

ルイセラードは自分を本気で殺すつもりだった。だが、躊躇ったのだろうか――あいにく急所は外れ、瀕死にただけだったというわけだ。

「もう、探し出した……か？」

――数十分前のことだった。

『陛下、あまり無茶を――』

『言ってる場合か』

ジェルドはホグール將軍にそう言った。

『……死にそうだから、お前らに頼むしかない』

『はい』

『ルイセラードを見つけて来い。そしてずっと確保しておけ。私はじき、イルゼル・レステアウェールとやりあうことになるだろうか』

『……はい』

そう言っただけに遣ったのが、数十分前のこと。

――その時、その場にふと柔らかな風が吹きぬけた。体を起こし、剣を鞘から引き抜き、背後を振り返れば、そこには、かの宿敵がいた。

波打つ柔らかな、淡い茶色の髪。そして青い瞳。

「……久し振りだな」

「ええ。その件はお世話になりました。——ジェルド・クロスキーズ」

イルゼルはそう言ってくつくと笑った。

「まさか、こんなにまだ元気とは思いませんでしたよ」

「どっかのバカが手加減したお陰だ」

「——そうですね」

ジェルドは傷を抑えて立ち上がる。そして剣を構えた。

「……ルイセラードは返してもらおう。あれは、私の後継者だ」

「放せ！」

力の限りルイセラードは叫んだ。だが、ホグール將軍は自分のこの腕を強く掴んだまま放してくれない。

「殿下！ 行つてはなりません！」

両手で双方の肩を掴み、ホグール將軍は自分の方へルイセラードを向かせた。

「行つてはなりません！ 殿下！ どうか、自分のお立場をお分かりに——」

「立場つてなんだ！ 僕は——僕は——！」

ルイセラードは腕を振り解き、彼に剣を向けた。

「僕は、クラウドイスルグへ行く」

「殿下！」

「この目が見えないのか？ この剣が見えないのか？ 黄金の獅子はとつくに捨てた、今更止めても無駄だ、僕は行く」

「——殿下」

睨み合いが続いた。そして、ホグール將軍は諦めたのか、目を伏せる。

「……ごめん」

ルイセラードはハルヴィートに飛び乗った。そして強く脇腹を蹴る。

決めたのだから。

――父上。

彼をそう呼ばうと、決めたのだから。

――こんな僕を認めてくれる人は、父上しかない。

――着慣れた軍服に袖を通す。

カツカツと力強い足音が響く。その姿を見て、城の中に非難している民たちは目を疑った。そして次には歓喜の声を上げる。

「陛下！」

「皇帝陛下！」

毅然とした軍服姿の彼女を見て、誰もが期待を抱いた。

彼女は二階の部屋の窓から外を見下ろした。見下ろせば、入り乱れている我が軍と敵軍。そして、盟友たちとでも言おうか。扉が死ぬ気で食い止められている。

――行けるだろうか。

メアリルは窓を開けた。そして眼下にたまたま居合わせた敵の軍人の乗る馬の後ろに飛び乗り、一瞬で相手の頭を銃で殴り飛ばし、その馬を手に入れる。

そして一発、銃声を響き渡らせた。

「立て直す！」

その声に、ロルディオリーズ国軍の誰もが反応した。彼女の乗る馬は戦場を駆けぬけ、攻撃は全て槍でなぎ払い、一人の男の許へと辿り着く。

「すまない、リヴェンティ大佐」

「なによりです、陛下」

「立て直せるか」

「ウェランドルス国軍のおかげで、こちらが有利に」

「――そうか」

と、彼女はもう一発銃声を轟かせた。

「ボルナード將軍、ヘルバン中將！ 癩に障るが北はウェランドル

ス国軍に任せろ！ ロルディオリーズ国軍は南へ！ リヴェンティ
大佐に指揮は任せろ！ ラウメル准将、その間に銃撃隊を立て直せ
！ 第一部隊は門へ！ 第二、第三、第四部隊は東へ回り込め！
これからは私が全軍の指揮を執る！」

「十五章：救いの銃声：2」

「死にかけの貴方と戦うのも、不名誉だ」

風が舞い、イルゼルの手には剣が現れた。

「……ローザを愛していない貴方と戦うなんて」

「愛していないと誰が、決めつけた」

「貴方自身が決め付けているではありませんか。——ジェルド・クロスキーズ！」

イルゼルは地面を蹴った。そしてジェルドに斬りかかる。

——それをギリギリで受け止めたが、ジェルドは傷の痛みを歯を食いしばった。

「……全く、不名誉だ。本当なら、ルイセラードにあなたは殺されるべきだった」

「あいつに、なにを吹き込んだ」

「真実を」

イルゼルは唇の端を吊り上げて笑う。

「私とローザが愛して生まれた子なんだということを。貴方は、ルイセラードのことをちっとも愛していないんでしょう？——貴方は僕を殺さない？ そんなことを、ルイセラードは私に訊きましたよ」

「……そうだな。愛情なんて持ち合わせていないのかもしれない」

「あの日の貴方もそうだった。ローザを連れ戻すのは己の権力保持の為。そう言っ、私から彼女を奪った。あの日から貴方はなんにも変わってはいない。いつもそうやって自分の権力保持のことしか考えていない——！ 人々は名君だと言うが、私にはそうは思えない。そんな輩に、ローザとルイセラードは任せておけない」

剣を弾き飛ばし、イルゼルはその場から飛び退いた。

「……十七年前を思い出す」

「そうだな」

十七年前。

イルゼルは各国を放浪する流浪の民だった。ルイセラードと同じ、旅好きの旅人だった。それが、政略結婚を望まず、王城から逃亡してきたキャルリアローザと出会ったことで人生を大きく変えることとなる。

——二人はただ、純粹にお互いを求め合っていた。

『優しい人なのね』

彼女はそう言っ、抱きしめた腕の中で微笑んでいた。

——そう笑わせることもできないくせに。

ただ単なる嫉妬心なのかもしれない。ジェルドが彼女を奪い返しに來たその日も、こうして剣を持ち、対峙していた。——豪雨の中だった。

「……今日この日で」

ウェランドルスが加勢に來て、ロルディオリースが優勢になったとしても。

「世界の秩序を変えてみせる」

「——その為に、あいつが必要か！」

ジェルドは地面を蹴った。そして切りかかる。だが、傷の痛みで素早さは半減し、動きが完全にイルゼルに読み取られる。たやすく受け止められ、なぎ払われる。ジェルドは体制を崩し、その場に転げた。

「っ……」

「大分傷が効いているようじゃないか」

す——と喉元に切っ先が向けられる。

——もうジェルドに動ける体力は、微かしか残されていなかった。剣を握ることで精一杯だ。持ち上げることが出来ずにいる。

「く、そ——」

だが、その時だった。

「——父上！」

はっとイルゼルは声のした方を向いた。刹那——、

「――は！」

ジェルドは懇親の力を込めて、その隙を突いて剣をなぎ払い、体を起こし、その場から飛び退いた。――だが、すぐにその場に、剣を支えにうずくまる。

「……っ、これまで、か」

ルイセラードはハルヴィートから降りて駆け出した。そしてイルゼルの前に、彼を背にして立ちはだかり、銀翼の鷲の剣を構える。

「――ルイセラード」

「……下がってください。僕が止めを刺します」

「放っておいても死ぬだろうに」

「僕が、自分で断ち切らないといけない」

「断ち切るなら、何故、一度でしとめなかった？」

「……それは」

心の奥深くで、なにかがずしんと沈んだ。

――何故。

何故、止めを刺さなかった？ 全てを断ち切って、この人についていくと決めたのに。

「まあいい。こんな輩でも、父親だったわけだ」

「……もう、父親なんて思ってたません」

すつと瞳を閉じる。そしてルイセラードは真っ直ぐにジェルドを見据えた。

――断ち切ってみせる。

ルイセラードはゆっくりと、剣を片手に、うずくまるジェルドの方へと歩いて行った。狙うはその首だ。剣を振りかざし、彼らしくない冷徹な表情で、見下ろす。

「……さようなら」

「十五章：救いの銃声：3」

「こつち！ こつちです！」

ハルシヤはレイーナの手を引いて、城の中の秘密通路を通り、戦場とは離れた小高い丘に建つ塔へと辿り着いていた。梯子を上り、外に出れば、戦場が遠くに見える。どうやら軍は持ち直したらしい。いくつもの銃声が響き渡っていた。

「お嬢さま、確かにここは安全と思われませんが、こんなところにな

にがある——」

「……感じるんです」

胸がざわついて、静まってくれない。良くないことが起ころうとしている。右手に握り締めた包帯を抱き、ハルシヤは瞳を閉じた。

そしてしばらくして、瞳を開き、戦場とはまた少し離れた、東の方を指差す。

「嫌な、予感がするんです」

「嫌な予感？」

「レイーナさんはここで休んでいてください。傷も重傷でしょう？」

私一人で行きます」

「いけません！ お嬢さまをお護りするのが私の役目、何処までもついて——」

と、突然、胸を襲った痛みに、レイーナは思わずその場にうずくまった。

「私は大丈夫です」

膝をつき、レイーナの肩にそつと手を置く。

「私が行かなければいけないんです。なんだか、そんな気がするんです。だから、ゆっくりと休んでいてください。ごめんなさい、皇女命令です」

「……わかりました」

ハルシヤは立ち上がり、指差した方を見据える。

——お願い。

ぎゅっと右手の包帯を握り締める。なにを願えばいいのかはわからない。だが、とてつもなく嫌な予感がかけめぐる。

——お願いよ。

彼女は地面を蹴って走り出した。足が思うように動かない。でも、行かなければ。

「お願い、間に合って……！」

冷酷な瞳で見下ろしていた。

——断ち切るんだ。その為にはこの人を、殺さなければ。

「……懺悔の言葉があるなら、聞きましょうか」

ルイセラードは静かにジェルドへ問いかけた。だが、もう言葉を発する力も残っていないらしい。荒い息遣いだけが聞こえてきた。

「……僕の両親を引き離れた。ずっと僕を騙し続けていた。母上を喜ばせたこともないでしょう。母上を心から愛したこともないでしょう。幼かった僕を何度も殺そうと試みた。——あなたの重ねた罪だ」

剣を握る右手に力が入る。そっと左手を添え、柄を握った。

「……僕は許しはしない」

後は、首筋にその剣を突き刺すだけだ。

「……さようなら」

ルイセラードは剣を振りかざした。そして切っ先を首筋目掛けて振り下ろす——が、その刹那だった。

「——やめて！」

響いた言葉に、首筋直前で剣が止まった。目を移せば、この丘の向こう——ジェルドの後方に、息を切らして彼女は立っていた。そしてその場にへたり込む。

——それがハルシャだと気づき、ルイセラードは目を見開いた。

「ハル、シャ……」

「……間に、合った……良かった……」

「どうして、君——……」

「あなたを、探してた。嫌な予感がして、いてもたってもいられなくなつて——その手を、血に染めないで……！　あなたになにがあったか、私は知らないし、わからないわ——でも、その手は、人を殺める為にあるものではないでしょう！」

ルイセラードは目を伏せた。

——けれども、どうすれば、断ち切れる？　どうすればこの呪縛から逃れられる？　どうすれば、ウェランドルスという国を、故郷を、断ち切れる？

——僕は——。

その時だった。ずるりと剣の柄からジェルドの手が滑り落ちる。そしてその体はその場に崩れ落ちた。

「国王陛下！」

ハルシャが駆け寄つてきた。

地に伏せたジェルドの体を仰向けに起こし、胸に耳を当てる。——心臓は微かに動いている。だが、傷口からの出血が酷い。口元に手をかざしてみるが——微かな呼吸しか感じ取れなかった。

「ルザ——」

泣きそうな瞳でハルシャは彼を見た。「誰か、お医者さまを——」

——だが、彼は、黙つたまま。黙つたまま、ずっと剣を構え、ジェルドの喉元へ切っ先を向けた。

「……ルザ？」

冷たさを放つ青の瞳が、ジェルドを見下ろしていた。それにハルシャは初めて気づく。

「青い……瞳……？」

「……もう、遅いよ」

消え入りそうな声で彼は呟き、手に力を込めた。

「どうして……？　なんで、そんな真似するの……？　あなたのお父さまよ——！」

「……違う」

「違うつて、どう違うつていうの？　ねえ、お願い、剣を下ろして

——」
「——断ち切らないといけないんだ！」

ルイセラードは刃を喉元向けて突き刺した——が、寸前、銃声がその場に響き渡る。弾丸は左肩を貫き、ルイセラードはその場に倒れた。傷を手で押さえ、剣を支えに体を起こし、その場にうずくまる。

「……ハルシャ」

彼女は護身用の銃を構えていた。銃口から煙が一筋、伸びる。手はガタガタと震えていた。拳銃を落とし、震える手で自分で自分のことを抱きしめて、ハルシャは、ごめんなさい、ごめんなさい、と震える声で何度も言った。彼女の瞳から涙が零れ落ちる。

「……まさか、撃たれるなんて思ってたよ」

「ごめんなさい……！　でも、あなたのお父さまじゃない……！
どうして剣を向けるの……！　お願いよ……自分のお父さまを殺すなんて真似、しないで……！　あんなにも誇りに思ってたお父さまじゃない……！」

ハルシャを見、振り返ってイルゼルを見る。そしてジェルドを見下ろした。

「……誇りになんて思ってたないよ」

故郷——ウエランドルス光景が頭の中に広がる。シューレ「ゲンジュナート」の景色が、温かだった家族が、脳裏に浮かぶ。けれどもう、戻れない。懐かしいその場所には戻れない。

「僕は、この人の子じゃない」

「どういう……こと……？」

「……僕の本当の父親は、そこにいて、イルゼル・レステアウエル陛下なんだよ。この右の瞳がなによりの証拠——。ジェルド・クロスキーズは、僕を十六年間騙し続けてきた。——幼い頃に何度も殺されかけたのを、思い出した。この人はそういう人だ。だから断ち切つて、この人を殺して、僕はクラウドイスルグへ行く」

ハルシヤはそう言った彼を見上げた。

「そんな……そんなこと……復讐したって、なにも与えられるものなんてないのよ！ 本当のお父さまが国王陛下じゃなくても……それでも……殺さなくたって、どんな方法でも、断ち切れるじゃない！ どうして殺さないといけないの？ どうして……」

「……ハルシヤには、わからないよ」

「わかるわよ！ 私にはもう、お姉さましかいない……！ お父さまは、もういないの……！ 誰かに、殺されてしまった。誰かに、殺されて……」

嗚咽で後が続けられなくなった。ハルシヤは顔を伏せて、肩を震わせる。

「……っ、だからっ、もう、やめて。自分のお父さまを自分で殺すことなんて、しないで——」

「……」

——僕は。それでも。

その時だった。

「……ルイセラード、もう、いい」

言われて振り返れば、イルゼルの手から、ひゅるりと剣が消え去る瞬間だった。

「お前に、ジェルド・クロスキーズを殺すことは、できないよ」

「そんなこと——」

「本当は、生きていてほしいのだろう」

「僕は——」

「ハルシヤ嬢をそこまで泣かせておいて、殺せる程……お前は性悪ではないからな。私と違って。本当は、生きていてほしいのだろう。ウェランドルスに戻りたいのだろう。——わかるよ」

イルゼルはやって来ると、ルイセラードの頭に手を置いた。

「……無理をさせて、悪かった」

ルイセラードは顔を伏せた。視界が霞んで見える。瞬けば、ぼたり、ぼたりと涙が零れた。

止まらない。袖で拭っても、拭っても、涙は止まらない。

——本当は。

故郷に帰りたい。

本当は——本当は——。

「応急処置しかできないが——後は救護班に任せたらいい。なんにせよ、こいつはしぶといからな。そう簡単には死なんだろう。大丈夫だ」

〔十五章：救いの銃声：4〕

——戦いは終わった。

メアリルの指揮の下、ウェランドルス国軍、並びにロルディオリズ国軍は体制を立て直し、クラウデイスルグ軍を鎮圧することに成功した。町は焼けたが、翌日の今日、もう既に人々は復興の作業へと入っている。

意識不明のジェルドや、怪我を負ったルイセラードや、アステイナ、レイーナにはオルンクール城の部屋をそれぞれ与え、治療に専念させてある。

クラウデイスルグ軍は捕虜として捕らえてある。イルゼルの身は、地下牢にある。

メアリルは自室で一人、ソファに腰掛けて、目を閉じた。

「……疲れた」

明日、即位式が執り行われる。晴れて、自分は皇帝の座につく。

「……ひとりぼっちになってしまったよ」

左手の薬指にはめられた指輪をかざして見る。

——信じたくはないが、“彼”に、何度助けられただろう。

ハルシャは今頃、ルイセラードと一緒にいるに違いない。たった一人の妹を持つていかれ、本当に、ひとりぼっちになってしまった。こんな孤独感は生まれて初めてだ。胸にぽっかりと穴が開いてしまつて、どうしようもない。

もう、彼、が、その扉を開けてこの部屋に来ることはない。

「……」

好きだった、のだろうか。——信じたくはないが。

「……」

愛していたのだろうか。彼、を。——信じたくはないが。

「……」

ハルシャがルイセラードに恋した理由がわかった気がした。

「私もまた……そうだったか」

——この世の掟というのは、厄介なものだな。ハルシャ。

「……私の分まで、幸せになれよ」

私にはどうやら、この先、もうそんなことは訪れないだろうからな。

イルゼルの応急処置と、その後の治療で、なんとかジェルドは一命を取り留めていた。だが、まだ意識は戻らない。ルイセラードの怪我の方は、弾が貫通していたのもあり、手当てを受けた後、安静にしているようにと医師から言われていた。止めるべきだったとはいえ、撃ってしまったハルシャは心底、後悔していた。会う度に、ごめんなさい、ごめんなさい、と謝り続けていた。

「……ハルシャの決断は、正しかったよ」

ベッドに横になりながら、ルイセラードはその琥珀の瞳と青玉の瞳で、天井を見つめていた。この広い視野にはもう慣れた。

「そんなことない」

枕元の椅子に座っていたハルシャは、そう言っただけを振った。

「あなたを撃ってしまった。傷を負わせてしまった」

「いや。……結局、僕は、僕のままだったみたいだ」

ハルシャの方へ視線を移し、ルイセラードは小さく呟く。

「変われやしなかった。本当は、生きていて、ほしかった——」

ハルシャはそっとルイセラードの手を取った。そしてベッドに顔をうずめる。

「その青の瞳、綺麗。深くて青い、海の色。ツォグリスサーナーが結ばれてた、結晶。私たちの希望の色」

「……海の色、結晶、希望、か」

彼女らしい例え方だ。

「あなた……クラウディスルグに行くの？ ウェランドルスに戻るの？」

「クラウディスルグに行くよ」

そつと優しく彼女の髪を撫でる。「ウェランドルスに戻っても、非難轟々だから。それに、クラウディスルグ王族には、後継者がいないらしいから——さっき、少しここを抜け出して会ってきた。君のことを話したら、一緒に来ればいい、と言われたよ」

「でも、お姉さまが許してくれるかしら？」

「メアリルは、話せばわかってくれるよ。いつそのこと、駆け落ちしたらいい」

そう言つて、ルイセラードはいたずらっぽく笑った。

「僕の我侭だけど——、ね」

ベッドの上、上半身を起こし、アステイナはじろりと枕元の椅子に腰掛けていたアルディクを睨んでいた。その背後で、ジュリーナが、落ち着いてくださいな、とアステイナに声をかける。だが、それも無意味なようだ。

「本当に、兄上という人は、どうして、そう、私にも——父上にも

——」

「だから悪かったって」

「迷惑なんですよ。おまけにただの家出ならまだしも、リメンバーを持って家出なんて」

「それはだな、ちよつと父上に反抗してみ——」

「反抗期は今ですか！」

アステイナは叫んで、体を襲った痛みに思わずうずくまった。

「……大人しく寝てろ、な？」

「無理です」

「アステイナ……」

げんなりとアルディクは肩を落とした。

「おまけに、ジュリーナさまと駆け落ち！」

「だから僕らそんな関係じゃないって。ね？」

と、アルディクはソファに腰掛けていたジュリーナの方を振り返る。

彼女は笑顔で、アステイナに言った。

「そうですよ。そんな関係じゃないですから、大人しく寝ときましようね、アステイナさん。傷、治るものも治らなくなりますよ?」

「……ならいいんですが」

アステイナはゆっくりと体を倒した。そして一息つく。

「そういえば……ジュリーナさま、ルイセロードは?」

「相変わらず、ハルシャさまと一緒にです。仲睦まじってああいうことを言うんですね」

にっこりと笑って彼女はそう言った。

「ずーっとずーっと一緒にいますよ。邪魔しないであげてくださいね」

「……まだ、謝ってなかったな。そういえば」

ぼつりとアステイナは呟く。

「なにをです?」

きょとんとジュリーナは首をかしげた。

「二人の関係を知った時、彼に罵声を浴びせてしまつて。私はあいにく現実主義者で、ツオグリスサーナーなんて、認めたくなかったんですよ」

「誰だつて、最初はそうですよ?」

ふっと笑つて、ジュリーナは続けた。

「私も、知った時は、まさかと思いました。ずっと迷信だと思つていましたから。——そうそう。ルザはどうやら、クラウドイスルグに行くことを決めたみたいです。さつき、廊下でばったり会つて——これ——メアシルさまから預かつてるんですけど」

と、ジュリーナは手に持つていた、厚手の布に覆われたそれを見た。開いてみれば、そこに現れたのは、青の重宝。

「返す時を、逃してしまいました。……寂しくなっちゃいます。お城も、静かになっちゃいます。でもあの子は、クラウドイスルグの本当の王位継承者なのだから、それはもう、仕方のないことですけど。お父さまの意識が戻ったら、ちゃんと伝えて、陛下が釈放され

たら、一緒に国へ行くって言っていました」

「……この長かった旅も、終わってしまうんですね」
名残惜しそうにアステイナは呟いた。そしてなにかを思い出したように、ふっと笑う。

「そういえば……あいつら、どうしてるかな」

「はい？」

「世話のかかる二人と、わけあって、道中で別れたきりなんですけどね。どれだけ大変でいろんなことに巻き込まれたか、兄上に言っておく必要がありますね。長くなりますけど、お二人とも、聞きます？」

「はい、是非」

にっこりとジュリーナは笑った。

「その話が終わったら——本当は、王后陛下から、手紙を預かっていたんですが——ルイセラードをちよつと説得していただだけませんか？ クラウディスルグに行く前に、私と共に寄ってほしいところがあると。あいにくその手紙、荷物共々、仲間と別れた場所に置いてきてしまつて。今となつては——少し、遅いかもしれませんが」

「それくらい、お安い御用です」

にこにこ笑つてジュリーナは言う。

「お母さまの手紙、きつと、ルザにとって為になることが書かれると思いますよ」

〔十五章：救いの銃声：4〕（後書き）

遂にあと一章となりました！なんとかほっと一息。正直、十六章目要るの？って思いましたが要りますね（苦笑。

「十六章：涙を止めるおまじない：1」

胸がざわついて、眠れなかった。窓の外に目をやれば、空がうっすらと紫に染まっている。ベッドの上に仰向けに寝転がり、ジーナは、ふう、と息を吐いた。

「……掃除でもしようかな……」

思い立って、部屋を見渡してみる。箒や雑巾は何処にあるんだろう。ベッドから降り、ジーナは欠伸を噛み殺し、部屋の扉を開けた。と、その時、

「あ」

向かいの部屋の扉が、同時に開いた。

「なんだ、お前か」

「あたしで悪かったわね」

ぷいっとジーナは視線を逸らす。

「相変わらず早起きだな」

「眠れなかったの。あんたこそ、早起きじゃない」

「……まあな」

ぼりぼりとステイルグは頭をかいた。それを見て、ジーナは、そうだ、と部屋に戻る。そして手に細長い布とブラシを持ってやってきた。

「ちよつとあんた、後ろ向きなさい」

「は」

「いいから、向く！」

「……わかったよ」

と、くるりとステイルグは後ろを向く。ジーナは背中まで伸びたその黒髪を一束掴んで、切らないの？ と問いかけた。

「ぼさぼさ。あ、枝毛あるわよ」

丁寧はその髪をブラシでとかしていく。

「切った方がいいわよ。毛先痛んでる」

「……うるさい」

髪の毛を一つに束ねて、ジェーナはその布で黒髪を手早く一つにまとめる。

「できた」

「……気持ち悪い違和感があるんだが」

「じきに慣れるわよ。ちよつとこつち向いてごらんなさい」

「……うるさいな」

しぶしぶとスティルグはジェーナの方を向いた。ぷいっと視線は何処かへ逸らす。

「ちよつとさつぱりしたじゃない」

満足そうにジェーナは微笑む。と、「あ、そうだ」と彼女はパンと手を叩いた。

「あんたに訊きたいことがあつたんだ」

「……は？」

「仮釈放されてルイセラードを連れ戻すことと引き換えに、なにを頼んだの？」

「それか」

「だつてずーっと旅のこと思い出してたら、ひっかつたんだもん。なに？ お金でも貰おうとしたわけ？ あんた盗賊だもんね。悪人だもんね。やつぱりお金？」

「あのなあ。盗賊はもうクビになつたし、俺はもう、悪人じゃねえ」

「じゃあなにをお願いしたのさ」

「……墓」

ぽつりとスティルグは呟いた。

「……墓？ なに、自分の棺作るのでも頼んだの？」

「バカも休み休み言え。……だよ」

消え入りそうな声で彼は呟いた。ジェーナは「え？」と聞き返す。

「ごめん、聞こえなかった」

「……だから。……ラリイナの墓。まともに葬ってやりたいと思つて、それで」

「……ごめん。そっか」

ジェーナは目を伏せた。

「そつえば……どうなったんだろっね」

「なにが」

「アステイナはちゃんと、ルイセラードを見つけたのかな、思っ
て。二人一緒に帰ってきてくれるように、お月さまにお願いし
てみたけど、効果あるかしら」

「あいつはやることはきっちりやるタチだろ。大丈夫じゃねーの？」

「なんか変な事件に巻き込まれてないといいけど」

「さーてと、とジェーナはぐるりと一周、首を回した。」

「お掃除でもしますかね。ほら、あんたも手伝いなさい」

「なんで俺が」

「だってどうせあんたも暇でしょう。箒とちりとり探して取ってく
る！」

「……なんで俺が」

と、しぶしぶステイルグは廊下を歩いて行った。

——レイーナは置手紙を残し、部屋を抜け出して一人、あの日、
クラルグと別れた場所を訪れていた。

いくら待っても、オルンクールに帰ってこない。戻って来ない。
もしかしたら——なんて思いが頭のなかを巡ったが、信じたくなく
てかぶりを振った。

——だが、そこには先客がいた。風になびくブロンズの髪。彼女
はじつと、黒い血だまりを見つめていた。

「……シュレーヌ・フォルクステイング」

言うつと、彼女はこちらにぱつと振り返った。目が赤く腫れている。
布に包まれた箱を抱えていた。

「フェイエル」

「クラルグの奴が帰って来なくてね。来てみたら——」
「シェイレルなら、病院にいるわよ」

「……そりや帰ってこないはずね」

そっか、とレイーナはため息をついた。

「――病院、ここからちよつと、遠いけど」

と、シュレーヌは抱えていた箱に目を移した。

「……偶然、狩をしてた人たちが見つけてくれたらしいの。話を聞けば、二人とも倒れていて、シェイレルの方は、まだ息があつたみたいだけど意識はなくて、ウェルリーは……」

箱から、黒い血だまりに視線を戻し、シュレーヌは顔を伏せた。

「……あなたたちの、勝ちね」

「シュレーヌ――」

「同情なんて、しないで。私たち敵同士じゃない。運ばれた病院まで、案内してあげる。こつちよ」

と、シュレーヌはレイーナの歩いてきた道を、踵を返し、歩き出した。

何台ものベッドが広い一室に並べられた、野戦病院へシュレーヌはレイーナを連れてきた。クラウディスルグ国軍にやられたであろうロルディオリーズ国軍の兵士たちが、そこには何人もいた。その窓際に、レイーナはあの灰色の髪を見つける。

「クラルグ――」

思わず駆け寄るが、呼吸音が微かに聞こえただけで、彼の閉じられた瞳は開かなかった。

「ずっと眠ったまま。もう、そう長くはないとお医者さまは言ってたわ」

「シュレーヌ、その――」

レイーナは目を伏せた。シュレーヌがウェルリーを実の弟のように慕っていたのを知っている。いや、もしかしたら、それ以上――。……言っただじゃない。同情なんてしないで。あなたたちが勝つたのよ。私たちは負けたの。勝負して、決着がついただけなんだから、ただ、それだけのことなんだから。でも、良い好敵手だったわね」

「そう、ね」

「目が覚めるまで、いてあげたら？ もう……私の大事な人は、この世にいないから。……火葬してもらったの。それが、彼の故郷のならわしだから」

と、シュレーヌは一度、抱えていた箱に目をやる。そしてくるりと踵を返し、それ以上なにも言わずに去って行った。

レイーナはそれを見送り、眠り続けている彼の手を取る。

「……クラルグ……全部、終わったよ」

もう、あたしたち、自由になれるよ。

「一緒に、故郷に帰ろう？ だから、早く起きてよね。せつかく来てやったのに、目覚めないまま死ぬなんて、許さないからね」

「十六章：涙を止めるおまじない：2」

メアリルの即位式が終わり、一週間が経った。

ジュリーナは一人、ジェルドのいる部屋を訪れていた。

「それで——この扉の前まで来ては繰り返し、を続けているのか」
呆れ気味に、ベッドの上に横になっているジェルドは言った。彼の意識が戻ったのはメアリルの即位式の翌日だった。医師にはまだ動くなと言われている。ウェランドルス国軍はもう引き上げた。彼のもとには、ホグール將軍とシヴィット大佐が残ってくれている。どうやら、ウェランドルスへ帰る為の馬車も調達してあるらしい。
「会つの、大分躊躇っているみたいです。このまま無言で行っちゃうかも」

でも、と、彼女は表情を曇らせた。

「そういう私も、まだ、ルザに渡せてないんです。リメンバー。躊躇ってしまつて……せつかくメアリルさまから渡してもらったのに」

と、彼女は手に持っていた厚手の布で覆われたそれに視線を落としました。

「ジュリーナ。……イルゼル・レステアウエルの方はどうなっている」

「メアリルさまが言うには——もう釈放してもいいって仰ってます」

「……そうか」

周囲の混乱を招かぬよう、右の目は包帯で隠し、ルイセラードはジェルドの部屋の前で立ち竦んでいた。ノックしようと手を構えてみるが、手が動かない。

「……」

自分が深手を負わせた相手に、会えるわけもない。あんな酷いことをしておいて、会えるわけがない。けれど、せめて——。

と、その時、目の前の扉が開いた。

「あ……」

「ルザ」

ジュリーナはぱちくりと目を見開く。と、ふっと微笑んで、首をかしげる。

「やっと、話す気になった？」

「……姉上」

「ね」

と、ジュリーナはルイセラードの手を取った。

「お父さまだって、ずーっと待ってるのよ？」

「……でも」

「いいから、いいから」

「あ、姉上っ」

と、部屋の中へと引き込まれた。パタンと背後で扉が閉まる。

「やっと来たな」

ジェルドはそう言っ、ちらりとこちらを見、窓の方へと視線を移した。

「二人きりの方がいい？ それとも私、いた方がいい？」

「いてください」

きっぱりとルイセラードは言い切った。

「ぎくしゃくすること、なにもないのに」

ほら、ジュリーナは笑った。けれど。――だけれど。

ちらりとジェルドを見て、ルイセラードは目を伏せた。

「……元氣そうで、良かったです」

「それだけか？」

「……」

どんなに過去が酷くても。十数年間、自分を育ててくれた父親だつてのはわかってる。けれど、この人は、本当の父親ではなくて――意識不明にさせるくらいに傷を負わせてしまつて――けれど、生きていてくれて、良かったと今は思う。彼の生が、深い深い闇の中

へと堕ちていくのを、止めてくれた。もし殺していれば、その闇から這い上がることは、一生できなかっただろう。

「……い」

消え入りそうな声でルイセラードは呟いた。

「……ごめんなさい」

「こんなの、かすり傷だ。急所を外すなんて、まだまだだな、お前は」

ふっとジェルドは笑って、こちらを向いた。

「敵を狙う時は、一発で仕留めると、教えなかったか？——そんな若輩者はウエラン

ドルスには要らん。何処かの東の遠い国にでも行け」

「お父さま、そこまで言わなくても——」

「いいんです、姉上」

ルイセラードはジェルドに向き直り、頭を下げた。

「お世話になりました」

ジェルドはなにも言わずに、ルイセラードに背を向ける。そしてぼそりと呟いた。

「……悪かったな」

それを聞いて、ルイセラードは頭を上げた。と、その時、
「ルザ。ちよつと、こっち向いて」

と、彼女は手に持っていた厚手の布に包まれたそれを取り出した。現れたのは、あの青の瞳と同じ色の——。

「クラウデイスルグの、リメンバー……」

「メアリルさまから預かってたの」

と、ジュリーナはそれをルイセラードの手に握らせる。

「あなたの、よ」

「僕、の……」

「でも、いつでも、ウエランドルスに帰ってきてね」

ジュリーナはそつとルイセラードを抱きしめた。

「お母さまにも、お父さまにも、みんなに、会いにきてあげてね。」

私、あなたのこと、大好きよ」

「……僕も」

ルイセラードはジュリーナのことを抱き返した。

「……姉上があなたで、良かった」

「十六章：涙を止めるおまじない：3」

その二日後。

ジェルドはジュリーナと家臣たちと共に、ウエランドルスへと帰って行った。それを、ハルシャとルイセラードは、馬車が見えなくなるまで見送っていた。

「今日、いいお天気ね」

「そうだね」

「……お姉さまに、昨日の晩、頼んでみたの」

と、ハルシャは彼の肩に頭をもたせかけた。ルイセラードはそつと彼女の肩を抱く。

「それで……どうだった？」

「行きたかったら、行ってもいい、だって。……でも、お姉さまを一人残して、自分だけ、そんなことできないわ。なにが原因かわからないけれど、お姉さま、ずっと塞ぎこんだままで」

「メアリルが塞ぎこむなんて、珍しいね」

「リヴェンティ大佐に訊いても、わかりません、って言われて。…

…ごめんなさい。一緒には、行けそうにないわ」

「それでもいいよ」

ルイセラードはふわりと彼女のことを抱きしめた。されるがままにハルシャは瞳を閉じる。そしてそつと抱き返した。

「明日……行っちゃうのね」

「……だから、もう少しだけ、このままでいい？」

「うん。このままがいい」

「……ありがとう」

アステイナはベッドを出て、窓の外を眺めているアルディクの隣に歩いて行った。

「……兄上」

「なに？」

「ジュリーナさま、帰して良かったんですか？」

「なんでそんなの訊くのさ」

アルデイクは笑った。「僕ら、そんな関係じゃないって言ったじゃん」

「……そういえば、何処で会ったんですか？ ジュリーナさまと」
「そうだな——」

と、アルデイクは少し考え込む。

「——一年前になるかな。ウェランドルス国王陛下の思想が、以前から魅力的だと思ってたんだけど。それで、話を聞きたいなと思って、家出したんだよ」

「そういえば、一ヶ月程、いなかった時ありましたね」

「王城には入れてもらえなかった。けど、その時ね、偶然、彼女を乗せた馬車が城の方からやって来たんだよ。騒ぎに気づいて、事情を聞くなり『お父さまには会えないけど、私の話で良かったら、聞きます？』って言われて。ジュリーナは友人の——シオンズルグ尔斯のメルナ・レシュリーカ姫に会いに、シューレ・ゲンジュナートを出るところでさ。それに同行させてもらったってわけ」

「それで、仲良くなった、と」

「いろんな話も聞いたよ。シオンズルグルスは、政治体制がウェランドルスに似てたから、国王陛下からもいろいろと話、聞けたし」

「……そんなことしてるから、皇位継承権が私に移ろうとしてるんじゃないですか」

——嫌味だ。

アステイナはいたずらっぽく笑った。

「このままだと、玉座は私のものになりますよ？」

「それは困るな」

アルデイクはそう言って苦笑いした。「皇帝になった暁には、やってみたいこと、たくさんあるのに」

「なにをするつもりですか？」

「政治体制を変えるんだよ。議会政治なんてのを企んでる。他国との交流も必要かな。グランディスナはどうも、閉鎖的だから。何処かと同盟でも——とも、思ってる。戦争はしないという方向性は変えないけどね。それを条件付けして、相互扶助の為の同盟を結びたいと思ってる」

長々と自信たっぷりに述べたアルディクを見て、アステイナはぱちくりと目を見開いていた。あの兄が。この兄が。そこまで考えているとは。自分は、今の封建国家を存続させていけばいいだけ思っていたのに——。

「……その考え、兄上が好きないようにしたらどうですか？」

そう言つて、アステイナは微笑んだ。

「父上に頼んでみたらどうです？ 国交とかは——結構、成立すると思いますよ。特に、ウエランドルスとロルディオリーズとは今回、大きな繋がりを得た。なんなら、その二国の架け橋になればいい」

「変わったね。アステイナ」

こちらを見、ぱちぱちとアルディクは目を瞬いた。

「以前のアステイナなら、僕の話、蹴ってたよ？」

「そうですか？」

「そうだよ」

顔を覗き込み、ふっとアルディクは微笑んだ。

「それと——前より、いい顔になった。表情が柔らかくなった。可愛くなったよ」

「……それはどうも」

大きな旅が、自分をそうさせたのかもしれない。兄に対する不満感はない。自分の知らないところで、そんなことを考えていたなんて思いもしなかった。ただのへなちょこだと思っていたけど、それはどうやら、私の方だ——。

アステイナは窓を開け、バルコニーに出た。そして見つめる。仲良く城の敷地内を散歩する二人の姿を。それを見て、ふっとアステイナは微笑む。

——あんな優しい表情、見たことないぞ。

「……謝らないとな。せいぜい、幸せになれよ」

——その翌日。「時間だ」と、番人に牢の鍵を開けられ、連れて来られれば、王城の入り口の前に、イルゼルはメアリルの姿を見た。足は自由だが、両手は縄で縛られたままだ。少し離れて、彼は足を止める。

「まさか、直々に見送ってくれるとは思いませんでしたよ」

「すまないが、二人にしてもらえないか」

番人たちを追い払ったところで、メアリルはイルゼルに近づくと、護身用のナイフを取り出した。そして縄を断ち切る。ナイフを納め、メアリルはすつと視線を逸らした。

「馬車まで用意してくるとは、親切ですね」

「……それくらいする」

「ありがとうございます。——皇帝陛下」

その堅苦しい呼び方はやめる。

もし、これが——偽りを知る前なら、そう言っていたかもしれない。

「……言っておくが、私はお前が大嫌いだからな」

「私も、ロルディオリスという国が大嫌いですよ」

そう言っ、イルゼルは馬車の方へ歩いていく——と、彼は、馬車の前で足を止めた。突如、ざあつと強い風が舞い、メアリルは目を閉じた。

そしてゆっくりと瞳を開く——。

「お前——」

真っ直ぐに伸びた黒い髪。そして振り返った、その黒の瞳——。

「……卑怯者」

ふいつとメアリルは瞳を逸らした。

「それはないんじゃないですか？」

くるりとメアリルは踵を返した。

「……元気でやれよ」

「あなたこそ。——さようなら。メアリル」

背後で、馬車の扉の閉まる音がする。そしてそれは走り出した。

「……さようなら」

メアリルは左手の薬指にはめられていた指輪を外した。何度も捨てようと思った。だが、できなかった。結局最後まで、“彼”に縛られたままだった。

「……覚めたくない、夢だったな」

呟いて、メアリルはその指輪を握り締めた。

——反則だ。

最後の最後で、その姿を見せるな。バ力者が。

「十六章：涙を止めるおまじない：4」

目が覚めると、おはよう、と腕の中の彼女は微笑んだ。

「もう、十時半だよ」

「……おはよう」

「おはよう」

「でも……だめだな。起きる気がしない」

「私も。——ルザの腕の中、落ち着くんだもの。——二度寝しちゃった」

昨日の晩、彼女は夜中に突然、ここにやって来た。どうやら眠れないらしく、

『一緒に、寝て、いい？』

と、ハルシヤは照れくさそうにそう言ったのだった。そういう自分も、眠れなくてずっと起きていたのだけれど。

『いいよ。——おいで』

腕枕して、彼女のことを抱きしめていれば、不思議とずっと眠りに落ちていた。

「……起きたくないな。十時に裏口に、って約束したけど……一生このままがいい」

「我俣」

「僕はもともと、我俣だよ」

「私も我俣だから、他人のこと言えないけれど。でも、そろそろ起きないと、あなた、お姉さまの肘鉄食らっちゃうわ。私も怒られちゃう」

「それは嫌だな」

ルイセラードはハルシヤを抱きしめていた腕を解いた。彼女は先に体を起こし、欠伸を一つ噛み殺す。

「……眠いわ」

「僕もだよ」

ルイセラードも欠伸を一つ噛み殺し、体を起こし、ベッドから降りた。

「腕、大丈夫？」

「なんともないさ」

——でも、本当は、じんじんとしびれているのだけれど。けど、気にしない。

「さて、のんびりと、準備するか」

あの日、何気なく旅立ったことを思い出した。上手くいけば、ロルディオリーズに不法侵入できるなんてことを、思っていたのを思い出した。

——あれから、長かったな。いや、短かったかな。

青の瞳を隠し、アステイナたちが待つ裏口へと、ハルシャと一緒に向かう。ゆつくりと、歩調を彼女に合わせて、廊下を歩いていた。

「……また、しばらく会えなくなるわね」

寂しそうにハルシャは微笑んだ。

「もう、三年間も待つのは、嫌」

「毎週会いに行くよ」

「クラウディスルグに着いたら、連絡ちょうだいね」

「もちろん」

——と、裏口へ着いてしまった。扉を開ければ、彼女とはここでお別れだ。笑顔で見送れる自信がないから——と、彼女はここで別れることを決めたらしい。

「……こんなにも一緒にいれて、幸せだった」

ハルシャはルイセラードの服の袖をつまんだ。

「……私って本当に我俣ね。離したくないの」

「僕だつて離れたくないよ。でも、永遠にさようならするわけじゃないじゃない」

彼女の頬に手を添える。ハルシャは潤んだ瞳を伏せた。

「下見ないで、顔上げて」

「……できない」

「涙、止めてあげるから」

しばらくして、ハルシャはゆっくりと顔を上げた。二人の距離を縮めて、ルイセラードはそつと目を閉じて彼女の唇に口付けた。それにぱちくりとハルシャは目を見開く。

——唇が離れば、ルイセラードは、ほら、と少し笑った。

「涙、止まったでしょ」

「……反則よ」

「なんでさ」

ぽすん、とハルシャはルイセラードの胸に顔をうずめた。そんな彼女をぎゅっと抱きしめて、彼は耳元で囁く。

「……大好きだよ」

「……遅いな」

そう言って、アステイナはゲオルドの鬘を撫でた。そして、ただご主人だな、とハルヴィートに視線を移す。——戦いの終わった翌日、シヴィット大佐が連れてきて、ここに置いて行っただ。

「……まあ、遅くても許すかな」

「でもまさか、このメア Ril 嬢の妹君が、ツォグリスサーナーだったとはね」

アルディクは壁にもたれていたメア Ril に視線を移した。

「一緒に、行かせるつもりですか？」

「行かない、と返されたよ。どうやら、私を一人置いて行くのが不安らしい」

そう言ってメア Ril は自嘲気味に笑った。

「そんなに頼りないか？ 私は」

と、その時だった。裏口の扉が開く。

「——ルイセラード」

「ごめん、アステイナ。寝過ごした。……怒ってる？」

「いや。怒らないことにした。——お世話になりました。皇帝陛下」

アステイナはメアリルに向かって、一礼する。そしてゲオルドに乗った。それでは、とアルディクがその後ろに乗る。アステイナの怪我はまだ完治していない。ましてや、骨折した腕で手綱は握れない。

「本当は、昼までに行く予定だったんだぞ」

「ぼそりとアステイナは呟いた。

「やっぱ怒ってるんじゃないか」

ルイセラードは寄って来たハルヴィートの顔を撫でた。

「お前——ウエランドルスに行ったと思ってたよ」

「門の前で、うろろろしていたらしいぞ。——お前がオルンクール城にいることを、勘づいてたんじゃないか？」

「……みんな、変わらないね」

ルイセラードはハルヴィートの背に乗った。

「行こうか」

「そうだね」

ルイセラードはハルヴィートの脇腹を蹴る。それにアルディクも続いた。

「そうだ、ルイセラード」

アステイナは言った。ルイセラードは少し振り返る。

「なに？」

「ハルシャ嬢との仲、罵って悪かった」

「——そんなこと、あったっけ？」

ルイセラードはそう言っつて小さく笑う。と、あ、とアステイナはなにかを思い出したように声を上げた。

「借金、いつでもいいから返せ」

「そうだ。借金してたんだね、僕」

「忘れるな」

くすくすとアステイナは笑い出した。

「やっぱりそなたは、そなただな。待ってるよ。いつでもグランデイスナに会い」

旅立つた最後の一行を見送り、メアリルは深いため息をついた。そして裏口の扉の向こうへと問いかける。

「これで、良かったのか？」

返答はない。

「父上と違つて、私は許してやることに決めたからな。お前の幸せを取ったところで、私は幸せになれないからな。だったらせめて、お前が幸せでいれることを願うまでだ」

裏口の扉を少し開けて中を見れば、ハルシャは扉から少し離れた場所に、膝を抱えて座り込んでいた。

「……今ならまだ、間に合うぞ？」

「いいんです」

ハルシャはそう言つて、己の唇に触れた。そして、ふふ、と微笑む。

「反則よ。あんな別れ方——」

——ファーストキスだったんだから。おかげで、本当に涙は止まつただけ。

私だつて、あなたに負けないくらい、あなたのこと大好きよ。

「十六章：涙を止めるおまじない：4」（後書き）

最後まで読んでくださった方ありがとうございます！シーズンワ
ンはこれにて終わりますが、自サイト（<http://www.k3.dion.ne.jp/silver-1/>）の方でシーズ
ンセカンドを考えていたりいなかったりします。そちらの方もよろ
しく願います。それでは、稜川春希でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3324h/>

remember

2011年7月27日03時28分発行